

堀下八幡遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	(財)群馬県埋蔵文化財 調査事業団保管	01-330
		15
No. ⁹⁸⁻ 4460	平成10年5月13日	(7)

堀下八幡遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

建設省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線の大規模バイパスである上武道路は、本県の中央部をほぼ南北に縦断します。既に、新田郡尾島町から一般国道50号線までの区間が開通・共用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の建設工事に際しては、数多くの埋蔵文化財が、昭和48年度から群馬県教育委員会及び当事業団により調査されています。佐波郡赤堀町堀下に所在する堀下八幡遺跡も、道路が遺跡の一部を通過するため、昭和59年度に当事業団が調査、記録保存しました。1,000点をこえる旧石器時代の遺物が集中して検出され、この時代の研究を進める上で貴重な資料が得られました。これら資料は、平成元年度から整理が行われ、今年度に入ってそれが終了し、以下に報告するところの調査報告書を作成することができました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、赤堀町教育委員会、地元関係者等から種々、ご指導・ご協力をいただきました。今回報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成2年6月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、一般国道国道17号(上武国道)改築工事に伴い事前調査した、事業名称「J K21 堀下八幡遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名称は遺跡所在地の大字名・小字名を併記する方法を採用している。本書では、より範囲の広い八幡の小字名を冠し、「堀下八幡遺跡」と呼称した。
3. 遺跡所在地 群馬県佐波郡赤堀町大字堀下字八幡865他・伊勢崎市波志江町字東原3442他
4. 事業主体 建設省関東地方建設局高崎工事事務所
5. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 調査期間 昭和59年10月1日～昭和60年3月29日
7. 調査組織 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
事務担当 白石保三郎・梅沢重昭・大沢秋良・松本浩一・秋池 武・定方隆史・国定 均・笠原秀樹・山本朋子・吉田有光・柳岡良宏
調査担当 原 雅信・須田 努・友廣哲也
8. 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 整理期間 平成元年4月1日～平成2年5月31日
10. 整理組織 事務担当 邊見長雄・松本浩一・田口紀雄・神保侑史・住谷 進・岩丸大作・国定 均・笠原秀樹・小林昌嗣・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・野島のお江・今井もと子・松井美智子・角田みづほ・桜場一寿・能登 健
整理担当 原 雅信・岩崎泰一
青木静江・坂庭常磐・石倉和美・市田武子・大川明子・神谷みや子・鈴木紀子・関 正江・高橋千代子・高橋裕美・田中晚美・南雲富子・新平美津子・萩原由美子・蜂巣綾子・松岡陽子
遺物写真 佐藤元彦
保存処理 関 邦一・北爪健二・小村浩一
11. 本書の編集は原 雅信・岩崎泰一が分担して行い、執筆は下記の通りである。
I-1……………桜場一寿 III-2……………岩崎泰一
I-2……………岩崎泰一 III-3 a……………原 雅信
I-3・4・5…友廣哲也 III-3 b……………岩崎泰一
I-6……………原 雅信 IV……………友廣哲也
II-1～6……………岩崎泰一 V……………岩崎泰一
III-1……………原 雅信
12. ローム層の地質及び火山噴出物の識別同定は、新井房夫氏(群馬大学教育学部教授)に依頼した。
13. 石材の鑑定は飯島静雄氏(群馬地質研究会所属)に依頼した。
14. 分布図原図作成及び一部の図面トレースは以下の業者に依頼した。
遺物分布図の原図の作成……中央航業株式会社
地形図のトレース……………技研測量設計株式会社
一部の実測図のトレース……株式会社測研

15. 井戸の調査に当たっては掘削を原沢ボーリング株式会社に依頼した。
16. 挿図中に使用した方位は、真北である。
17. 遺構実測図は以下の縮尺で掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。
- | | |
|-----------------|------------------|
| 住居……………1/60 | 掘立柱建物跡……………1/60 |
| 住居のカマド……………1/30 | 土坑……………1/40・1/60 |
18. 遺物実測図は下記の縮尺率を基本に図示した。なお、小形石器（石鏃等）は縮尺を変えてあり、その都度縮尺率を表示した。
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 旧石器単独資料……………4/5 | 平安時代の遺物……………1/2・1/4 |
| # 接合資料……………1/2 | 金属製品……………1/3 |
| 縄文時代の石器……………1/1・1/3 | |
| # 土器……………1/2・1/3 | |
19. 遺物写真図版は実測図を掲載した順に時代毎に整理し、実測図と対照できるように図版の右下に挿図番号を示した。
20. 石器実測図中の矢印は使用痕が確認出来る範囲を、網がけの部分は以下の部分を示している。



21. 旧石器の遺物分布図中に使用したマークは以下の器種を表している。
- | | | | |
|------------|--------|------|------------|
| ◆ ナイフ形石器 | ◇ 楔形石器 | ■ 削器 | ▲ 加工痕のある刮片 |
| ▲ 使用痕のある刮片 | ○ 石核 | ● 刮片 | ● 砕片 |
| ● 燧石 | □ 礫 | | |
22. 本書の作成にあたっては関係各方面の協力を得た。また、発掘調査に際しては赤堀町教育委員会・伊勢崎市教育委員会・前橋市教育委員会並びに地元関係者の多大なる御支援を戴いた。ここに記して感謝の意を表す次第である。
23. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

目 次

序

例 言

I 発掘調査の経過	1
1. 調査までの経過	1
2. 遺跡の位置と周辺遺跡	2
3. 調査の方法	4
4. 調査の経過	5
5. 遺跡の概要	6
6. 基本土層	8
II 旧石器時代の遺構と遺物	10
1. 隣 群	10
2. 石器の分布	11
3. 出土石器	27
4. 石器の接合	52
(a) 接合資料	52
(b) 接合資料の分布	103
5. 母岩別資料の分布	115
6. 小 結	120
III 縄文時代の遺構と遺物	128
1. 住 居	128
2. 土 坑	130
3. 包含層出土の遺物	132
(a) 土 器	132
(b) 石 器	143
IV 平安時代の遺構と遺物	157
1. 住 居	157
2. 掘立柱建物	169
V 時期不明の遺構と遺物	170
VI まとめ	176

付 遺物観察一覧表

接合資料の剥離順序・計測値一覧表

挿 図 目 次

第1図 上武道路計画図……………1	第43図 出土石器 (20) ……………49
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡……………3	第44図 出土石器 (21) ……………50
第3図 グリッド設定図……………4	第45図 出土石器 (22) ……………51
第4図 調査範囲 (旧石器) と周辺の地形……………6	第46図 接合資料-3 (1) ……………53
第5図 基本土層 (台地部分) ……………8	第47図 接合資料-3 (2)・91 ……………54
第6図 基本土層 (低地部分) ……………9	第48図 接合資料-13……………55
第7図 1号磔群……………10	第49図 接合資料-16……………57
第8図 石器の分布……………11	第50図 接合資料-23 (1) ……………58
第9図 石器の分布 (1号ブロック) ……………12	第51図 接合資料-23 (2)・80 ……………59
第10図 石器の分布 (2号・3号ブロック) ……………13	第52図 接合資料-26 (1) ……………60
第11図 石器の分布 (4号・5号ブロック) ……………14	第53図 接合資料-26 (2)・79 ……………61
第12図 石器の分布 (6号ブロック) ……………15	第54図 接合資料-27……………62
第13図 石器の分布 (7号・8号ブロック) ……………16	第55図 接合資料-32 (1) ……………63
第14図 石器の分布 (9号・10号ブロック) ……………17	第56図 接合資料-32 (2) ……………64
第15図 石器の分布 (11号・13号ブロック) ……………18	第57図 接合資料-42 (1) ……………65
第16図 石器の分布 (12号・14号ブロック) ……………19	第58図 接合資料-42 (2)・63 ……………66
第17図 石器の分布 (15号ブロック) ……………20	第59図 接合資料-44 (1) ……………68
第18図 石器の分布 (16号・17号ブロック) ……………21	第60図 接合資料-44 (2) ……………69
第19図 石器の分布 (18号・19号ブロック) ……………22	第61図 接合資料-69……………70
第20図 石器の分布 (20号ブロック) ……………23	第62図 接合資料-72 (1) ……………71
第21図 器種構成と石器石材 (1) ……………24	第63図 接合資料-72 (2)・45 ……………72
第22図 器種構成と石器石材 (2) ……………25	第64図 接合資料-75 (1) ……………73
第23図 器種構成と石器石材 (3) ……………26	第65図 接合資料-75 (2)・18 ……………74
第24図 出土石器 (1) ……………27	第66図 接合資料-78……………76
第25図 出土石器 (2) ……………28	第67図 接合資料-88 (1) ……………77
第26図 出土石器 (3) ……………30	第68図 接合資料-88 (2)・51 ……………78
第27図 出土石器 (4) ……………31	第69図 接合資料-89……………79
第28図 出土石器 (5) ……………33	第70図 接合資料-90……………80
第29図 出土石器 (6) ……………34	第71図 接合資料-92 (1) ……………82
第30図 出土石器 (7) ……………35	第72図 接合資料-92 (2) ……………83
第31図 出土石器 (8) ……………36	第73図 接合資料-93 (1) ……………84
第32図 出土石器 (9) ……………37	第74図 接合資料-93 (2) ……………85
第33図 出土石器 (10) ……………38	第75図 接合資料-65・87……………86
第34図 出土石器 (11) ……………40	第76図 接合資料-31・94……………87
第35図 出土石器 (12) ……………41	第77図 接合資料-36・52……………88
第36図 出土石器 (13) ……………42	第78図 接合資料-53・55……………90
第37図 出土石器 (14) ……………43	第79図 接合資料-59・82……………91
第38図 出土石器 (15) ……………44	第80図 接合資料-62・77……………92
第39図 出土石器 (16) ……………45	第81図 接合資料-74……………93
第40図 出土石器 (17) ……………46	第82図 接合資料-10・29・48……………94
第41図 出土石器 (18) ……………47	第83図 接合資料-6・20……………95
第42図 出土石器 (19) ……………48	第84図 接合資料-33……………96

第85図	接合資料-47	97	第117図	包含層出土の土器(4)	139
第86図	接合資料-35・84	98	第118図	包含層出土の土器(5)	140
第87図	接合資料-86・8・66・30・11	99	第119図	包含層出土の土器(6)	141
第88図	接合資料-4・40・7・24・1・64・ 58	100	第120図	包含層出土の土器(7)	142
第89図	接合資料-21・49・5・15・17・2・ 9・19・14	101	第121図	包含層出土の石器分布(1)	143
第90図	接合資料の分布(黒色頁岩)	106	第122図	包含層出土の石器分布(2)	144
第91図	接合資料の分布 (黒色安山岩・粗粒安山岩)	107	第123図	石器組成と石材	145
第92図	接合資料の分布(1号線群)	108	第124図	包含層出土の石器(1)	146
第93図	接合資料の分布 (1・2・4・5号ブロック)	109	第125図	包含層出土の石器(2)	148
第94図	接合資料の分布(6・7号ブロック)	110	第126図	包含層出土の石器(3)	149
第95図	接合資料の分布(8号ブロック)	111	第127図	包含層出土の石器(4)	150
第96図	接合資料の分布 (9・10・12・13号ブロック)	112	第128図	包含層出土の石器(5)	151
第97図	接合資料の分布 (14・15・17号ブロック)	113	第129図	包含層出土の石器(6)	153
第98図	接合資料の分布 (16~18・20号ブロック)	114	第130図	包含層出土の石器(7)	154
第99図	母岩別資料の分布(黒色頁岩-1・2)	115	第131図	包含層出土の石器(8)	155
第100図	母岩別資料の分布 (黒色安山岩-1・2)	116	第132図	包含層出土の石器(9)	156
第101図	母岩別資料の分布(黒色安山岩-3)	117	第133図	平安時代の遺構	157
第102図	母岩別資料の分布(珪質頁岩)	118	第134図	1号住居跡	158
第103図	その他の石材分布	119	第135図	1号住居跡出土遺物	159
第104図	5号住居跡出土のナイフ形石器	120	第136図	2号住居跡・出土遺物	160
第105図	ナイフ形石器(A群)の長幅比	121	第137図	3号住居跡・出土遺物	161
第106図	大形剥片素材のナイフ形石器	121	第138図	1号住居跡	162
第107図	新片剥離の工程概念	125	第139図	4号住居跡出土遺物	163
第108図	縄文時代の遺構	128	第140図	6号住居跡	163
第109図	5号住居跡・出土遺物	129	第141図	6号住居跡出土遺物	164
第110図	土坑(1)	130	第142図	7号住居跡・出土遺物	164
第111図	土坑出土の石器	131	第143図	7号住居跡出土遺物	165
第112図	包含層出土の土器分布(1)	132	第144図	8号住居跡	165
第113図	包含層出土の土器分布(2)	133	第145図	8号住居跡出土遺物	166
第114図	包含層出土の土器(1)	135	第146図	9号住居跡	166
第115図	包含層出土の土器(2)	136	第147図	9号住居跡・出土遺物	167
第116図	包含層出土の土器(3)	138	第148図	10号住居跡・出土遺物	168
			第149図	1号掘立柱建物跡	169
			第150図	時期不明の遺構分布	170
			第151図	土層の堆積状態 (7・10~14・22号溝)	171
			第152図	土坑(1)	172
			第153図	土坑(2)	173
			第154図	土坑(3)	174
			第155図	1~4号井戸・出土遺物	175

図 版 目 次

- PL 1 遺跡の遺景
PL 2-1. 遺跡近景 (南側から)
2. 遺跡全景 (西側から)
PL 3-1. 遺物の出土状態
2. 遺物の出土状態 (群群)
PL 4 出土石器 (1)
PL 5 出土石器 (2)
PL 6 出土石器 (3)
PL 7 出土石器 (4)
PL 8 出土石器 (5)
PL 9 接合資料 (1)
PL 10 接合資料 (2)
PL 11 接合資料 (3)
PL 12 接合資料 (4)
PL 13 接合資料 (5)
PL 14 接合資料 (6)
PL 15 接合資料 (7)
PL 16 接合資料 (8)
PL 17 接合資料 (9)
PL 18 接合資料 (10)
PL 19 接合資料 (11)
PL 20 接合資料 (12)
PL 21 接合資料 (13)
PL 22 接合資料 (14)
PL 23 接合資料 (15)
PL 24 接合資料 (16)
PL 25-1. 5号住居跡全景
2. 2号土坑
3. 3号土坑
4. 4号土坑
5. 5号土坑
PL 26-1. 5号住居跡出土の遺物
2. 土坑出土の遺物
PL 27 包含層出土の土器 (1)
PL 28 包含層出土の土器 (2)
PL 29 包含層出土の土器 (3)
PL 30 包含層出土の土器 (4)
PL 31 包含層出土の土器 (5)
PL 32 包含層出土の土器 (6)
PL 33 包含層出土の石器 (1)
PL 34 包含層出土の石器 (2)
PL 35 包含層出土の石器 (3)
PL 36 包含層出土の石器 (4)
PL 37-1. 1号住居跡全景
2. 1号住居跡掘り方
3. 1号住居跡カマド
4. 1号住居跡カマド掘り方
PL 38-1. 2号住居跡全景
2. 2号住居跡掘り方
3. 2号住居跡カマド
4. 2号住居跡カマド掘り方
5. 2号住居跡遺物出土状態
PL 39-1. 3号住居跡全景
2. 3号住居跡カマド
3. 3号住居跡カマド掘り方
PL 40-1. 4号住居跡全景
2. 4号住居跡カマド掘り方
3. 4号住居跡遺物出土状態
PL 41-1. 6号住居跡全景
2. 7号住居跡全景
PL 42-1. 8号住居跡全景
2. 9号住居跡全景
PL 43-1. 10号住居跡全景
2. 8号住居跡カマド
3. 8号住居跡カマド掘り方
4. 9号住居跡カマド
5. 10号住居跡カマド
PL 44 1・2号住居跡出土の遺物
PL 45 3~7号住居跡出土の遺物
PL 46 8~10号住居跡出土の遺物
PL 47 墨書土器
PL 48 墨書土器
PL 49-1. 1号掘立柱建物跡全景
2. 作業風景
3. 作業風景
4. 現地説明会風景
5. 復元住居
PL 50-1. 1号井戸
2. 2号井戸
3. 3号井戸
4. 4号井戸
5. 1号井戸出土の遺物

堀下八幡遺跡



国土地理院 25000分の1(大册)

I 発掘調査の経過

1. 調査までの経過

建設省は、一般国道17号の交通混雑緩和のため、東京～大宮～前橋間に大規模バイパスの建設を進めている。上武道路はその一環として計画されたもので、深谷バイパスの上武インターチェンジ（深谷市東方）を起点とし、利根川を渡河して群馬県に入り、伊勢崎市の東側を通過した後、前橋市北側を迂回して、前橋市田口町で現道に取りつく全長41.4km（内高崎工事事務所管内36.5km）の道路である。

昭和41年度に大宮国道工事事務所で調査が開始され、昭和44年度に高崎工事事務所に引き継がれた。都市計画は、昭和46年3月に尾島町～伊勢崎市、昭和58年3月に国道50号までの決定が行われた。

これに伴い、県教育委員会は、昭和45年度に開発諸事業との調整をはかる資料として、計画道路を中心に巾2kmの区域の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、遺跡総数は、472ヶ所にのぼった。

発掘調査は諸準備を整え、昭和49年1月から実施された。当初1班で進められたが、工事の進捗に対応して昭和59年度からは3班、60年度からは4班編成となり、昭和63年度で国道50号までの調査を完了した。一方、県教育委員会は埋蔵文化財の調査部門として昭和53年度に（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が設立され、同年以降の上武道路建設に伴う発掘調査は本事業団が実施し今日に至っている。

今回報告する堀下八幡遺跡は、分布調査で赤堀町No.3遺跡として登録した地点である。昭和60年の調査に先立つ表探でも土師器の散布が認められ、遺構の存在が確実視されることから、STNo.840から859にかけての延長380mを全面調査することとなった。本調査は、上武道路建設工事の進捗に対応して3班集体になった初年度の実施であり、以後の調査は急ピッチで進められた。

なお、上武道路は平成元年3月3日に前橋市飯土

井町から国道50号までが共用され、尾島町の国道354号から国道50号までが開通している。

※「上武国道地域埋蔵文化財分布調査報告書」

群馬県教育委員会 昭和46年



第1図 上武道路計画図

2. 遺跡の位置と周辺遺跡

赤城山は第三紀の複合成層火山で、四方に広大な裾野が展開している。山体は南東側を旧渡良瀬川で、南西側を旧利根川（現広瀬川）で浸食され、長大な崖線を形成している。山頂からみて、東南から西南の山麓には河川や湧水が多く、山体は浸食が進み、長狭な沖積地と丘陵性の台地が交互に入り込む複雑な地形を呈している。標高500m以下の山麓一帯には遺跡が密集して分布し、その調査事例も多い。一方、勢多郡赤城村の沼尾川から以北の西麓から北麓一帯では、深いV字状の谷地形が発達している。南麓に比べ、広く平坦な台地が展開している。西麓一帯は山林が多く、遺跡の分布状況は不明だが、大小の河川に沿う台地の縁辺や、湧水を伴う谷頭に遺跡が分布する可能性が高い。

以上、山麓一帯の地形と遺跡の立地傾向の概要を指摘した。山麓には、粕川扇状地や白川扇状地など小規模な扇状地が存在しており、山体の地形変化の複雑な様相が判明している。最近の発掘調査の成果でも、氾濫性の堆積物が起伏に富むローム台地を覆い、平坦な台地を形成する事例（神沢川流域）や、河川が氾濫して沖積地の一部が台地化した。集落を形成する事例（江竜川流域）が確認され、地形の変化を復元する作業も重要性を増してきている。山麓末端を横断する上武道路関係の遺跡に限定しただけでも、五目牛清水田遺跡・飯土井二本松遺跡などで、上述した地形変化の様子を確認しており、遺跡の動態を連動して分析する必要性が生じてきている。

堀下八幡遺跡は、南北5km以上も続く長狭な台地先端から約1kmの地点に位置し（第2図）、遺跡の立地する台地には、地蔵山丘陵や八幡山丘陵など山麓端部に多い「流れ山」が点在している。遺跡は、その八幡山丘陵の南側に位置し、丘陵の東側は東桂川の形成した沖積地に、西側は西桂川の形成した沖積地に接し、立地している。

周辺の地域には数多く遺跡が分布しており、その調査事例も多い。圃場整備事業に伴う調査事例が主

体であるだけに、制約条件も多く、そのため、調査自体が十分な情報を提供しているとはいえない。

旧石器時代 調査事例は概して少なく、上下二層に石器群が出土した下触牛伏遺跡と上武関連の六反田天神山遺跡(2)、飯土井二本松遺跡・今井道下遺跡など、9遺跡がある。80年代以後、上武関連の遺跡では旧石器時代石器群を対象に試掘調査を実施している。その結果、遺跡の規模は大小さまざまだが、ロームが堆積している台地では石器が必ず出土している。仮に、上武道路をトレンチに想定するなら、周辺地域は有数の遺跡密集地帯ともいえよう。石器の出土層位は「暗色帯」が最も多い。

縄文時代 明確な遺構を伴う遺跡は少数で、包蔵地が圧倒的に多い。明確な遺構(住居)を伴う遺跡には前期段階の集落が多く、小規模である。前期集落の場合、県内では前期後半段階の集落であることが多く、山麓一帯の分布調査も同様な傾向を示している。堀下八幡遺跡の周辺でも同様な傾向を示しており、北通遺跡(9)や鷹巣遺跡(10)で前期後半の住居を検出している。一方、堀下八幡遺跡の北側に隣接する八幡林古墳群(11)や、最近調査した上武道路関連の五目牛清水田遺跡(5)・五目牛南組遺跡(4)では、前期前半の花積下層段階の住居が確認され、資料の不備を補う充実したデータが蓄積されつつある。

弥生時代 周辺の地域には、この時代の遺跡分布は不明確である。堀下八幡遺跡周辺では今井南原遺跡で弥生後期の住居を確認している。この遺跡の立地条件から想定して、付近には散在してこの時代の集落が存在する可能性が高い。

古墳時代・平安時代 周辺地域の古墳時代の遺跡の在り方は宮川の下流域に立地する遺跡群の分析（能登ほか、1983）結果を良く反映している。古墳時代前半から集落を形成する遺跡には、中畑遺跡(6)や五目牛清水田遺跡が、平安時代から集落を形成する遺跡には、北通遺跡(9)や鷹巣遺跡(10)・五目牛東遺跡(14)A区・B区がある。古墳群は「流れ山」の上に立地する場合が多く、八幡林古墳群や地蔵山古墳群(15)・蟹沼東古墳群(16)などの調査例がある。

第2図 遺跡の位置と周辺道路



2. 遺跡の位置と周辺道路

3. 調査の方法

遺跡は上武道路 S T No840から S T No859までの延長380m、対象面積は12,250㎡となっている。

この部分は、上武道路建設に伴う埋蔵文化財分布調査において遺物の散布が確認されており、当初から包蔵地として認定されていた地点である。そのため今回の発掘調査が実施されるまで試掘調査などは行われておらず、遺構数・遺物量をはじめとする遺跡の内容については不明な部分もあった。

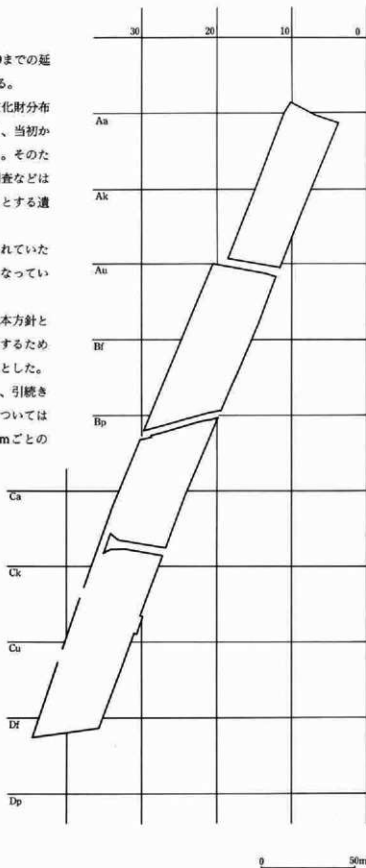
対象地内は桑園もしくは畑として利用されていたが、上武道路用地となって以降は未耕地となっている。

調査に際しては全面調査を行うことを基本方針とし、まず遺構および遺物の出土状況を把握するため表土掘削とともにその確認を実施するものとした。

調査は遺跡東部にあたるD区より着手し、引続きA区までおこなっている。調査区の設定については日本平面直角座標系に基づき遺跡上に100mごとの基軸線を設定し、西側からA区・B区・C区・D区とし、さらに各区を1辺4mのグリッドに区切った。グリッド基点は北西隅とし、南北方向に0から24の数字をあて、東西方向にaからyまでのアルファベットを付している。グリッドの呼称はAa-10・Ba-10等と表示している。

(第3図)

全面調査を行うことを前提としているが、調査地内には路線に沿ってもしくは横断する農道が数本存在し、この道路の確保も必要不可欠なものであった。道路下については仮道路を設置し調査を実施したが、一部については未調査となった部分もある。



第3図 グリッド設定図

4. 調査の経過

堀下八幡遺跡の発掘調査は1984年（昭和59年）10月1日から1985年3月31日の期間で行われ、対象面積は12,250㎡となっている。当該年度は前半期に上植木光仙房遺跡（『上植木光仙房遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第80集 1988年）の発掘調査が行われ、引き続き本遺跡の調査に着手している。

調査は上武道路工事工程とも関連する関係から遺跡東側にあたるD区より着手し、順次A区まで表土除去、遺構確認作業を行っている。

調査の経過は作業日誌に記録されているが、ここではその日誌をもとに月毎の動向を示し、調査経過の概要を報告していきたい。

10月期

調査事務所および作業所を設営するとともに調査器材の搬入を行う。あわせて前月まで実施していた上植木光仙房遺跡終了に伴う残務を行う。

本遺跡は全面調査が前提であるため、当初から表土掘削を行うものとし、D区より着手している。この段階では遺跡東部分に竪穴住居が確認されはじめ西方に向かって遺構の存在がやや稀薄となる傾向が認められた。

11月期

遺構の確認および調査を引き続き行う。住居は遺跡東側部分にのみ存在し、他区域には広がりをもたない。A区・B区には溝・土坑・ピット等とともに縄文時代の遺物包含層が確認された。住居を初めとする各種遺構についてほぼ着手している。

また、この期には12月8日（土）・9日（日）に実施予定の遺跡説明会へむけた準備も行っている。この説明会は近接する五目牛南組遺跡および五目牛清水田遺跡と一斉に実施するもので、各遺跡とも特色をうちだすようにし、本遺跡については検出された竪穴住居のうち一軒について復元するものとしている。

12月期

遺構調査とともに旧石器時代の試掘調査も着手している。その結果、調査A区においてローム層から石器群の出土を確認したため、引き続き範囲確認調査を実施している。

なお、8日・9日両日については天候にも恵まれ予定通り遺跡説明会を行っている。

1月期

平安時代住居および各種遺構の調査を終了させ、旧石器時代の試掘調査を継続的に行う。試掘は遺跡全域を対象としたが、石器出土地点はA区にほぼ限定されるようである。

2月期

A区南側において縄文時代の住居1軒・土坑4基が検出される。埋没土がローム層類似の土であったため確認に時間を要してしまった。旧石器時代の遺物はこの部分にも広がりをもつため早急に調査を進めるものとしている。

本遺跡の調査期間は3月までを終了期間としている。

3月期

遺構類についてはほぼ調査が終了し、主体はA区における旧石器時代の調査となる。

石器類が集中的に出土し、また出土層が硬い等調査終了期を迎え困難な日々が続く。

さらに本期中旬には積雪もあり、条件はより悪いものとなった。

この間調査完了へむけ体制の充実等を計りながら進化した結果、3月31日をもって調査の全工程が終了している。

5. 遺跡の概要

発掘調査の対象範囲は、全長400m・幅30mに及ぶ。全体に遺構や遺物の分布も薄く、さらに、耕作や水田の開削で遺構を破壊するなど、遺構や遺物の検出状態は良好ではない。それでも台地縁辺を中心に、縄文時代前期の住居1軒・土坑4基（A区）や、平安時代の住居9軒・掘立柱建物跡1棟（D区）を検出したほか、後期旧石器時代の石器約1000点、縄文時代早期から後期の土器や石器が多数出土している。ここでは、それぞれ時代毎に分け、その概要を

説明しておく。

旧石器時代 この時代の石器が出土する可能性の最も強い八幡山丘陵の南側斜面部（A区）から試掘調査（第4図）を開始した。その結果、丘陵の南側斜面の全域に石器が集中分布し、他の地点には石器が出土しないことを確認した。

総計988点（礫28点を含む）の石器が出土している。石器の集中地点を20カ所、礫群を1カ所確認した。石器は第V層から第VII層まで、とりわけ、第VI層に多く出土しており、礫群の出土層位と良く一致して



第4図 調査範囲(旧石器)と周辺の地形

1:2000

いる。石器は散漫な状態で分布する傾向が強く、石器が最も多く出土した地点でも、約90点の石器が出土したのにすぎない。また、石器の集中地点は隣接して分布しており、この地点で継続的・断続的に生活した結果なのかもしれない。石器石材は、県内で採集が可能な黒色安山岩が最も多く出土している。黒色頁岩の出土も多く、両者で全体の90%以上を占め、赤城山麓一帯の「暗色帯」から出土する石器群の一般的な在り方を示している。出土石器は、剥片や砕片が主体で、定形石器は概して少ない。そのなかでも、小形・縦長の剥片を使用するナイフ形石器の一群や、台形状ないし切出状を呈すナイフ形石器の一群は、石器群の特徴的な存在である。県内では、この段階の石器(特に、小形のナイフ形石器の一群)は概して少なく、その資料的価値は高い。接合資料は、101例を確認した。縦長剥片の作出を目的に剥離している資料が多い。また、接合資料は複数の地点で接合する資料も多く、剥離地点を変え、剥片を剥離している状態を暗示する資料も存在する。資料が持つ制約から母岩の分類は困難で、同一の母岩を6種確認したのにとどまる。

縄文時代 縄文時代については遺構・遺物とも量的には少ない。遺構は八幡山丘陵南斜面にあたる遺跡西側(A区)に住居1軒・土坑4基が確認されている。他区には認められていない。住居の遺存はあまり良好ではなく、炉・柱穴等について不明な部分もあり、平面形状もやや不安定な状態を示している。時期は出土土器から判断して前期諸磯b式期に位置付けられるであろう。土坑についてはその性格および時期について有効な情報が得られていない。住居に近接するものもあり関連も想定されるが確定できない。

土器は、早期燃糸文系土器、押型文土器、前期黒浜式土器、諸磯a・b式土器、中期加曾利E式土器、後期称名寺式土器、加曾利B式土器等がA区・B区に主として分布している。

平安時代 遺跡東側(C区)に住居が9軒確認されている。他区には認められていない。この区については南東側に土取りによる削平部分があり、住居も遺失している可能性がある。検出された住居は遺存状態はあまり良好ではなく、攪乱もかなり認められる。住居は9軒の内3軒について重複が認められる。この住居群に接して掘立柱建物が1棟存在する。二間×二間の規模をもち、柱穴は円形を示す。出土遺物から時期は確定できないが、位置関係からみて住居群に伴う可能性が高いと考えられる。

その他 井戸4基の他、主としてB区に遺構が確認されている。溝については区画・地割・水路等が含まれるが、個々の性格、時期については不明なものが多い。なお、A区西北部には近世以降の墓所が存在したことが確認されている。

6. 基本土層

上武道路は、沖積地と丘陵性の台地を交互に分断して赤城の山麓端部を横断している。調査区内にはA区東側に浅い沖積地が入り込み、台地を分断している。上述した沖積地より東側は底平なローム台地、西側は八幡山丘陵（赤城山の山麓端部に多い「流れ山」の一つ）の末端に相当し、微妙に地形が相違している。遺跡は上述した台地部分と低地部分からなり、各々の地点で土層の堆積状態は相違していた。

台地部分 台地部分では、表土（第I層）の直下からローム層へ移行していく。ローム層以下の堆積状態は東西の台地で完全に一致しており、赤城南麓の丘陵性台地に所在する他の遺跡と同様な土層が堆積していた。

なお、八幡山丘陵の西南斜面部では水田開削に伴い、丘陵が削平され、縄文時代の土器や石器の包含層や旧石器時代の石器包含層を完全に破壊していた。その開削深度は「暗色帯」まで及んでいた。

第I層 表土

第II層 黄褐色軟質ローム層。いわゆる「ソフト・ローム」で、その下面には顕著な凹凸を持つ。周辺の下蝕牛伏遺跡などでは、風化の相違を基準に2層に細分している。

第III層 黄褐色硬質ローム層。白色パミス（As-SP）を多く混入する。

第IV層 暗褐色硬質ローム層。As-BPを塊状に混入する。全体に砂質で、黒色の鉱物が目立つ。第III層に比べ、やや暗い色調を呈す。

第V層 黄褐色ローム層。やや軟質で、漸移的に変化している。V層下位部分からVI層上位部分にATの極大値を持つ。

第VI層 暗褐色ローム層。

第VII層 暗褐色ローム層。第VI・VII層とも、いわゆる「暗色帯」に相当する。石器は第VI

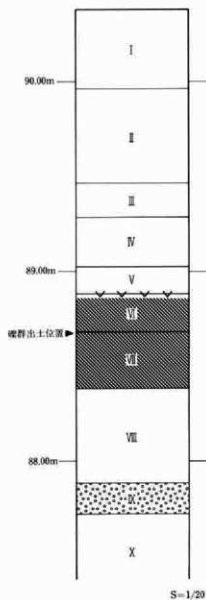
層から第VII層の境界付近に多く出土する。全体に軟質だが、第VII層に比べ、第VI層は暗い色調を呈す。

第VIII層 褐色硬質ローム層。粘性が強く、黒色の鉱物を多く混入する。

第IX層 八崎軽石層（HP）。

第X層 褐色硬質ローム層。

低地部分 A区0ライン～B区bライン付近が低地部分に相当する。この浅い低地は遺跡の北側に延び、



第5図 基本土層(台地部分)

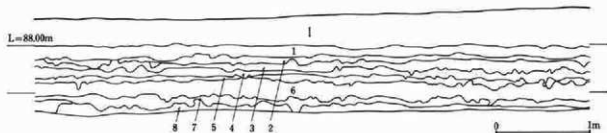
凹凸の有る微妙な地形を形成している。現在、この低地の北側には湧水も存在せず、また、低地を形成する河川も想定できないため、もともと存在した凹地が徐々に埋没した可能性が高い。

第6図は、A区Vライン付近を通る農業用道路の東側で観察した土層の堆積状態を図示した。

この土層断面には、第4層に一部純層に近い状態で標名山ニツ岳火山灰FA（5世紀末～6世紀初頭）が堆積していたほか、5層以下にもニツ岳噴出軽石FP（6世紀中頃）に似た軽石を多量に含む黒色土が堆積していた。従来の所見と違い、層位が逆転して堆積していた。そこで、群馬大学新井原雄教授に現地でテブラの観察を中心に、土層の堆積状態を観察して戴いた。その結果、4層に堆積していたテブラはニツ岳火山灰FAであること、5層以下の軽石もニツ岳噴出の軽石であること、の2点の所見を得た。近年の調査成果では、これまでこの地域でFPと同定していた軽石がFAに伴う軽石である可能性が高く、実際そうした方が古墳の構築年代にも良く合致すること、また、標名・有馬火山灰(Hr-A A)の検出など、FA・FP以外にもニツ岳の活発な活動を示唆している。以上の成果を勘案して、5層以下に堆積していた軽石が6世紀中頃の噴火に伴うFP以外の時期の噴出軽石であることも予想され、また、逆に4層のFA自体2次堆積している可能性もある、という相反する可能性を想定した。しかし、同様な土層の堆積状態は周辺地域には確認できないこと、また、再堆積の原因ともなる河川の氾濫は隣接する波志江中峰岸遺跡でも確認できないことか

ら、層位が逆転する明確な理由は不明確である。また、方形区画の溝を除いて、この低地部分は遺構の希薄な部分でもあり、遺構に伴う遺物や土層の堆積年代を示す遺物は全く出土していない。このため、路線に限定した狭い調査範囲の中で全体を判断するのは極めて難しい。現状では上記2点の可能性を断定する明確な根拠はなく、どちらとも判断できない。

- | | | |
|----|---------|---------------------|
| 1層 | 茶褐色砂質土層 | 直径1～5mmの軽石粒を含む。 |
| 2層 | 茶褐色砂質土層 | 直径1～5mmの軽石粒を多量に含む。 |
| 3層 | 暗褐色土層 | 粘性をもつ硬質土。微量の軽石粒を含む。 |
| 4層 | 灰白色土層 | 粘性強くFAを多量に含む（一部純層）。 |
| 5層 | 暗褐色土層 | 粘性強く、軽石粒を微量に含む。 |
| 6層 | 黒色土層 | 粘性なくもろい、軽石粒を微量に含む。 |
| 7層 | 暗褐色土層 | 粘性もつ、軽石粒を微量に含む。 |
| 8層 | 暗褐色砂質土層 | |



第6図 基本土層(低地部分)

II 旧石器時代の遺構と遺物

1. 礫群

礫群は、台地先端・東南のAm・An-12・13Gに分布している。石器の分布域と10m以上の空白域を有し、単独に近い状態を示す。礫群の周辺には、この地点以外で生産した剥片が数点出土したほか、敲石3点が分布していた。また、礫群は明確に集中することなく分布しており、県内ではこうした状態が旧石器時代石器群の一般的な在り方でもある。

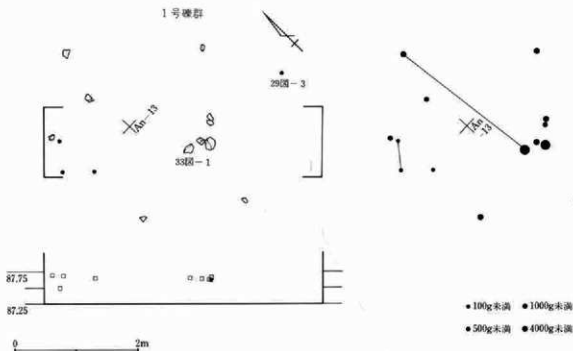
1号礫群(第7図)

総計12点の礫からなる。礫群は長軸4m・短軸2mの範囲に散漫な状態で分布している。すべて破損礫であり、500g程度の礫を多用している。出土した礫には、接合状態で1886gを測る礫や破損状態で3000gを越す礫が存在している。このほか、100g未満の小礫が出土した。この小礫の「割れ面」は凹凸

に富み、打割した「割れ面」の状態と違う。礫群はVII層上位に安定した状態で出土している。

礫の接合は2例4点(第33図1・2)が確認され、2例とも礫群の内部で接合する。このうち1例(第33図1)には、「割れ面」の状態から推定して、意図して打割した可能性が指摘されよう。

礫群を構成する礫には、タールの付着した礫(第33図1)の他、熱で破損した礫も存在しており、火の使用を明瞭に示している。また、この礫群の周辺には、礫の小口部分に打痕を持つ敲石3点(第32図1・2・3)の他、形状の良好な剥片(第29図3・5、第38図5)が出土しており、この剥片と同一母岩の剥片や破片を含まないことから、搬入状態を示していた。以上を総合して判断するなら、礫群、および、その周辺には、石器製作址というよりも生活址に近い要素を多く残しているといえよう。



第7図 1号礫群

2. 石器の分布

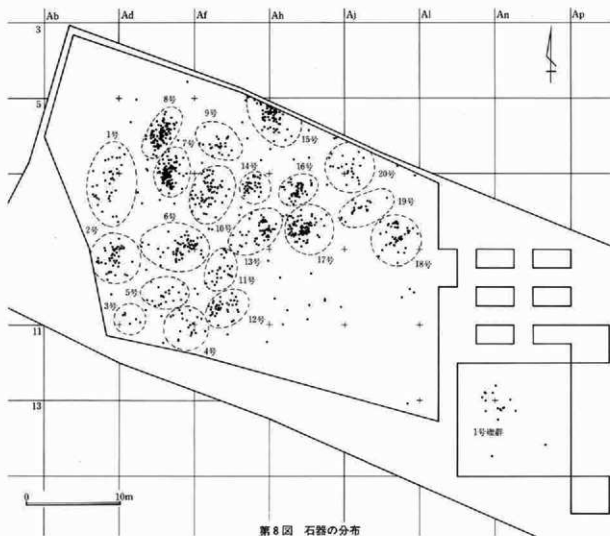
路線に限定した調査は広大な山麓を横切る長大なトレンチ(長さ400m・幅36m)に似ている。旧石器時代石器群は、路線西側のA区に集中して出土した。A区東側には浅い凹地が入り、この凹地が台地を分断している。これより東側(B区～D区)の台地では、石器群は未検出である。

石器が出土した地点(A区)は、通称「八幡山丘陵」と呼ぶ丘陵の南側斜面に相当する。この丘陵は赤城の南麓に点在する「流れ山」のひとつで、水田面と約6mの比高差がある。石器群は、路線北側の丘陵斜面にも確実に分布すること、調査区南西部は水田開削に伴い削平され、また、南側の側道部分は

未調査であり、実態は不明だが、石器の分布する可能性も否定できない。

なお、この遺跡に隣接する波志江中峰岸遺跡(昭和60年度調査)の調査結果から、これ以上、路線の西に石器が分布しないことを確認している。

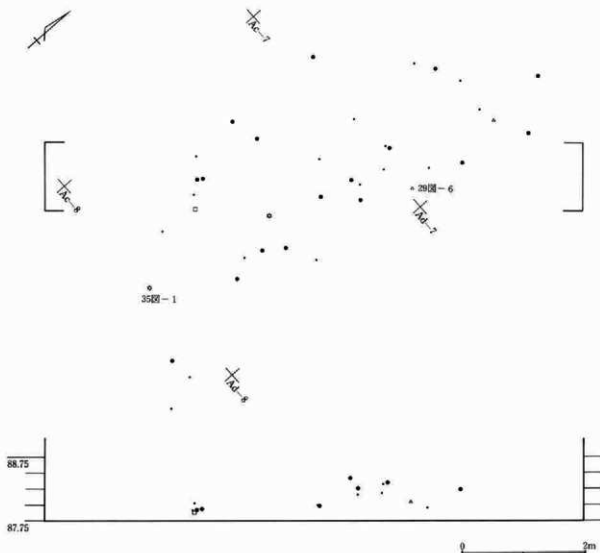
調査の結果、20カ所の石器の集中地点と1カ所の礫群を確認した。それぞれ石器の集中地点は、石器数量や石材構成が類似しており、顕著な相違は指摘できない。また、相互に隣接して分布しているのも特徴的であり、ほぼ単独に近い状態で分布する礫群と対照的である。礫群は石器の分布域と10m以上の空白域を隔て分布しており、また、礫群の周辺には石器製作を示す剥片や砕片は分布せず、良好な形状の剥片が出土している。



第8図 石器の分布

II 旧石器時代の遺構と遺物

1号ブロック



第9図 石器の分布(1号ブロック)

石器群は、V層からVII層まで、とりわけ、VI層に多く出土する傾向が指摘され、また、こうした状態はVII層上位に出土している礫群の出土状態とも良く整合する。なお一部には、住居(縄文・5住)を構築する段階で破壊され、上半が不明なブロックも存在するほか、IV層やVII層に食い込み、石器が出土しているブロックもあるようで、一概に比較できない点もある。ただ、微妙な石器群の同時性は別に、接合資料や同一母岩の分布などから、「暗色帯」より出土する石器群と、大枠では把握できるだろう。

1号ブロック(第9図)

ブロックは、台地西側の斜面(Ac-6・7G)で検出した。確認した20カ所に及ぶ石器の集中地点の中で最も西側に位置している。南側に2号ブロックが、西側に6～8号ブロックが隣接する。石器は長軸7.7m・短軸3.1mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器の分布状態は集中性に欠け、散漫な分布状態を示す。石器はV層からVII層に出土しており、その上位と下位部分とは約50cmの高低差を持つ。石器はVI層に多く出土している。

2. 石器の分布

総計38点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。このほかには、使用痕のある剥片や石核が各2点・拳大の礫1点が出土した。全体の58%を黒色安山岩が、約30%を黒色頁岩が占め、この遺跡の石材組成の基本的な在り方を示している。その他、敷石の破片である可能性の強い砂石が1点出土している。接合資料5例が確認され、このうち、1例（接合資料-3）は2号ブロック出土の石器と、1例（接合資料-4）は11号ブロック出土の石器と、それぞれ接合する。

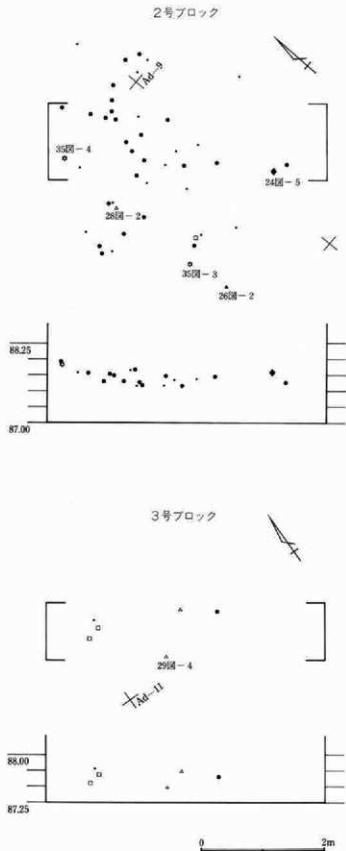
2号ブロック(第10区)

ブロックは、台地西側の斜面(Ac-9Gを中心に)で検出した。1号ブロックの南側に位置し、5・6号ブロックが隣接している。石器は径3.3mの範囲に分布していた。石器は良好に集中して出土している。石器はV層からVII層まで出土しており、その上位と下位部分とは約40cmの高低差を持つ。VI層に多く出土している。

総計46点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。このほかには、切出状を呈すナイフが1点と加工痕・使用痕のある剥片が各1点出土している。石器石材は黒色安山岩が主体(32点)で、黒色頁岩が次に多い。接合資料4例を確認しており、このうち、1例は1号ブロックから出土した石器と接合する。

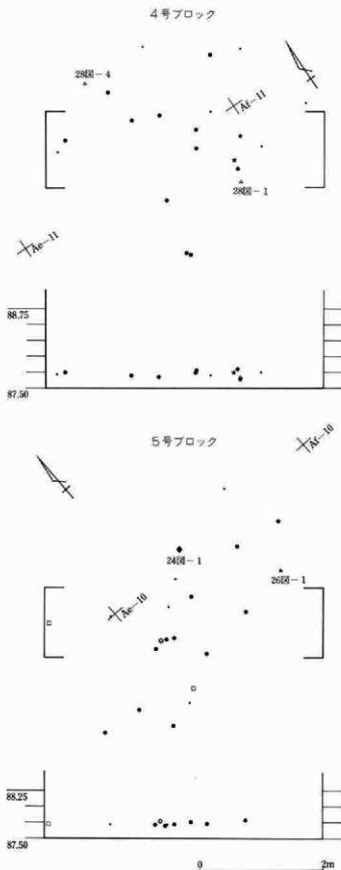
3号ブロック(第10区)

ブロックは、台地西側の斜面(Ad-10G)で検出した。20カ所に及ぶ石器の集中地点の南西に位置する。東側に4・5号ブロックが隣接する。石器は長軸2.2m・短軸1.5mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器の分布状態は集中性に欠け、散漫な分布状態を示す。石器はV層からVII層に出土しており、



第10図 石器の分布(2号・3号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第11図 石器の分布(4号・5号ブロック)

特に、VI層に多く出土している。その上位と下位部分とは、約35cmの高低差を持つ。

総計6点の石器が出土している。石器6点の分布範囲は狭く、量的に最も小規模である。使用痕のある剥片2点が組成の主体を占め、このほか、剥片・碎片が各1点出土している。石器石材は4点とも黒色頁岩を使用している。また、上記石器以外にも2点の礫が出土しており、その遺存理由は不明だが、このうち、1点にはススが附着している。

4号ブロック(第11図)

ブロックは、台地南側の斜面(Ae・Af-10・11G)で検出した。確認した20カ所に及ぶ石器の集中地点の中で、最も南側に位置している。石器は長軸5.2m・短軸3.3mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器の分布状態は集中性に欠け、散漫な分布状態を示す。石器はV層からVII層に出土しており、特に、VI層に多く出土している。その上位と下位部分とは約20cmの高低差を持つ。

総計21点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。このほかには、使用痕のある剥片2点・敲石2点が出土している。石器石材は、全体の2/3が黒色安山岩を、残り1/8が黒色頁岩を使用している。接合資料4例を確認している。このうち、1例(接合資料-11)は16号ブロック出土の石器と接合している。

5号ブロック(第11図)

ブロックは、台地西側の斜面(Ad・Ae-9・10G)で検出した。ブロックの南側に4号ブロックが、北側に6号ブロックが、東側に11・12号ブロックが隣接している。石器は長軸5.5m・短軸2.6mの楕円形状の範囲に分布している。石器の分布状態は集中性に欠け、散漫な分布状態を示す。石器はV層からVII層

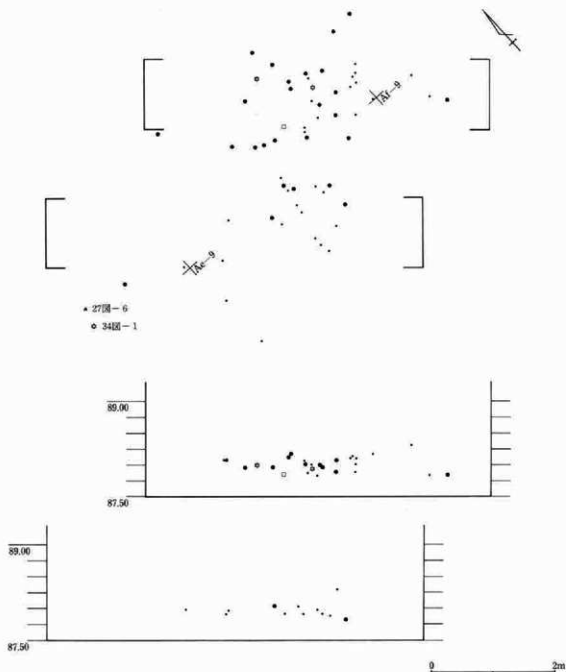
2. 石器の分布

に出土しており、特に、VI層に多出している。その上位と下位部分とは約15cmの高低差を持つ。

総計21点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。このほかには、二側縁に調整加工したA群のナイフ（第24図1）や、加工痕のある剥片（第26図1）が出土している。石器石材は全体の52%を黒色頁岩が、28%を黒色安山岩が占め、

このほかには黒曜石や流紋岩が組成する。石器の接合は3例（接合資料-13・14・15）を確認した。このうち、2例（接合資料-13・15）は約20mの接合距離を有し、接合資料-13はAi-10G出土の石器と、接合資料-15は9号ブロック出土の石器と接合する。

6号ブロック



第12図 石器の分布(6号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

6号ブロック(第12図)

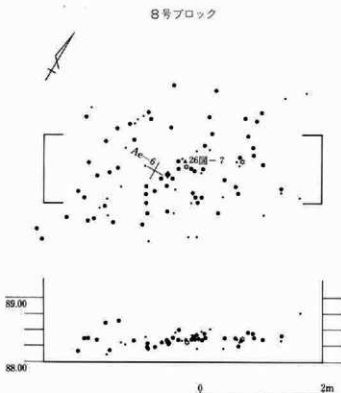
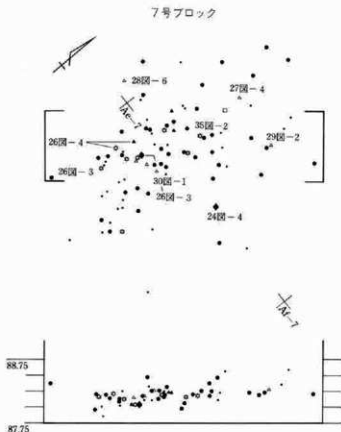
ブロックは、台地西側の斜面(Ad-8・9 G、Ae-8・9 G、Af-8・9 G)で検出した。東側には11号ブロックが隣接するほか、北側にはやや距離を隔て10号ブロックが位置している。石器は長軸4.4m・短軸3.6mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器は西側で散漫状態で出土する一方、東側では良く集中している。東側では、2カ所に石器が集中しており、Ae-8 Gの集中地点では剥片や破片を主体に石核が分布するのに対し、Ae-9 Gでは破片を主体に分布するなど、分布状態が相違している。ブロックの細分が可能であるのかもしれない。石器はV層からVII層に出土し、特に、VI層に多く出土している。その上位と下位部分とは約50cmの高低差を持つ。

総計61点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。このほかには、加工痕のある剥片(第27図6)や、ススの付着した礫が1点組成している。全体の約90%を黒色安山岩が占め、このほか、黒色頁岩(3点)や黒曜石が若干組成している。接合資料7例が確認され、このうち、2例(接合資料-20・21)はAe-11G・Af-8 G出土の石器と、それぞれ接合している。

7号ブロック(第13図)

ブロックは、台地西側の斜面(Ad-6・7 G、Ae-6・7 G)で検出した。北側に8号ブロックが、東側に10号ブロックが隣接している。石器は長軸4.6m・短軸3.3mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器は良く集中しており、集中度は高い。石器はV層からVII層に出土しており、特に、VI層に多く出土する傾向を示している。その上位と下位部分とは約70cmの高低差を持つ。

総計92点が出土しており、確認した20カ所



第13図 石器の分布(7号・8号ブロック)

2. 石器の分布

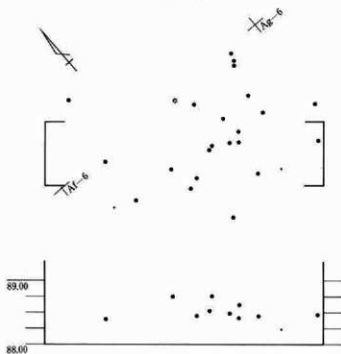
の石器の集中地点の中で最大規模を誇る。剥片や砕片を主体に、台形に近い形態のナイフ1点や、使用痕・加工痕のある剥片(各5点)を組成する。全体の約68%を黒色安山岩が、約30%を黒色頁岩が占め、このほか点紋頁岩1点が組成している。接合資料は10例が確認され、このうち、2例(接合資料-29・30)は8号ブロック出土の石器と接合する。

なお、このブロックには母岩別資料・黒色安山岩-3に分類可能な剥片1点が出土したほか、礫1点が出土している。この礫にはススが附着していないこともあり、その機能・用途は不明確である。

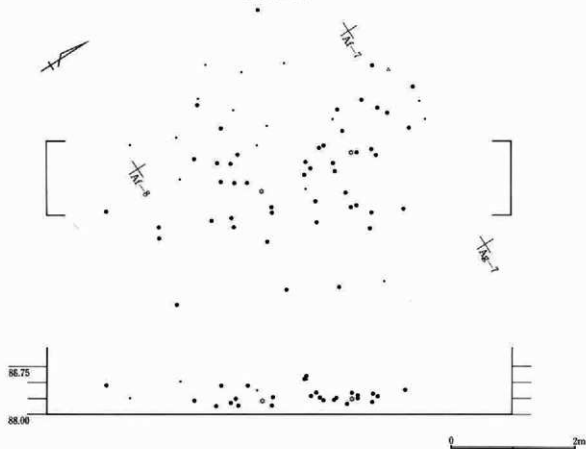
8号ブロック(第13図)

ブロックは、台地西側の斜面(Ae-6を中心に)で検出した。20カ所に及ぶ石器集中地

9号ブロック



10号ブロック



第14図 石器の分布(9号・10号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

点の中で、最も北西側に位置する。石器は長軸4.8m・短軸2.8mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器は良好に集中しており、分布密度は高い。

石器はV層からVII層に出土しており、特に、VI層に多出する傾向が強い。その上位部分と下位部分とは、約65cmの高低差を持つ。

総計90点の石器が出土している。剥片や破片を主体に組成するほか、加工痕のある剥片(第26図7)1点が出土している。全体の90%以上を黒色安山岩が占め、残り10%弱は黒色頁岩を使用している。接合資料は13例を確認した。このうち、2例(接合資料-29・30)は7号ブロック出土の石器と接合している。

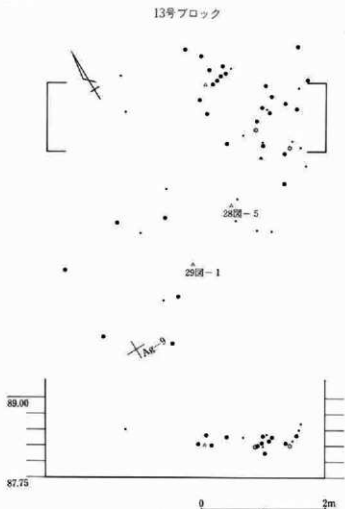
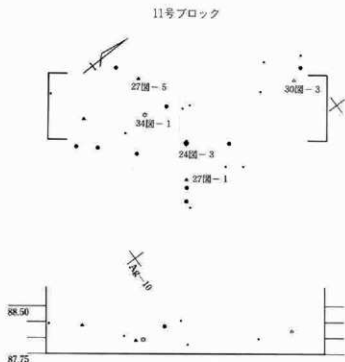
9号ブロック(第14図)

台地南側の斜面(Af-6Gを中心に)で検出した。石器は長軸4.0m・短軸3.1mの範囲に、楕円形状に分布しており、その分布状態は散漫で、分布密度は低い。石器はV層からVII層に出土しており、とりわけ、VI層に多く出土している。その上位部分と下位部分とは約40cmの高低差を持つ。

総計25点の石器が出土しており、剥片や破片が組成の主体を構成する。黒色安山岩に比べ、黒色頁岩を多く使用している。現在まで接合資料は5例を確認しており、2例(接合資料-42・93)が10号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-15)が5号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-66)が15号ブロック出土の石器と、それぞれ接合している。

10号ブロック(第14図)

台地南側の斜面(Af-10Gを中心に)で検出した。石器は長軸5.5m・短軸4.0mの範囲に、概ね、楕円形状に分布しており、良く集中している。V層からVII層に出土しており、VII層上位に多く出土している。その上位部分



第15図 石器の分布(11号・13号ブロック)

と下位部分とは約50cmの高低差を持つ。

総計65点の石器が出土している。剥片や破片を主体に組成するほか、使用痕のある剥片や石核が出土している。全体の70%弱を黒色安山岩が、30%を黒色頁岩が占め、このほかには、珪質頁岩1点が組成しているのにすぎない。接合資料は7例が確認され、このうち、1例（接合資料-48）が13号ブロック出土の石器と、1例（接合資料-47）が11号ブロックから出土した石器と、2例（接合資料-42・93）が9号ブロック出土の石器と、1例（接合資料-44）が9号・11号・17号ブロック出土の石器と、それぞれ接合している。

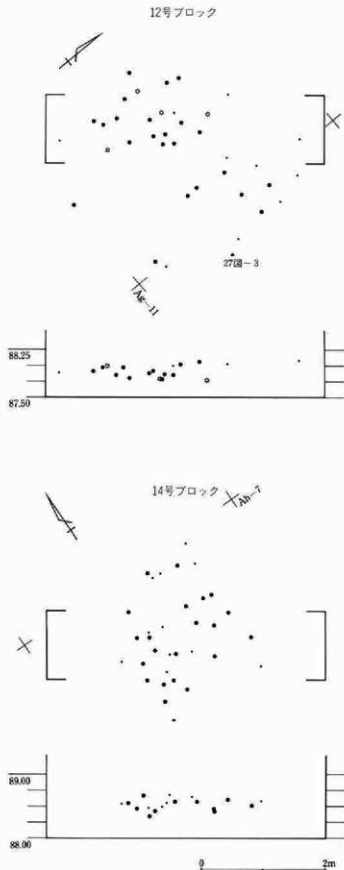
11号ブロック(第15図)

台地南側の斜面(Af-9 G)で検出した。石器は長軸4.2m・短軸2.4mの範囲に、概ね、楕円形状に分布しており、散漫な分布状態を示す。全体の80%を黒色安山岩が占め、残り20%は黒色頁岩を使用している。石器はIV層下部からVII層上部に出土しており、VI層に多く出土する傾向を示している。

総計25点の石器が出土している。剥片や破片を主体に組成するほか、二側縁に調整加工を施すナイフが1点(第24図3)や、加工痕・使用痕のある剥片が4点出土している。これまで接合資料は4例が確認され、このうち、1例（接合資料-4）は1号ブロックから出土した石器と、2例（接合資料-44・47）は10号ブロック出土の石器と、1例（接合資料-49）はAf-6 Gから出土した石器と、それぞれ接合している。

13号ブロック(第15図)

台地南側の斜面(Ag-8 G・Ag-9 G)で検出した。石器は長軸5.5m・短軸3.5mの範囲に、概ね、楕円形状に分布しており、東側では密に、西側では疎らに分布する傾向が指



第16図 石器の分布(12号・14号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

摘されよう。石器はV層からVII層に出土しており、VI層下部からVII層上部に安定した状態で多出する。上位部分と下位部分とは、約50cmの高低差がある。

総計52点の石器が出土している。剥片や破片を主体に、加工痕・使用痕のある剥片を組成している。黒色頁岩が全体の50%を、黒色安山岩が48%を占めている。これまで、接合資料9例を確認した。このうち、1例(接合資料-48)は10号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-91)は11号ブロック出土の石器と、2例(接合資料-56・90)は17号ブロック出土の石器と、それぞれ接合している。

12号ブロック(第16図)

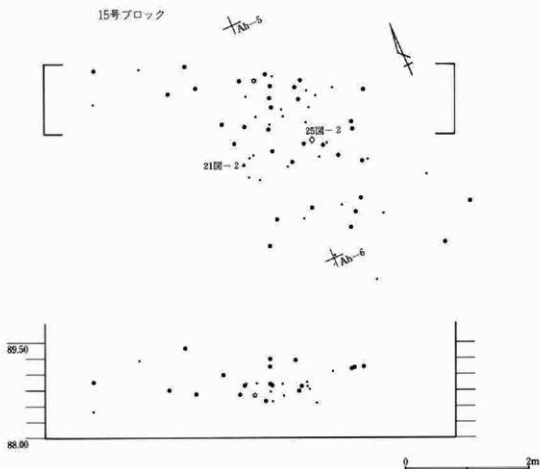
台地南側の斜面(Af・Ag-10G)で検出した。確認した20カ所の石器の集中地点の中で南側に位置している。石器は長軸3.9m・短軸3.1mの範囲に、楕

円形状に分布している。石器の分布密度は高く、2カ所に集中部を形成しているようにみえる。石器はV層からVI層に出土しており、VI層上位部分に多く出土する傾向が強い。上位部分と下位部分には、約30cmの高低差がある。

総計38点の石器が出土しており、剥片や破片を主体に組成する。全体の97%以上を黒色安山岩が占め、このほかには珪質頁岩1点が出土しているのにすぎない。現在まで、接合資料は4例が確認され、このうち、1例(接合資料-74)は2号・17号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-92)は6号ブロック出土の石器と、それぞれ接合している。

14号ブロック(第16図)

台地南側の斜面(Ag-7G)で検出した。石器は長軸2.8m・短軸2.2mの範囲に、概ね、楕円形状に



第17図 石器の分布(15号ブロック)

2. 石器の分布

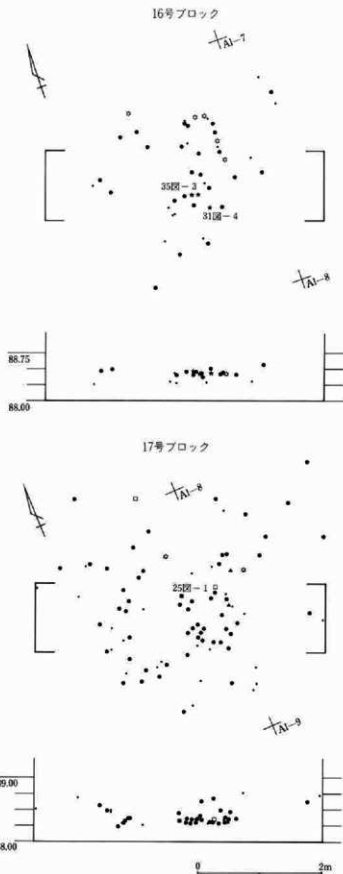
分布していた。石器は良好に集中した状態で出土している。石器はV層下部からVI層中位に出土しており、とりわけ、VI層上位に多く出土する傾向を示している。上位部分と下位部分とは、約35cmの高低差がある。

総計35点の石器が出土しており、剥片や砕片を主体に組成するほか、礫が1点出土している。全体の50%以上を同一母岩の珪質頁岩が、残り30%を黒色頁岩が、20%を黒色安山岩が占め、珪質頁岩が多い点で特徴的である。接合資料1例（接合資料-89）を確認している。

15号ブロック(第17図)

台地南側の斜面(Ah-5 Gを中心に)で検出した。確認した20カ所の石器の集中地点の中で、最も北側に位置しており、石器分布の一部は確実に北側に延びている。その全貌は不明だが、現状で長軸4.6m・短軸3.1mの範囲に、楕円形状に分布する。石器はIV層からVIII層に出土しており、特に、V層とVII層に多く出土する傾向を示していた。また、ソフトローム(II層)より槌状刻痕を有す特徴的な形態の彫器(第124図2)も出土していることから、文化層(石器群)の重複をも考慮して、石器の接合関係や母岩に注意した。その結果、V層出土の石器と、VII層から出土した石器が複数接合(接合資料-61・65・66)しているため、積極的に文化層を分離するのは困難で、その必要性はないものと判断した。

総計63点の石器が出土している。剥片や砕片を主体に組成するほか、楔形石器(第25図2)1点が出土している。全体の80%を黒色安山岩が占め、残り約20%は黒色頁岩を使用している。接合資料は9例が確認され、1例(接合資料-66)は9号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-62)は17号ブロック出土の石器と、それぞれ接合している。



第18図 石器の分布(16号・17号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

16号ブロック(第18図)

台地南側の斜面(Ah・Ai-7G)で検出した。石器は長軸3.6m・短軸2.4mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器は良く集中して出土しており、特に、東側で良く集中する。石器はVI層下部からVII層上部に出土しており、他のブロックと違う様相を呈している。この地点は試掘段階で調査を完了しており、そのため、多少調査も粗く、その上半の石器を遺失している可能性が強い。以上の理由から上述の出土状態の相違が説明できるものと理解している。

総計48点の石器が出土している。刮片や碎片を主体に組成するほか、敲石の破片が3点

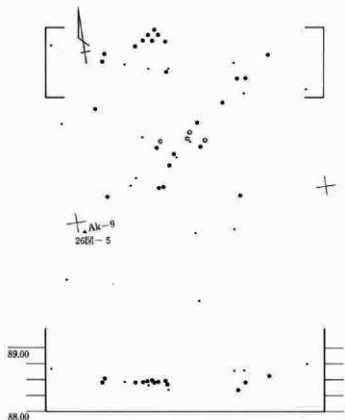
(第31図3)出土している。全体の60%を黒色安山岩が占め、残り30%弱は黒色頁岩を使用するほか、玉髓2点(第76図)が出土している。接合資料は10例を確認しており、1例(接合資料-11)は4号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-76)は17号ブロック出土の石器と、2例(接合資料-78・96)は18号ブロックから出土した石器と、1例(接合資料-86)は20号ブロックから出土した石器と、それぞれ接合する。

17号ブロック(第18図)

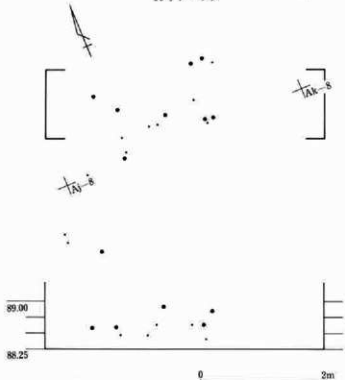
台地南側の斜面(Ah・Ai-8G)で検出した。石器は長軸4.2m・短軸3.8mの範囲に、楕円形状に分布しており、良く集中して出土している。石器は、IV層からVII層に出土しており、特に、VII層の上半に多出する傾向が強い。その上半と下部部分では約70cmの高差がある。

総計86点の石器が出土している。刮片や碎片を主体に組成するほか、削器(第25図1)や加工痕のある刮片3点が出土している。全体の60%以上を黒色安山岩(53点)が占め、残り36%は黒色頁岩を使用している。接合資

18号ブロック



19号ブロック



第19図 石器の分布(18号・19号ブロック)

料は10例を確認した。このうち、8例は他のブロックと接合関係を持つ。

18号ブロック(第19図)

台地東側の斜面(Ak-8 G、Ak-9 G)に検出され、20カ所の石器の集中地点の中で、最も東側に位置する。北側に19号ブロックが隣接している。石器は長軸4.8m・短軸4.2mの範囲に、概ね、楕円形状に分布している。石器は、やや散漫な状態で分布し、グリッドの南北に2カ所の集中部があるようにみえる。V層からVII層に出土しており、特に、VII層の上部に多く出土する傾向が強い。その上半部分と下位部分では、約40cmの高低差がある。

総計46点の石器が出土している。剥片や砕片を主体に組成する。石核も5点と多く、石器製作の痕跡を明瞭に示している。全体の60%以上を黒色安山岩が占め、残り約33%は黒色頁岩を使用する。接合資料8例を確認しており、3例(接合資料-78・88・96)は16号ブロックの石器と、1例(接合資料-79)は13号・20号ブロックの石器と、1例(接合資料-87)は20号ブロックから出土した石器と、それぞれ接合している。

19号ブロック 第19図)

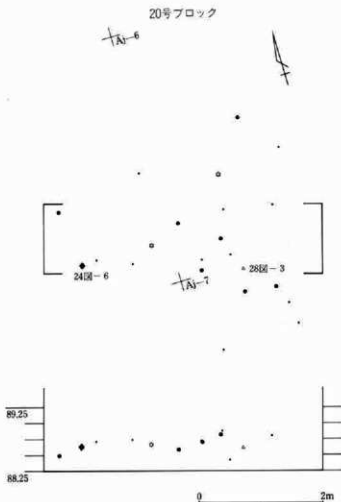
台地東側の斜面(Aj-7 G、Aj-8 G)で検出した。石器は長軸3.6m・短軸1.8mの範囲に、概ね、楕円形状に分布しており、散漫な分布状態を呈す。石器はV層からVII層に出土しており、特に、VII層に多く出している。その上半部分と下位部分では、約50cmの高低差がある。

総計20点の石器が出土しており、剥片や砕片を主体に組成する。全体の60%以上を黒色安山岩が占め、残り約30%は黒色頁岩を使用している。接合資料は3例を確認しており、1例(接合資料-79)は18号ブロック出土の石器と接合する。

20号ブロック(第20図)

台地東側の斜面(Ai-6 G、Aj-7 G)に検出され、調査区北東部に位置している。石器は長軸4.2m・短軸3.6mの範囲に、概ね、楕円形状に分布しており、散漫な分布状態を呈している。VI層からVII層に出土しており、とりわけ、VII層の上部に多出する。その上半と下位部分では、約50cmの高低差がある。

総計22点の石器が出土している。剥片や砕片を主体に組成するほか、左右の側縁を加工したナイフ(第24図6)、使用痕のある剥片が出土している。全体の約80%を黒色安山岩が占め、黒色頁岩や珪質頁岩は1点づつ出土しているのにすぎない。接合資料4例を確認しており、このうち、1例(接合資料-75)は17号ブロック出土の石器と、1例(接合資料-87)は18号ブロック出土の石器と、それぞれ接合する。



第20図 石器の分布(20号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

全体 (988点)

①	②	剥片 528点(53.4%)	砕片 327点(33.1%)
---	---	----------------	----------------

- ① ナイフ形石器 6点(0.6%)
 楔形石器・削 器 各 1点(各 0.1%)
 加工痕のある剥片 19点(1.9%)
 使用痕のある剥片 23点(2.3%)
 燧 石 9点(0.9%)
 ② 石 核 46点(4.7%)
 ③ 礫 28点(2.8%)

1号ブロック (38点)

①	②	17点(44.7%)	16点(42.1%)
---	---	------------	------------

- ① 使用痕のある剥片 2点(5.3%)
 ② 石 核 2点(5.3%)
 ③ 礫 1点(2.6%)

2号ブロック (46点)

①	23点(50.0%)	17点(37.0%)
---	------------	------------

- ① ナイフ形石器・加工痕のある剥片・
 使用痕のある剥片 各 1点(各 2.2%)
 ② 石 核 2点(4.3%)
 ③ 礫 1点(2.2%)

3号ブロック (6点)

使用痕のある剥片 2点(33.3%)	1点 (16.7%)	1点 (16.7%)	礫 2点(33.3%)
-----------------------	---------------	---------------	-------------

4号ブロック (21点)

①	12点(57.1%)	5点(23.8%)
---	------------	-----------

- ① 使用痕のある剥片・燧 石 各 2点(各 9.5%)

5号ブロック (21点)

①	②	12点(57.1%)	4点 (19.0%)	③
---	---	------------	---------------	---

- ① ナイフ形石器・加工痕のある剥片 各 1点(各 4.8%)
 ② 石 核 1点(4.8%)
 ③ 礫 2点(9.5%)

6号ブロック (61点)

②	26点(42.6%)	30点(49.2%)
---	------------	------------

- ① 加工痕のある剥片 1点(1.6%)
 ② 石 核 3点(4.9%)
 ③ 礫 1点(1.6%)

全体 (988点)

黒色安山岩 649点(65.7%)	黒色頁岩 258点(26.1%)	①	②
-------------------	------------------	---	---

- ① 粗粒安山岩 32点(3.3%)
 ② 珪質頁岩 24点(2.4%)
 頁 岩 5点(0.5%)
 チャート 4点(0.4%)
 黒曜石 3点(0.3%)
 ホルンフェルス・変質安山岩・玉 髓 各 2点(各 0.2%)
 点紋頁岩・赤色珪質岩・流紋岩・
 変質玄武岩・滑結凝灰岩・砂 岩 各 1点(各 0.1%)

1号ブロック (38点)

黒色安山岩 22点(57.9%)	黒色頁岩 12点(31.6%)	①	②
------------------	-----------------	---	---

- ① 頁 岩 2点(5.3%)
 ② 砂 岩 1点(2.6%)
 ③ 粗粒安山岩 1点(2.6%)

2号ブロック (46点)

黒色安山岩 32点(69.6%)	黒色頁岩 11点(23.9%)	①	②
------------------	-----------------	---	---

- ① 黒曜石・チャート 各 1点(各 2.2%)
 ② 粗粒安山岩 1点(2.2%)

3号ブロック (6点)

黒色頁岩 4点(66.7%)	粗粒安山岩 2点(33.3%)
----------------	-----------------

4号ブロック (21点)

黒色安山岩 15点(71.4%)	黒色頁岩 6点(28.6%)
------------------	----------------

5号ブロック (21点)

黒色安山岩 6点(28.6%)	黒色頁岩 11点(52.4%)	①	②
-----------------	-----------------	---	---

- ① 黒曜石・流紋岩 各 1点(各 4.8%)
 ② 粗粒安山岩 2点(9.5%)

6号ブロック (61点)

黒色安山岩 55点(90.2%)	①	②
------------------	---	---

- ① 黒色頁岩 3点(4.9%)
 ② 黒曜石・ホルンフェルス 各 1点(各 1.6%)
 ③ 粗粒安山岩 1点(1.6%)

類21図 器種構成と石器石材(1)

2. 石器の分布

7号ブロック (92点)



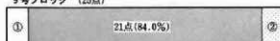
- ① ナイフ形石器 1点(1.1%)
加工痕のある剥片・使用痕のある剥片 各5点(各 5.4%)
② 石核 8点(8.7%)
③ 礫 1点(1.1%)

8号ブロック (91点)



- ① 加工痕のある剥片 1点(1.1%)
② 石核 2点(2.2%)

9号ブロック (25点)



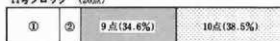
- ① 石核 2点(8.0%)
② 砕片 2点(8.0%)

10号ブロック (65点)



- ① 使用痕のある剥片 1点(1.5%)
② 石核 2点(3.1%)

11号ブロック (26点)



- ① ナイフ形石器・使用痕のある剥片 各1点(各 3.8%)
加工痕のある剥片 3点(11.5%)
② 石核 2点(7.7%)

12号ブロック (40点)



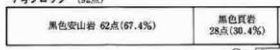
- ① 加工痕のある剥片 1点(2.5%)
② 石核 4点(10.0%)

13号ブロック (53点)



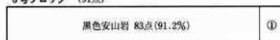
- ① 加工痕のある剥片 1点(1.9%)
使用痕のある剥片 3点(5.7%)
② 石核 2点(3.8%)

7号ブロック (92点)



- ① 点紋頁岩 1点(1.1%)
② 粗粒安山岩 1点(1.1%)

8号ブロック (91点)

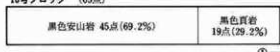


- ① 黒色頁岩 8点(8.8%)

9号ブロック (25点)

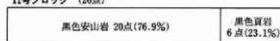


10号ブロック (65点)

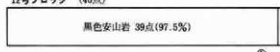


- ① 珪質頁岩 1点(1.5%)

11号ブロック (26点)

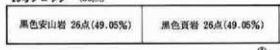


12号ブロック (40点)



- ① 珪質頁岩 1点(2.5%)

13号ブロック (53点)



- ① 安山岩 1点(1.9%)

第22図 器種構成と石器石材(2)

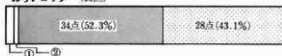
II 旧石器時代の遺構と遺物

14号ブロック (35点)



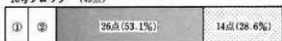
- ① 礫 1点(2.9%)

15号ブロック (65点)



- ① 楔形石器・加工痕のある剥片 各1点(各1.5%)
② 石核 1点(1.5%)

16号ブロック (49点)



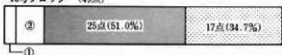
- ① 敲石 4点(8.2%)
② 石核 5点(10.2%)

17号ブロック (87点)



- ① 削器 1点(1.1%) ② 石核 2点(2.3%)
加工痕のある剥片 3点(3.4%) ③ 礫 2点(2.3%)

18号ブロック (49点)



- ① 加工痕のある剥片・敲石 各1点(各2.0%)
② 石核 5点(10.2%)

19号ブロック (20点)



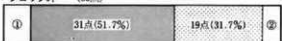
- ① 石核 1点(5.0%)

20号ブロック (23点)



- ① ナイフ形石器・使用痕のある剥片 各1点(各4.3%)
② 石核 2点(8.7%)

ブロック外 (60点)



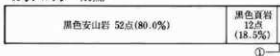
- ① ナイフ形石器・敲石 各1点(各1.7%)
使用痕のある剥片 4点(6.7%)
② 礫 4点(6.7%)

14号ブロック (35点)



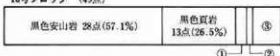
- ① 黒色安山岩 6点(17.1%) ② 粗粒安山岩 1点(2.9%)

15号ブロック (65点)



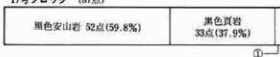
- ① 変質安山岩 1点(1.5%)

16号ブロック (49点)



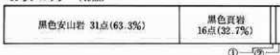
- ① 玉髓 2点(4.1%)
② ホルンフェルス 1点(2.0%)
③ 粗粒安山岩 5点(5.0%)

17号ブロック (87点)



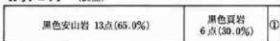
- ① 粗粒安山岩 2点(2.3%)

18号ブロック (49点)



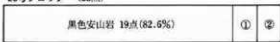
- ① チャート 1点(2.0%)
② 粗粒安山岩 1点(2.0%)

19号ブロック (20点)



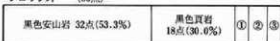
- ① 変玄武岩 1点(5.0%)

20号ブロック (23点)



- ① 黒色頁岩 2点(8.7%)
② 珪質頁岩 2点(8.7%)

ブロック外 (60点)



- ① 頁岩 3点(5.0%)
② チャート・珪質頁岩 各2点(各3.3%)
③ 粗粒安山岩 3点(5.0%)

第23図 器種構成と石器石材(3)

3. 出土石器

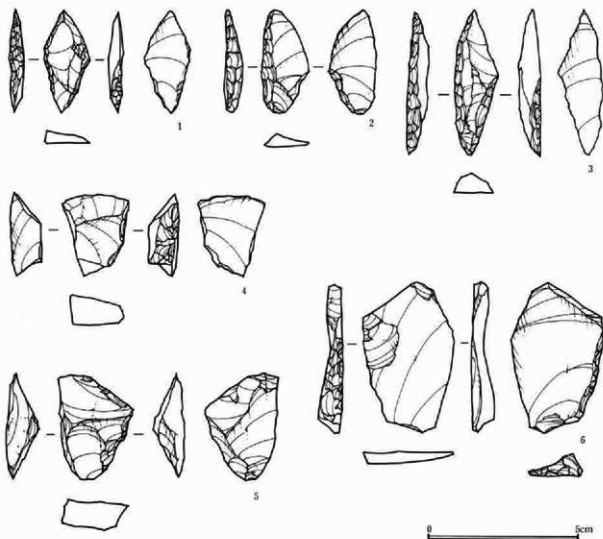
総計973点の石器が台地西側の斜面（A区）を中心に出土している。剥片や砕片が主体を占め、全体の85%に及ぶ。出土石器には、素材剥片の用い方の違う二種類のナイフ（6点）が特徴的に組成するほか、楔形石器・削器（各1点）・加工痕のある剥片・使用痕のある剥片が組成している。調査範囲が路線に限定され、分布の全貌は不明だが、一部は確実に路線の北側に石器の分布が及ぶ。そのため、器種構成の全容が判明したとも断言できない。出土石器以外にも、石斧など他の石器器種が石器群に伴う可能性を想定すべきだろう。

ナイフ形石器（第24図1～6）

二側縁に加工を施す縦長のナイフ形石器（A群）が4点、台形に近い形状を呈すナイフ形石器（B群）が2点、の総計6点が出土している。

1は、やや幅広いの剥片を素材に用い、微細な調整加工を二側縁に施し、石器を作出している。全体に小形で、菱形に近い形状を呈す。調整加工は丁寧で、裏面側から表面側に向け施す。打面・打縮は、この調整加工で除去され、基部は尖る。刃部を右側縁に設定している。流紋岩。5号ブロック出土。

2は、やや幅広いの剥片を素材に用い、調整加工を二側縁に施し、石器を作出している。全体に小形で、「切出」に近い形状を呈す。左側縁では裏面側から、



第24図 出土石器（1）

II 旧石器時代の遺構と遺物

右側縁では表面側から調整加工を施す。とりわけ、右側縁に施す調整加工は粗く、平坦剥離に近い。風化で剥離方向の識別は困難だが、平坦な打面が残存している。基部は丸味を帯び、刃部を右側縁に設定している。器体長：刃部長は1/2を越す。黒色頁岩。Ai-10G出土。

3は、縦長剥片を用い、二側縁に調整加工を施し、石器を作出している。全体に細身で、柳葉形状に近い石器形状を呈す。裏面側から表面側に向け、微細な調整加工を施す。この調整加工で打面・打瘤を除去し、刃部を右側縁に設定している。石器基部は尖る。黒色安山岩。11号ブロック出土。

4は、縦長の剥片を横位に使用し、左右の側縁に調整加工を施し、石器を作出している。右側縁では裏面側から急峻な調整加工を、左側縁では素材剥片を折断して石器を作出する。台形に近い石器形状を呈す。素材剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁を石器の刃部に使用する。石器の表面は一部で剥落しており、熱を受けている可能性がある。

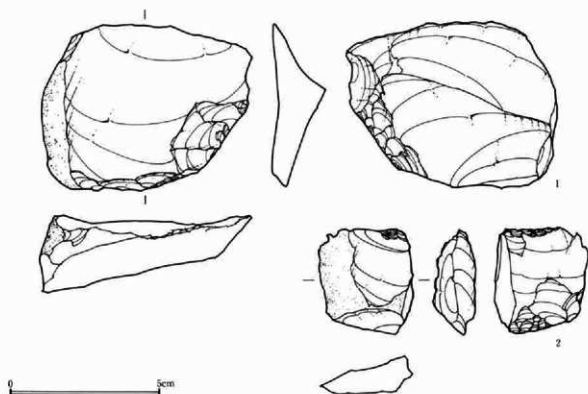
黒色頁岩。7号ブロック出土。

5は、台形に近い横長の剥片を素材に使用して、左右の側縁を折断し、石器を作出する。左側縁では折断したままだが、右側縁では折断してから、折断部分を打面に微細な平坦剥離を施す。「切出」に近い石器形状を呈す。概ね、素材剥片の長軸と石器の長軸は一致し、剥片端部を石器刃部に使用する。なお、この刃部には微細な剥離が観察され、使用痕である可能性もある。黒色安山岩。2号ブロック出土。

6は、幅広い縦長剥片を用い、側縁に調整加工を施し、石器を作出している。微細で急峻な調整加工を表面側から裏面側に施す。側縁を欠損するため、刃部の状態は不明瞭である。石器長軸と素材剥片の剥離方向は一致しており、打面には微細な打面調整を施している。珉質頁岩。20号ブロック出土。

削器(第25図1)

削器は1点が出土している。表面に礫面を残す幅広い横長剥片を素材に用いている。剥離段階で石核



第25図 出土石器(2)

に内在した節理部分で薄く剥離した剥片を石器素材に採用しており、この部分を刃部に使用している。この部分には平坦な剥離や微細な加工を施している。黒色頁岩。17号ブロック出土。

楔形石器 (第25図2)

やや幅広い剥片を素材に用いている。剥片の上下両端に対向する剥離が石器長軸に平行してみられる。石器上端の表裏両面は潰れ、微細な剥離が集中している。一方、下端には表面のみ剥離が集中している。この石器には2点の剥片が接合(第75図)しており、接合状態の観察から、左側縁の剥離痕は石器の加工段階に形成されたことを明確に示している。石器の形状は方形に近く、その断面形状は紡錘形状を呈す。黒色安山岩。15号ブロック出土。

加工痕のある剥片 (第26・27図)

加工痕のある剥片は、統計19点が出土している。剥片の側縁に微細な調整加工を施し、製作器種の不明な石器が多い。図示した以外にも、接合資料-25・27・49・72・74・90の中に若干の加工を施す剥片が出土している。ここでは、特徴的な石器のみ取り上げ、説明していきたい。

第26図1は、表裏両面を剥離で覆う石器で、石器素材に黒曜石を使用している。器体上半を欠損するため石器形状は不明だが、断面形状が紡錘形状を呈し、石器縁辺が潰れ、表裏両面の加工が器体の長軸に並行することから、楔形石器に分類できるのかもしれない。5号ブロック出土。

2は、素材剥片の周辺に角度の浅い調整加工を施す小形の石器で、その形状は茎を持つ石鐮に近い。左側縁を除く縁辺に浅い調整加工を施す。とりわけ、石器基部の作出意図は明確で、裏面側・表面側の順に調整加工している。また、石器先端には欠損してから、再び加工している。その加工意図は明確ではない。石器の形態や調整加工の特徴から判断して、他の石器と伴出するのかが即断できない。チャート。12号ブロック出土。

3は、縦長剥片を横位に使用した小形の石器で、石器を構成する技術的特徴はB群のナイフ形石器に近い内容を持つ。ただ、これまで出土している他の遺跡の資料に比べ、小形で折断手法も明確ではないため、ここではその可能性だけを指摘しておきたい。黒色安山岩。7号ブロック出土。

4は、縦長剥片を使用して、側縁を粗く加工した石器で、器体中央で欠損した2点の石器が接合している。甲高で、大形の剥片を使用する特徴を持つ。こうした特徴を持つ石器は、県内遺跡に類例が存在しており、「暗色帯」から出土する石器群に特徴的に組成するナイフに類似する。石器は欠損してから、器体の上半を石核に転用しており、打面部側から1枚、側縁から2枚の横長剥片を剥離している。黒色頁岩。7号ブロック出土。

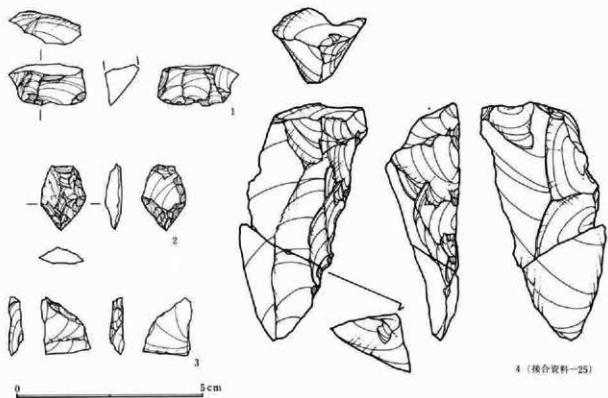
5は、やや幅広い縦長剥片を用い、側縁に粗い加工を施す。剥片は剥離段階で縦位に折断しており、この折断状態と加工状態を総合して評価するなら、B群のナイフに近い様相を示している。黒色安山岩。18号ブロック出土。

6は、側縁を加工した石器で、縦長の剥片を折断して、その上半を石器素材に使用している。左側縁に粗い加工を表裏両面から施す。右側縁に使用痕の可能性が強い剥離痕が認められる。黒色頁岩。7号ブロック出土。

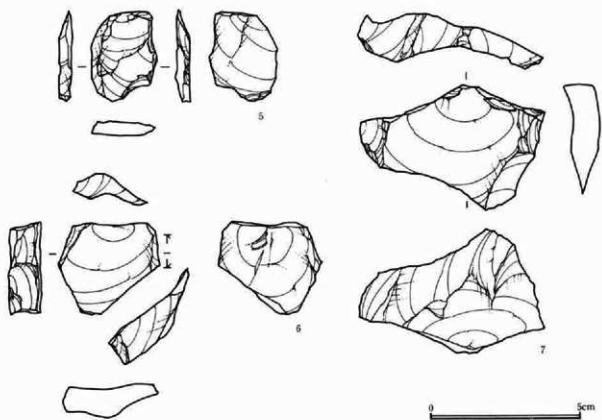
第27図3は、厚い縦長剥片を素材に使用して、剥片の側縁・剥片端部に微細な加工を施している。加工は剥片に対しほぼ垂直に施し、その状態はナイフの加工に類似する。剥片の上下両端にバルブが観察され、このことから、両設打面を持つ石核から剥片を剥離したことがわかる。珪質頁岩。12号ブロック出土。

6は、やや幅広い縦長剥片を素材に用い、側縁・剥片端部に粗い調整加工を施す。剥片の表面に残る剥離の方向は剥片の剥離方向と90°相違している。平坦な剥離面を打面に剥離している。黒色安山岩。6号ブロック出土。

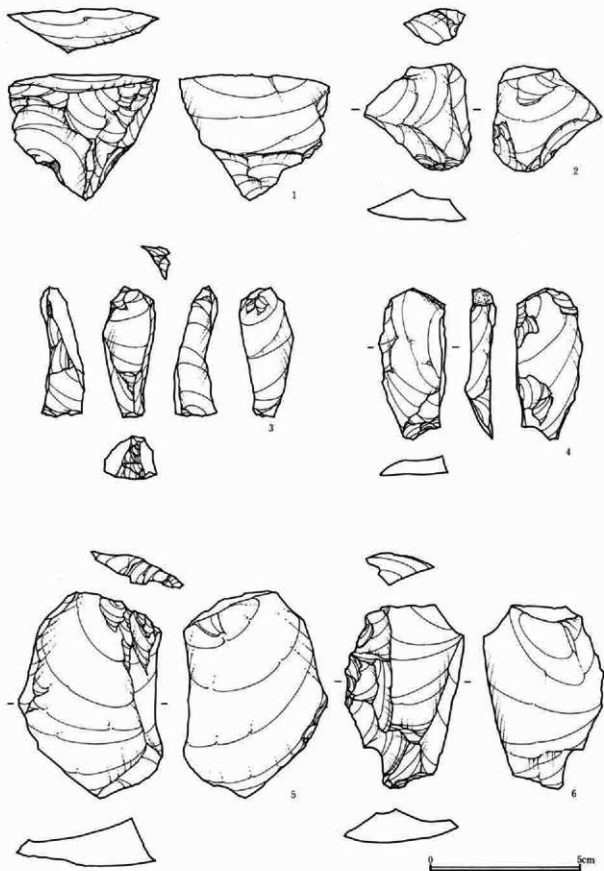
II 旧石器時代の遺構と遺物



4 (接合資料-25)



第26図 出土石跡(3)



第27图 出土石器(4)

II 旧石器時代の遺構と遺物

使用痕のある剥片(第28・29・30図)

使用痕のある剥片は、総計22点が出土している。刃部の確保が容易な形状の良好な剥片を石器素材に採用しており、縦長剥片の場合には側縁を刃部に、横長剥片の場合には剥片端部を刃部に設定する傾向が強い。剥片の表面を構成する剥離の方向は剥片を剥離した方向に一致しており、ほぼ同様な剥離手法で作出した剥片である可能性が高い。図示した以外にも、接合資料-3・9・23・27・44・53に同様な剥片が出土している。

第28図1は、平坦な剥離面を打面に剥離した幅広い横長剥片を素材に選択している。剥片端部は三角形状を呈し、より直線的な左側縁を刃部に使用している。黒色安山岩。4号ブロック出土。

2～4は、縦長剥片を素材に用い、側縁を刃部に使用している。3点とも黒色頁岩を使用している。2は礫面を打面に剥離され、より珪化の顕著な黒色頁岩から得た剥片で、この遺跡以外の地点から搬入している可能性が高い。それぞれ2号ブロック・20号ブロック・4号ブロックから出土している。

5・6は、やや幅広い横長剥片を素材に用い、剥片の端部を刃部に使用している。5は左右の側縁を両方とも折断しており、縦長剥片に近い石器形状を示す。13号ブロック出土。6は剥片端部が三角形状を呈す幅広い横長剥片を素材に用い、より直線的な右側縁を刃部に選択している。7号ブロック出土。2点とも黒色安山岩を使用している。

第29図1・3～5は、平坦な剥離面を打面に剥離した縦長剥片を素材に用い、側縁を刃部に使用している。1の表面は礫面が覆い、剥離の初期段階に剥離した剥片であることを示している。黒色頁岩。13号ブロック出土。3は1号礫群から出土しており、赤色珪質岩を使用している。単独出土しており、搬入石器である可能性が高い。4は剥片端部に礫面を残す。左右の側縁が平行する良好な形状を持つ。打面を欠損している。黒色頁岩。3号ブロック出土。5は平坦な剥離面を打面に剥離され、側縁に礫面を

残す。小形だが、形状の整った側縁形状を呈している。黒色頁岩。Ao-14G出土。

第29図2・6、第30図1・3は、幅広い横長剥片を素材に用いている。第29図2・6は剥片の端部を、刃部に使用している。2点とも黒色頁岩を素材に用い、平坦な剥離面を打面より剥片を剥離している。2は7号ブロックより、6は1号ブロックよりそれぞれ出土した。第30図1は側縁・剥片端部を刃部に使用している。台形に近い剥片形状を呈し、良好な剥片形状を有している。7号ブロック出土。3は側縁を刃部に使用している。剥片上部を欠損しており、本来の剥片形状は不明だが、厚い大形剥片を素材に使用している。11号ブロック出土。

第30図2は、小形の縦長剥片を素材に用い、側縁を刃部に使用する。剥片上部を欠損する。チャート。Ah-10G出土。

敲石(第31図1～4、第32図1～3)

接合資料3例を含む7点の敲石が出土している。500g程度の重量を測る礫が4点と最も多い。礫の小口を使用している場合が多い。敲石の大小と掌に入る程度の棒状礫を多く選択する傾向が指摘されよう。

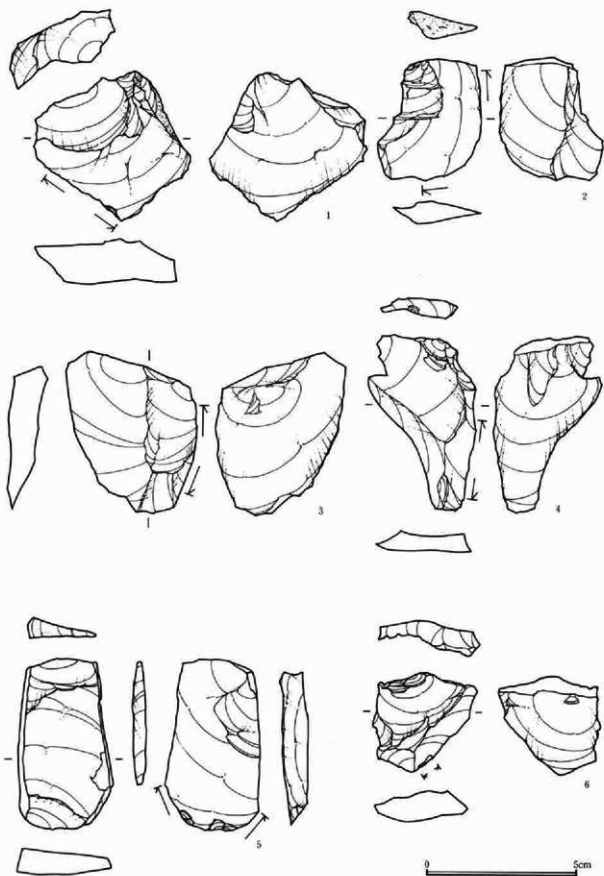
第31図1は、使用段階で破損した小形の敲石で、礫の小口部分に打痕が集中している。2点の礫片が接合している。黒色頁岩。4号ブロック出土。

2は、小形の敲石で、礫の小口部分に打痕が集中している。その形状は扁平で、棒状礫に近い。黒色頁岩。A 8-11G出土。

3は、棒状の礫を使用した敲石で、その上下両端には顕著な打痕が集中している。石器の使用段階で破損した4点の礫片が接合している。粗粒安山岩。16号ブロック出土。

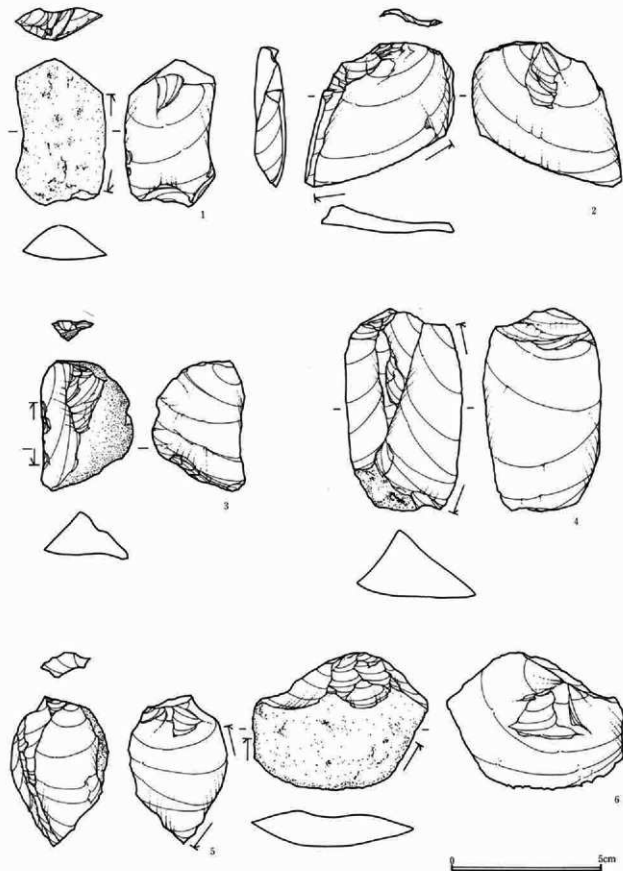
4は、棒状の礫を使用した敲石で、その上下両端の小口部分には顕著な打痕が集中する。使用段階で器体の中央から二分した2点の礫片が接合している。粗粒安山岩。16号ブロック出土。

第32図1は、中形の敲石で、礫の小口部分に打痕

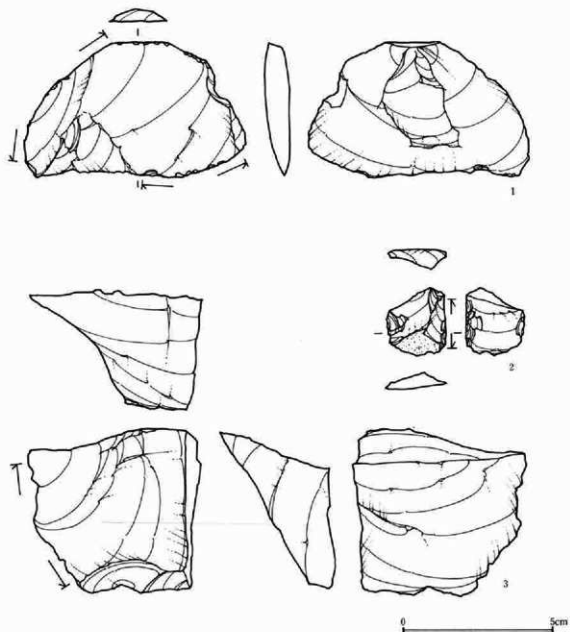


第28图 出土石器(5)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第29回 出土石器(6)



第30図 出土石器(7)

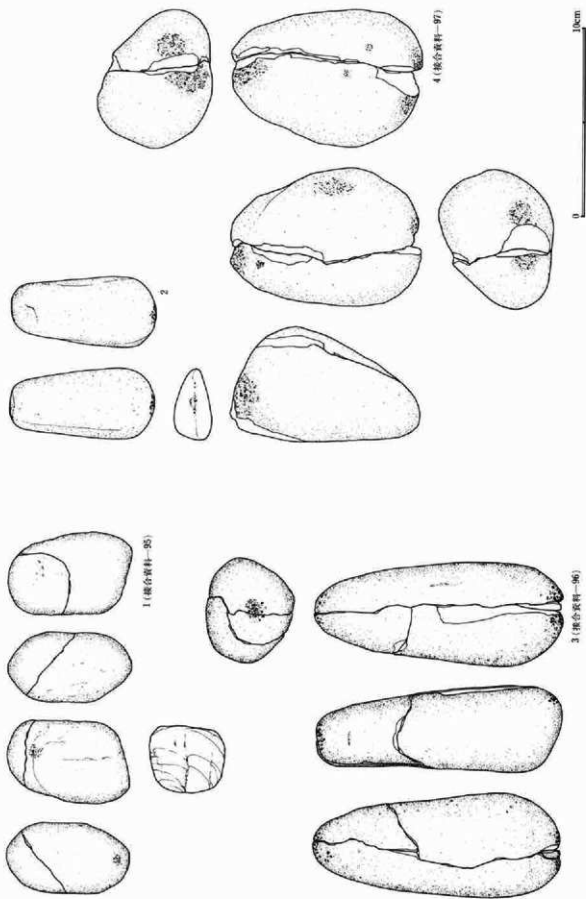
が集中している。礫の平坦面は摩耗している。その形状は楕円形状に近く、三角形の断面形状を呈す。粗粒安山岩。1号礫群出土。

2は、中形の敲石で、礫の小口部分・側縁に打痕が集中している。棒状に近い平面形状を呈す。粗粒安山岩。1号礫群出土。

3は、大形の敲石で、礫の小口部分に打痕が集中している。表裏両面とも摩耗しており、他の用途に使用した可能性がある。礫面はヒビ割れ、全体に脆

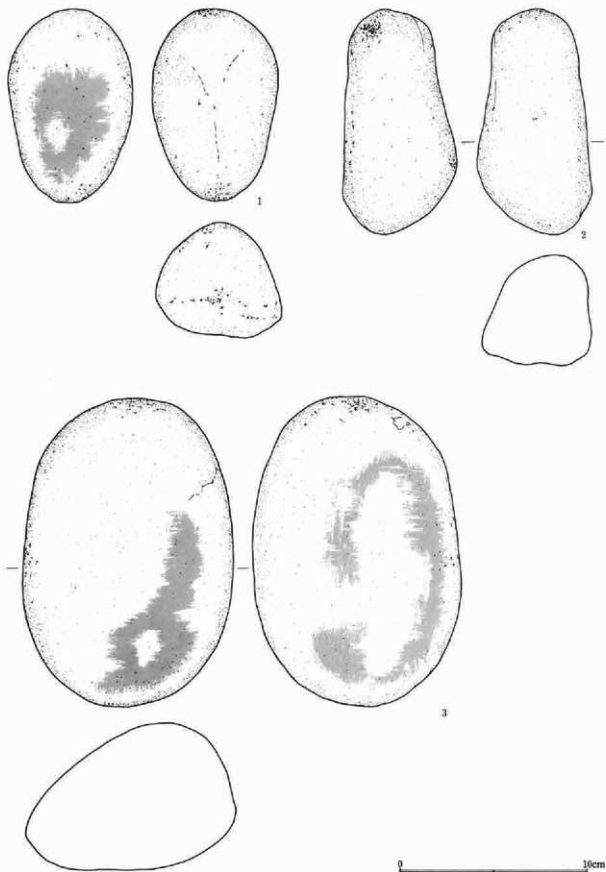
い。出土位置を勘案するなら、熱を受け、変質した可能性がある。粗粒安山岩。1号礫群出土。

II 旧石器時代の遺構と遺物



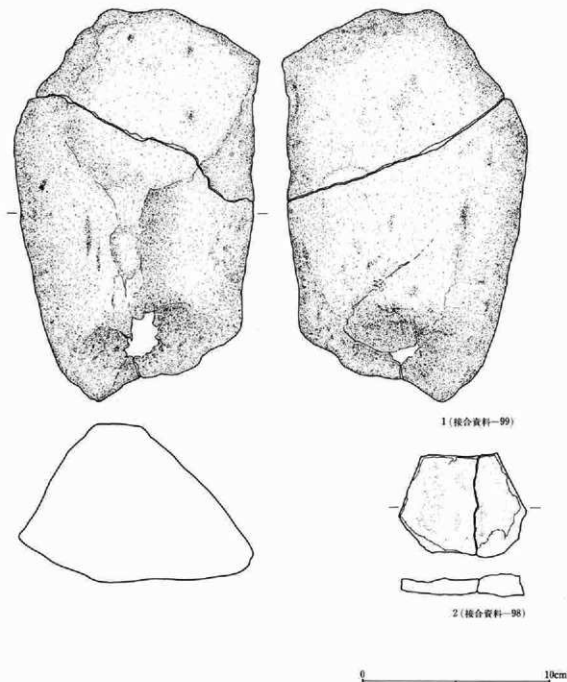
第31圖 出土石器(8)

3. 出土石器



第32图 出土石器(9)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第33図 出土石器(10)

礫(第33図1・2)

図示した2点とも礫群から出土した。ここでは、接合した資料のみ呈示しておく。このほかにも、数点の礫が単独の状態での他の地点から出土しており、「ヒビ割れ」やタールの付着した礫も出土している。

第33図1は、破損した2点の礫片が接合した資料で、その表面にはタール状の物質が付着している。

粗粒安山岩。1号礫群出土。(PL5)

2は、表皮の一部が熱で剥落した礫片が接合した資料で、同様な形状を示す礫片が周辺にも出土している。ただ、上述の礫片が総て接合したとしても、完形状態には復元できない。粗粒安山岩。1号礫群出土。

石核(第34・35図)

石核は45点が出土している。頻りに打面転移して剥片剥離が展開している。そのため、石核も複数の打面を持つ資料が多く、多種多様な形状の石核が存在している。また、大形の剥片を石核素材に使用し、剥片剥離を行う資料も多く、石器群に特徴的に存在する。ここでは、接合資料を除く石核に限定して図示した。

第34図1は、楕円形状を呈す円礫を石核素材に使い、打面を頻りに転移して剥片剥離を行う。石核の遺存状態から判断して打面調整や頭部調整は施されない。裏面・側面に礫面を残す。黒色安山岩。11号ブロック出土。

2は、石核の上下両端に打面を持つ。石核の全面を剥離が覆い、ある程度、剥離が進行した状態を示している。剥片剥離は石核の表裏両面の他に、左右の側面でも展開しており、打面を固定して連続して剥離した状態を示している。打面の調整は全く確認できない。黒色安山岩。6号ブロック出土。

第35図1～4は、大形の剥片を石核素材に使用し、目的の剥片が剥離可能な部分を選択して剥片剥離を行う。1は礫面を打面に作出した大形の剥片を石核素材に採用している。剥片剥離は大形剥片の表面を打面に展開し、数枚の横長剥片を剥離して剥離を終了している。黒色安山岩。1号ブロック出土。2は石核正面だけではなく、表裏両面でも剥離作業を行う。全般に打面を固定することなく剥離している。黒色頁岩。7号ブロック出土。3は厚手の剥片を素材に剥離を行う。剥片剥離は礫面を打面に展開し、打面を固定して小形の横長剥片を数枚剥離している。黒色安山岩。2号ブロック出土。4は柱状を呈し、剥片を分割した小形の石核で、平坦な分割面を打面に剥片を剥離している。意図した剥片や石器の形状は不明確である。

剥片(第36～45図)

出土石器の50%以上を占め、500点を越す。ここでは、破片や接合資料に掲載した剥片を除く、大形で、

形状の良好な剥片に限定して図示した。平坦な打面より剥離した剥片が圧倒的に多い。また、剥片の表面に残る剥離の方向が剥片の剥離方向に一致する資料が多い。こうした状態は接合資料の状態にも良く一致しており、図示した剥片は接合資料と同様な剥片剥離手法で作出したものであることを明確に示している。

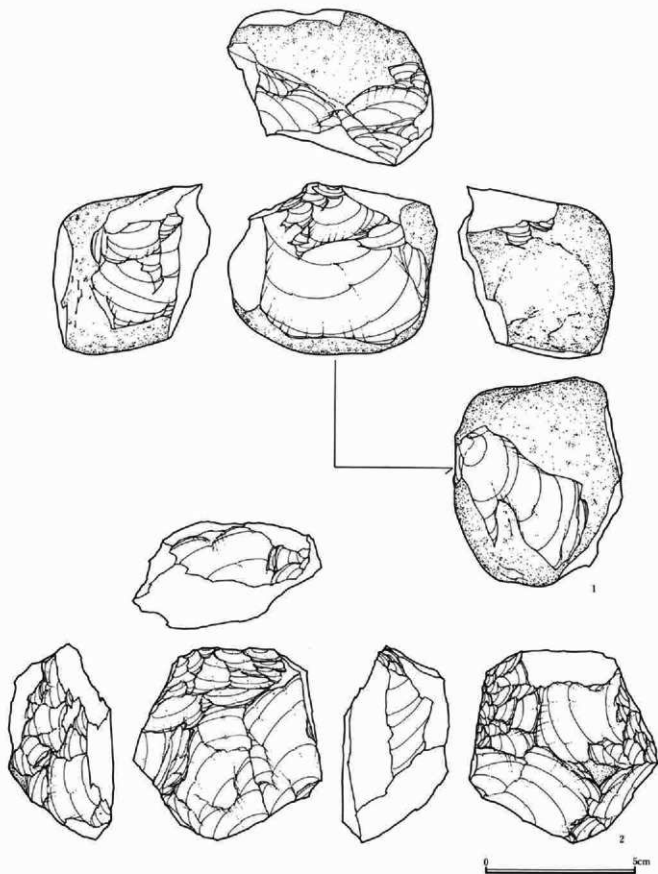
第36図1は、平坦な剥離面を打面に剥離した縦長剥片で、石器表面に礫面を残す。打角は鈍角で、打面の調整や頭部調整は施されない。珪質頁岩。20号ブロック出土。

第36図2～4、第37図1～6、第38図1・2・4～6、第39図1・2、第40図1・2・4・5、第41図1・2・4・5の24点は、やや幅広い縦長剥片や左右の側縁が平行する縦長剥片で、総て黒色安山岩を石材に使用している。礫面や平坦な剥離面を打面に剥離している。剥片の表面に残る剥離の方向は、剥片の剥離方向に一致する資料と、90°方向が違う資料の両者が存在する。また、180°方向が違う両側の打面より剥片を剥離する手法の存在を示す資料(第36図4、第38図2、第39図2、第40図4、第41図2)も、少数が存在する。打面調整や頭部調整は施されない場合が圧倒的に多い。

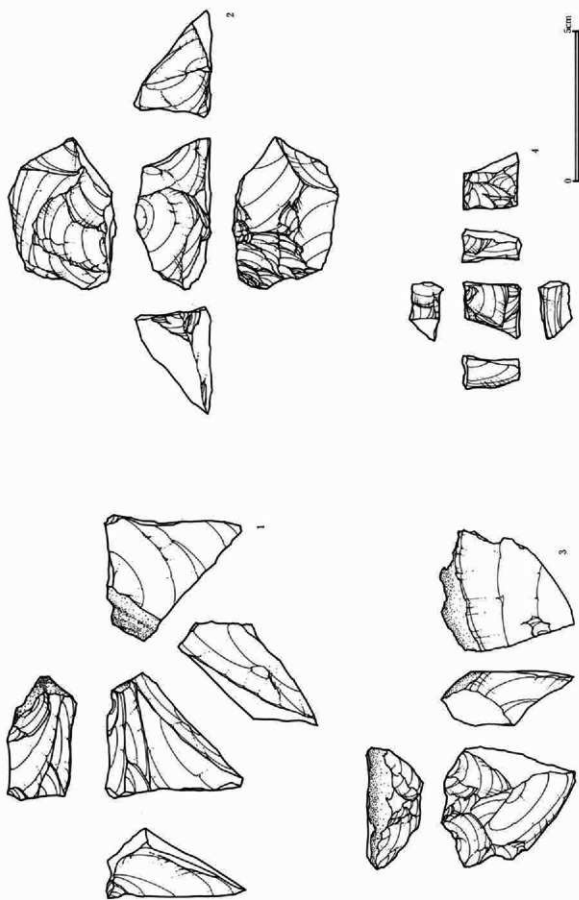
第36図5・6、第38、39、40、41図各3の6点は、幅広い縦長剥片や左右の側縁が平行する縦長剥片で、総て黒色頁岩を石材に使用している。礫面や平坦な剥離面を打面に剥離している。剥片の表面に残る剥離の方向と剥片の剥離方向に一致する資料が多く、また、90°方向が相違する剥片も多い。打面の調整や頭部調整が施されない場合が圧倒的に多く、黒色安山岩の場合に類似した作り方を示している。第39図3は側縁に古い作業面の一部を取り込む剥片で、打面再生を目的に剥離した剥片である可能性がある。

第42図1～3、第44図1・2の5点は幅広い横長剥片で、総て黒色頁岩を使用している。平坦な打面より作出した剥片と調整打面から剥離した剥片の両者が存在している。剥片の表面に残る剥離の方向と

II 旧石器時代の遺構と遺物

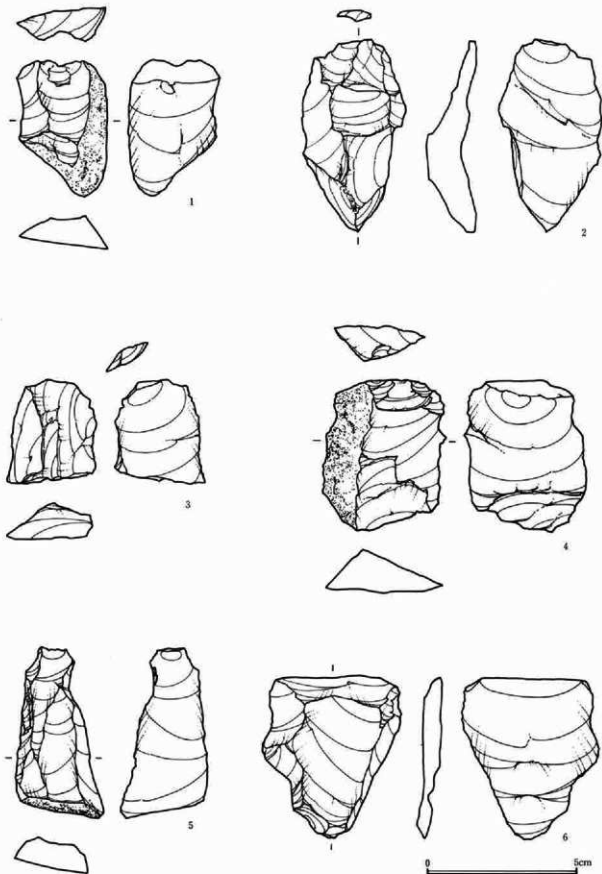


第34図 出土石器(11)

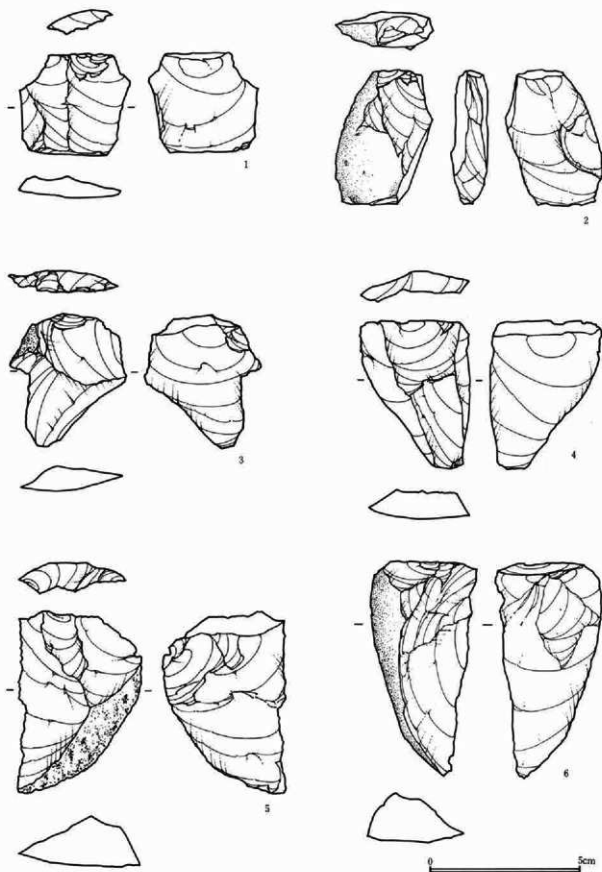


第35图 出土石器(12)

II 旧石器時代の遺構と遺物

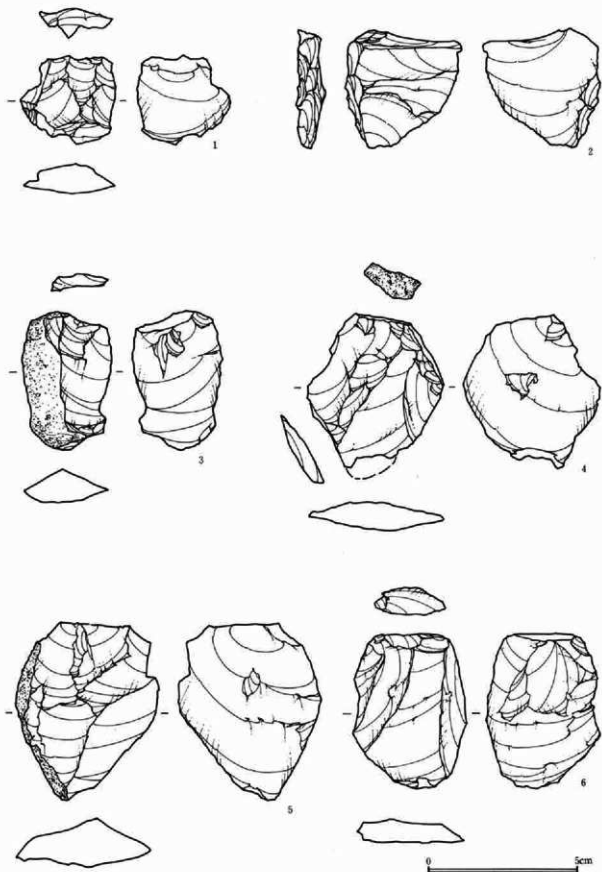


第36図 出土石器(13)

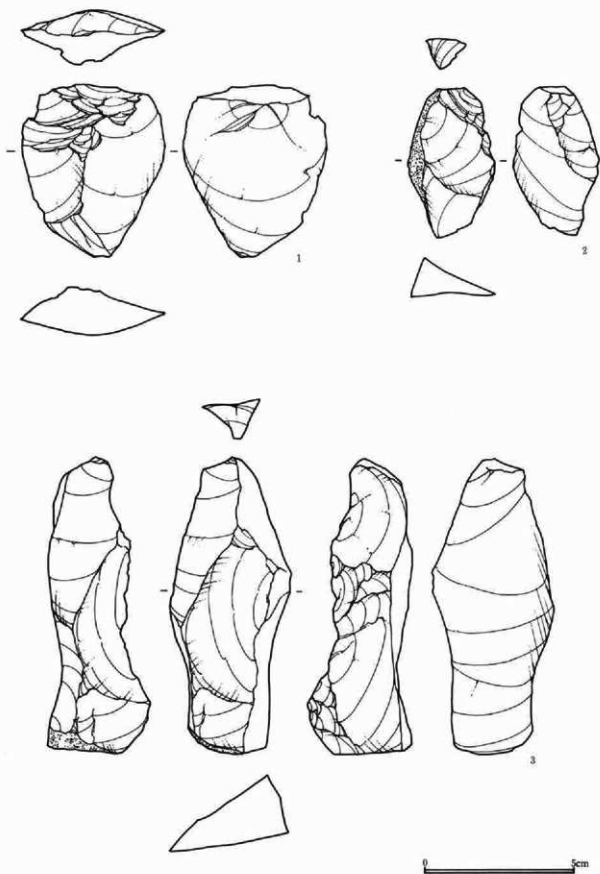


第37图 出土石器(14)

II 旧石器時代の遺構と遺物

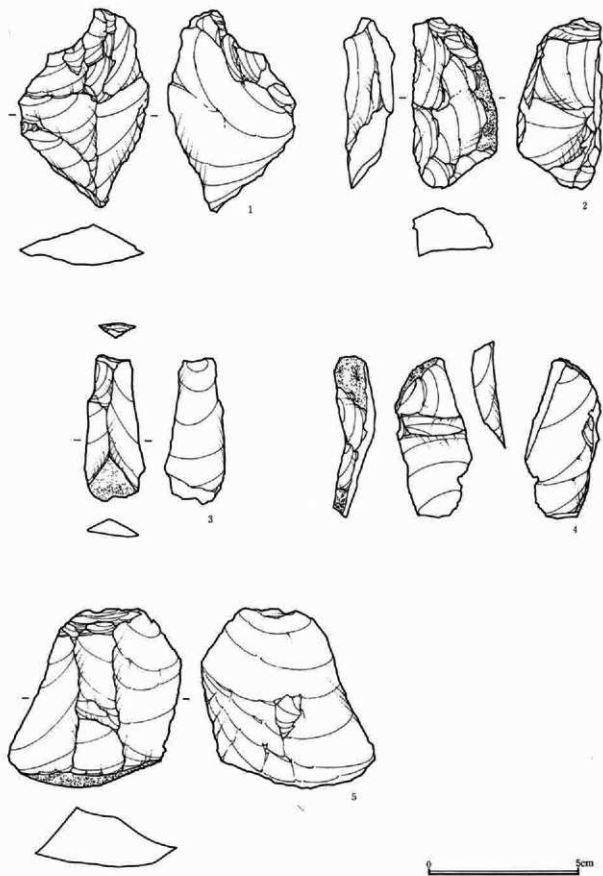


第38図 出土石器(15)



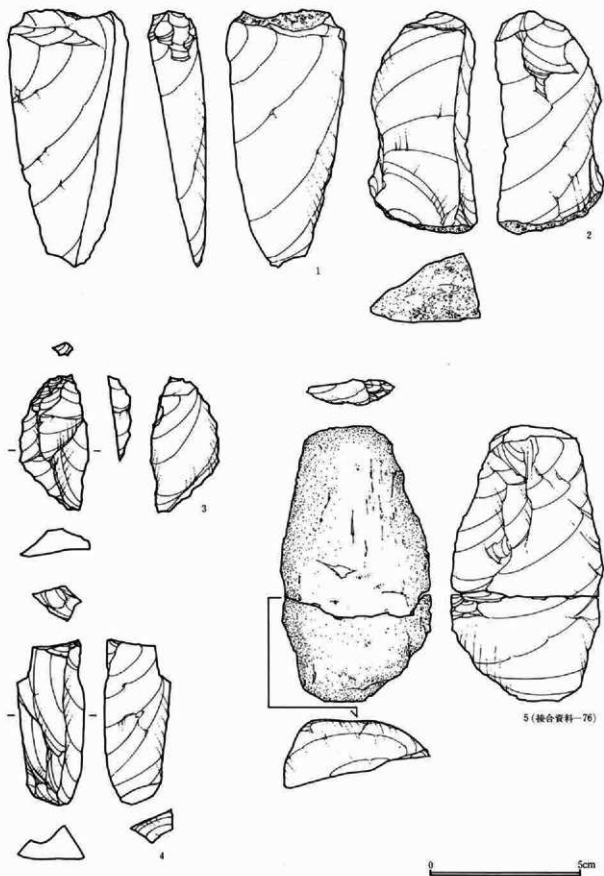
第39回 出土石器(16)

II 旧石器時代の遺構と遺物



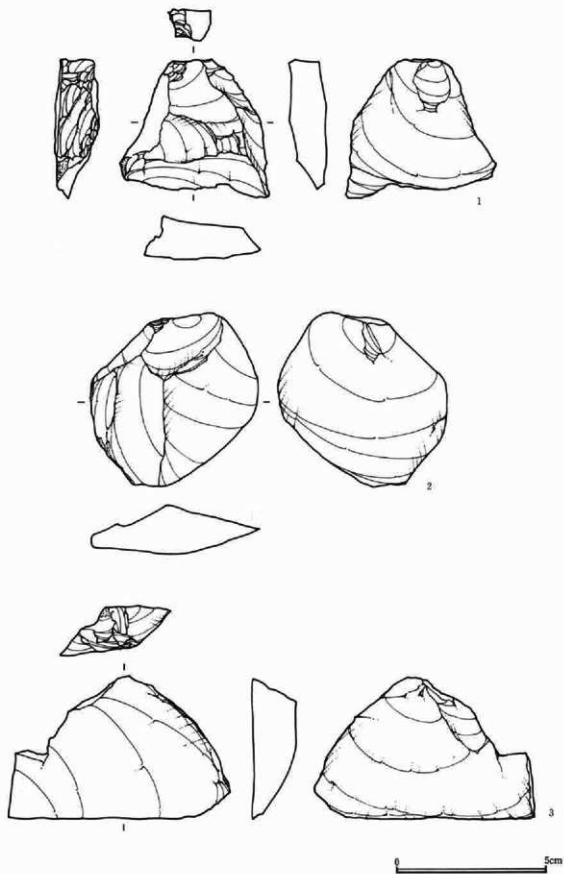
第40図 出土石器(17)

3. 出土石器

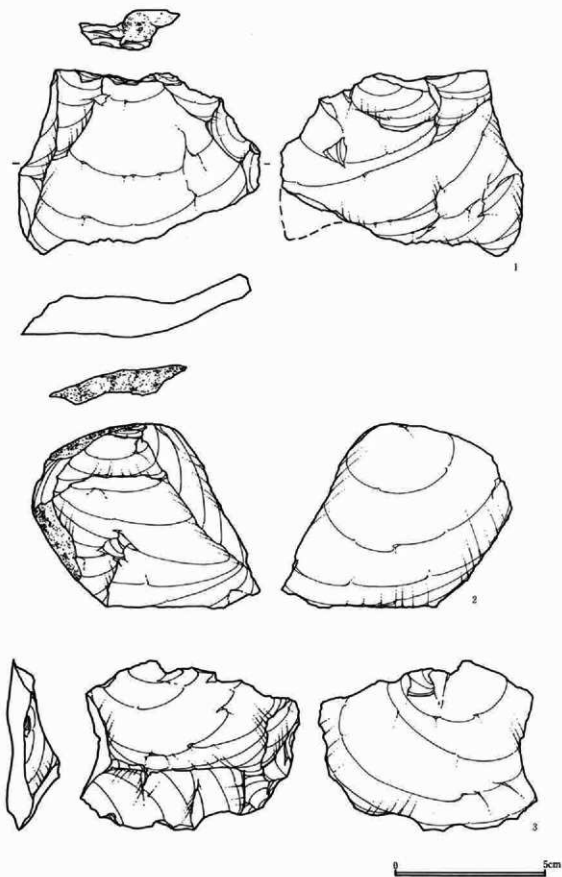


第41图 出土石器(18)

II 旧石器時代の遺構と遺物

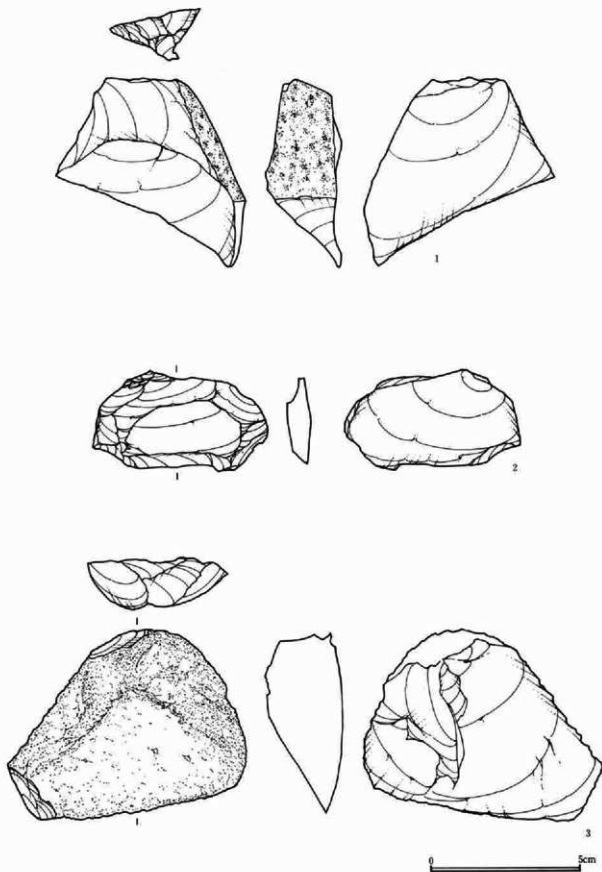


第42図 出土石器(19)

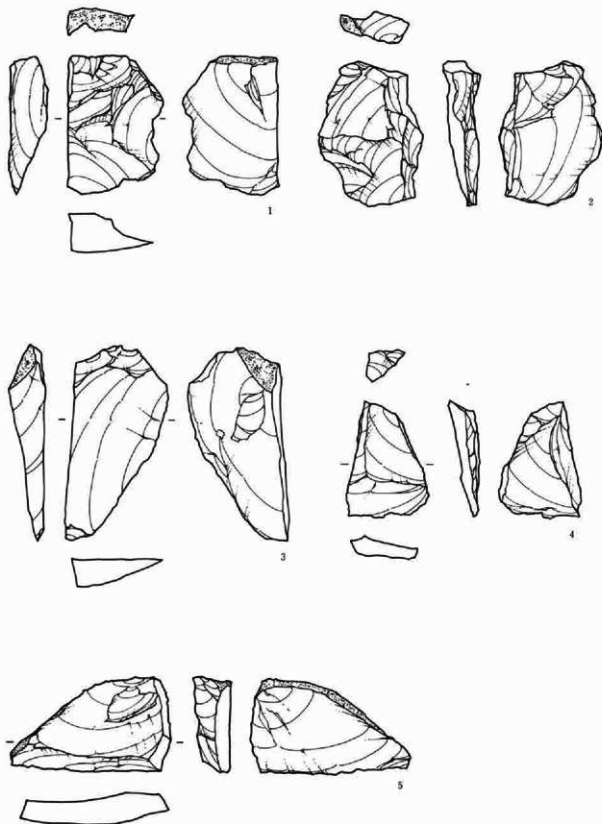


第43图 出土石器(20)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第44図 出土石器(21)



第45图 出土石器(22)

II 旧石器時代の遺構と遺物

剥片の剥離方向は90°相違している。打面の調整や頭部調整は施されない。

第43図1～3、第44図3の4点は幅広の横長剥片で、総て黒色安山岩を使用している。打面形状や調整加工の在り方は黒色頁岩と同様な状態を示す。

4. 石器の接合

(a) 接合資料

接合作業の結果、101例486点(礫の接合資料5例を含む)が接合している。接合率は50%に達し、剥離の状態を良く示す接合資料も多い。接合資料には明確に縦長の剥片を指向して剥離が展開していく資料と、大形の剥片を石核素材に剥離が展開していく資料の二種に大別できよう。ただ、大形剥片を石核素材に剥片を剥離する場合でも、大形の剥片を目的に剥離が展開する資料は存在せず、その組成頻度は客体的であり、石器群の主体にはならない。

接合資料-3(第46・47図)

礫面の残存状態から推定して、拳大程度の原石を石核素材に選択している。原石の1/3程度に接合され、接合資料の正面や右側面に広い分割面を有す。

まず、正面左側から剥離を開始し、縦長剥片(1)を剥離している。この直後、90°打面を転移して幅広の横長剥片(2)を剥離する。石器の表面に礫面を残しており、剥離の初期段階を示している。以上の剥離以前に、接合資料の上面や側面で剥離作業を行い、大形の剥片を剥離して、表皮を除去している。

石核上面には、微細な剥離が連続しており、打面調整とも推定されよう。ただ、実際には、この部分に打面には剥片を剥離せず、接合資料左側から剥片(3)を剥離している。次に、90°打面の転移を繰り返して、4・5の剥片と6・7の剥片を各々連続して剥離している。これ以後の剥離の状態は、石核(8)形状から判断するしかない。石核形状から判断して、これ以後も90°打面を転移して剥離が展開した、と推定できよう。黒色安山岩。

第45図1～5には、剥離段階で縦位に折断した剥片を図示した。打面の状態や剥片剥離に際し施す調整加工の在り方は、他の剥片の剥離手法に一致している。

接合資料-91(第47図)

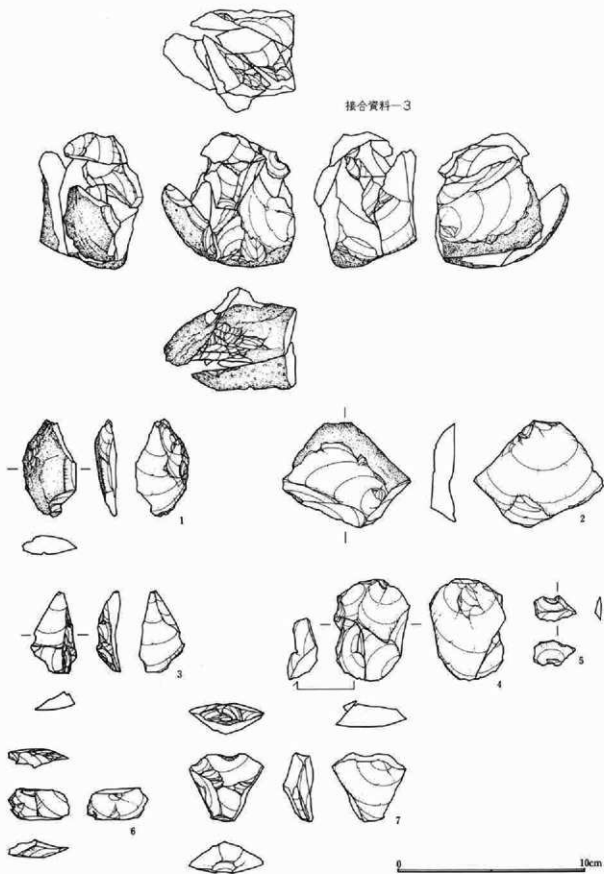
大形剥片を石核素材に転用した接合資料で、接合資料正面の右側で二分してから、それぞれ剥片剥離が展開している。折断部分で接合した小形剥片(1)が見事に上述の剥離の在り方を証明している。右側部分での剥離の実態は、その実態は不明だが、左側では石核を分割してから、90°打面転移して剥片を剥離している。

石核を二分してから、接合資料の左側から小形の剥片(2)を剥離し、90°打面を転用して3の剥片を剥離する。上面の剥離は石核素材を獲得する以前の剥離で、打面作出の剥離ではない。石核(4)側面の下面には、以上の剥離を終了してから、なお剥片を剥離する意図が看取され、微細な剥離が存在する。黒色安山岩。

接合資料-13(第48図)

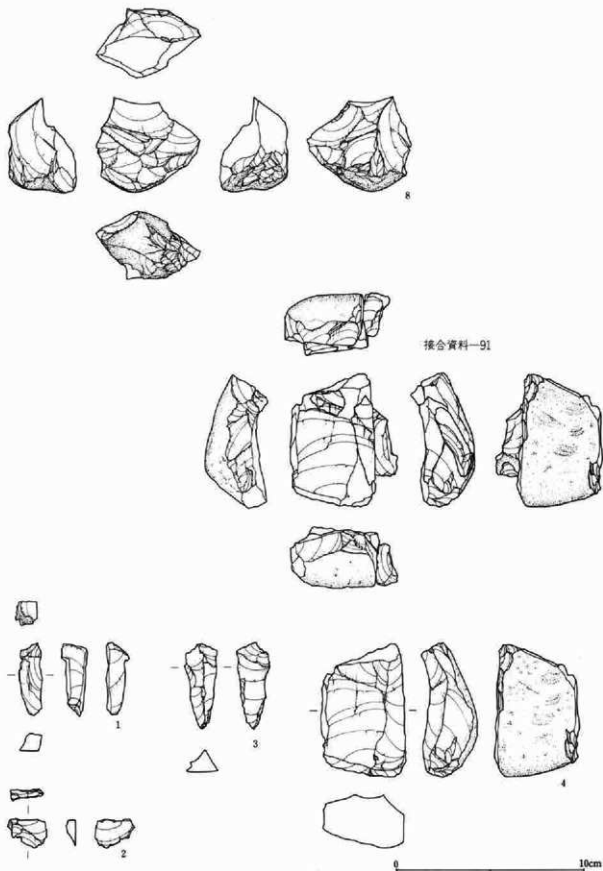
縦長の剥片を連続して剥離している接合資料で、90°打面転移を伴う。接合資料の上面に、平坦な打面を持ち、この部分から剥片を剥離している。石核裏面には、この打面より古い剥離が存在しており、打面を再生している可能性がある。

まず、石核上面の打面から縦長の剥片(1～3)を連続して剥離する。以後、4の剥片を剥離するまで、打点を徐々に左側へ移動して剥片を剥離している。この剥離作業を終了してから、90°打面を転移し、4の剥片を剥離し、同一打面より3枚程度の剥片を剥離している。そしてさらに、90°打面転移して剥片数枚を剥離して作業を終了している。黒色頁岩。



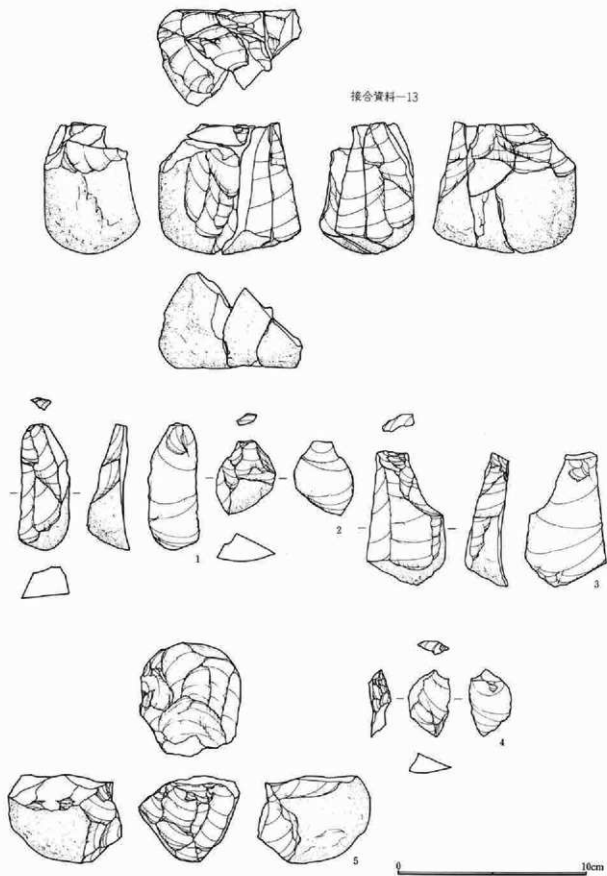
第46回 接合資料-3(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第47図 接合資料-3(2)-91

接合資料—13



第48図 接合資料—13

II 旧石器時代の遺構と遺物

接合資料-16(第49図)

側縁や下面に礫面を残す剥片剥離の初期段階を良好に示す接合資料で、拳大の円礫を素材に選択している。

まず、1の大形剥片を平坦打面より剥離している。この剥片は石核に転用され、裏面側の剥離面を打面に側縁で横長の小形剥片を2枚剥離している。これより以前の段階で、接合資料の正面で、礫面を打面に剥片を剥離しており、そしてさらに、90°打面を転移して、接合資料の上面で2枚の剥片を剥離している。以上の段階を経て、90°打面を転移し、2枚の剥片(2・3)を剥離する。再び、90°打面の転移を繰り返して、4・5の剥片を剥離する。以上の剥離は、打撃面と作業面を交互に入れ替え、剥片剥離が展開したのだが、以後の剥離作業では、この部分に対向する礫面を打面に剥片(6・7)を剥離する。黒色安山岩。

接合資料-23(第50・51図)

楕円形状を呈す円礫の長軸で主に剥離作業が展開する。90°打面転移を繰り返して剥離していき、石核と剥片は漸移的に小形化していく。

まず、接合資料の左側から連続して、小形の剥片(1)を剥離する。この直後、90°打面を転移して、剥離作業を行う。2の剥片と6の剥片の接合状態が不自然であり、一挙に剥離が進行した可能性が高い。このうち、大形の剥片(3)は石核に転用され、剥片(4)を剥離している。次に、石核の正面を打面に大形の剥片を剥離し、平坦打面を作出する。この打面より7・8の剥片を剥離する。黒色頁岩。

接合資料-80(第51図)

板状の大形剥片を石核素材に使用する。まず、礫面を打面に小形剥片(1)が剥離され、次に、打面を接合資料の左側に移動して剥離を行う。この剥離が終了して、対向する側面から剥離を行い、90°打面転移を繰り返して、2～4の剥片を剥離している。以上の剥離は打撃面と作業面を交互に入れ替え、剥離

が展開するものだが、これより以後の打面の移動は著しく大きい。剥片(6)を裏面で剥離して、作業を終えている。全体に、剥離の主体は接合資料の上端や側縁で展開している。黒色安山岩。

接合資料-26(第52・53図)

円礫を素材に用いている。剥離の初期段階では、やや大形の剥片が剥離され、接合状態は複雑な剥離状態を示している。1・2は同時に剥離した可能性が高い。次に、1・2の剥離面を打面に大形の剥片を剥離して平坦打面を獲得している。この打面より小形の横長剥片(3)を剥離する。再び、90°打面を転移して、剥片(4～7)を連続して剥離する。これより以後、やや小形の剥片(8～13)が、石核周辺の礫面から打面に頻りに転移して剥離され、剥離作業が終了する。黒色安山岩。

接合資料-79(第53図)

板状の大形剥片を石核素材に使用し、周辺の礫面を打面に剥離作業が展開している。石核正面には、石核の周辺から複数の剥片を剥離した痕跡を残し、石核の表裏両面で剥離作業を行う。剥離は徐々に打点を移動していくのではなく、「求心的剥離」と違ふ。90°打面転移して剥離した結果、類似した剥離状態を形成したのではなからうか。剥離は表裏両面に及び、やや横長の小形剥片を多く剥離している。黒色安山岩。

接合資料-27(第54図)

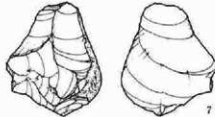
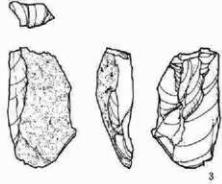
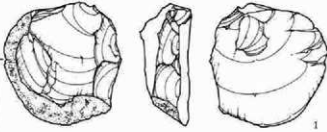
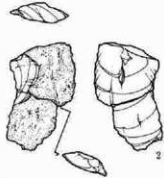
剥片10点の接合資料で、周辺の礫面を打面に剥離している。接合資料-79に類似した剥離構造を示す。

まず、側面の礫面を打面に小形の剥片(1・2)を剥離し、次に、上面の礫面を打面に剥片(3・4)を剥離している。再び、打面を右側の礫面に移動して剥片を剥離してから、上面の礫面に打面を移動して2枚の剥片(5・6)を剥離する。これ以後、再度、打面を右側の礫面に移動し、2枚の剥片(7・8)を連続して剥離している。黒色安山岩。

4. 石器の接合

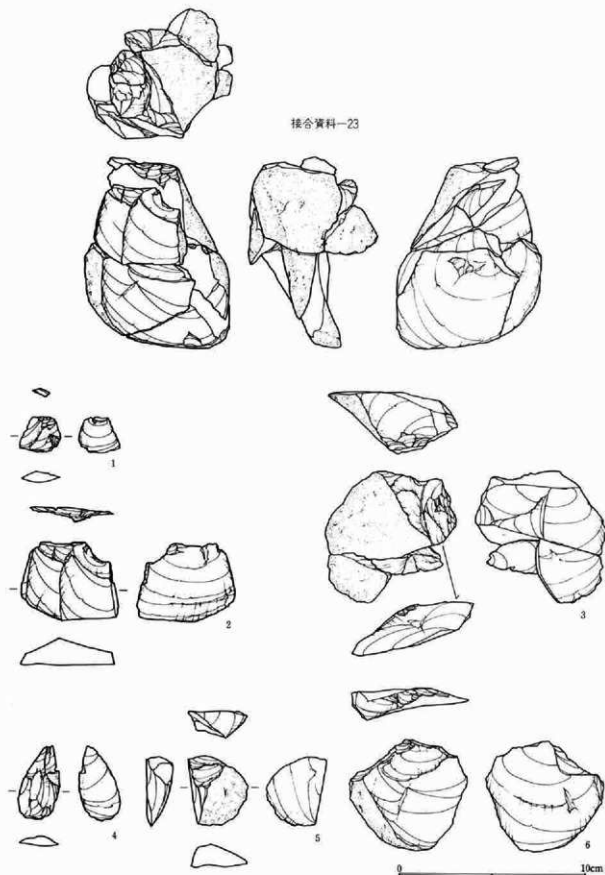


接合資料-16

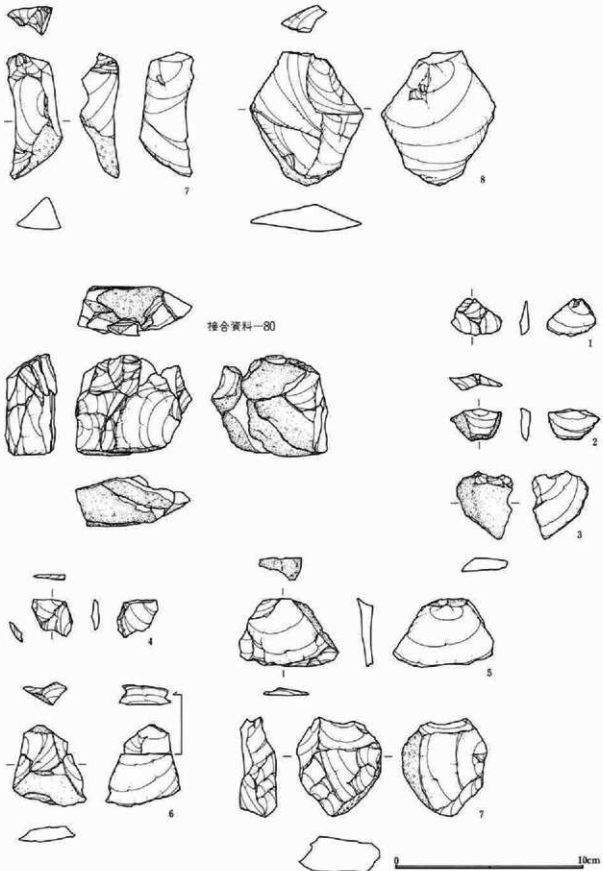


第49図 接合資料-16

II 旧石器時代の遺構と遺物

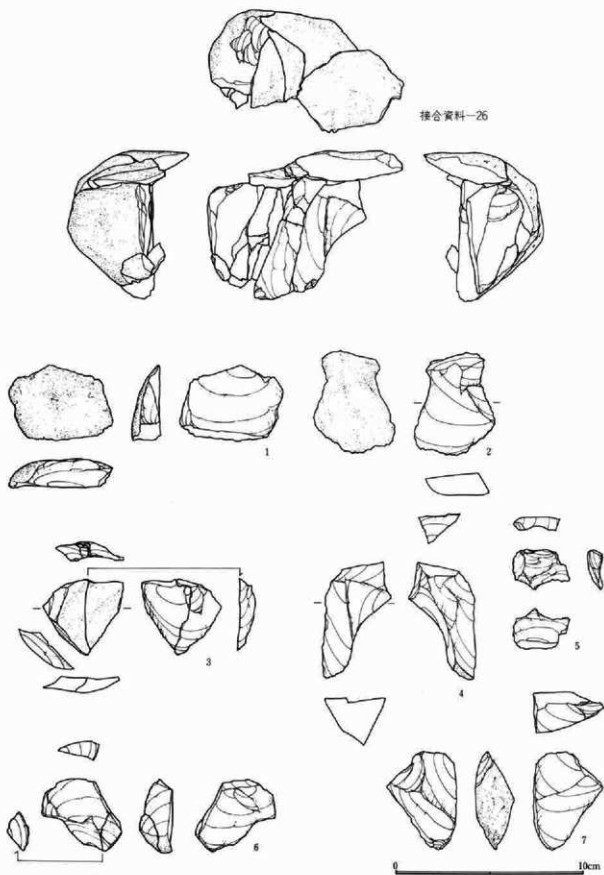


第50図 接合資料-23(1)



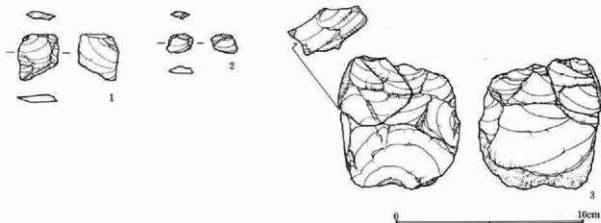
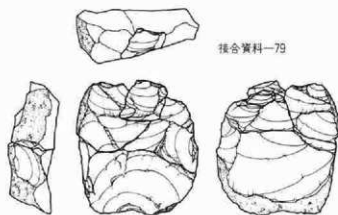
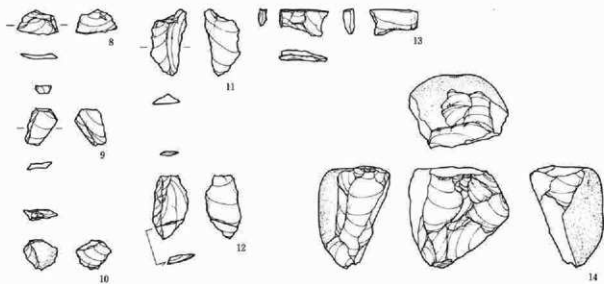
第51図 接合資料-23(2)・80

II 旧石器時代の遺構と遺物



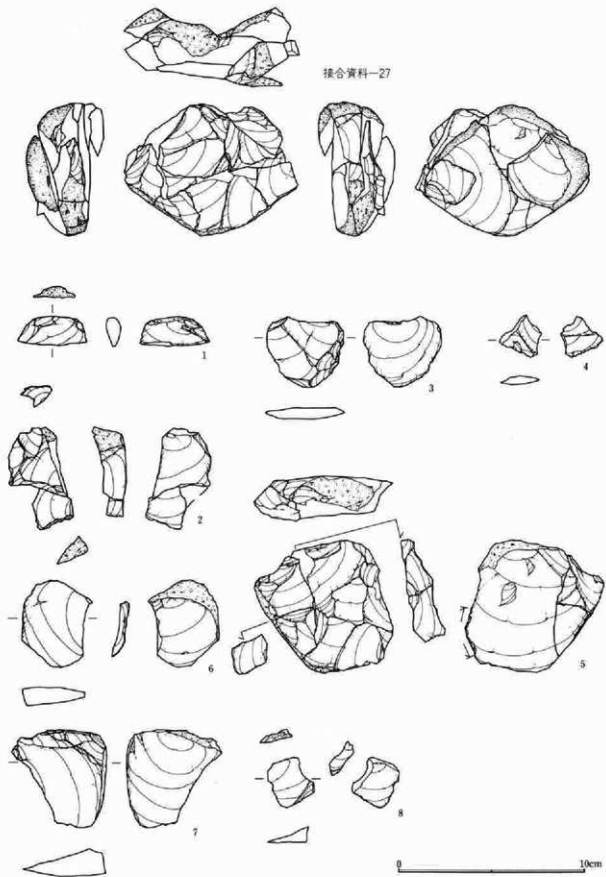
第52図 接合資料-26(1)

4. 石器の接合



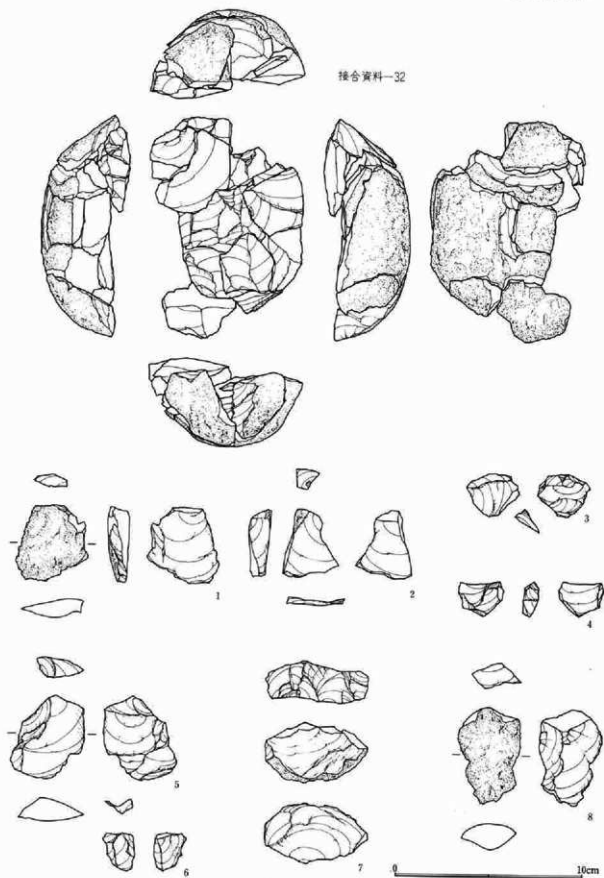
第53図 接合資料-26(2)・79

II 旧石器時代の遺構と遺物



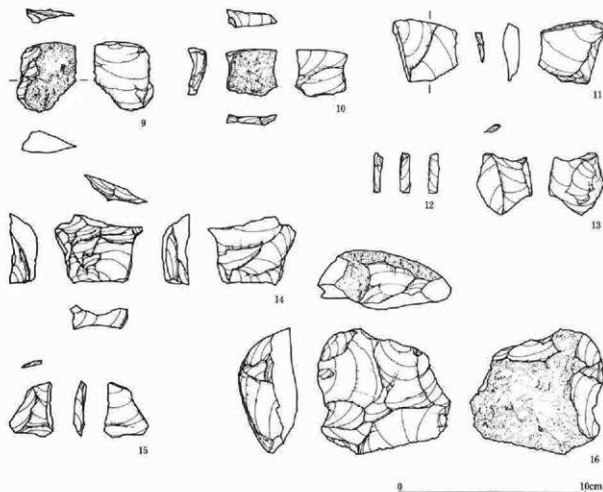
第54図 接合資料-27

接合資料-32



第55図 接合資料-32(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第56図 接合資料-32(2)

接合資料-32(第55・56図)

円礫を分割して石核素材に使用した接合資料で、剥離工程の推移を良好に示している。剥片(1・8・11・13)に分割面の一部を残している。

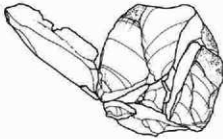
まず、石核の右側で剥離作業が開始され、平坦な剥離面を打面に2枚の剥片(1・2)を剥離している。この直後、すぐ90°打面を転移し、3~5の剥片を剥離する。以後、打面転移を繰り返し、剥片を剥離していく。以上の状態と同様な作業は、一方の側面でも展開している。石核(16)は薄い板状の石核形態を呈し、左右両端や上端部分に打点を残す。全体に石核両端の短軸方向で剥離を行い、打面を作出し、同一の打面より連続して剥片を剥離することなく、頻繁に打面転移して剥離作業を展開する傾向が指摘されよう。黒色安山岩。

接合資料-42(第57・58図)

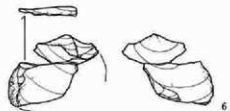
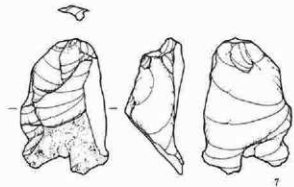
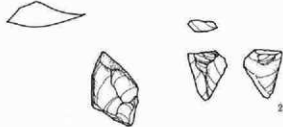
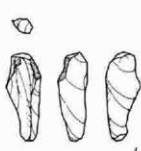
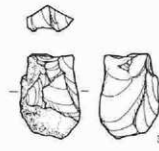
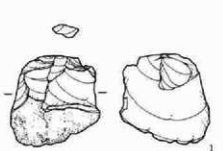
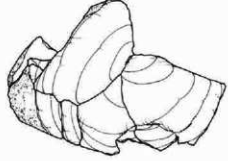
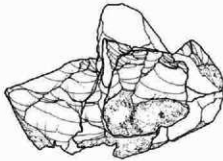
大形の円礫を石核素材に、90°打面を転移して、剥離作業を展開する。円礫上端から下端へと、対角線上をたどるように剥離していき、石核は漸移的に小形化していくものといえる。

まず、接合資料の上面から2枚の剥片(1・2)を剥離している。次に、90°打面を転移し、接合資料の右側で、3~6の剥片を剥離している。なお、5は大形で厚い剥片形状を呈し、石核に転用している。この石核から剥片(4)を剥離している。

以上の段階の剥離が終了してから、再び、最初に剥片剥離した打面より大形の剥片(7)を剥離し、以後、頻繁に90°の打面転移を行い、剥片を剥離していく。大形剥片が多く作出する傾向が指摘されよう。黒色頁岩。



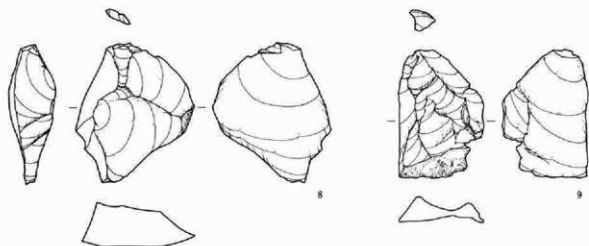
接合資料-42



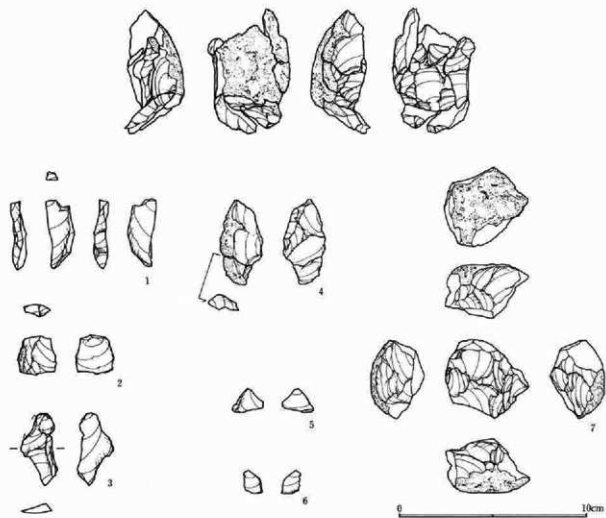
0 10cm

第57図 接合資料-42(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物



接合資料—63



第58図 接合資料—42(2)・63

接合資料-63 (第58図)

礫面を裏面に残す小形の石核を使用している。円礫を素材に剥離を開始するとき多量出する、大形で、厚手の剥片に類似した形状を持つ。剥離作業は石核両端で行う。

まず、石核の一方で、剥片(1)を剥離し、90°打面を転移する。この段階では、3の剥片を剥離する以前に数枚の剥片を剥離しており、1や2の剥片は打面の作出を意図しているともいえる。一方の側面は礫面を打面に剥離が展開しているのと、対照的である。黒色安山岩。

接合資料-44 (第59・60図)

円礫を二分し、石核の小口部分から剥離を開始し、90°打面を転移して、剥離が展開する。概ね、小形の剥片を多く剥離している。

まず、剥片剥離は接合資料の右側で開始され、1の剥片を剥離する。次に、90°打面を転移して2・3の剥片を連続して剥離している。再び、打面転移して4を、次に、5・6の剥片を剥離する。そしてさらに、6の平坦な剥離面を打面に幅広の横長剥片(7)を剥離する。これ以後の剥離には、同一の打面から連続して剥離作業が展開する傾向が強い。黒色頁岩。

接合資料-69 (第61図)

円礫を分割して石核素材とし、石核裏面には礫面を残す。剥離当初、上面の打面より連続して縦長の剥片を剥離しており、更に、2枚の剥片を剥離している。以上の作業を終了して、90°打面を転移して、やや幅広の剥片(2・3・4)を剥離する。この段階では、石核の小口部分で剥離作業が展開しており、当初、作出した剥片の形状とは相違している。黒色頁岩。

接合資料-72 (第62・63図)

大形の板状剥片を石核素材に用い、90°打面転移を行い、剥離作業を展開している。打面調整・頭部調

整は明確ではない。

まず、石核上面の平坦打面から横長の剥片(1)を剥離する。次に、90°打面を転移して、剥片(2～5)を剥離する。以上の作業が終了してから、再び、打面を元の状態に戻し、7・(8～10)の2枚の剥片を剥離している。剥片(7)は、剥離段階に破損した可能性が、また、8～10は同一剥離面を有し、剥離してから分割した可能性が強い。このうち、10は側縁に若干の加工痕を有す。剥片(11)は、上端を欠損している。黒色頁岩。

接合資料-45 (第63図)

大形の板状剥片を石核の素材に用い、剥離作業が展開している。石核素材の凹部が剥片の一部に残存している。

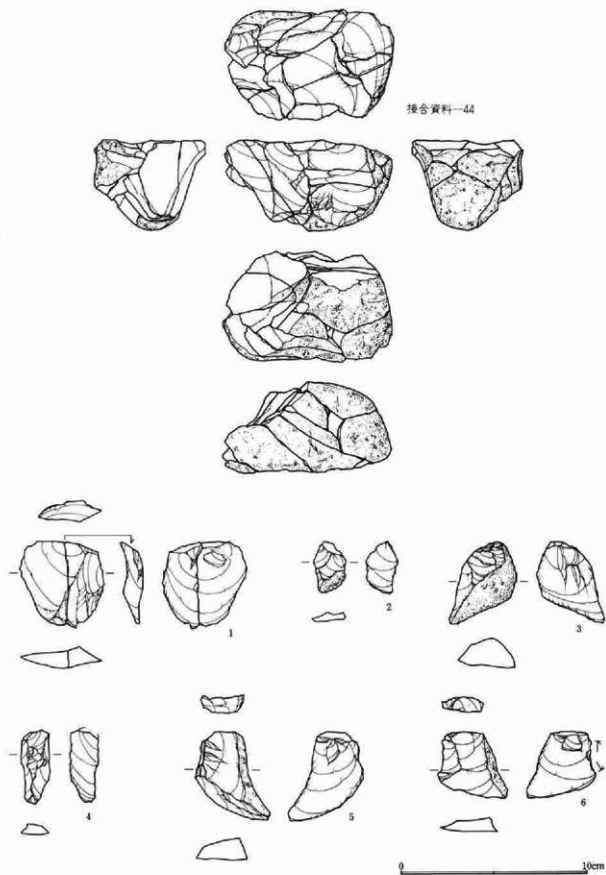
まず、平坦打面より剥片(1)を剥離する。次に、石核を反転し、礫面より剥片(2)を剥離している。そしてさらに、90°打面を転移し、大形の縦長剥片を剥離する。これ以後、石核(4)の上下両端から横長の剥片を剥離して、石核を放棄している。小形の横長剥片(3)は、石核側縁から剥離している。黒色安山岩。

接合資料-75 (第64・65図)

準大程度の円礫を石核素材に使用し、90°の打面転移を行い、剥離作業を展開している。大形の剥片を石核に転用する資料は全く存在せず、剥片剥離の最初から最後まで、縦長剥片の作出を目的に剥離を行う。

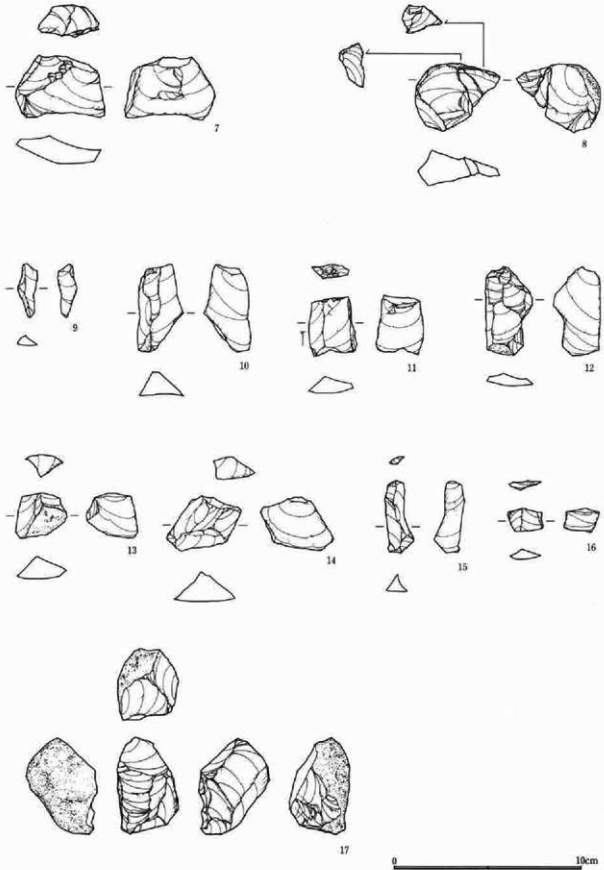
剥離作業は、まず、礫面を打面に幅広の剥片(1)を剥離して開始している。次に、この剥離面より、2の剥片を剥離して打面を作出し、剥離作業が展開していき、3～6の剥片を連続して剥離する。以後、90°打面転移を繰り返し、7・8、9・10、11・12、13、14、15～17、の剥片を連続して剥離している。石核(20)は裏面や下端に礫面を残し、すべて剥離面に覆われるような形状を呈している。石核上面には、平坦な打面を持つ。黒色安山岩。

II 旧石器時代の遺構と遺物



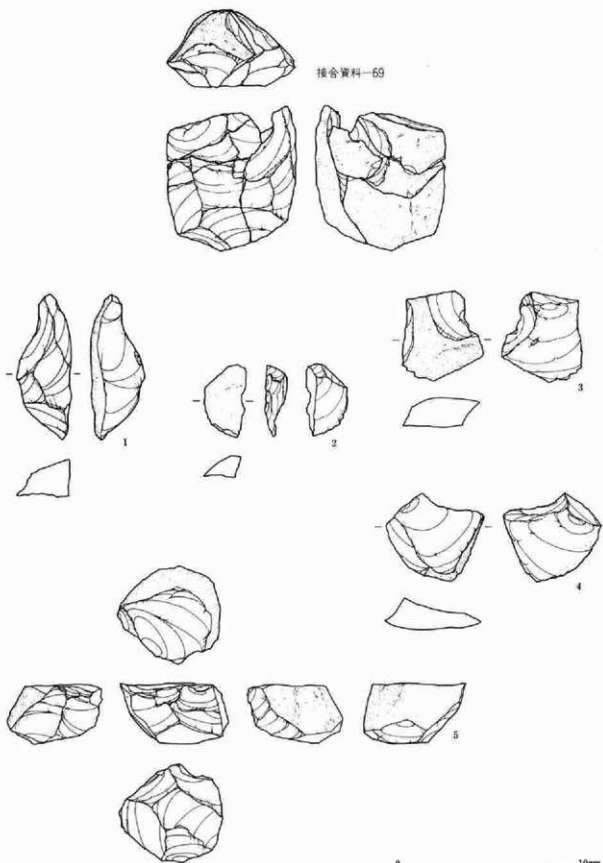
第59図 接合資料-44(1)

4. 石器の接合



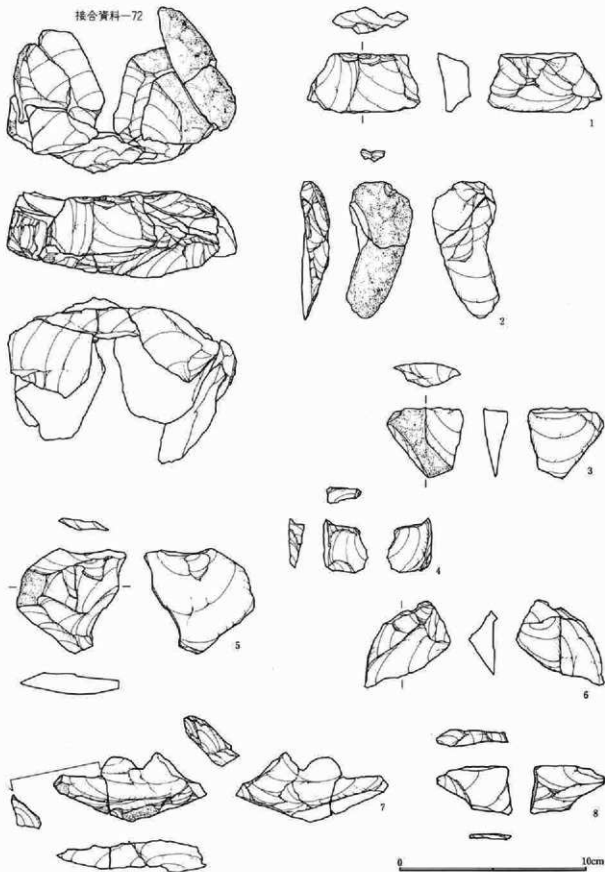
第60図 接合資料—44(2)

II 旧石器時代の遺構と遺物



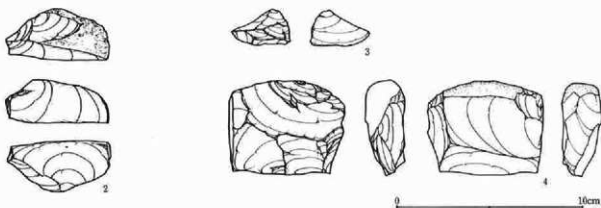
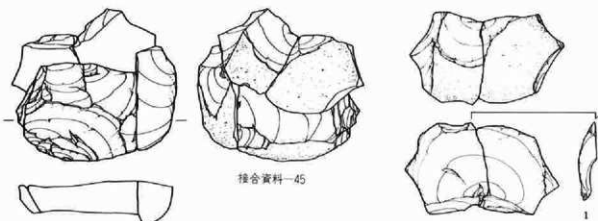
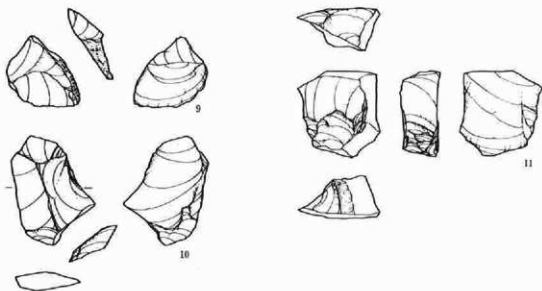
第61図 接合資料-69

接合資料-72



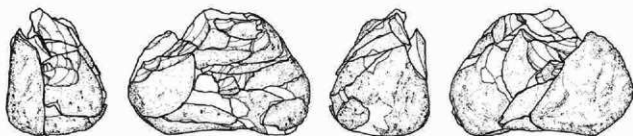
第62図 接合資料-72(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物

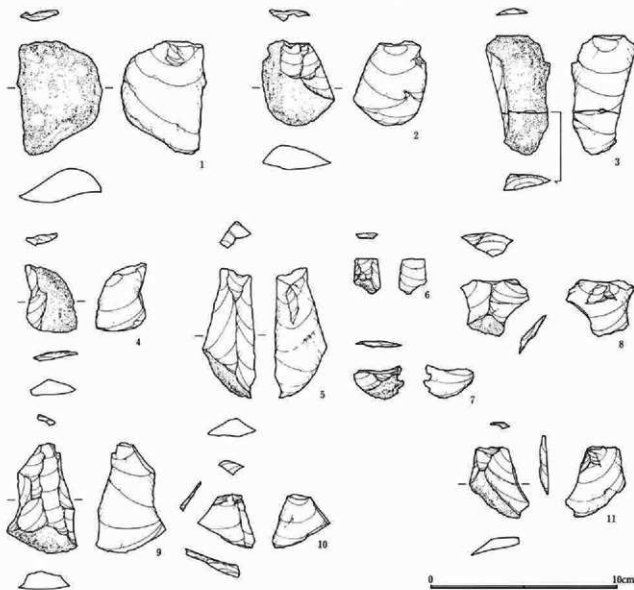


第63図 接合資料-72(2)・45

4. 石器の接合

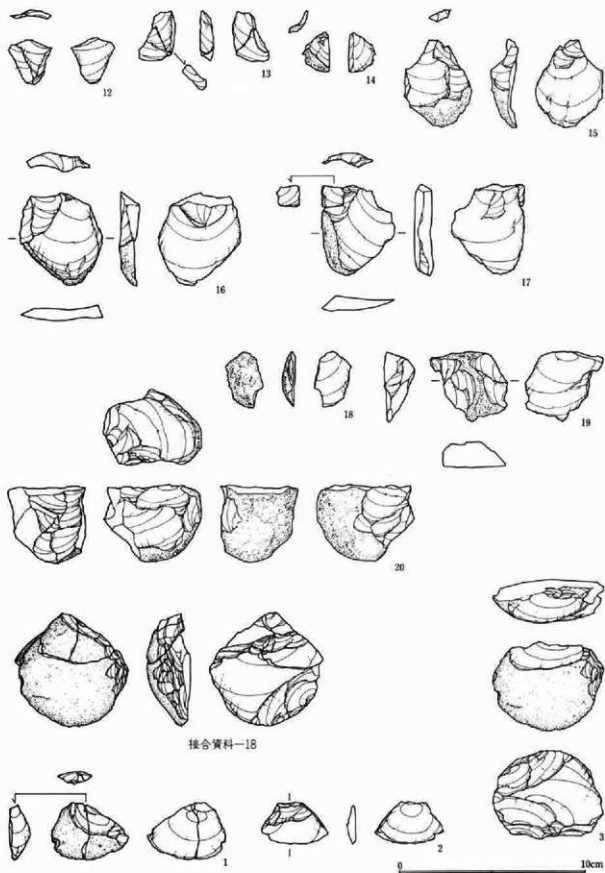


接合資料-75



第64図 接合資料-75(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物



第65図 接合資料-75(2)・18

接合資料—18 (第65図)

剥離の初期段階に多い板状剥片を石核素材に使用している。

最初の剥離を石核の上下両端で開始し、上端では表面側から、下端では裏面側から小形の横長剥片を剥離している。なお、2の剥片には微細な頭部調整を施し、石核にも同様な剥離が連続する。この微細な剥離は、適当な角度の打角を確保するために、この場合に限定して採用したものと見え、普遍的に存在する手法ではない。黒色安山岩。

接合資料—78 (第66図)

準大程度の円礫を石核素材に用い、平坦な打面を作出してから剥離作業を行う。

剥片剥離は、まず、接合資料の上面に平坦打面を作出することから開始され、遺存する剥離面の状態から判断して、大形剥片を剥離しており、こうした傾向は最終段階まで続く。剥離作業は頻繁に打面を転移して展開している。石核(5)は上面に平坦な打面を持ち、下端に礫面を残す他、総て剥離面が覆う。黒色安山岩。

接合資料—88 (第67・68図)

大形の円礫を石核素材に用い、90°の頻繁な打面転移を繰り返す。剥離作業が展開している。縦長の剥片を指向したのは明確だが、全般に、大形剥片が多く剥離され、また、石核の内部に節理を多く内包することにも起因して、破壊に近い状態で石核を放棄している。

まず、接合資料の上面から剥片(1)を剥離する。この後、対向する礫面より、やや大形の剥片(3)を剥離している。以後、この部分を打面とし、剥片を連続して剥離していく(4~8)。以上の剥離作業を終了してから、打面を下端に移動して10の大形剥片を剥離している。これ以後の剥離の状態は節理部分で破損しているため、明確ではない。その実態は、節理部分での破損に近い状態なのかもしれない。なお、3・6の大形剥片は、小形の剥片作出を目的に

石核に転用して、数枚の剥片を剥離している。黒色頁岩。

接合資料—51 (第68図)

裏面に礫面を残す、やや厚手の板状剥片を石核の素材に使用している。まず、表面の平坦な打面より剥離を開始して、礫面を除去していく。1~3の剥片は、この剥離が終了してから同一の打面より剥離している。剥片は3点とも小形で、横長の剥片形状を呈す。黒色安山岩。

接合資料—89 (第69図)

接合資料の上面に、平坦打面を作出し、剥離作業を行う。剥片剥離は、90°の打面転移を繰り返す、やや大形の剥片を剥離している。接合しないものの同一の母岩が、このほかにも出土している。

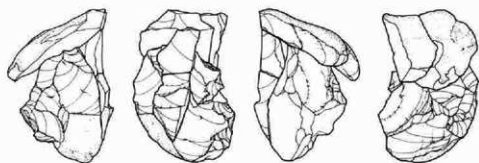
まず、最初に接合資料の下端から剥片(1)を剥離する。このとき、同時に剥片(2)が剥離している。接合資料上面の打面の作出は、この剥片(1)を剥離してから行う。以下、この打面より剥片を剥離していき、3・4の縦長剥片を剥離する。次に、90°打面を転移して、大形剥片(8)と小形剥片(9)を剥離している。この大形剥片は石核に転用され、5~7の剥片を剥離する。これ以後、90°の打面転移を繰り返す、10・11の剥片を剥離している。珪質頁岩。

接合資料—90 (第70図)

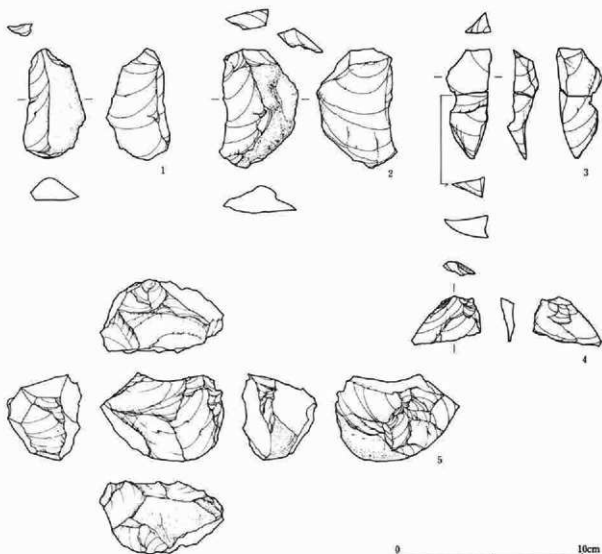
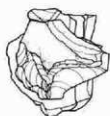
接合資料の正面と上面で、交互に剥片剥離を繰り返す。接合資料の正面を主体に剥離作業が展開され、剥離した剥片の形状は、概ね、横長の剥片が多い。剥離段階で破損した剥片が多い。

剥離作業は、まず上面の平坦打面から大形の横長剥片(1)を剥離してから展開していく。剥片(1)は合計5点の折断剥片が接合しており、剥離の段階で破損してから、分割して折断剥片を獲得している。以後、90°打面を転移して大形剥片(2)を剥離してから、再び、打面を元に戻し、3・4の剥片を連続して剥離している。黒色安山岩。

II 旧石器時代の遺構と遺物

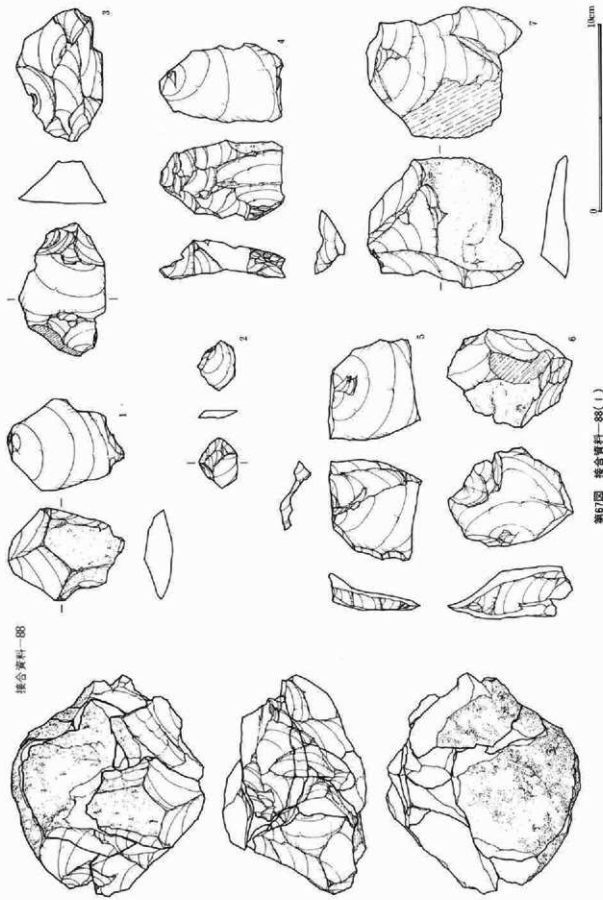


接合資料-78



第66図 接合資料-78

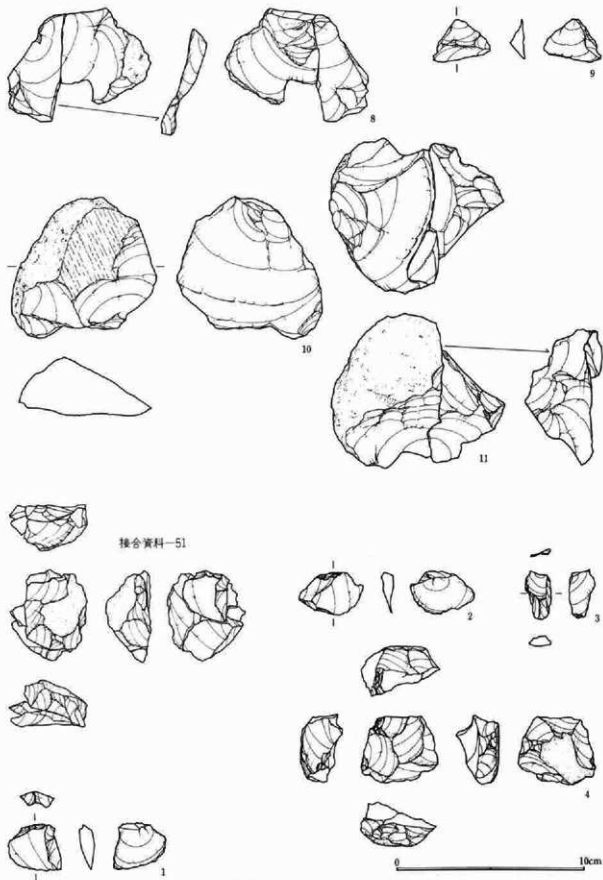
4. 石器の接合



接合資料—88

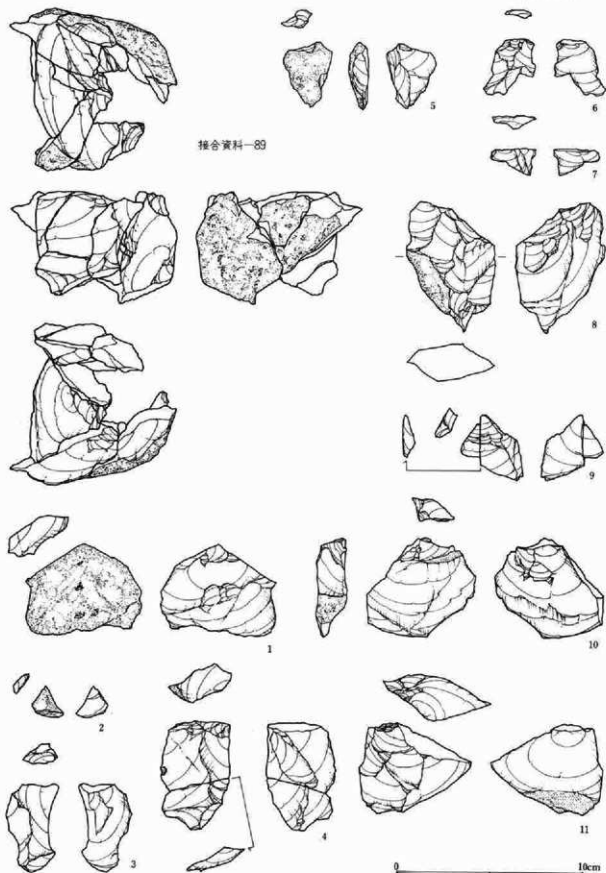
第67回 接合資料—88(1)

II 旧石器時代の遺構と遺物



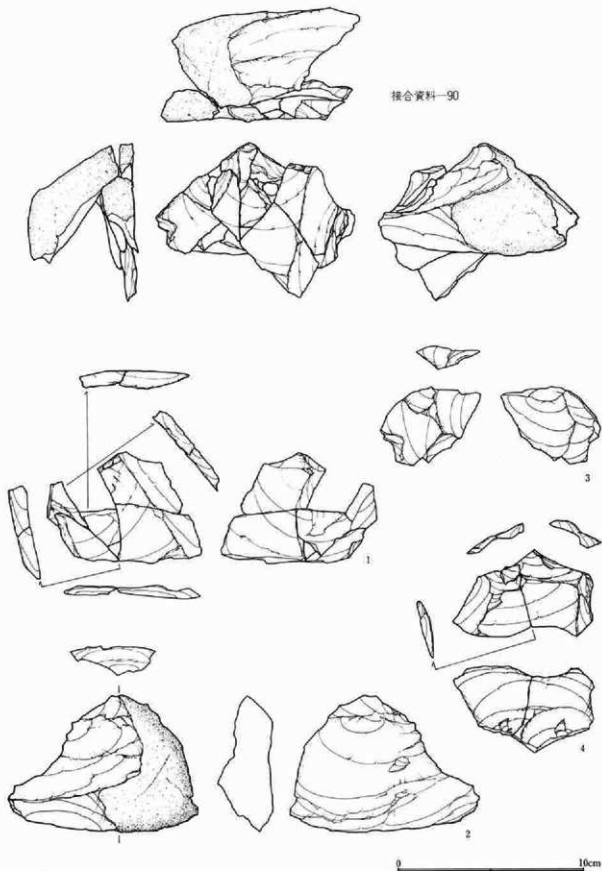
第68図 接合資料—88(2)・51

4. 石器の接合



接合資料-89

第69図 接合資料-89



第70回 接合資料—90

接合資料-92 (第71・72図)

円礫を分割して石核素材を獲得する。剥離作業は、接合資料の正面や接合資料の右側に集中しており、90°の打面転移を繰り返して、展開している。

まず、上面の平坦な打面より、1～3の大形剥片を剥離する。4・5の剥片は、剥片(3)を剥離したとき、同時に剥離している可能性が高い。これ以後、接合資料の右側に剥離の主体が移動し、6～9の剥片を剥離している。この段階の剥離が終了して、再び、打面を元に戻し、剥離作業を行い、剥片(10)を剥離する。以後、頻繁な打面転移を繰り返して、剥片(11～14)を剥離して、作業を終了する。石核(15)は上面に平坦打面を持つ。黒色安山岩。

接合資料-93 (第73・74図)

円礫を分割した石核素材を用い、頻繁に打面転移を行い、剥離作業が展開している。接合資料の内部には空白部分が存在する。

まず、平坦な分割面を打面に、正面左側から剥離作業を開始して、剥片(1)を剥離する。次に、左側面から剥片(2)を剥離する。再び、打面を元に戻し、剥片(3・4)を剥離している。3・4の剥片は連続する主要剥離面を有す。2枚の剥片は同時に剥離した可能性が高い。この剥離作業が終了して、再び、最初の打面に移動して剥片(6)を剥離する。以下、90°打面を転移して、同一の打面より剥片(7・8・10・11)を剥離する。剥片(9)・12～18の剥片は、この打面に対向する打面から連続して剥離している。黒色安山岩。

接合資料-65 (第75図)

横長剥片を素材に使用した、楔形石器の製作工程を良好に示している。素材剥片は平坦打面より剥離され、この打面は剥片(2)の一部に遺存している。この打面に相対する位置に小形剥片(1)を剥離して、全体に素材が対象形になるように配慮している。以後、素材剥片の上下両端から打撃を加え、石器を作出していく。黒色安山岩。

接合資料-87 (第75図)

楕円形状を呈す偏平礫を用い、剥離作業を行う。接合資料の上面には、剥片(1)を剥離して平坦な打面が作出され、この部分を打面に剥離している。剥離した剥片は、合計2枚程度で、途中で剥離作業を終了している。黒色頁岩。

接合資料-31 (第76図)

やや大形の円礫を石核素材に使用している。石核正面には、10枚以上の剥片を剥離した痕跡を残し、ある程度剥離作業が進行した状態を示す。接合した2点の剥片は、石核上面の礫面を打面に剥離され、1の剥片は、その上半を剥離段階で破損している。黒色安山岩。

接合資料-94 (第76図)

偏平な礫を石核素材に使用している。剥離作業は、石核の右側・上下両端で行う。石核上端では、分割して平坦な打面を作出して、そのほかでは礫面を打面に表裏両面で剥離作業を行う。全体に小形の剥片を多く剥離している。石核下端を破損した段階で、剥離作業を終了している。玉髄。

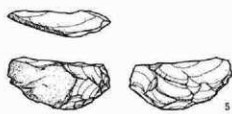
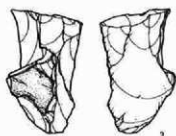
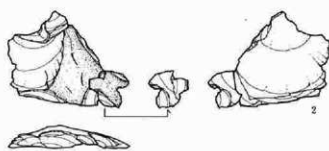
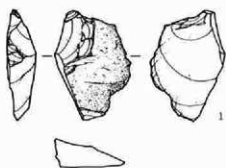
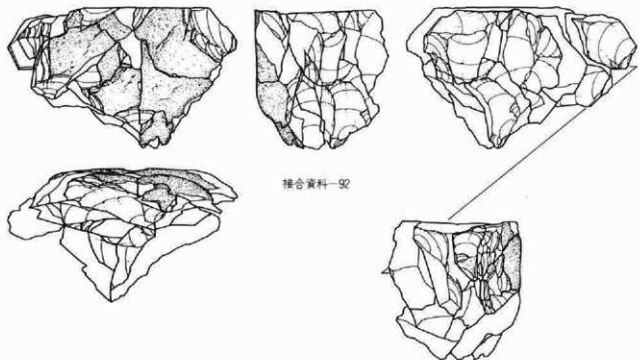
接合資料-36 (第77図)

4点からなる接合資料で、上下両端に打面を持つ。接合資料左側の側面には分割面があり、また、剥片(1)は大形の剥片を剥離してから、その剥片を石核に使用して、礫面を打面に剥離した可能性がある。8号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-52 (第77図)

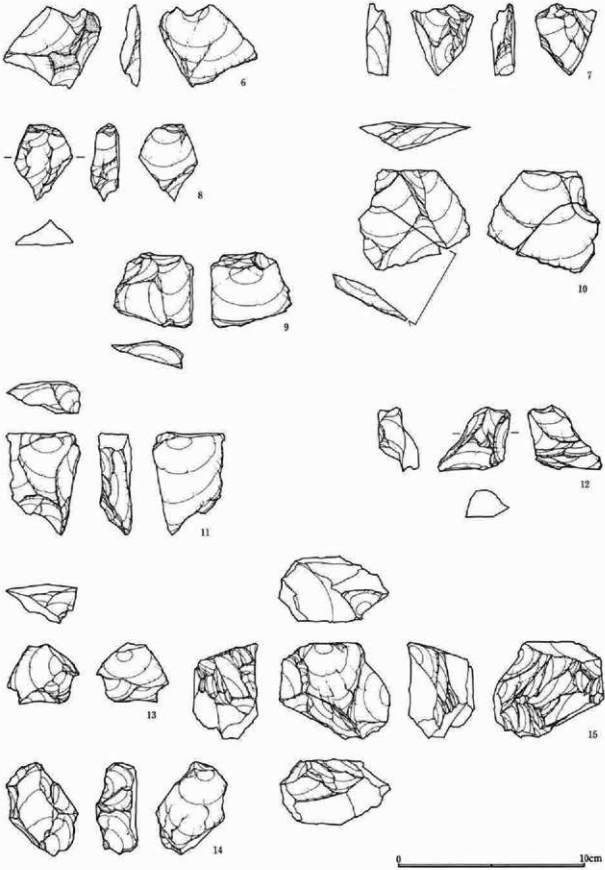
5点からなる接合資料で、小形の剥片(1・2)を剥離し、この部分を打面に縦長剥片を連続して剥離している。剥片(5)は石核に転用され、剥片上半の表裏両面で剥片を剥離している。剥片(3)は、このとき剥離した剥片で、このほかにも裏表両面で2枚づつ剥片を剥離している。13号ブロック出土。黒色頁岩。

II 旧石器時代の遺構と遺物

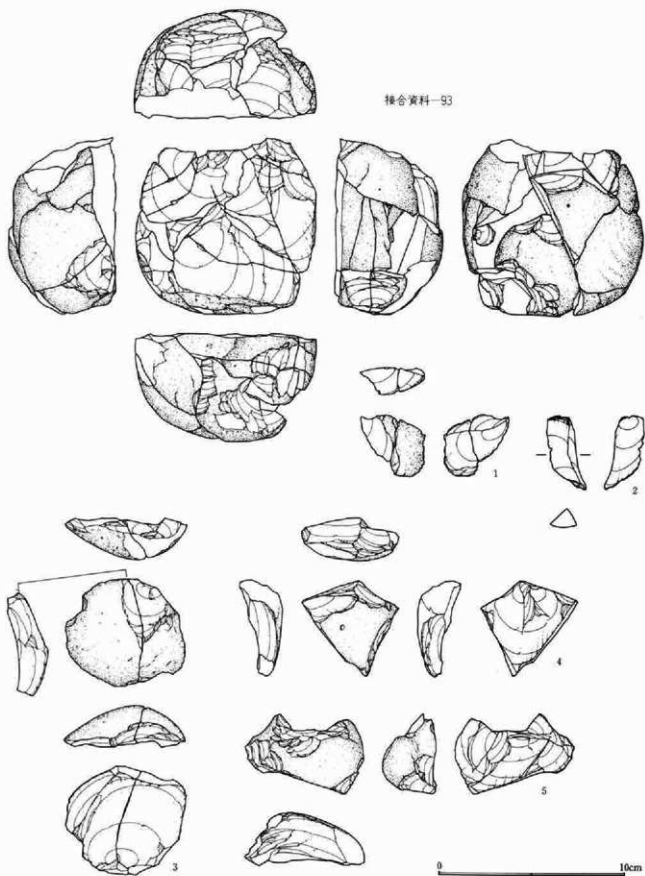


第71図 接合資料-92(1)

4. 石器の接合

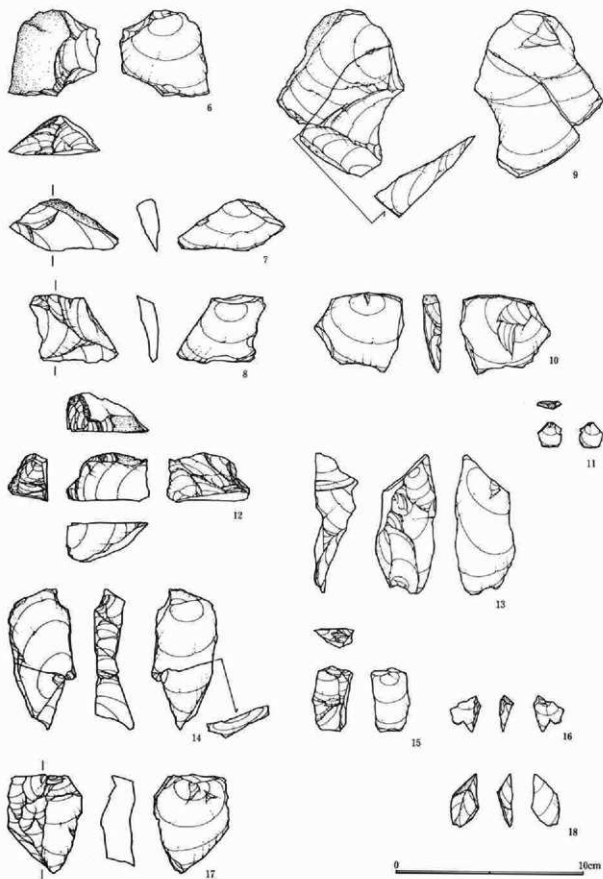


第72図 接合資料—92(2)



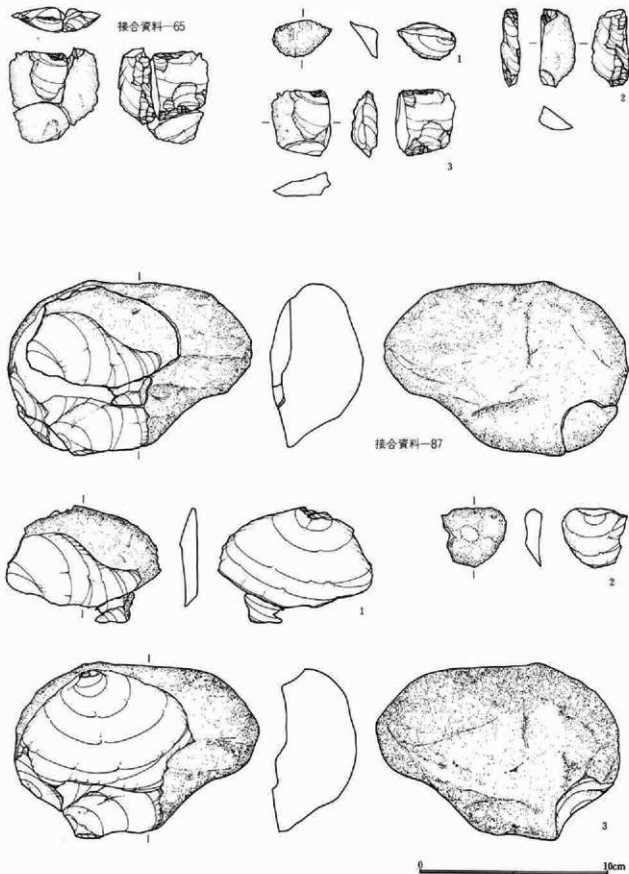
第73図 接合資料—93(1)

4. 石器の接合



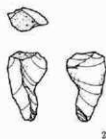
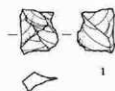
第74図 接合資料-93(2)

II 旧石器時代の遺構と遺物

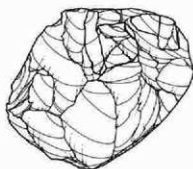


第75図 接合資料-65・87

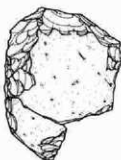
4. 石器の接合



接合資料-31



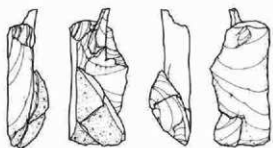
接合資料-94



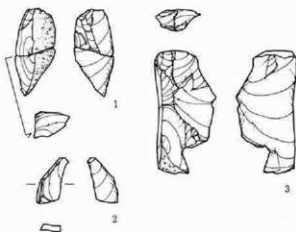
0 10cm

第76図 接合資料-31・94

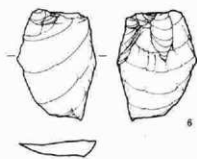
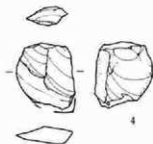
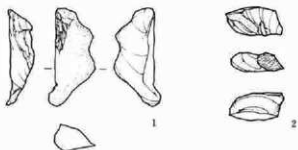
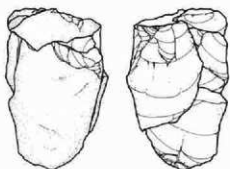
II 旧石器時代の遺構と遺物



接合資料-36



接合資料-52



0 10cm

第77図 接合資料-36・52

接合資料-53(第78図)

4点からなる接合資料で、上面の平坦打面より連続して剥片を剥離している。形状が良好な縦長剥片を多く剥離している。13号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料-55(第78図)

4点からなる接合資料で、同一打面から連続して剥片を剥離している。打面には、微細な剥離も観察され、若干の頭部調整を伴う。接合状態で、その表面には90°方向の違う剥離面がある。13号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料-59(第79図)

6点よりなる接合資料で、その表面には礫面を多く残す。剥離作業は1・2の剥片を連続して剥離し、90°の打面転移を介在させ、再び、打面を元に戻し、3～6の剥片を剥離している。14号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料-82(第79図)

2点よりなる接合資料で、やや幅広の剥片が接合している。剥片(1)は上面の打面から、剥片(2)は左側の側面から剥離している。19号ブロック出土。黒色頁岩。

接合資料-62(第80図)

4点からなる接合資料で、上下両端に打面を持つ。左右の側縁が平行する形状の良好な剥片を多く剥離している。各々の剥片の打面は若干相違しており、この打面の相違が、打面調整であるのか打面再生であるのか、現状では断定できない。剥片(3)は17号ブロックより、他の3点の剥片は15号ブロックより出土している。黒色安山岩。

接合資料-77(第80図)

5点よりなる接合資料で、上面の平坦打面より剥離している。礫面を剥片の端部に残し、剥離の初期段階であることを示している。剥片(4)は中央付

近を欠損している。剥片(1)は1号ブロックより、他の剥片は17号ブロックよりそれぞれ出土している。黒色安山岩。

接合資料-74(第81図)

8点よりなる接合資料で、上面の礫面を打面に、やや幅広の大形剥片を連続して剥離している。剥片(1)は、当初、側縁に粗い調整加工を施し、削器の作出を意図している。破損した段階で石器の製作を放棄しており、石器の上半を石核に転用している。石核の上下両端で剥離作業を展開しており、数枚の剥片を剥離している。また、剥片(6)は剥離段階で縦位に折断している。剥片(5)が2号ブロックより、剥片(6)は12号ブロックよりそれぞれ出土している。黒色安山岩。

接合資料-10(第82図)

4点よりなる接合資料で、剥片表面に礫面を残し、剥離の初期段階を示している。打点を左右に振り、同一の打面より連続して剥片を剥離している。剥離の状態から推定して、幅広の剥片を剥離したのではないだろうか。剥片(1)は剥離の段階で縦位に破損している。4号ブロック出土。黒色安山岩。

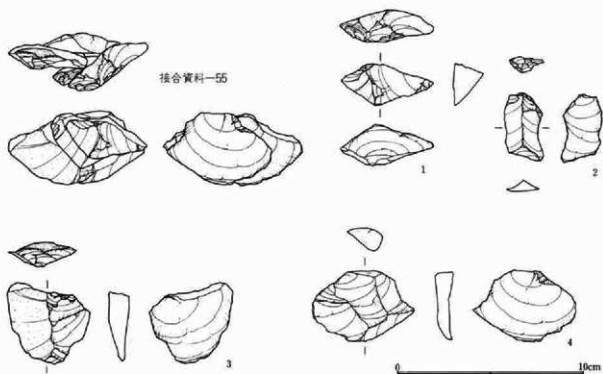
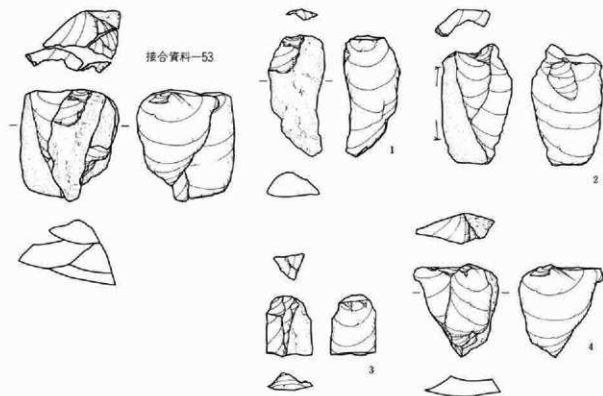
接合資料-29(第82図)

3点よりなる接合資料で、上面の礫面を打面に、打点を左右に振り、剥離している。剥片(1～3)はその表面に同一の剥離面を持ち、石核素材に分割礫を用い、その初期に作出した剥片である可能性が高い。7号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-48(第82図)

3点よりなる接合資料で、同一打面より剥離している。接合資料の打面と、表面に残る古い剥離面の状態から推定して、板状の大形剥片を石核素材に使用している可能性が高い。縦位に折断している剥片(2)の左側の石器は13号ブロックより、他の剥片は10号ブロックより出土している。黒色安山岩。

II 旧石器時代の遺構と遺物

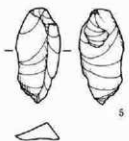
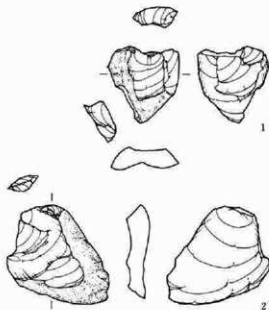
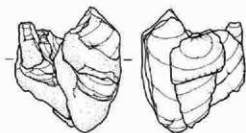


第78図 接合資料—53・55

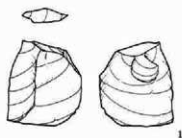
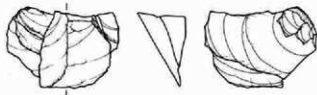
4. 石器の接合



接合資料—59

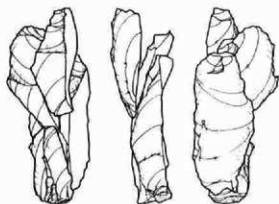


接合資料—82

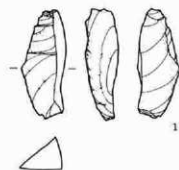


0 10cm

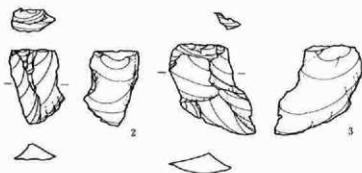
II 旧石器時代の遺構と遺物



接合資料—62

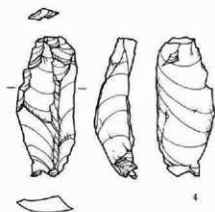


1



2

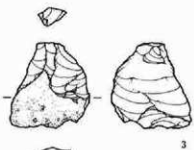
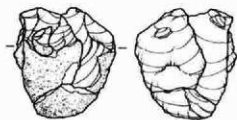
3



4



接合資料—77



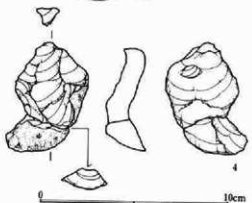
3



1



2

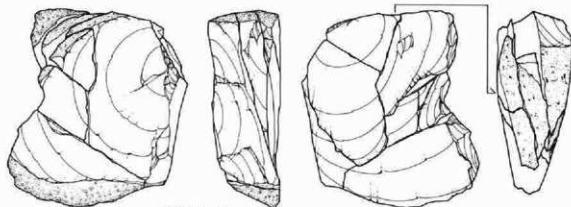


1

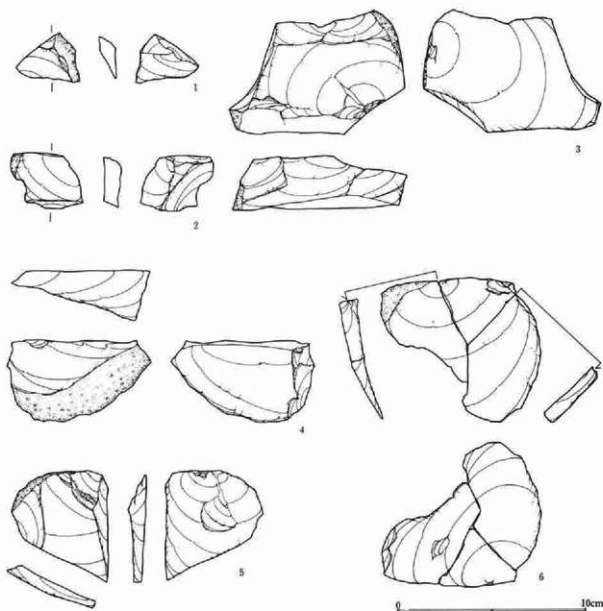
4

0 10cm

第80図 接合資料—62・77

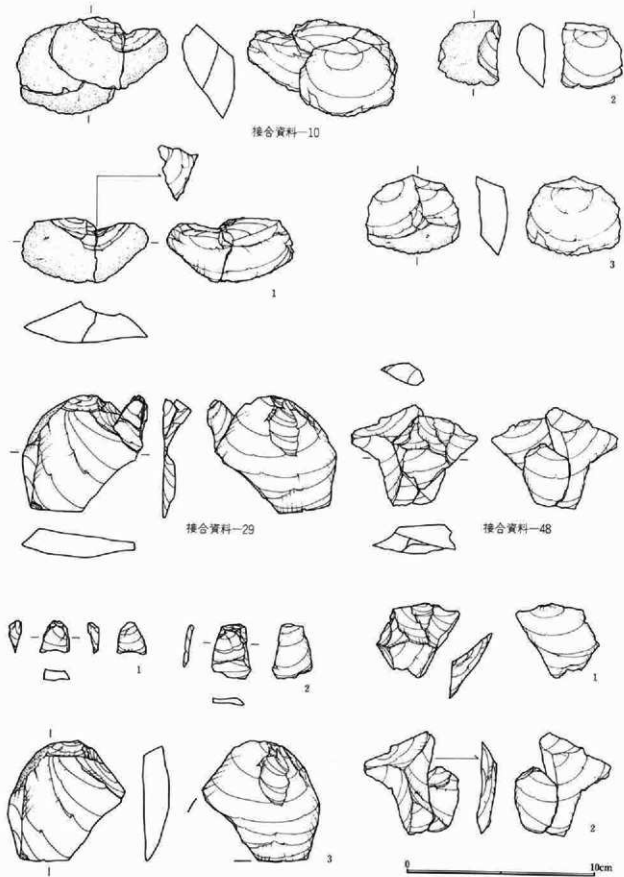


接合資料-74



第81図 接合資料-74

II 旧石器時代の遺構と遺物

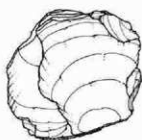
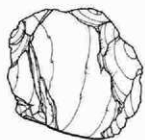


第82図 接合資料-10・29・48

4. 石器の接合



接合資料-6



接合資料-20



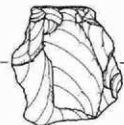
1



1



2



2

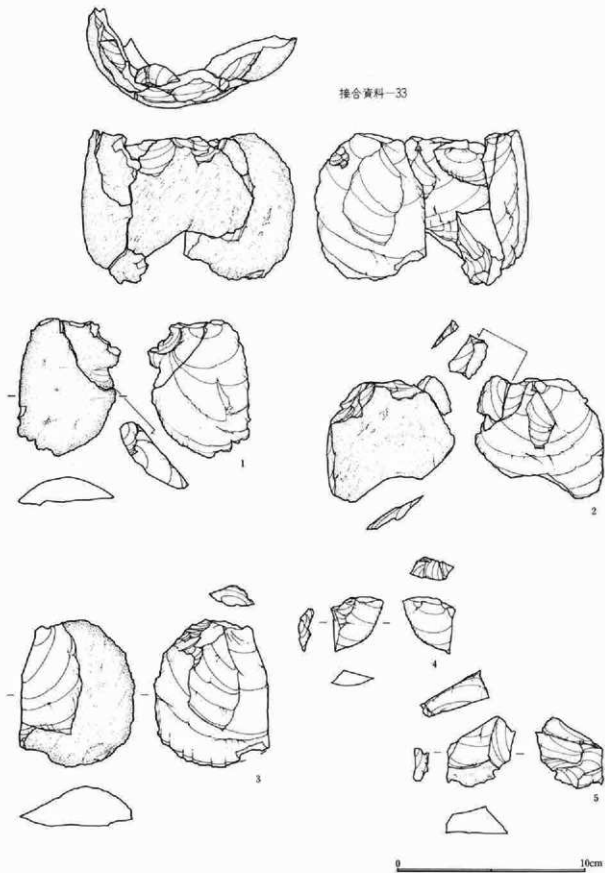


3

0 10cm

第83図 接合資料-6・20

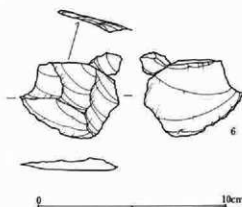
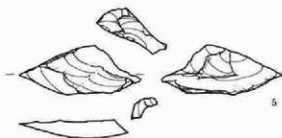
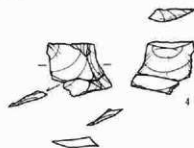
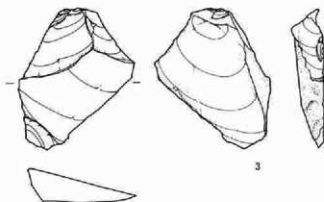
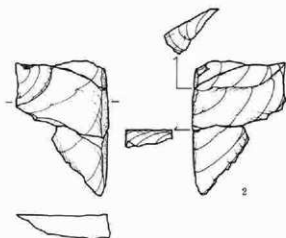
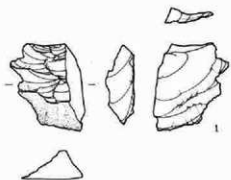
II 旧石器時代の遺構と遺物



第84図 接合資料-33



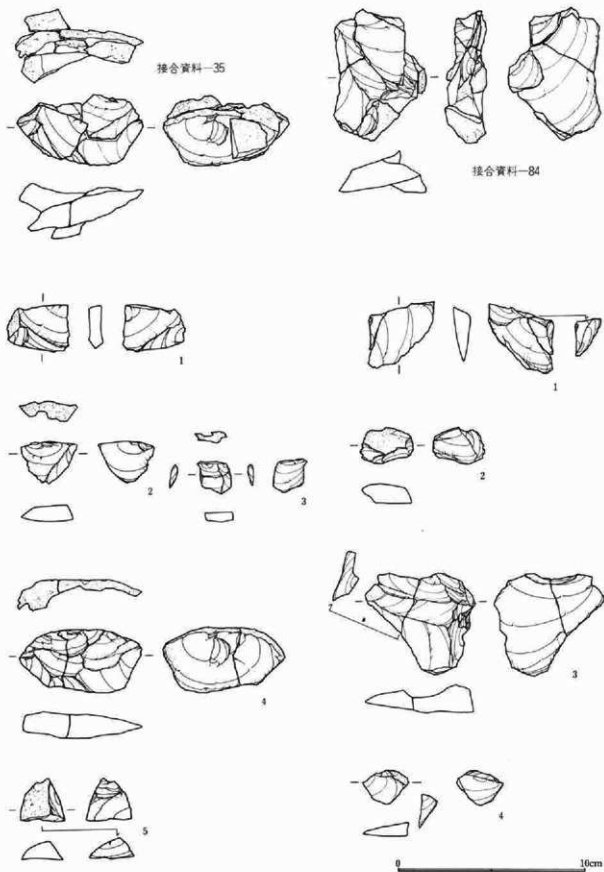
接合資料-47



0 10cm

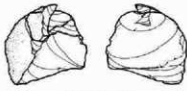
第85図 接合資料-47

II 旧石器時代の遺構と遺物

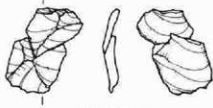
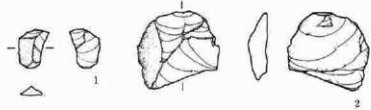


第86図 接合資料-35・84

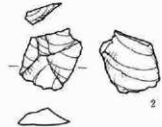
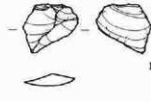
4. 石櫛の接合



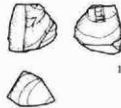
接合資料-86



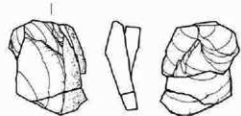
接合資料-8



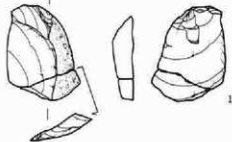
接合資料-66



接合資料-30



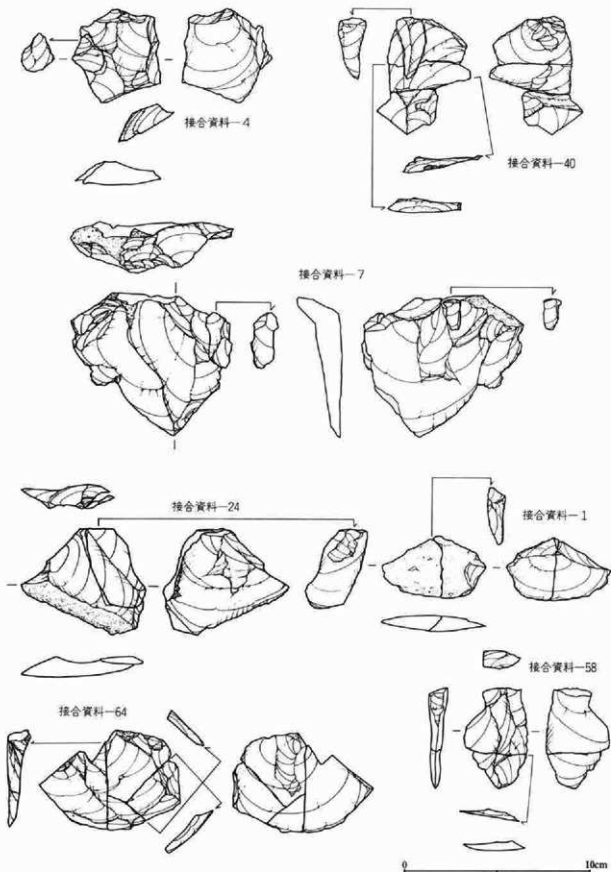
接合資料-11



0 10cm

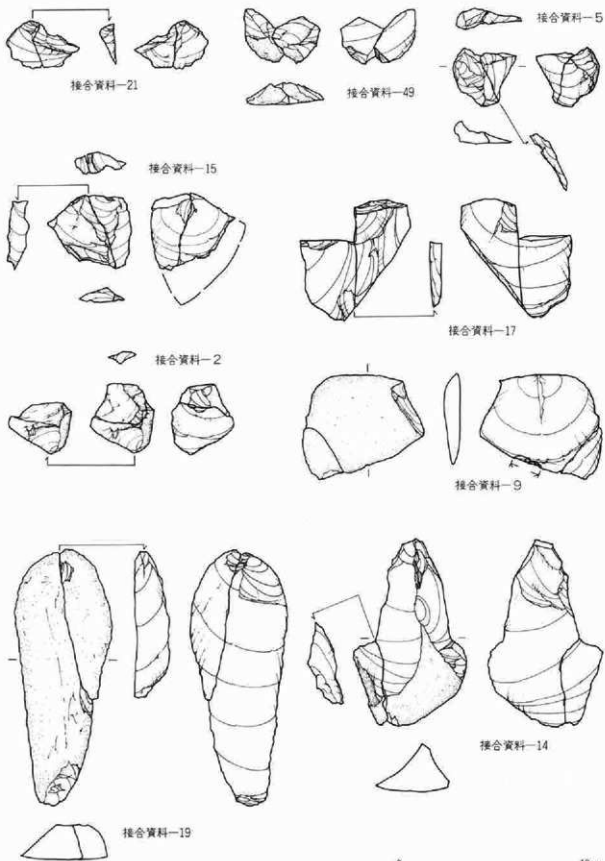
第87図 接合資料-86・8・66他

II 旧石器時代の遺構と遺物



第88図 接合資料-4・40・7他

4. 石器の接合



第89図 接合資料-21・49・5他

II 旧石器時代の遺構と遺物

接合資料-6(第83図)

2点よりなる接合資料で、上下両端の打面より剥片を剥離している。剥片の表面に残る剥離方向には左右両端から直行する剥離も観察され、90°打面を転移して剥離していく、剥片剥離の状態が想定されよう。剥片(1)は打面調整の顕著な打面から、剥片(2)は礫面を打面に、それぞれ剥離している。2号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-20(第83図)

6点よりなる接合資料で、同一方向から連続して剥離している。剥離の状態は複雑で、1・2の剥片は同時に剥離している可能性が、また、剥片(3)は剥離段階で破損した可能性が強い。接合状態で、左上に図示した破片は、剥片(3)を剥離する直前に剥離している。6号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-33(第84図)

7点よりなる接合資料で、上面の平坦打面から剥片を剥離している。剥片の表面には礫面を残し、剥離の初期段階を示している。最初、接合資料の左側から打点を徐々に右側へ移動して剥片(1~3)を剥離していき、4・5の剥片を剥離する段階で、再び打点を元の位置に戻している。8号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-47(第85図)

円礫を分割し、板状の剥片を石核素材に使用している。最初、分割面を打面に剥片を連続していき、最終段階で剥片(1)を剥離する。以下、90°打面を転移して剥離していく。剥離している剥片の形状は、横長剥片が多く、剥片端部には平坦な剥離面を取り込む。剥片は横位に破損している場合が多い。剥片(1~3)は10号ブロックより、剥片(4~6)は11号ブロックより出土している。黒色安山岩。

接合資料-35(第86図)

6点よりなる接合資料で、上面の礫面を打面に剥

片を剥離している。打点を左右に振り、徐々に後退して剥片を連続して剥離している。剥離した剥片の形状は幅広で、長い剥片端部を形成する。「折れ面」のリングは打点に一致していることから、剥離段階で縦位に破損している可能性が強い。剥片(2・4)は8号ブロックより出土している。黒色安山岩。

接合資料-84(第86図)

6点よりなる接合資料で、平坦打面から連続して剥片を剥離する。剥片(2)は、剥片(3)を石核素材に剥離しており、ほかに同一部分から数点の剥片を剥離している。また、同様に剥片(1)も石核素材に転用しており、図中に示した破片を剥離している。20号ブロック出土。黒色安山岩。

接合資料-85・8・66・11(第87図)

2点前後の剥片の接合資料で、剥離の実態は不明な部分が多い。平坦打面より剥離している場合が多く、ほぼ同様な剥離手法を適用しているものと推定される。黒色安山岩。

接合資料-30(第87図)

3点よりなる接合資料で、やや縦長の剥片を連続して剥離している。剥片(3)には打面調整が顕著に観察され、剥片(1・2)の打点と剥片(3)の打点は相違している。剥片(1・2)は8号ブロックから、剥片(3)は7号ブロックからそれぞれ出土している。黒色頁岩。

接合資料-4・40・58・64(第88図)、17(第89図)

接合して1枚の剥片の状態に戻る接合資料で、剥片の剥離方向に対し、横位に破損している。2~4点が接合する。裏面側にリングが集中する資料が多い。剥離段階で、横位に折断する場合も多く、意図して折断しているのか断定できない。接合資料-4は1号ブロックから、40は8号ブロックから、58は13号ブロックから、64は15号ブロックから、17は6号ブロックからそれぞれ出土している。黒色安山岩。

接合資料-1 (第88図)、21・5・15・19 (第89図)

接合して1枚の剥片の状態に戻る接合資料で、剥片の剥離方向に対し、縦位に破損している。折れ面のリングは打点から発生していることから、剥離の段階で破損している可能性が高い。接合資料-1・5は1号ブロックから、21・19は6号ブロックから出土している。なお、接合資料-15は5号ブロックと9号ブロックから出土している。黒色安山岩。

接合資料-9 (第89図)

2点からなる接合資料で、剥片端部に近い部分で接合した。剥片端部には微細な使用痕があり、そのため、使用段階で破損したのか、剥離の段階で破損したのか明確ではない。3号ブロックより出土した資料に縄文時代前期の住居から出土した資料が接合した。黒色頁岩。

接合資料-2 (第89図)

接合した1枚の剥片に戻る接合資料で、剥離方向に対し、横位に破損している。1号ブロック出土。頁岩。

接合資料-7 (第88図)

大形の横長剥片に2点の破片が接合した資料で、2号ブロックから出土している。黒色安山岩。

接合資料-24 (第88図)

2点よりなる接合資料で、上面の平坦打面から剥片を剥離している。接合資料の表面に残る剥離方向と剥片の剥離方向は直交している。7号ブロック出土。黒色頁岩。

(b) 接合資料の分布

石器群の同時性を検討するには同一母岩の分布や接合資料の分布を分析する作業が必要であることはいうまでもないことである。本遺跡出土石器群の場合、出土石器全体の約66%が黒色安山岩を、約26%が黒色頁岩を使用している。数枚の剥片が接合している資料が多く、また、原石や石核の擲入状態も不明な資料が多い。そのため、同一母岩の分類も困難であり、さらに、石核・剥片の移動状態は一部のみ分析が可能な状況で、全般的な全体像は分析できずにいる。だが、それでも石器群の同時性や集落構造の分析に向け、一定の見解を得るデータだけは提供すべきだろう。ここでは、図版が繁雑となることを避け、接合資料の分布のみ掲載した。

複数のブロックで接合する資料 (第90・91図)

該当する接合資料28例を確認している。このうち、5例 (接合資料-13・30・42・44・88) が黒色頁岩を素材に使用した資料の接合で、22例 (接合資料-3・4・11・15・18・29・47~49・62・74・75・77~79・86・87・90~93) が黒色安山岩を使用した資料の接合で、このほか、破損した3点の敲石が1例 (接合資料-96) 接合している。移動している剥片の場合、石材を持ち出し、剥離の作業地点を変え、剥離しているのか、良好な形状の剥片のみ移動しているのか、その移動理由が明確でないものが圧倒的に多い。

接合資料-13 5号ブロックに3点・Ad-10GとAi-10Gに各1点が分布している。Ai-10Gに出土した1点は連続して剥離した剥片 (第48図1~3) の1枚 (第48図2) で、出土理由は明確ではない。石核の存在からもわかるように、剥離の主体は5号ブロックに想定されよう。また、第48図4の剥片を剥離する前後に剥離した剥片が接合資料にはなく、空白部分を構成している。そうした状態を総合して判断するなら、剥片2はその空白部分を構成する剥片と共に何等かの理由で移動している可能性があるの

II 旧石器時代の遺構と遺物

かもしれない。(黒色頁岩)

接合資料-30 7号ブロックに1点・8号ブロックに2点が分布している。7号ブロックに出土した剥片は剥片3点の中で、最も最後に剥離した剥片だが、その接合距離は2mしかないため、また、資料点数も不足しているため、剥離工程が相違しているのか、否か、明確には判断できない。(黒色頁岩)

接合資料-42 9号ブロックに7点・10号ブロックに2点が分布している。その接合距離は1.5mと近く、剥片形状も石器素材には適当とはいえないため、意図した移動とはいえない。(黒色頁岩)

接合資料-44 10号ブロックに15点が、9号・17号ブロック・Ag-5Gに1点が、11号ブロックに2点が分布している。接合距離は平均で5m以上あり、意図して移動している可能性が高い。ただ、剥片の形状も良好で、石器に使用した痕跡を残す剥片(第60図11)以外には小形の剥片が多く、何故、その小形剥片が移動しているのか、明確には判断できない。(黒色頁岩)

接合資料-88 16号ブロックに5点・18号ブロックに9点が分布している。接合距離は約10mを測る。この接合資料の場合、その分布理由は明確で、1～7・10・8左半部(第67・68図)が18号ブロックから、9・11・8右半部(第68図)が16号ブロックから出土し、原則的に各々の地点で連続して剥離していることからわかるように、それぞれ剥離作業地点の相違を示している可能性が高い。(黒色頁岩)

接合資料-3 1号ブロックに8点・2号ブロックに1点が分布している。1号ブロックを主体に分布しており、この地点で剥片を剥離していた可能性が高い。2号ブロックに出土した剥片(第46図1)は剥片の表面に礫面を残し、また、剥片形状も良好ではないため、その存在理由は明確ではない。接合資

料には剥片の空白部分が存在する。(黒色安山岩)

接合資料-4 1号・11号ブロックに各1点が分布している。その接合距離は約15mを測る。何等かの理由で遺物が移動している可能性があり、剥片の形状を重視するなら、より大形の剥片(第88図)が移動した可能性が高い。(黒色安山岩)

接合資料-11 4号ブロックに2点・16号ブロックに1点が分布している。その接合距離は約20mを測る。何等かの理由で遺物が移動している可能性が高い。接合資料-11は、この遺跡で剥離したのは確実だが、断定する根拠に欠け、どの地点からどの地点へ剥片が移動したのか判断できない。(黒色安山岩)

接合資料-15 5号・9号ブロックに各1点が分布している。その接合距離は約18mを測り、何等かの理由で遺物が移動している可能性が高い。接合資料は剥離段階で縦位に折断したもののだが、石器に加工しているわけでもなく、現状では、剥片が移動した理由は明確ではない。(黒色安山岩)

接合資料-18 6号ブロックに3点・Ae-11Gに1点が分布している。その接合距離は約10mを測り、最初に剥離した剥片がAe-11Gに出土している。

接合資料-29 7号ブロックに2点・8号ブロックに1点が分布している。その接合距離は3mと近く、意図して剥片を移動したものとはいえない。(黒色安山岩)

接合資料-47 10号ブロックに5点・11号ブロックに4点・Ah-10Gに1点が分布している。6枚の剥片が接合していることからこの遺跡で剥片を剥離したのは確実だが、同一母岩の分布が特定できないため、剥離の作業地点を示す碎片の分布が確定できない。そのため、どの地点で剥離しているのか、明確に判断できない。(黒色安山岩)

4. 石器の接合

接合資料-48 10号ブロックに2点・13号ブロックに1点が分布している。13号ブロックに出土した剥片(第82図2)は幅広い縦長剥片で、10号ブロック出土の剥片とは約7mの距離を隔て接合している。剥片は形状も良好ではなく、何故移動しているのか、明確ではない。(黒色安山岩)

接合資料-62 15号ブロックに3点・17号ブロックに1点が分布している。その接合距離は約12mを測る。17号ブロックに出土した剥片は形状の整う縦長剥片で、ナイフなどの素材剥片にも充分に使用することができる。(黒色安山岩)

接合資料-66 9号・15号ブロックに各1点が分布している。接合資料は礫面が表面を覆い、その形状も良好ではなく、石器の素材には適当とはいえない。そのため、何故移動しているのか、その移動理由は明確ではない。(黒色安山岩)

接合資料-74 17号ブロックに4点・12号ブロックに3点・2号ブロックに1点が分布している。12号ブロック出土の剥片とは約10m、2号ブロック出土の剥片とは約20mの距離を隔て接合している。12号ブロック出土の剥片(第81図6)は横長の剥片で、3点の折断剥片が接合している。このことから、1枚の剥片が12号ブロックに搬入され、何等かの目的で折断した可能性が高い。そこには明確な意図が看取されよう。また、2号ブロックに出土した剥片(第81図5)は横長の剥片で、長い縁辺を保有し、そのまま刃部に使用することができる。剥片の移動距離から推定して、意図して搬入されたものと推察されよう。(黒色安山岩)

接合資料-75 17号ブロックに20点が、6号・20号ブロックに各1点が分布している。17号ブロックで剥片を剥離していたのは確実で、原石を完全に消費している。接合資料には空白部分が存在し、剥片の一部を他の地点に搬出している可能性がある。上述

した2点の剥片も同様に評価することも可能である。(黒色安山岩)

接合資料-77 17号ブロックに4点・2号ブロックに1点が分布している。2号ブロックに出土した剥片(第80図1)は剥離段階で作出する砕片で、約18mの距離を隔て接合している。この砕片は残り4点の剥片と全く違う剥離段階に剥離され、そのことから判断して、剥離作業が地点を違え展開していることを示す可能性が高い。(黒色安山岩)

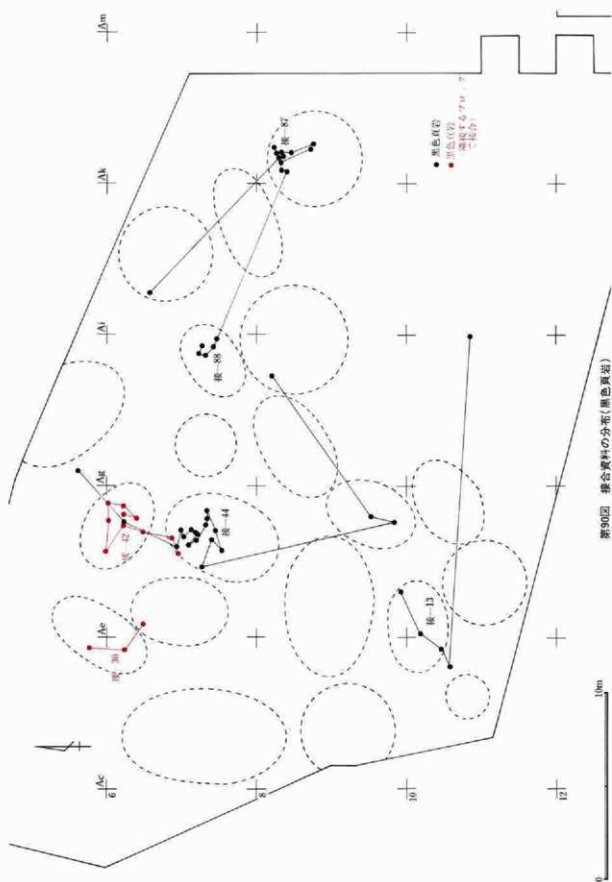
接合資料-78 16号・18号ブロックに各3点が分布している。16号ブロックに石核が出土していること、18号ブロックには形状の良好な縦長剥片2点(第66図2・3)が出土していることから判断して、16号ブロックから18号ブロックへ、剥片を意図的に移動している可能性が高い。(黒色安山岩)

接合資料-79 18号ブロックに2点が、13号・19号ブロックに各1点が分布している。石核の出土地点から推定して、18号ブロックで剥片を剥離している可能性が高い。石核(第53図3)を二分した一方の破片が出土している19号ブロックは別に、約12mの距離を隔て接合する13号・18号ブロックには剥離地点の相違や、剥片の搬入・搬出など、有機的関係が存在している可能性が高い。(黒色安山岩)

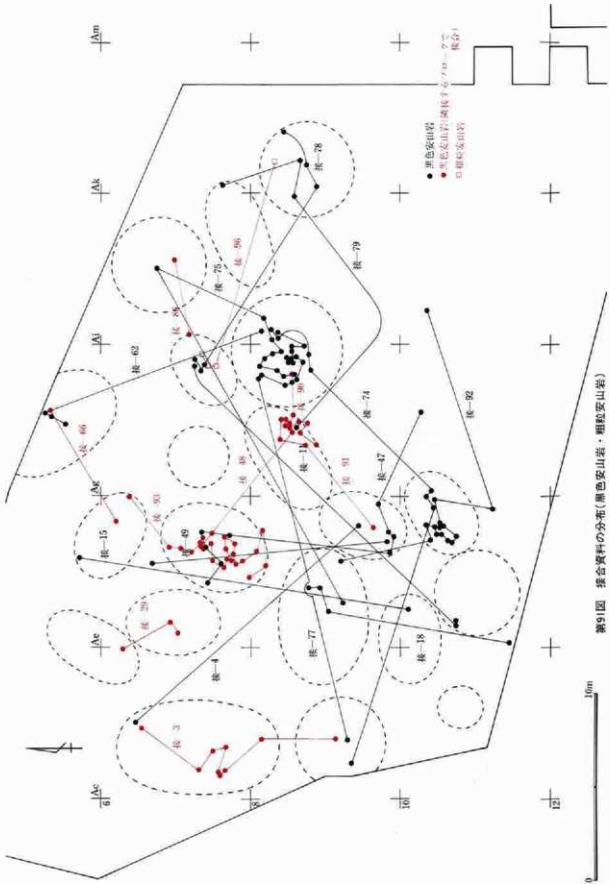
接合資料-86 16号・20号ブロックに各1点が分布している。剥片と砕片の接合資料で、資料点数が不足しているため、剥離地点の相違なのかどうか、剥片の搬入・搬出の関係を示しているのか、明確には評価できない。(黒色安山岩)

接合資料-90 13号ブロックに9点・17号ブロックに1点が分布している。13号ブロックが分布の主体で、この地点で剥片を剥離している。17号ブロック出土の剥片は、約2mの距離を隔て接合しており、そこには明確な意図を看取できない。(黒色安山岩)

II 旧石器時代の遺構と遺物



4. 石圍の接合



II 旧石器時代の遺構と遺物

接合資料-91 13号ブロックに3点・11号ブロックに1点が分布している。その接合距離は約6mを測り、11号ブロックには石核が出土していること、13号ブロックには剥片のみ出土していることから総合して判断するなら、そこには意図した石核の移動が存在している可能性が高い。(黒色安山岩)

接合資料-92 12号ブロックに12点・6号ブロックに1点が分布するほか、Af-11G・Ai-10Gに各1点が分布している。6号ブロック出土の剥片(第72図10)と約5m、Ai-10G出土の剥片と約10mの距離を隔て接合している。剥片の形状は良好ではないため、移動の理由は不明だが、そこには明確な意図を看取することができる。(黒色安山岩)

接合資料-93 10号ブロックに21点・9号ブロックに1点が分布している。10号ブロックを主体に分布し、9号ブロック出土の剥片とも約3mの距離しかなく、ほぼその分布範囲は石器の製作地点を示していると断定されよう。(黒色安山岩)

接合資料-96 4点の破片が接合した敲石で、16号ブロックに3点・18号ブロックに1点が分布する。敲石は使用段階で破損しており、10m以上も離れ、その破片が出土するのは理解できない。単に、石器の搬入・搬出を暗示しているというよりも、それ以外の理由を反映している可能性が高い。(黒色安山岩)

単一のブロックで接合する資料(第92-98図)

単一のブロックで接合する資料は67例を確認している。石材では、黒色安山岩が47例と圧倒的に多く、そのほかには黒色頁岩17例、珪質頁岩・玉髓各1例、粗粒安山岩1例を確認した。同一地点での接合資料が多く存在したのは6号・7号・8号・13号・15号ブロックで、6例以上の接合資料を確認している。また、8号ブロックの場合、11例存在する接合資料全部が黒色安山岩で、13号ブロックの場合にも7例

中6例が黒色頁岩の接合資料であるなどの顕著な相違が存在し、石材は偏在している。そしてさらに、接合資料には剥片2枚からなる接合資料が多い一方、10点以上の接合資料も存在する。石器製作地点の特定が困難な中で、上述の10点以上の接合資料の存在は、石器の製作地点を暗示する、と解釈することが可能である。

10点以上の接合資料には、

7号ブロック、接合資料-26・27

8号ブロック、接合資料-32

17号ブロック、接合資料-72

14号ブロック、接合資料-89

5点以上の接合資料には、

6号ブロック、接合資料-16・20

7号ブロック、接合資料-23

8号ブロック、接合資料-33・35

10号ブロック、接合資料-45

13号ブロック、接合資料-52

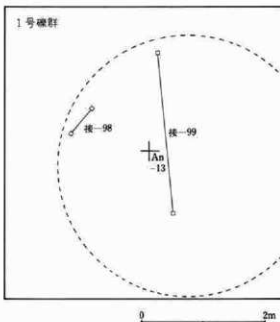
14号ブロック、接合資料-59

15号ブロック、接合資料-63

16号ブロック、接合資料-69

18号ブロック、接合資料-80

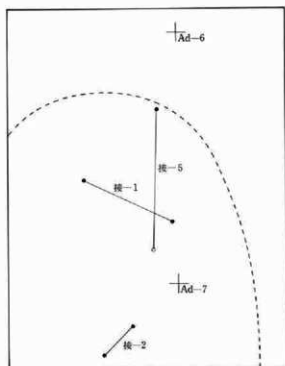
20号ブロック、接合資料-84



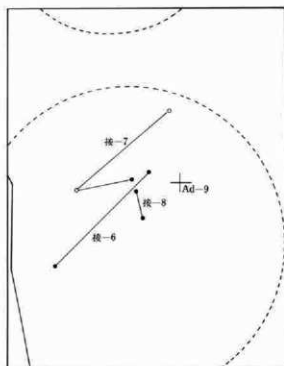
第92図 接合資料の分布(1号確群)

4. 石器の接合

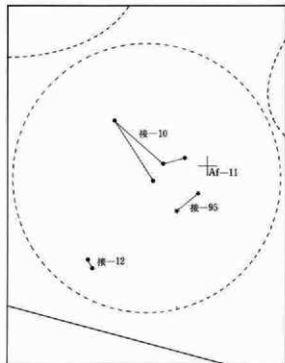
1号ブロック



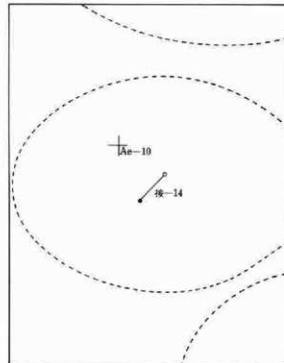
2号ブロック



4号ブロック



5号ブロック

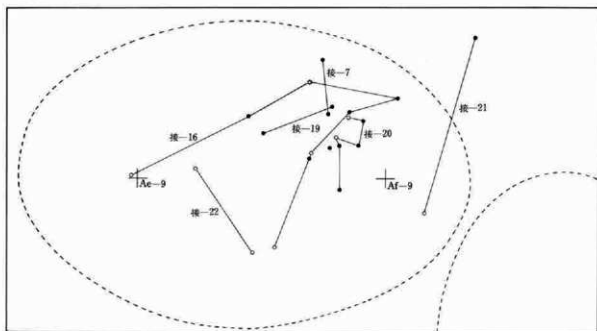


0 2m

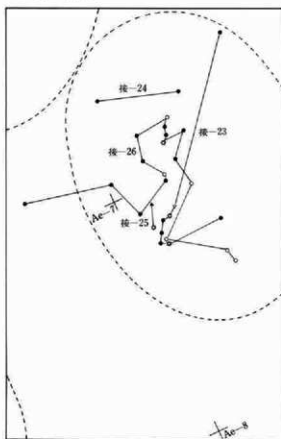
第93図 接合資料の分布(1号・2号・4号・5号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

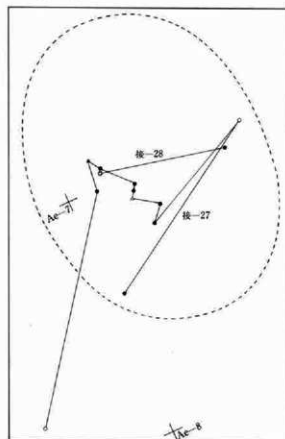
6号ブロック



7号ブロック(1)



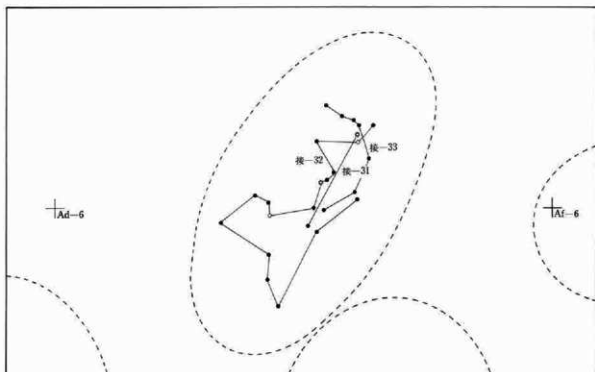
7号ブロック(2)



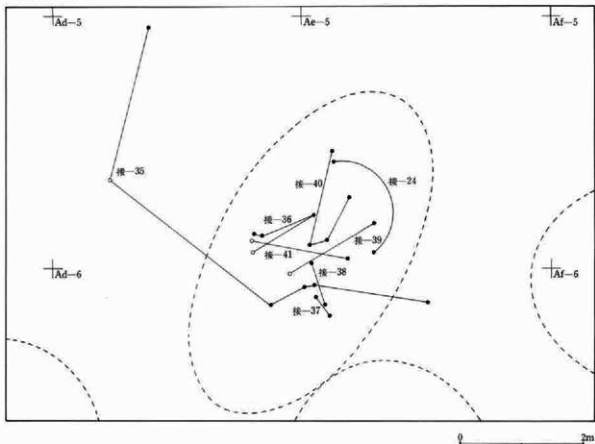
0 2m

第94図 接合資料の分布(6号・7号ブロック)

8号ブロック(1)



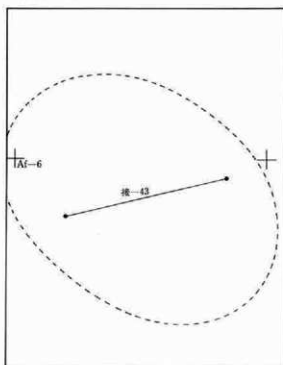
8号ブロック(2)



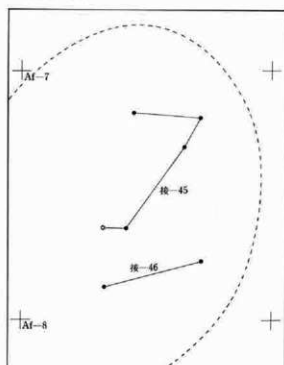
第95図 接合資料の分布(8号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

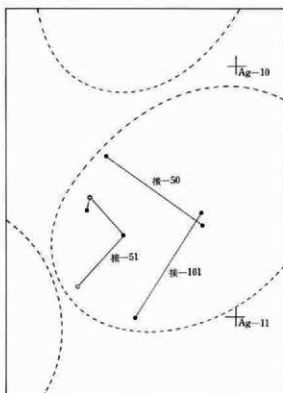
9号ブロック



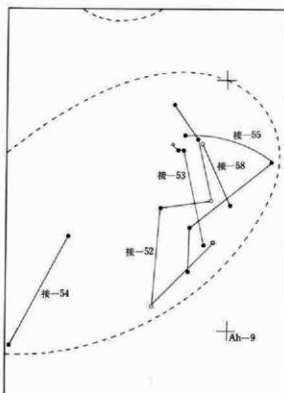
10号ブロック



12号ブロック



13号ブロック

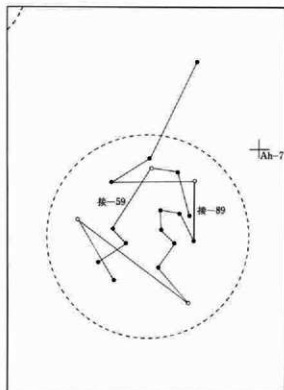


0 2m

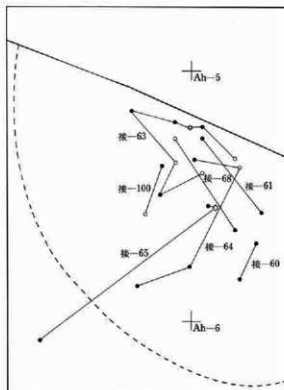
第96図 接合資料の分布(9号・10号・12号・13号ブロック)

4. 石器の接合

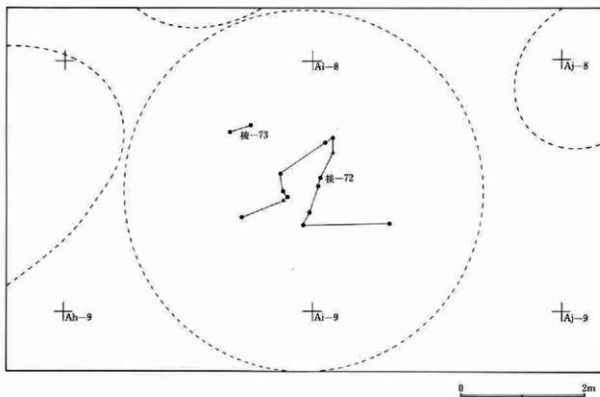
14号ブロック



15号ブロック



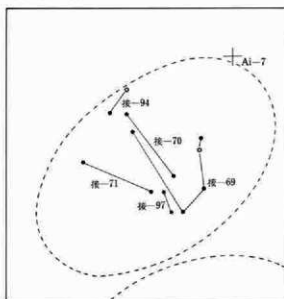
17号ブロック



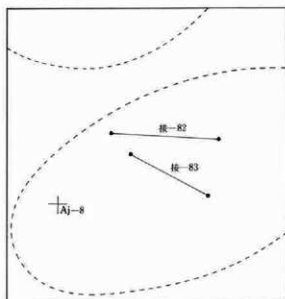
第97図 接合資料の分布(14号・15号・17号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

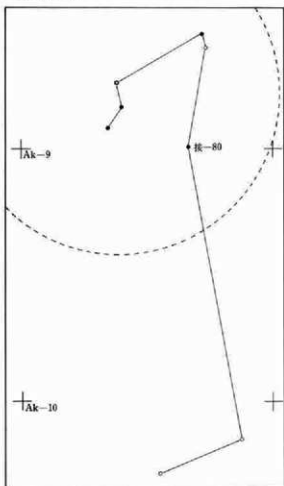
16号ブロック



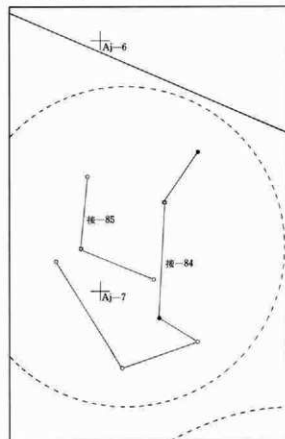
17号ブロック



18号ブロック



20号ブロック



0 2m

第98図 接合資料の分布(16号・17号・18号・20号ブロック)

II 旧石器時代の遺構と遺物

母岩別資料・黒色頁岩-1の分布(第99図)

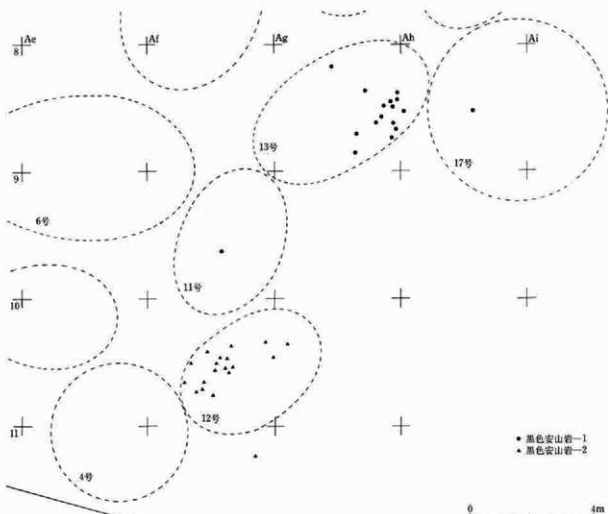
総計3点(石核1点・剝片2点)からなる。石核・剝片が1点づつ18号ブロックに分布するほか、20号ブロックに剝片が分布している。3点とも接合していることから(接合資料-87、第75図)、確実に同一母岩に分類できよう。こうした状態が剝片剝離地点と素材剝片の移動というような関係を反映した結果なのかどうか、また、上述した2点の剝片以外に、剝離している3枚の剝片は遺跡で剝離しているのか、否か、現状では判断材料が不足しているため、判断できない。

母岩別資料・黒色頁岩-2の分布(第99図)

総計14点(石核3点・剝片9点・砕片2点)が、

16号ブロックに6点、18号ブロックに9点分布している。14点とも接合しており(接合資料-88)、確実に同一母岩に分類できよう。16号ブロックに出土した5点は剝離工程の後半(第68図9・11・8右半部)に、18号ブロックに出土した8点は剝離工程の前半(第67・68図1〜7・10・8左半部)に、それぞれ剝離しており、かつ、原石を分割した状態にもないことから、剝離作業の時間差を示す可能性が高い。

なお、接合状態から想定するなら、既に、原石の3割程度を消費している。水田の開削で包含層が削平され、また、調査範囲が限定され、単位の石器群の全貌が不明確であり、原石を搬入しているのか、ある程度消費してから原石を搬入しているのか、現状では判断できない。



第100図 母岩別資料の分布(黒色安山岩-1・2)

母岩別資料・黒色安山岩-1(第100図)

総計14点の石器(石核1点・剥片8点・碎片5点)からなる。接合資料-90・91を主体に、数点の剥片から構成され、90・91の2例とも13ブロックの東側に分布している。縦糸にも似た目の密な流状構造を持つ石材の特徴を有す。接合資料2例の形状から推定して、大形の円礫を素材に使用しており、接合資料は礫表皮に近い部分であることは確実である。発掘調査ではその中心部分は出土していないことになる。

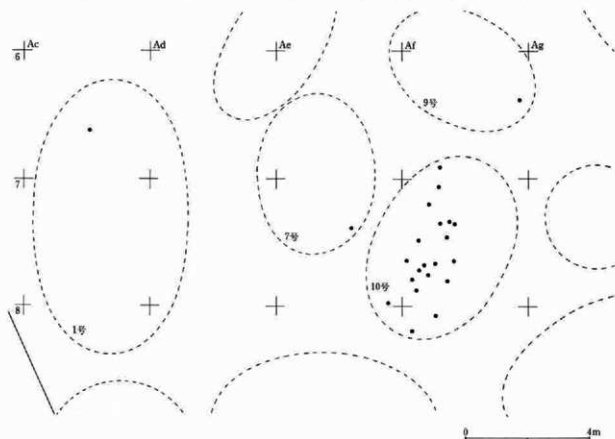
接合資料-90は、3枚の剥片が13号ブロックに、1枚の剥片(第70図3)が17号ブロックに出土した。接合資料の分布域も狭く、また、剥片の形状も良好とはいえない剥片(3)が、17号ブロックに出土する理由は明確に判断できない。一方、接合資料-91は、剥片や碎片が13号ブロックに、石核が11号ブロックに出土している。隣接するブロックで接合するとはいえ、5m以上距離を隔て分布していること、石

核と剥片・碎片というように、明確に器種レベルで相違していることから、石核を意図して搬出している可能性が指摘されよう。

母岩別資料・黒色安山岩-2(第100図)

総計22点の石器(石核3点・剥片14点・碎片5点)からなる。接合資料-92を主体に、数点の剥片や碎片から構成され、12号ブロックを中心に分布する。このほかにも、同一の母岩に分類可能な剥片が6号ブロックやAf-11G・Ai-10Gに1点づつ分布している。石器表面には、不純物が離脱した痕跡が無数に観察され、こうした特徴から母岩を分類した。接合資料は原石を四分した状態まで復元され、剥離作業自体は完結している。

12号ブロックに剥片剥離の主体があることは確実だが、6号ブロック(第72図10)やAi-10Gに出土した剥片(第71図1)は形状も良好ではなく、上述の剥片が分布する理由は明確ではない。



第101図 母岩別資料の分布(黒色安山岩-3)

II 旧石器時代の遺構と遺物

母岩別資料・黒色安山岩-3(第101図)

総計24点の石器(剥片19点・砕片5点)からなり、接合資料-93が主体で、母岩を構成している。母岩は10号ブロックを主体に分布するほか、1号・7号・9号ブロックに各1点が分布している。このうち、9号ブロックに出土した剥片(第73図1)には接合関係を確認している。母岩別資料・黒色安山岩-1と比較して、やや粗い流状構造を有す。

母岩は10号ブロックに集中して分布するとはいえ、ブロックの全体に散漫に分布している。何等かの要因で石器分布が乱れ、本来的な在り方とは相違している。9号ブロックから出土した剥片も同様な理由で解釈できるものと推察している。1号ブロックや7号ブロックから出土した砕片が出土した理由は、意図して移動したともいえないため、明確にはその理由を判断できない。

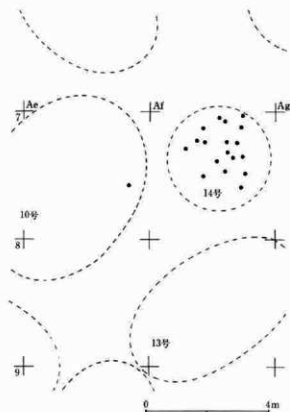
母岩別資料・珪質頁岩-1(第102図)

総計21点の石器(剥片14点・砕片7点)からなる。接合資料-89を主体に、数点の剥片や砕片が母岩を構成している。14号ブロックを主体に分布するほか、10号ブロックに1点・Ag-6・7Gに各1点が分布している。この母岩は緑色を呈す特徴を有し、確実に分類することができた。

10号ブロックやグリッドから出土した剥片は剥片形状も良好ではなく、剥片が移動する背景は不明確である。接合状態などから想定して、この母岩は原石を二分し、接合した剥片を剥離したものと判断されよう。原石を二分した一方の石核や上述の接合資料は調査区内には検出されていない。

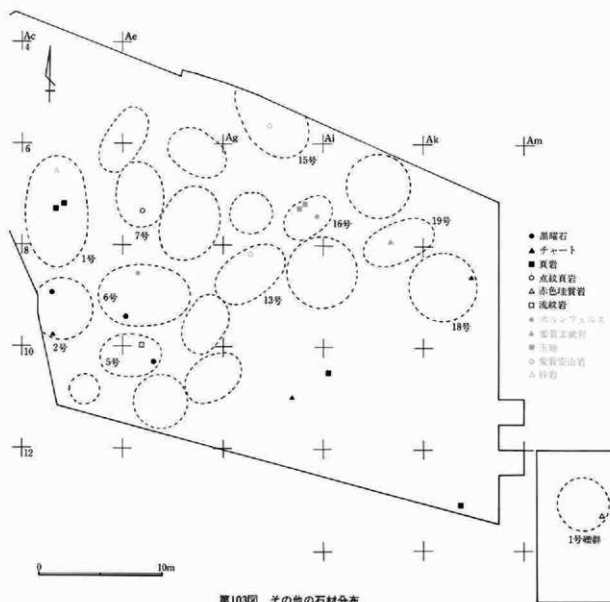
その他の石材の分布(第103図)

上述した母岩の他にも、少量だが、頁岩や玉髓・黒曜石などが出土している。その分布状態(第103図)は特定の地点に集中するわけではなく、明確に解釈できない。頁岩は1号ブロックに2点、Ai-10G・Ak-13Gに各1点が出土している。1号ブロックの2点は確実に同一母岩(接合資料-2)だが、他



第102図 母岩別資料の分布(珪質頁岩)

の2点は1点が剥片・1点が砕片で、単独に出土している。玉髓は2点が16号ブロックから出土している。接合関係から確実に同一母岩であることがわかる。黒曜石は2号・5号・6号ブロックに出土している。石材の特徴は3点とも若干相違するため、この地点以外の場所から搬入している可能性が高い。流紋岩は1点が5号ブロックから出土している。完成した石器であることや同一母岩が出土していないことから、確実に他の地点から搬入したものと見える。同様に1号礫群から出土した赤色珪質岩も石器が完成状態を示し、同一の母岩が出土していないことから、他の地点で製作した石器を搬入している可能性が高い。チャートは2号・18号ブロックに各1点が、Ag-9G・Ah-10Gに各1点が出土している。確実に4点とも母岩が違い、搬入している可能性が高い。このほか、点紋頁岩が6号・7号・16号ブロックより1点づつ出土している。3点とも類似した石材の特徴を示し、同一母岩である可能性が高い。



第103図 その他の石材分布

6. 小 結

(1) 出土石器

出土石器の一部には二層（V層とVII層）にピークを持ち石器が出土する地点や、試掘の段階で包含層上半部を遺失した地点が存在していた。また、縄文時代の土器や石器に混在して、男女倉タイプの彫器（第124図2）や、所属時期の特定できないナイフ（第124図1）も存在していたことから出土した石器全部が同時に存在したのか否か、文化層（石器群）が重複しているのか否か、を接合作業や母岩の分類を中心に検討した。その結果、V層出土の石器とVII層出土の石器に接合関係を確認したほか、石器はV層からVII層まで（とりわけ、VI層に安定して出土するなど）、ほぼ同様な状態で石器が出土していること、また、複数の地点同士で接合する資料が多数存在すること、を確認した。以上の状況を総合して判断するなら、ほぼ同時存在した石器群であり、また、VI層上位はATの降灰層準にも相当することから出土層位を重視するなら、AT降灰以前の石器群である、と判断されよう。

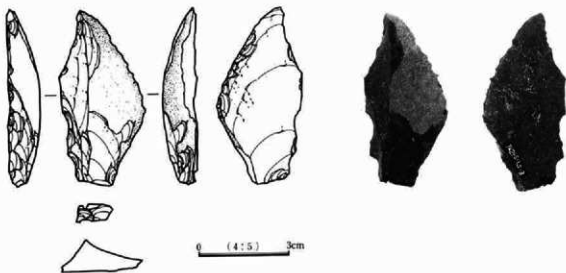
A区出土の石器には、形態の違う2種類のナイフを主体に、若干の削器、楔形石器や加工痕・使用痕ある剥片が組成している。調査区外にも確実に石器

分布が延び、また、住居（縄文前期5号住居）を構築した段階で旧石器の包含層を破壊していることから器種組成の全容も不明確であり、未検出の別器種が組成する可能性も否定できない。実際、5号住居の埋没土中には「暗色帯」から出土した剥片と接合した資料（接合資料-9、第89図）や、石器の形状や加工状態から判断してこの段階の石器に組成する可能性の強いナイフ（第104図）がある。ただ、「暗色帯」から出土した石器には、この石器（第104図）と同一の母岩は存在せず、現状で伴関係の有無を断定するのは困難でもある。石器組成を分析するには以上の制約条件を考慮すべきことを指摘しておく。

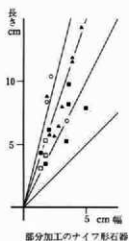
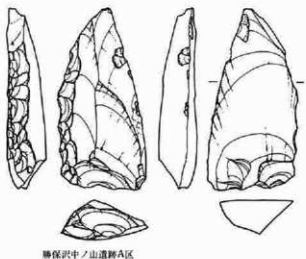
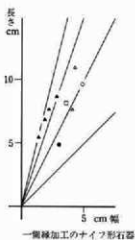
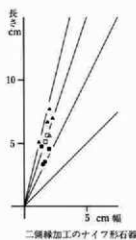
以上の状況を考慮してなお、その組成は単純で、この段階特有の器種組成を示している。なかでも、6点のナイフ（第24図1～6）は特徴的で、石器群を編年的に位置づけ、その変遷過程を分析していく上でも良好な石器群である、と判断している。6点のナイフは、素材剥片の用い方や石器形状の相違から大別2種に分類されよう。

ナイフ形石器A群 縦長剥片を縦位使用し、側縁に調整加工を施し、石器を作出する一群。（第24図1～3・6）

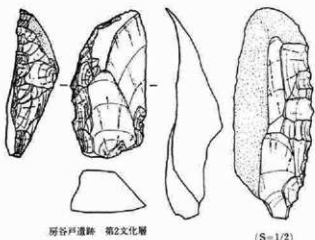
ナイフ形石器B群 剥片を折断し、側縁に調整加工を施し、台形状・切出状を呈す石器を作出する一



第104図 5号住居跡出土のナイフ形石器



- 地下八幡
- 後田
- 善上
- 勝保沢中ノ山
- 房谷戸
- 大竹



第105図 ナイフ形石器(A群)の長幅比

第106図 大形剥片素材のナイフ形石器

群。(第24図4・5)

ナイフ形石器のA群には、二側縁を加工するもの(a類)と一側縁を加工するもの(b類)とが存在している。a類のナイフの場合、3点とも刃部を右側縁・上半部で作出しており、石器基部と素材剥片の位置関係は固定している。3点とも裏面から調整加工を施し、素材剥片の打面を除去している。ATの降灰以前の県内遺跡から出土した資料に比べ、小形で、類例は概して少ない。長さ3cm~5cm・幅約1.5cmを測る(第105図)。一方、b類に分類可能な資料は、1点のみ出土している。資料点数が限定され、そのため、この段階に普遍的・一般的に存在したの

か、不明確である。左側縁・打面に、表面側から調整加工して石器を作出しており、その加工状態はa類に比べ、大きく異なる。県内のAT降灰以前の出土資料には、二側縁加工のナイフに比べ、一側縁加工のナイフが、より大形の剥片(第106図)を選択する傾向が指摘され、なかには10cmを越す大形剥片を使用している。善上遺跡・大竹遺跡(月夜野町)、房谷戸遺跡(北橋村)、勝保沢中ノ山遺跡A区(赤城村)など、VII層段階・その直前段階の遺跡ではその傾向が強く、特に、房谷戸や勝保沢中ノ山では大形・肉厚の剥片を素材に用い、側縁を粗く加工した石器が出土しており、地域性の強い石器であることを以

II 旧石器時代の遺構と遺物

前指摘した(岩崎 1988)。本書で、加工痕ある剥片に分類した資料には、上述した大形の剥片を素材に側縁を加工した資料(第26図4)が存在しており、注意しておくべきなのかもしれない。

ナイフ形石器のB群には、器体長軸と刃部が直交し、台形に近い平面形状を呈すa類と、器体長軸と刃部が斜交し、切出に近い平面形状を呈すb類が出土している。a類・b類とも各1点が出土したのにとどまるため、その実態は不明な点が多い。a類に分類した資料は幅広の剥片を素材に用い、剥片端部に刃部を設定している。普通、この種の石器は剥片を折断して側縁に刃部を設定する場合が多く、異質ではある。左側縁は折断したままだが、右側縁を裏面から加工して石器を作出している。一方、b類に分類した資料は台形に近い形状の剥片を素材に用い、左右の側縁を折断して、石器を作出している。この資料でも左側縁は折断したままだが、右側縁を折断して、この部分を打面に表面に浅い平坦加工を加え、石器を作出している。本来こうした浅い平坦剥離を施す石器の作出手法は古い段階の手法だが、この石器が出土した2号ブロックには、12号ブロックや17号ブロックと接合関係を有し、また、剥片剥離の在り方も類似しており、石器の混入は想定できても、ブロック自体は分離できない。

このほか、石器群の特徴的な石器に楔形石器1点(第25図2)が出土している。この石器には2点の剥片が接合(第75図)しており、その製作過程や機能を知る上で重要な資料になるものと判断している。即ち、①幅広の剥片を剥離→②素材剥片の打面に平行する平坦部分を打面に対向する剥片端部に作出→③上下両端に対向する剥離が形成→④石器の右側を破損→⑤大形の破損資料の方を使用して、上下両端に対向する剥離を形成→⑥放棄、の順が追跡できよう。要は、素材剥片を剥離してから、常に、断面が紡錘形状となるように位置関係が配慮され、石器を製作していくのである。また、この資料は遺跡の内部で製作され、その製作途上で放棄している。以上の状態から判断して、使用以前の段階で石器の

上下両端を微細に剥離し、この段階で楔形石器の形状作出は概ね完了しているのである。

(2) 剥片剥離

96例の接合資料を確認した。平均4.8枚の剥片が接合しており、剥片剥離の状態を良く示している。接合資料を詳細に観察した結果、実に多様性に富む剥離状態を示していた。即ち、目的剥片の剥離システムとは別に、打撃面や作業面の状態など様々な形状を示す石核に対し、多種多様に対処して剥離していく状況を示していたのである。こうした実態は数枚の接合資料の観察では理解できない場合の方が多い。そのため、ここでは接合点数の多い資料を中心に、剥片剥離の様相を検討していくことにしたい。

接合資料を概観して、まず、最も顕著な剥片剥離の特徴を指摘するならば、頻繁な打面転移と板状剥片を石核の素材に多用する2点が指摘できよう。接合資料は石核素材の用い方の相違で二分され、原石を直接剥離していく一群(原石を分割する資料を含む)と、大形剥片を石核素材に用い、剥離していく一群が存在している。これまで、前者の一群に該当する接合資料・後者の一群に該当する接合資料を各13例確認しており、ほぼ均質に存在していた。

前者の一群は、原石から直接剥離する資料(接合資料-75・88など)と、原石を分割剥離していく資料(接合資料-32・44・92・93など)からなる。それぞれ接合資料には、剥離手順や剥離手法に類似点と相違点が共存しており、もう一度整理して概観しておきたい。

接合資料-75の場合、礫面から打撃を加え、平坦な打面を作出することから剥離が開始され、以後、90°の打面転移を行い、剥片剥離が展開していく。剥離の初期段階では同一の打面から連続して剥片を剥離している。以後、極端に剥離枚数が減少して、2枚程度の剥片剥離が続き、最終段階では打面転移して1枚づつ剥離していく。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致しており、打撃面と

作業面を固定した状態で剥片剥離が進行していく。そのため、原石は左隅上から右隅下へと、作業面の「高さ」を徐々に減少していく。最終的な石核形状は直方体に近く、裏面や石核下面に礫面を残す。顕著な打面調整や頭部調整は確認できない。接合資料-13・16・23・26など、同様な剥離状態を示す複数の接合資料が存在している。

接合資料-88の場合、接合資料-75と同様に礫面から打撃を加え、平坦な打面を作ることから剥離を開始する。接合状態での剥離の「切り合い」関係から、剥離の初期には連続した剥離作業が予想され、また、途中から剥片を1枚剥離する度に、打撃面や作業面を移動して剥離していた。やや扁平な原石を使用しており、初期の剥離段階では原石の小口部分で連続して剥片を剥離している。同様な状態は第67図5の剥片を剥離する段階まで続く。これ以後の剥離は確実に90°打面を転移して剥片を剥離しており、打面を固定せず、剥離面を打面に、打面を作業面に、頻りに打面を移動して剥離が進行していく。原石は一方の小口部分から一方の小口部分へと徐々に減少^{註2}していき、接合資料-75の原石の減少方向とは違う状態を示していた。剥離した剥片にはより大形の剥片が多く、このうち、2点の剥片を石核に転用している。剥離段階の初期に剥離した剥片の場合、その背面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向に一致するのに対し、後から剥離した剥片の場合には剥片の剥離方向に一致する剥離と、90°方向の違う剥離の両者が背面には存在していた。こうした背面構成の在り方や、交互剥離に似た剥離手法から90°打面転移する剥離手法へ移行すること、大形剥片を石核に転用する在り方は、接合資料-75と大きく異なり、特徴的である。打面調整や頭部調整は確認できない。なお、この接合資料の場合、原石の消費状態は、原石(石核)の表裏両面を交互に剥離していく剥離手法に類似していた。こうした状態を示す背景にはより原石が扁平であることが反映している可能性や、節理が発達している原石の性状に原因している可能性もある。ただ、出土資料には同様な形状の扁平礫

を素材に小口部分から剥片を剥離していく類例(接合資料-87、第75図)も存在していることから、多分に、扁平な原石に対応した剥片剥離の在り方を反映した石器群が持つ多様な剥離方法の一端を暗示している可能性が強い。

次に、原石を分割して剥離していく接合資料の場合を概観しておきたい。接合資料-32の場合、原石を二分して広い平坦面を作出し、石核の素材を獲得している。まず、剥離作業は石核の両端で開始され、礫面の除去を目的に剥片を剥離してから90°打面を転移して剥離していく。この剥離で石核両端に平坦な分割面に似た剥離面が形成され、この両端部分を打面に対向する剥離を行う。この段階の石核形状は裏面に礫面を残し、平面・長方形を呈している。接合資料-44の場合、同様に原石を二分して、石核素材を獲得している。剥離作業は分割して得た平坦な打面の側面から開始され、徐々に小口部分へ移動していく。この段階の剥離が終了して、90°打面を転移して剥離していく。打面転移は打撃面と作業面を交互に入れ換え、1度の転移で2枚程度の剥片を剥離して作業を終了する。そのため、石核は一方の上端から一方の下端へと徐々に剥離面の「高さ」を減じていく。この接合資料2例には石核の獲得方法と打面調整・頭部調整の欠落が共通して指摘され、また、一方では剥片の剥離手順や最終石核形状の顕著な相違が指摘されよう。即ち、接合資料-32には、打撃面と作業面を交互に入れ換え剥離していく段階と、石核両端に打面を固定して両設の打面から剥片を剥離していく段階が共存しており、それぞれ前者の剥離段階は石核調整段階、後者の剥離段階は目的剥片の剥離段階に相当する可能性もある。接合資料-44にはこうした剥離段階の相違は顕著ではなく、最初から剥片の剥離を目的に、90°打面転移を行い作業が展開する。当然、最終石核形状も接合資料-32と違い、接合資料-75に類似してくる。接合資料-32は断面三角形を呈す剥片が、接合資料-44では断面四角形を呈す剥片が剥離され、より薄い剥片を剥離する傾向が指摘されよう。このほかにも、複

II 旧石器時代の遺構と遺物

数の剥離作業面を持つ多面体石核(第35図2)や、礫を分割して上面の礫面から連続して剥片剥離する^{註3}資料(接合資料-31)も存在している。

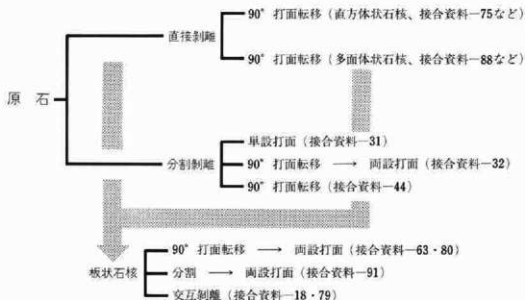
一方、大形の剥片を石核素材に剥片を剥離していく資料には、接合資料-91・80・79・63・18・88・51など10例以上の資料を確認している。接合資料-91は裏面に礫面を残す大形剥片を素材に、更に分割して石核素材とし、石核の上下両端の打面から剥片を剥離する。接合資料-80や接合資料-63は、裏面に礫面を残す大形剥片を石核素材に用い、まず石核両端を剥離していき、この剥離で打面を作出して、左右の両打面や上下両端の礫面から剥離を行う。石核素材の第1次剥離面を作業面に固定し、剥離の主体を展開する。こうした状態は接合資料-63でも同様だが、この接合資料では剥離が周辺の礫面にも及び、剥離のバラツキが存在している。このほか、接合資料-79や接合資料-18は、大形の剥片を石核素材に用い、表裏両面で剥片を剥離している。2例とも大形剥片の打面付近で剥離しているほか、側縁や剥片端部で剥片を剥離している。このほか原石を分割した石核素材との区分は曖昧だが、より大形の剥片を石核に使用している可能性の高い接合資料2例(72・45)を確認した。2例とも礫面を残し、頻繁に打面を転移している。接合資料-45は、剥離が展開していく過程で、更に、分割して直方体状に石核形状を整え、石核の上下両端や裏面で剥離している。接合資料-72では打撃面と剥離面を交互に入れ換え、剥片を剥離している。この接合資料2例は直方体状の石核形状を指向する点で類似する一方、分割の有無や打面設定の在り方、剥離していく剥片形状など顕著な相違が指摘され、相違点が多い。剥片素材の石核は礫面を一方に残す場合が圧倒的に多く、石核素材の形状は良く類似している。しかし、その一方では打面転移の在り方など、その剥離手法は多様性に富む。

以上、剥片剥離の実態を二分して整理してきた。普通、剥片剥離は一定形状の剥片剥離を目的に展開する。そこには、一定の確立した剥離工程(手法)

が存在するはずだが、実際には多様性に富む接合資料を前に、その実態は解明できない点が多い。分析は作出する目的剥片の形状や作出器種との関係を含め、体系づけ理解していくべきだが、出土資料の分析が不十分であり、ここでは剥離工程の復元を中心に整理しておきたい。

まず、剥片剥離を開始する段階の対応の仕方には、原石を直接剥離していく方法と、分割してから剥離していく方法とが存在していた。接合資料-75・88が前者の一群に、接合資料-32・44が後者の一群に相当する。以前、報告した勝保沢中ノ山遺跡・A区出土資料には、原石を直接剥離する接合資料と分割した石核素材が共存していた。ここでは、分割の有無に関係なく石核素材は近似した形状を呈し、一定規模の石核素材を獲得するため、原石を分割していたのに対し、この遺跡では原石の大小に関係なく原石を分割している。こうした剥離の対応方法や在り方の相違は集団差や石器群の段階差ということに限定せず、目的剥片の形状や原石の形状とが密接に関連した、石器製作者が持つ技術上の許容範囲の中で現象する相違をも包括するもの、と評価しておきたい。^{註4}

次に、上述の接合資料に限定して、その剥離手順の対応の仕方を再度確認していきたい。原石を直接剥離していく一群では打撃面と作業面を交互に入れ換え、90°打面転移して剥離する接合資料(75)と、剥離の初期段階では接合資料-75と同様に剥離していく一方、途中から剥片を剥離する都度、打面を固定せず、打面転移を繰り返す接合資料(88)とが存在した。接合資料-75は、楕円形状を呈す原石の小口から小口へ斜向して剥離していくのに対し、接合資料-88は、その剥離手順や石核形状の様相が若干相違しており、原石の長軸に平行して、原石を消費していた。より円礫に近い原石を石核の素材に選択しており、そのため剥離手順が相違している可能性が強い。一方、原石を分割して剥離する一群の場合、分割してから石核の両端に打面を作出し、そこから分割面に作業面を固定して剥離していく資料(32)



第107図 剥片剥離の工程概念

と、打撃面と作業面を交互に入れ換え、90°打面を転移して剥離していく資料(44)が存在していた。石核の消費状況は、後者が石核の一端から一端へと斜向するのに対し、前者は分割面を薄く剥離していく。こうした石核の消費状況の相違は、上述の剥離作業の在り方や剥片の形状を確実に左右している。ただ、出土資料には以上の事実を反映・規定した作出器種との対応関係が明確ではなく、また、作出剥片の形状は打点の選択の仕方でも充分対応できるものと判断され、なぜ剥離手法の違う剥離が存在しているのか不明瞭である。大形剥片を石核素材に使用する一群には大別して、両端に打面を作出して剥離していく一群(接合資料-63・80)と、表裏両面で交互に剥離していく一群(18・79)が存在した。石核の裏面に残面を残す場合が多い前者の石核素材には平坦打面や原石を分割する際に作出する大形の剥片を、後者の石核素材には剥離の途中で作出する大形の剥片を、それぞれ使用・選択している。量的にはより前者の石核素材が多く、剥片剥離の在り方は原石から直接剥離していく一群や、分割してから剥離していく一群の剥離に類似している。

以上、剥片剥離の実態を整理してみた(第107図)。そこには、作業面を打面に、打面を作業面に、その両者の関係を固定せず、頻繁に打面転移を繰り返す接合資料や、両端に打面を設定して剥片を剥離していく接合資料など、多様性に富む剥離実態を示していた。だが、一方では、90°の打面転移を基本に展開する剥離と同一打面に固定した剥離の連続性の欠如が共通して指摘され、ある意味では組織的・体系的に剥片を剥離していた。とりわけ、板状・大形剥片を石核に剥片を剥離していく場合にも、原石を直接剥離する場合や、分割して剥離していく場合と同様な剥離手法さえ採用しており、強く剥片剥離を規定していた。全体に、剥片剥離は縦長剥片を意識して剥離しており、その剥離実態は石核素材の獲得からその消費方法まで、一定のシステムが完成しているとも評価され、A区出土の接合資料には多様な石核形状を越え共通する剥片剥離全体を貫く、普遍性が存在する、と換言できよう。

(3) 出土石器の位置づけ

A区出土の石器は素材剥片の用い方や石器形状の

II 旧石器時代の遺構と遺物

違う2種類のナイフ(A群・B群)を主体に組成していた。「暗色帯」を主体に出土していることからAT降灰以前の石器群であり、その組成状態や形態の特徴から、後半段階の石器群である可能性が強い、と判断している。一方、これまで出土している県内資料には後田遺跡(VII層段階)を前後する段階の資料が不足しており、そのため石器群の段階的な変質の実態は不明瞭である。即ち、「石刃技法」に立脚した石器製作が完成する前後の石器製作と剥片剥離の関係や、その変質の実態を理解するには県内資料だけでは極めて難しいのである。出土した接合資料を見る限り、接合資料にはIX層段階に多い多様性に富む剥離手法を含んでおり、単に多様な剥離工程を技術基盤に成立していたというような理解だけではその実態を充分理解しているとはいえない。多様な石核形状に対し、剥離は集団が持つ技術を駆使して展開していく、という特殊性をも含んでおり、石核形状は確実に剥片剥離や剥片形状を左右するということが出土資料は明確に示しているからでもある。多様性に富む剥片剥離の実態を理解するには、原石に復元が可能な接合資料を検討した上で、上述した剥離の普遍性と特殊性を分離して、把握していくべきであろう。

A区出土の石器は複数の地点で接合関係を有し、また、ほぼ同様な石器の出土状態を示していたことから、同時存在した可能性が強い。石器組成は素材剥片の用い方や形状の違う2種類のナイフを主体に組成しており、なかでも二側縁加工の小形ナイフは特徴的である。県内出土の石器には類例は概して少なく、房谷戸遺跡(第2文化層)出土の小形ナイフや、大竹遺跡出土の小形ナイフが類似しているのとどまる。だが、その基部形態(打面除去の有無)や加工部位は相違しており、厳密な意味では類似しているとはいえない。唯一、厚手の大形剥片の側縁を粗く加工したナイフが、共通して存在しているのにすぎない。石器群を編年的に評価するには、本来の器種組成など不明な点も多く、判断に苦慮している。それでも、小形・二側縁加工のナイフを主体に

組成するということは確実で、この小形ナイフの存在を重視するならば、A区出土の石器はAT降灰直前段階、武蔵野台地・VI層段階に相当する石器群に位置づけられよう。

一般に、VI層段階では「石刃技法」に立脚した石器製作の完成も指摘され(角張・藤波 1986)、石器製作は縦長剥片の生産と深く結び付いている。また、VII層段階から縦長剥片を主体に剥離して石器素材に選択していることから、段階的・発展的な石器群の変遷や変質が容易に辿れ、その評価は定着している。VI層段階の代表的な石器群である、鈴木遺跡や寺尾遺跡では縦長剥片を連続剥離する点で共通しており、この剥離手法は素材剥片作出の主要部分を占め、安定している。半面、打面調整・頭部調整の在り方は一致せず、鈴木遺跡では打面調整が、寺尾遺跡では頭部調整が顕著で、格差は極めて大きい。そうした剥片剥離の様相の相違は地域に偏る傾向が指摘され、その技術基盤は一致するとはいえない状況を示している。

一方、堀下八幡遺跡出土の接合資料には、明確な打面再生や打面調整・頭部調整は存在せず、頻繁に打面転移して剥離が展開していた。そこには多様な剥離手法が存在しており、その様相はIX層段階の伝統を残しているかのようでもある。ただ、県内出土のIX層段階に相当する石器群に比べ、板状剥片石核を素材に剥離していく資料の組成頻度(特に、板状剥片石核の表裏両面を交互に剥離していく接合資料の組成する頻度)は低く、より後出の様相を呈している。鈴木遺跡や寺尾遺跡の剥片剥離の在り方に比較した場合には、石核調整に顕著な相違が存在する一方、打面転移の在り方(打撃面と作業面の関係)や数枚の剥片を連続して剥離していることなど、寺尾遺跡の珪岩を石核素材に使用した剥片剥離技術の特徴に良く一致する。また、VII層段階の石器群であることが確実な後田遺跡では、単設や同設の打面から縦長の剥片を剥離していく場合が圧倒的に多く、実際そうした状態を示す接合資料が多数存在しており、板状剥片素材の石核は客体的であり、概して少

ない。全体に剥片の連続剥離が顕著で、より強く縦長の剥片を意識して剥離している。仮に、堀下八幡遺跡・A区出土石器を後田遺跡に後出するものとし、両者を比較した場合、堀下八幡遺跡では剥片を連続剥離せず、頻繁に打面転移すること、平坦に打面を得る際に、作出する大形剥片を石核素材に転用する頻度が高く、その剥離形態は後田遺跡の剥片剥離と相違している。石器群が発展的に変遷する武蔵野台地や相模野台地の様相に比べ、その様相は若干相違しているということができよう。以上、VI層・VII層段階の代表的な石器群を中心に、剥片剥離の在り方を検討した結果、堀下八幡遺跡出土の接合資料には板状剥片石核を多用するなどIX層段階の伝統を残す可能性も全く否定できない状況を示していた。とはいえ、明確な層位的出土例ではないこと、剥片剥離が石核形状に左右され、剥離の普遍性と特殊性が同居する可能性のあることを考慮するなら、VII層段階以後の剥片剥離システムの変質、というような視点で分析していくべきなのかもしれない。当然、そこには周辺地域との関連も想定され、在来の剥離システムが多様に反応して、一律には比較できない個差が生じている可能性も強い。現状では、分析も充分ではなく、また、県内資料も不足しているためこれ以上の論及は困難だが、横長剥片を素材に石器を製作する場合（岩宿II段階）にも、石核素材の獲得方法を一部変更するだけでも充分対応できるものと考えている。

本論では、円礫や角礫など原石形状や石核形状が違う場合、剥離の対応状態が相違しているのか、否か、を中心に検討してきた。その結果、石核形状を越え、共通する剥離の在り方や、組織的・体系的な剥片剥離システムの存在が指摘され、今後分析していく上で、有効な検討材料を提供することができたものと考えている。県内出土の資料には、VI層段階に相当する資料は明確ではなく、また、同一遺跡での層位的な出土例も期待できないため、地味な作業だが、接合資料や同一母岩の認識を深め、剥離の本質を把握すべきである。膨大な資料が蓄積している

現状では、剥片剥離の実態を把握するにはその都度詳細に検討していくしか分析は進展しないだろう。個別遺跡出土資料の検討を地道に積み上げ、剥離を系統的に把握する視点から検討すべきことを強調しておきたい。

註

- 註1. 勝保中ノ山・所谷戸と同様に、この石器は磨削を粗く加工している。石器は製作途中で破壊しており、一方は石核に転用している。ただ、その調整加工は浅く、若干調整加工の状態は上記遺跡の石器とは相違しているため、ここでは加工面ある剥片に分類した。
- 註2. 接合資料-75は、左上端から右下端へ斜向して石核を消費していくのに対し、接合資料-88は石核の長軸に平行して消費する点で、相違している。
- 註3. この接合資料は剥離を終了した状態ではないため、これ以後のように剥離が展開していくのか、現状では判断できない。
- 註4. 剥片剥離は集団の独自性を示す、という考え方ができる。充分想定可能な考え方だが、石器群の同時性や地域の設定が極めて難しい。ある意味では、本稿で強調した石核形状や石材形状を越え、共通する剥離システムの存在を無視した考え方であり、それ以上、議論は展開していかないのも厳然たる事実である。即ち、剥片剥離には、意図する剥片の作出を目的に打撃面や作業面を選択する石器製作の限界も反映しているのである。この複合状態を解明せず、集団の独自性を議論するのは極めて難しい、といえよう。
- 註5. 分析が不充分であり、剥片剥離と剥片形状の関係を充分把握しているとはいえない。石器素材に採用している剥片形状は、やや幅広い縦長剥片が多く、このほかにも剥片端部の形状が良好な剥片を主体に、横長剥片も石器素材に使用していた。量的には縦長剥片が多く、目的剥片の形状を暗示していた。縦長剥片・横長剥片も、その剥離面構成の在り方は基本的に一致しており、接合資料を見る限り、両者を目的別に剥離していく状況は看取されない。

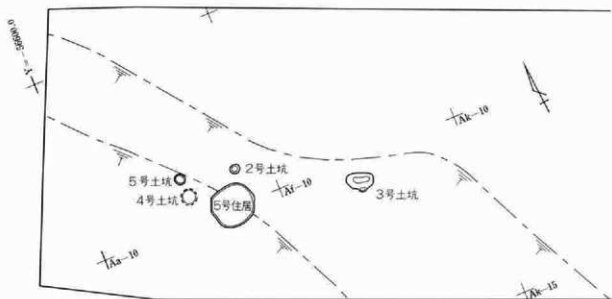
参考文献一覧

- 【後田遺跡（旧石器層）】1987年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 【大竹・小竹遺跡】1985年 月夜野町教育委員会
 【勝保中ノ山遺跡】1989年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 【下畑牛伏遺跡】1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 【善上遺跡】1985年 月夜野町教育委員会
 【群馬県史 資料編1】原始・古代1 1988年 群馬県史編纂委員会
 【鈴木遺跡Iほか】1978年 鈴木遺跡発行会
 【寺尾遺跡】1980年 神奈川県教育委員会
 岩崎泰一「AT時代以前の石器群—県内出土石器群の分析—」『群馬の考古学』創立10周年記念論集 1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
 砂田佳広・鈴木次郎「石刃技法と盤状剥片石核」『石器文化研究』1 1989年 石器文化研究会
 角重淳一・藤波啓吾「武蔵野台地におけるVI層—IX層の石器群の一考察」『東京考古』4 1986年 東京考古談話会
 田村 孝「石器群の層位的出土例と、その検討」『原総風土記の丘年報』10 1986年 千葉県立原総風土記の丘

III 縄文時代の遺構と遺物

A区にあたる八幡山丘陵南斜面に遺構が確認されている。諸磯b式期に属する住居が1軒存在するほか、土坑が4基認められている。遺構はこの部分にのみ認められており、他区には存在しない。地形的にみれば、調査区北側に同期の集落が広がる可能性はあ

ろう。土器は早期から後期にわたる資料が出土しているが、完形品はほとんどなく、小破片が大半を占める。分布は調査区全域におよぶが、時期毎にみていくと、ある程度集中する傾向も認められる。



第108図 縄文時代の遺構

1:400

1. 住居

5号住居跡(第109図、P.L25・26)

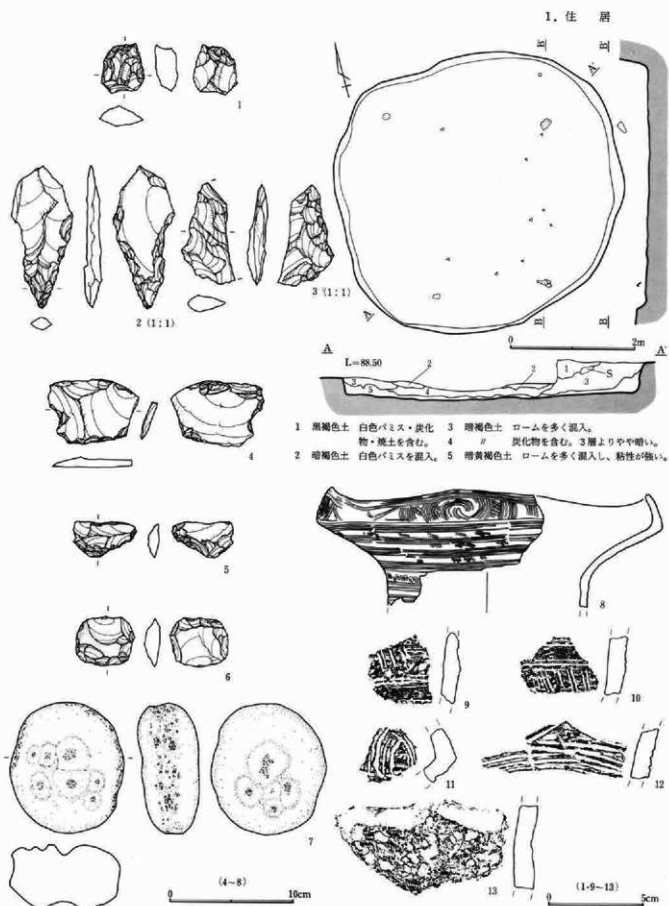
Ae-9グリッドに位置する。平面形は直径4.20mから4.50mを測る不整形円形を示す。壁はほぼ垂直に立上がり、深さは北東壁部で50cm、南西壁部で25cmである。床はローム層中に構築され、水平面をたもっている。床は地山をそのまま利用しているが、特に硬質面は認められていない。柱穴および周溝は検出されていない。炉については焼土、掘り込みもしくは埋設土器等の諸施設は確認できていないためその存在は不明である。埋土は主として、ロームを多く含む暗褐色土が堆積し遺構の検出をしにくくしている。

遺物の出土状態をみると床面直上のものは少な

く、ほとんどが埋土中から出土している。土器は小破片が大半であり、第109図-8に示す深鉢波状口縁部が最も大きい資料である。

出土土器(第109図8~13、P.L26-1)

8は4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器で、胴部は欠損する。口縁は大きく開き口唇部は「く」の字状に屈曲する。この口唇屈曲部外面に渦状文・弧状文が口縁波状下に沿って加えられ、以下横位の平行線文帯となる。9・10は梯子状平行線文が加えられる胴部片である。11は口縁屈曲部とみられるが弧状文が加えられる。12は三角状平行線文が施されるが平行線は太く深い。13は不明瞭ながら縄文の認められる胴部片である。これらの資料はいずれも諸磯b式土器に位置付けられよう。



第109図 5号住居跡出土遺物

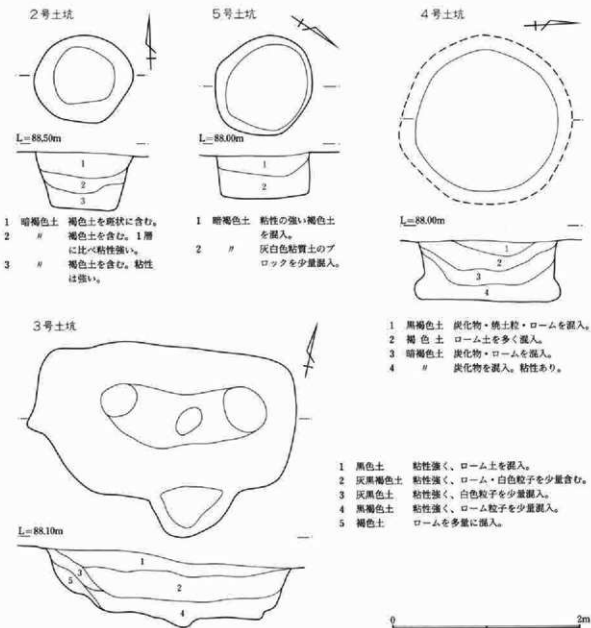
2. 土 坑

土坑は4基を検出した。4基ともA区西南に位置している。この地点は後世の水田開削で削平され、その遺存状態は良好ではない。長方形を呈す土坑1基(第110図、3号土坑)と、円形に近い形状を呈す土坑3基(第110図、2号・4号・5号土坑)の2種が存在する。後者の土坑は縄文前期後半の住居(5号住)の周辺に位置している。この住居に伴う貯蔵

穴である可能性が高い。

2号土坑は、5号住居の北側(Ae-8G・Ae-9G)に位置する。その平面形状は円形に近く、長軸1.1m・短軸0.9m、深さ0.6mを測る。土坑の埋設土層は暗褐色土が主体で、レンズ状に堆積し、自然埋設の状態を示していた。縄文前期の土器の破片が1点出土している。

3号土坑は、Ay-10Gに位置する。長方形の平面形状を呈し、他の土坑の形態とは相違している。



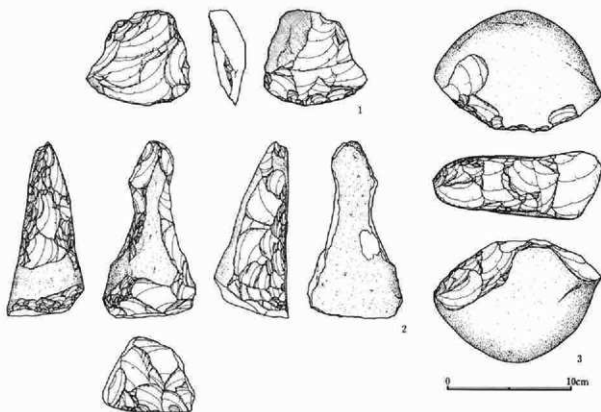
第110図 土坑(1)

上面の平面形態に比べ、坑底の形状は良好ではなく、土坑は未完成である。坑底には3カ所にピット状の凹部が存在しており、「陥し穴」を意図して可能性もある。埋没土層は地形の高い方から土砂が流入し堆積しており、自然埋没の状態を示していた。埋没土中より石核を転用した削器(第111図1)が1点出土している。この石器は横長剥片を素材に用い、左右の側縁で小形の剥片を剥離した石器で、剥離が終了してから、粗く加工して剥片端部に刃部を作出している。長軸2.8m・短軸1.6m、深さ0.8mを測る。

4号土坑は、5号住居の西側(Ad-9G)に位置する。円形を呈す平面形状を持ち、その断面形状は漏斗状を呈し、「袋状土坑」に分類できよう。土坑の上面で径1.5m、坑底で径1.9mを測る。埋没土層は暗褐色土を主体にレンズ状に堆積していた。石核が1点埋没土中より出土している。この石器は偏平礫の一端を打面に、連続して横長剥片を剥離している。上面からみて、作業面は弧状に並び、この遺存状態

から判断して、組織的、かつ、目的的に剥片を剥離している状況が想定されよう。

5号土坑は、5号住居の西側(Ad-8G)に位置する。円形を呈す平面形状を持ち、ほぼ垂直に壁が立ち上がる。長軸1.1m・短軸1.0m、深さ0.4mを測り、ほぼ円形に近い形状を呈す。埋没土層は暗褐色土を主体に堆積しており、自然埋没の状態を示す。三角錐形石器(第111図2)が1点出土している。石器の体部や底面は、裏面から同一方向の剥離を施し、作出している。底面と体部の持つ角度は直角に近く、裏面の全面と側面や石器の表面に礫面を残す。明確な使用痕は観察されない。この石器は燃余文土器群に伴出する場合が多く、この遺跡でもA区東側の地点で燃余文土器と共に出土している。



第111図 土坑出土の石器

3. 包含層出土の遺物

(a) 土 器

出土した土器類は早期から後期にわたるもので、型式別にみると次の種類が認められている。

早期 燃糸文系土器、押型文土器、三戸式土器

前期 黒浜式土器、諸磯 a・b・c 式土器

中期 加曾利 E 3・4 式土器

後期 称名寺式土器・加曾利 B 2 式土器

その他無文土器・縄文片等が出土しているが、それぞれの型式に伴うものと考えられる。

いずれの資料も小破片であり、完形品もしくは器形の復元し得るものはほとんど含まれていない。

これら土器群について型式毎に分布状況をみていきたい。分布状況はグリッド単位で示すものとし、基本的に表示点数はそのまま出土点数をあらわしている。(第112図～第113図)

早期の土器の分布(第112図)

土器の分布はA区に集中する。同区南半部については近年の削平により土器分布は失われている。他区についてはB区に数点散布が認められるのみである。

燃糸文系土器の分布

A区南斜面に分布域をもつ。この部分に広がり認められるが、AkラインからAoラインにかけてやや集中する傾向が認められる。この集中部は他種土器を含まず明瞭な分布域を形成する。

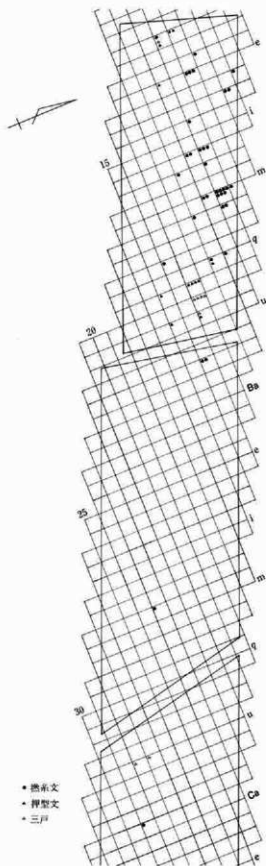
押型文土器の分布

A区南斜面に分布域をもち燃糸文系土器と同様の地点に認められるが、両者の分布は競合せず、比較的明瞭に差異が看取される。

分布をみると集中度がたかく、AcラインおよびAsライン付近の2カ所に分布地点が存在する。

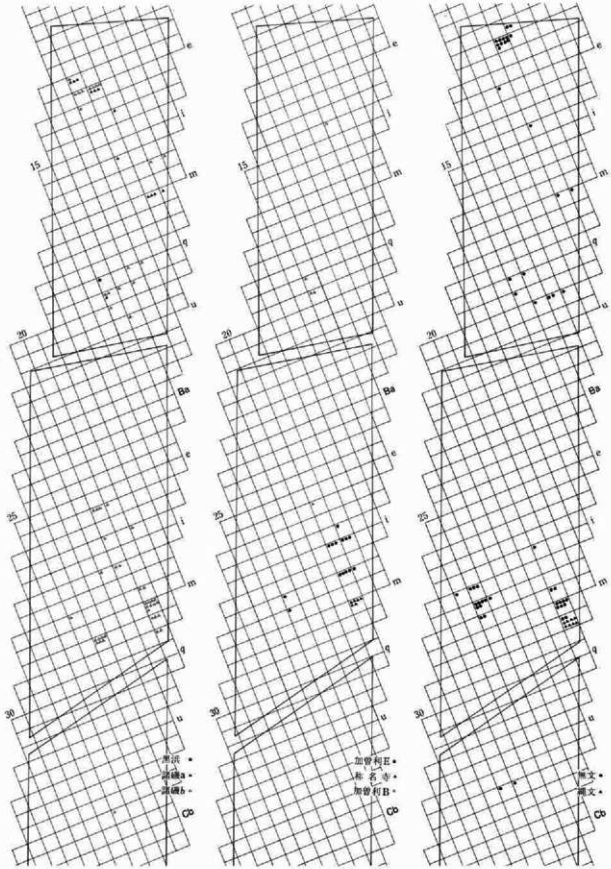
三戸式土器の分布

型式認定され得た資料数が少なく、不明瞭であるが散漫な分布傾向を示す。



第112図 包含層出土の土器分布(1)

3. 包含層出土の遺物



第113図 包含層出土の土器分布(2)

III 縄文時代の遺構と遺物

前期の土器の分布(第113図左)

A区およびB区に分布域が認められる。両分布域の間には凹地が存在し、この部分には、遺物散布はみられない。

A区分布域には黒浜式土器、諸磯a・b式土器が含まれ、B区分布域には主として諸磯b式土器が散布している。

黒浜式土器の分布

出土量が少なく、明瞭な分布傾向はみられないが、A区に散布が確認されている。

諸磯a式土器の分布

出土量は少ないがA区に分布が認められる。AeラインおよびAnライン付近の2カ所に分布域が存在する。

諸磯b式土器の分布

A区およびB区に広く分布が認められる。A区ではAfラインおよびArライン付近の2カ所に集中域が形成される。

B区では凹地東側台地上に広く分布する。BgラインからBpラインにかけほぼ単一型式で分布域が形成されている。

中・後期の土器の分布(第113図中)

A区およびB区に分布が認められる。中期は出土量は少ないもののA区に分布し、後期はB区台地上に分布しており、両者は明確に異なった地点に分布域を形成している。

その他の土器の分布(第113図右)

無文土器片および縄文部片の分布を示す。時期的には複数のものが含まれると考えられるが、型式を確定し得ない資料を一括している。

無文土器片はA区およびB区に広く分布するが、Acライン・Bmライン・Bkライン付近にはそれぞれ集中分布域が存在する。これらの分布域を他の分布状態と比較すると、Acラインについては早期土器の分布域と重複し、Bmライン・Bkラインについては前期土器と類似した分布傾向を示している。

縄文部片はBpライン付近にやや纏まった分布をするが、これは前期・後期土器の分布域と共通している。

次に出土した縄文土器について時期毎(型式別)に報告していきたい。

包含層出土の土器(第114図～第120図)

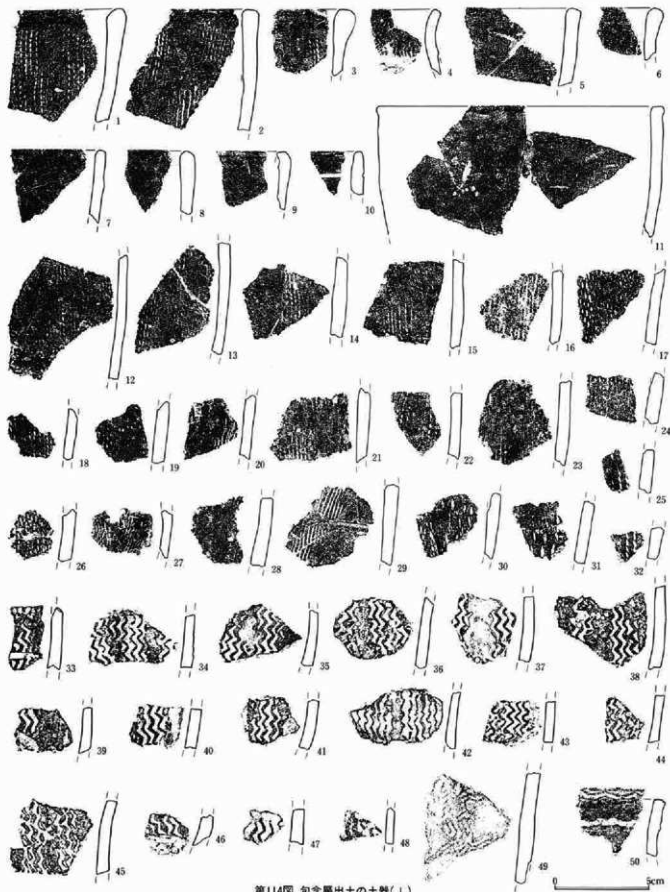
縄文時代の遺構については、前項に報告したようにA区において住居1軒、土坑4基が確認されている。

縄文土器はその分布状態を示した通りA区およびB区の包含層より早期から後期にわたる各時期の土器が出土している。

燃糸文土器(第114図1～32)

器面に加えられる燃糸文はいずれも短軸絡条体第I類、縦位施文によるものである。1は口縁部で、口唇は内側に些小な面をもつ。器面の整形は良好で平滑面を形成し、条間隔のややあいたYRが施される。2は口唇上面に平坦面をもち、口縁部下にわずかながら脹らみが認められる。器面は平滑面を形成し、口縁部下にやや間隔をおいてYRが施される。施文は粗く、表出される燃糸文は不整である。3は口縁部が脹らみ、口唇部は丸みをもつ。口縁部の脹らみは器外面に認められるもので、燃糸文はこの脹らみ部下より施される。施文は不明瞭であるがYRが観察される。4は口縁部が外反ぎみに開き、口唇部は平坦面を形成する。燃糸文は不明瞭であるが口縁部外反より下位に施されている。原体については判別できない。5～9は無文の口縁部片である。5は口縁が直線的に立上がり、口唇部は丸みをもつ。6は口縁が外反ぎみで、口唇部はやや肥厚しながら丸みをもつ。7は口縁部外反直線的に立上がり、口唇部は丸みをもつ。8は口縁部がやや肥厚きみとなり、丸みをもつ口唇部には外側に狭い面が見られる。9は器内面が大部分剝落しているが、口唇部は丸みをもってたちあがる。10は口縁下約1cm程度の位置に沈線が一条施される。沈線は丸棒状施文具により

3. 包含層出土の遺物



第114図 包含層出土の土器(1)

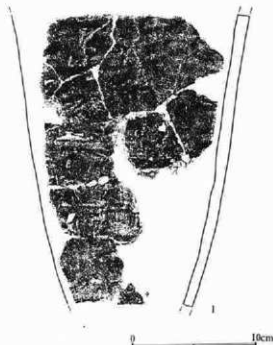
III 縄文時代の遺構と遺物

加えられ、施文はやや浅いが明瞭である。11は無文の口縁部で推定15cm程度の口径を計る。口唇部は上端に面をもち、直下には不明瞭であるが浅い凹面が認められる。器面は表裏とも整形良好で平滑な面を形成する。12~32は胴部片である。12~24・26・27は施文がやや粗いが、絡糸体における条間隔が密接する資料である。いずれもY Rが用いられており、筋は細緻で明瞭であるものの、表出は浅めである。燃糸文の状態からみると口縁部資料1もしくは2などに関連するものと見られる。なお、23は他例に比べ特に細緻なもので条の密集度もたかい。27は条走行からみて底部に近い胴下半部片であろう。28は無文部片。29は燃糸文が不規則に多少斜行するもので、絡糸体の施文は深く明瞭である。25・30~32は筋がやや大きめで条間隔のあく燃糸文である。器面は平滑で絡糸体の施文は浅い。30・31は接合関係はないものの同一個体と見られる。

これらの資料は燃糸文系土器後半段階に位置付けられる土器群で複数の型式が含まれるものと考えられる。1~4・12~24・26・27・29は稲荷台式土器、25・30~32は稲荷原式土器、5~11・28は東山式段階にそれぞれ相当するものといえよう。

押型文土器(第114図33~50)

調査によって得られた押型文土器はいずれも山形押型文をもつ資料である。33・50は口縁部片、34~49は胴部片である。33の口縁部はほぼ直口し、口唇部内側が斜落しているが、外側に面が認められこの部分に刻目が加えられる。押型文は口縁下より縦位に加えられる。同部にみられる横位の痕跡は文様ではなく調査時の傷痕である。50は外反ぎみの口縁部でわずかに肥厚し、口縁部上端には山形押型文が加えられる。また口縁部には浅く不規則な沈線状の文様が認められるが、明確な沈線文ではなく柔軟な原体により施されたものとみられる。可能性としては繊維束の結束回転も考えられ



第115図 包含層出土の土器(2)

3. 包含層出土の遺物

る。34～48は山形押型文の縦位帯状施文が施される胴部片である。45は山形文帯が一部で干渉しやや不規則となるが、他資料については規則的で良好な施文が認められる。49は器面の大半が剥落しているため文様構成が不明瞭であるが、山形文の横位、縦位施文が観察される。

三戸式土器(第115図1・2)

1は無文の深鉢型土器の胴部片である。器形は図上復元によると変化のない単純な砲弾形をなし、器面は平滑面を形成しており、文様は加えられない。

2はほぼ直線的にたちあがる口縁部片で、口唇部は外側に丸みをもってわずかに肥厚し先端には面をもつ。文様は認められないが、器面には横位の整形痕が全面に加えられる。この整形痕はヘラ状の工具によるものとみられ、やや鋭いケズリ痕として明瞭に観察される。また、口縁付近に小穴が2穴存在する。

条痕文土器(第116図1)

器内外面に条痕文をもち、胎土中に植物性繊維を含む胴部片である。条痕は貝殻を施文具とするものか、深く明瞭である。胎土中の繊維含有量はあまり多くなく、器内外面にほとんど露出していない。

前期前半の土器(第116図2～9)

胎土中に植物性繊維を含み、器面に縄文の施される一群の土器である。2はRLr3が施される。3はRLr3、RLl3をそれぞれ横位に加え羽状縄文を構成している。4・5についてもRLr3が観察される。6は器表面がかなり剥落しているがRLが認められる。

7～9はやはり器面に縄文とみられる文様が存在するが極めて不明瞭である。7は口縁部、8・9は頸部片である。

2～6については黒浜式土器に位置付けられるが、7～9については保留しておきたい。

諸磯a式土器(第116図10・11・15・22, 第118図1)

10は深鉢型土器の口縁部片でやや外反ぎみにひらき、口唇部はわずかに肥厚する。口縁部文様帯は櫛歯状工具による横位および波状文が施されるが、文様帯内には縄文は認められない。胴部にはRL3横位

が加えられる。11は内湾ぎみに口縁部片で口唇部上端に面をもちわずかに内傾する。文様は口縁に沿って細い横走線文帯が施され、縄文はRL横位である。

15・22は胴部片で、15には横走線文及びLR横位が施され、22には半截竹管両端のみを用い、弧状部を施文しない連続爪形文(連続刺突文)が横走し、縄文はRL3横位が施される。

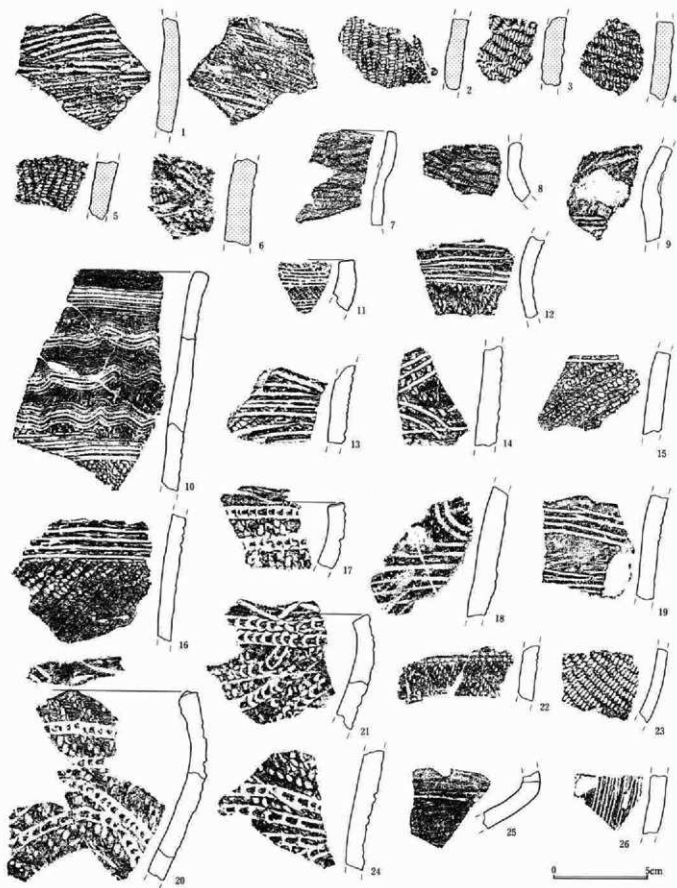
第118図1は水平口縁の深鉢形土器であるが底部は欠損する。最大径を口縁および胴部にもち、頸部はわずかに括れぎみとなる。口縁部文様帯はこの頸部括れ部までおよび。口径は推定20cmを計る。文様は櫛歯状工具により施文され、口縁および頸部には横位に巡らせ、その間に波状文を3段施す。胴部にはRL3横位が施されるが縄文は文様帯下部にも認められる。

諸磯b式土器(第116図12～14・16～25, 第117図1～23, 第118図2)

12～14・16・18・19は平行沈線文により文様が構成されるものである。これらの土器に加えられる沈線文はためて施文は深く明瞭である。縄文は19の土器については観察されないが、12・14にはRL横位、13・14・18にはLR横位が加えられる。12・14の縄文はかなり硬めの原料を用いた原体によるものとみられ、施文された縄文は筋が不安定な状態を示している。これに比べ13・14・18の縄文の施文はやや粗めであるものの原体自体は安定した良好なものである。

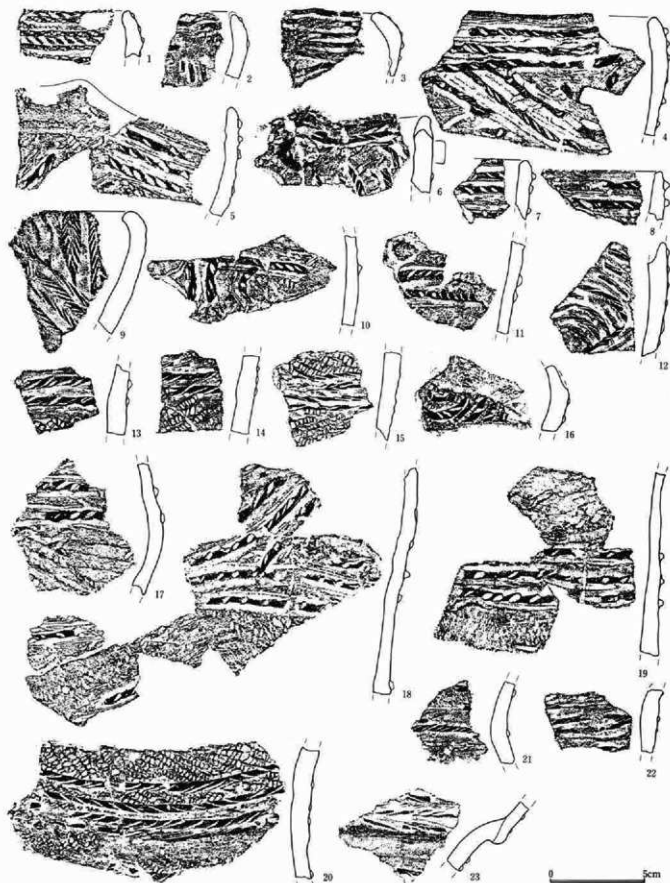
17・20・21・24は連続爪形文により文様構成されるものである。17は内湾ぎみの口縁部で口唇上面に面をもち、この部分に沈線文が加えられる。20は内湾する波状口縁で、波頂部には凸状の面があり沈線文が加えられる。口縁下に横位の連続爪形文が2条巡り、下位には弧状の文様構成が施される。21は内湾する口縁部で、口唇には内傾する面をもち、この部分に波状沈線文が加えられる。口縁に沿って2条連続爪形文が巡り、その下位に弧状の構成が認められる。24は弧状の連続爪形文が横位に加えられる胴部片である。これらの土器に施される連続爪形文は

III 縄文時代の遺構と遺物



第116図 包含層出土の土器(3)

3. 包含層出土の遺物



第117図 包含層出土の土器(4)

III 縄文時代の遺構と遺物

深く明瞭であり、器面にはRL横位が観察される。縄文は施文がやや粗く、原体もためのものが用いられているとみられる。

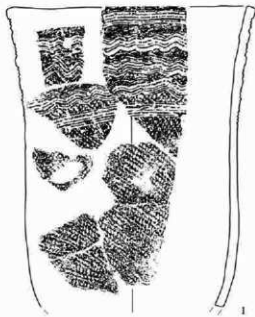
23は縄文片でRLr3横位が施されている。25は浅鉢型土器の頸部片である。器内外面とも整形は良好で平滑面を形成し無文である。また、円孔が穿たれておりその一部が観察される。

第117図1～23、第118図2は浮線文土器である。第117図1～5は内湾ぎみの口縁部片であり、4・5については波状口縁をなすものとみられる。浮線文は粘土紐を加えたもので太く肉厚であり、刻目は棒状工具により施されており丸みをもつ。縄文は一部で観察されるが不明瞭である。6～8は直行する口縁部片である。6は獸面把手部にあたるが、かなり簡略化されたもので、口縁の小突起と粘土板の張付けにより表現される。9は強く内湾する口縁部片で浮線文は偏平であり、細い刻目が矢羽根状に施される。縄文は認められない。10～22は胴部片である。10・11・16～19は浮線文が太めで、丸みをもつ刻目が加えられる。12～15・20～22の浮線文は偏平で加えられる刻目は細く矢羽根状に施される。23は浅鉢型土器片である。おそらく頸部が「く」の字状に屈曲する特殊浅鉢の頸部片であろう。浮線文は偏平で上に加えられる刻目は細く矢羽根状に施される。縄文は認められず、整形は良好である。

第118図2は深鉢型土器胴部で、胴下半部に屈曲部をもつ。胴上半部には浮線文が弧状に加えられるが、以下は横位に施される。浮線文はやや太めで棒状工具による丸みのある刻目が加えられる。縄文は極めて不明瞭であるがLR横位が観察される。

諸磯c式土器(第116図26)

26は縦位の集合条線文をもつ胴部片であるが張付け文は認められない。



0 10cm

第118図 包含層出土の土器(5)

加曾利E式土器(第119図1~5・7)

1は胴部片で懸垂文間にRL縦位が施される。縄文は節に不規則な部分があるが原体の燃りが充分でないためと見られる。2は渦状沈線文の施される胴部片であり、器面は三分の程度が剥落している。縄文は認められない。3はRL縦位の縄文が施される胴部片である。4・5はLRの縄文が施される胴部片であるが、他文様は認められない。7は深鉢型土器底部で、陸線文により文様構成される。縄文は施されない。底面には極めて不明瞭ながら網代痕が認められる。

これらの資料は加曾利E式土器に位置付けられ

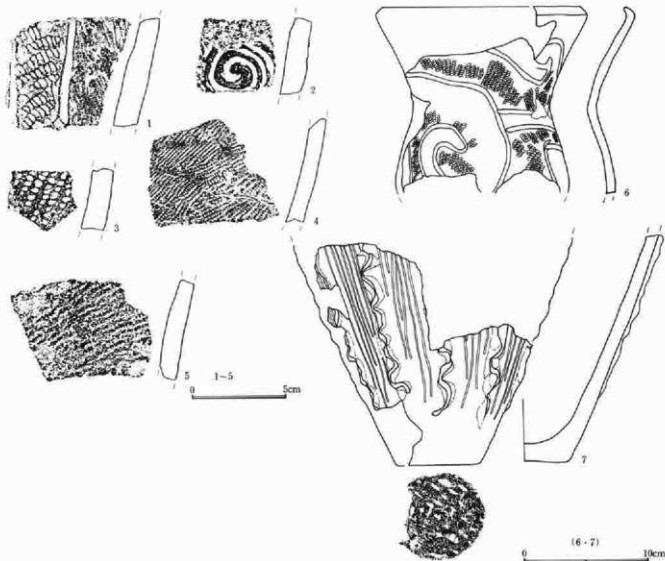
るものと考えられる。

称名寺式土器(第119図6)

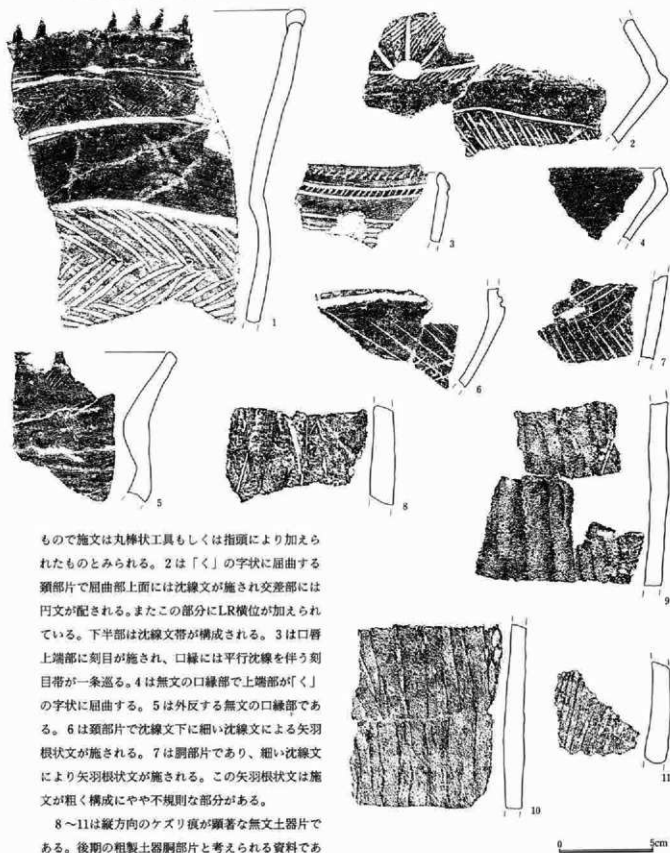
頸部が括れ口縁に向かって開く深鉢型土器で、口唇部は内傾し端部は尖りぎみとなる。文様は単一沈線文により曲線および曲折構成の文様帯が施され、沈線文内にはRL縦位が加えられる。施文は粗く縄文は疎らに認められる。

加曾利B2式土器(第120図1~7)

1は水平口縁に山形の小突起が連続して付されるもので、口縁に沿って縄文帯が廻り、その下位に矢羽根状文帯が施される。縄文はLR横位であるが、細い原体が用いられている。横位の沈線文は太く浅い



第119図 包含層出土の土器(6)



もので施文は丸棒状工具もしくは指頭により加えられたものとみられる。2は「く」の字状に屈曲する頸部片で屈曲部上面には沈線文が施され交差部には円文が配される。またこの部分にLR横位が加えられている。下半部は沈線文帯が構成される。3は口唇上部に刻目が施され、口縁には平行沈線を伴う刻目帯が一条巡る。4は無文の口縁部で上部が「く」の字状に屈曲する。5は外反する無文の口縁部である。6は頸部片で沈線文下に細い沈線文による矢羽根状文が施される。7は胴部片であり、細い沈線文により矢羽根状文が施される。この矢羽根状文は施文が粗く構成にやや不規則な部分がある。

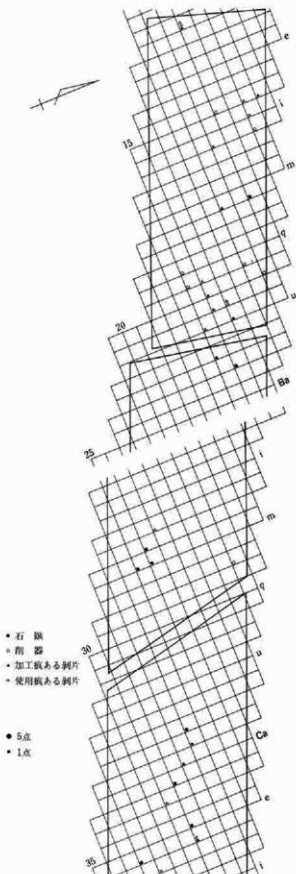
8～11は縦方向のケズリ痕が顕著な無文土器片である。後期の粗製土器胴部片と考えられる資料であるが、確定し得ない点もありここでは形式の特定については保留しておきたい。

第120図 包倉層出土の土器(7)

(b) 石器

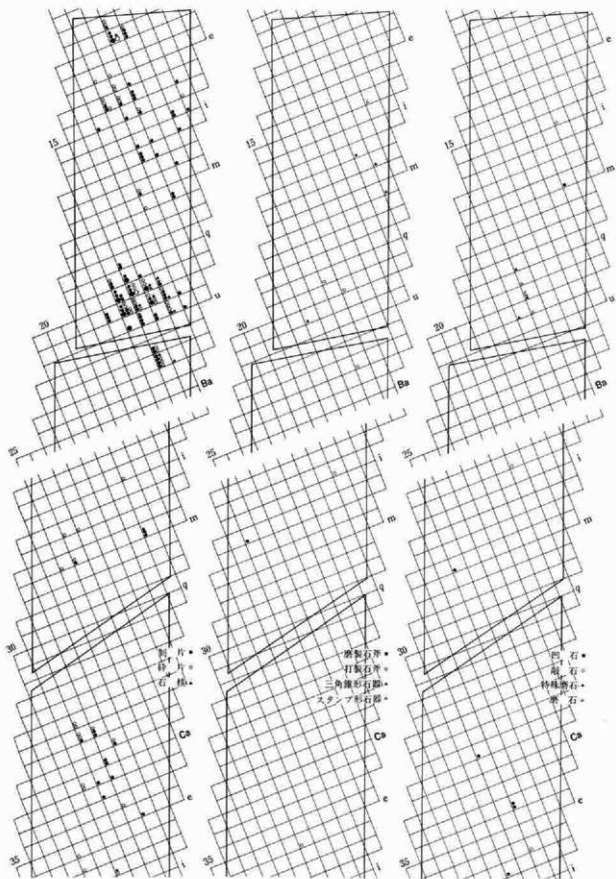
総計641点(礫248点を含む)の石器が出土している。全体の60%以上がA区に分布しており、残り40%がB区やC区に分布している。D区には剥片と礫片が各1点出土したのにとどまる。この地域では、表土を除去した段階で石器や土器の分布範囲は確認可能で、そのため、この遺跡でも石器や土器が分布する地点を中心に掘り下げ、調査した。石器や土器は、第II層(褐色土)の上半から出土しており、ほぼ同様な出土状態を示していた。石器の分布範囲は土器の分布範囲と一致している。スタンプ形石器や三角錐形石器・特殊磨石など、その所属時期の推定可能な石器も出土している一方、所属時期を限定できない石器も多い。ここでは、石器分布(第121・122図)の概要を指摘していきたい。

石器が濃密に分布しているのは、A区に2カ所・B区・C区に1カ所である。特に、A区では西側の地点(bライン～mライン)と東側の地点(oライン～wライン)に多く出土している。A区西側の地点は唯一確認した縄文住居の位置とも一致し、石器が多出するの不思議でない。この地点には前期後半の土器の他に、燃糸文土器や押型文土器が分布している。削器など剥片系の加工具が多く出土するほか、燃糸文土器に伴うスタンプ形石器や三角錐形石器が出土している。一方、A区東側の地点には、西側の地点より多く石器が分布している。この地点には、押型文土器を主体に早期・前期・後期の土器が若干分布している。土器の分布範囲に一致して、削器など剥片系の加工具や、打製石斧や(特殊)磨石が出土している。また、剥片や破片も多く出土しており、他の地点と相違している。この地点には浅い沖積地が入り込み浅い凹地を形成していること、剥片だけではなく、打製石斧や磨石が出土していることから、石器の製作地点というよりも石器の廃棄地点である可能性が高い。B区では、jライン～lラインに石器が分布している。この地点には、前期後半や中期後半の土器が出土している。石礫が3点と集中して出土したほかには、打製石斧・磨製石斧が1



第121図 包含層出土の石器分布(1)

III 縄文時代の遺構と遺物



第122図 包含層出土の石器分布(2)

3. 包含層出土の遺物

器 種 (636点)

①	②	③	④	⑤	
① 剥片 182点(28.60%)				② 砕片 80点 (12.58%)	③ 礫・礫片 247点(38.84%)
① 石 鏃	12点(1.89%)	⑤ 凹 石	8点(1.26%)		
削 器	10点(1.57%)	磨 石	5点(0.79%)		
加工痕のある剥片	13点(2.04%)	磨 石	11点(1.73%)		
使用痕のある剥片	18点(2.83%)	特殊磨石・多孔石	各2点(各0.31%)		
② 打製石斧	13点(2.04%)	④ 石 核	20点(3.10%)		
磨製石斧・片刃石器	各1点(各0.16%)				
三角錐形石器	8点(1.26%)				
スタンプ形石器	3点(0.47%)				

石 材 (636点)

①	②	③	④	⑤
① 黒色頁岩	238点(37.42%)	②	③ 粗粒安山岩	230点(36.16%)
② 黒色安山岩	32点(5.03%)	⑤ 輝緑凝灰岩・珪質頁岩・灰色安山岩・ ホルンフェルス		各3点(各0.47%)
④ 黒曜石・砂 岩	各10点(各1.57%)	珪質安山岩・軽 石・細粒安山岩・ 石 英・点紋頁岩・珉 岩・変質凝灰岩		各2点(各0.31%)
頁 岩	11点(1.73%)	曹母石英片岩・花崗岩・褐色珪質岩・ 輝緑岩・石灰岩・変流岩(変チャート)・ 変質流紋岩		各1点(各0.16%)
砂岩質頁岩・石英閃緑岩	各4点(各0.63%)			
チャート	26点(4.09%)			
変質安山岩	7点(1.10%)			
変質玄武岩	5点(0.79%)			
溶結凝灰岩	8点(1.26%)			
緑色片岩	18点(2.83%)			

第123図 石器組成と石材

点づつ出土したのにとどまる。C区では、石鏃4点が出土しているほか、剥片系加工具や凹石が出土している。剥片や砕片の出土も多い。

なお、A区～C区の石器の集中範囲には、262点の礫が出土している(第123図)。その分布範囲は土器や石器の分布範囲に一致していた。礫は集中部を形成することなく出土しており、「集石」とは判断できない。破損した礫が多く出土していることから、礫を廃棄している可能性もある。

特殊磨石や局部磨製の石鏃、三角錐形石器やスタンプ形石器など、所属時期の特定が可能な石器の分布は、偶然にもそれぞれ押型文土器と捺糸文土器が分布する範囲に一致している。石器の使用方法にも関連して、このことから特定器種が分布している範囲と一致する土器型式を以て、石器の所属時期を決定するのは困難だが、上述した礫の出土状態が暗示する遺物の在り方や、石器の製作から廃棄までその

過程を総合して検討していくことができるなら、土器と石器が同時存在したのか、否か、ある程度想定され、集落の構造も充分分析できるものと判断している。

ナイフ形石器(第124図1)

1点がAm-9Gから出土している。縦長の剥片を石器素材に使い、左右の側縁に丁寧な調整加工を施す。この調整加工で剥片の打面を除去している。石器の先端部分が欠損している。石器の特徴から判断して、縄文時代の石器でないことが確実である。チャート。

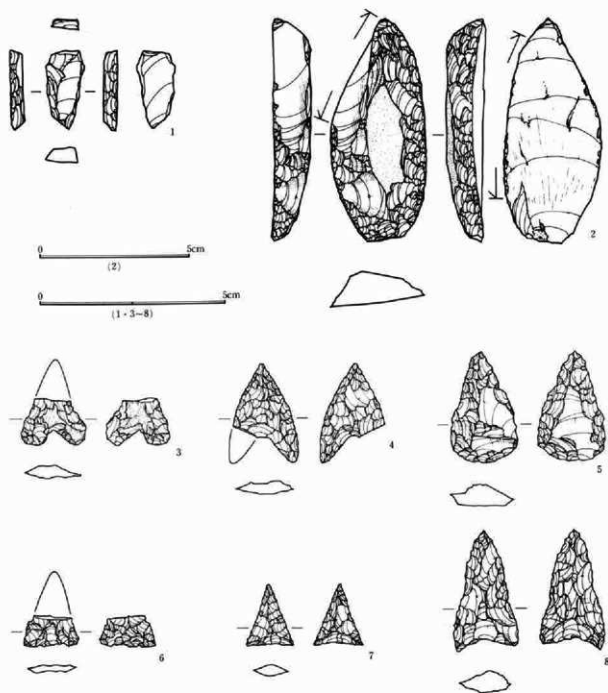
彫器(第124図2)

1点がAg-12Gから出土している。縦長の剥片を石器素材に使い、石器の先端に機能部を作出している。調整加工は素材剥片を全周し、その角度は先端

III 縄文時代の遺構と遺物

で厚く、それ以外の部分ではやや浅い。加工状態は丁寧で、全体に押圧剥離に近い。表面には稜面を残し、また、この調整加工で素材剥片の打面を除去している。石器先端から種状剥離を施し、機能部を左側縁・上端部へ作出している。種状剥離は器体の長軸に対し、傾いた状態で抜けている。その角度は先端で90°、器体の中央付近で45°に近い。機能部の全体

に微細な使用痕が観察され、特に、その下半には顕著に存在する。機能部の作出方法の特徴は、男女倉技法を技術基盤に作出した石器であることを示している。黒味が強く、良質な黒曜石を使用している。石器基部に灰色の不純物を含んでおり、この特徴から信州産の黒曜石である可能性が高い。



第124図 包含層出土の石器(1)

石鏃 (第124図3～8)

石鏃は13点が出土している。形態の内訳は、凹基無茎鏃10点・平基無茎鏃3点である。このうち、8点が欠損しており、「返し」部分を欠損する事例が4点と半数を占める。石材は黒曜石（6点）やチャート（4点）を多く使用する。3・4は凹基無茎鏃で、3は石器の上半を、4は「返し」の一部を欠損する。3は局部磨製の石鏃で、黒曜石を素材に用いている。V字状の抉り部を持ち、その作出状態は粗い。5は丸味の強い基部形態を呈す。素材剥片の周辺に調整加工を施し、鋸状の側縁を形成している。裏面側に剥片の剥離面を残す。その加工状態から判断して、未製品である可能性が高い。B区から出土している。6・7は平基無茎鏃で、直線的な基部形態を呈す。6に比べ、7は加工も丁寧で、直線的な側縁形状を作出している。6は器体の上半を欠損する。8は平基に近い基部形状を呈す。若干基部が缺れ、側縁の中央部分で内湾する。石器形状から判断して、ほぼ意図した形状に石器が完成している。やや鈍角に先端を作出している。

磨製石斧・打製石斧 (第125図1～5・7～9)

18点が出土している。全体の出土数が多いA区に比べ、B区やC区からより多く出土している。1は短冊形を呈す磨製石斧で、未製品である可能性が高い。横長剥片を素材に用い、周辺を若干加工している。表面には顕著な打痕が存在する。変玄武岩。2は裏面に礫面を残す打製石斧で、器体の下半を欠損している。厚手の大形剥片を素材に用い、側縁を主体に加工している。石器の形状が大形で、礫面が裏面全体を覆う特徴から、早期後半の土器に伴う石器である可能性が高い。3～5は短冊状を呈す打製石斧で、偏平な礫（3）や薄手の剥片（4・5）を石器素材に用い、周辺を加工して石器を作出している。3は石器の下半を、4・5は石器の上半を欠損している。7・9は分銅状を呈す打製石斧で、7は剥片を素材に用い、周辺を加工している。ほぼ完成状態を示す。9は偏平礫を用い、左右の側縁を中心

に加工して、ノッチ部を作出している。また、石器刃部に相当する部分には何等かの作出意図が看取され、何度も繰り返し剥離している。その加工状態は刃部の作出とは相違しており、作出意図は明確ではない。全体の加工状態から判断して完成状態にはない。D区検出の1号住居覆土から出土している。8は小形の打製石斧で、薄手の剥片を素材に使用している。石器形状は換状を呈す。他の打製石斧に比べ、やや幅広く丁寧加工していること、打製石斧特有の側縁の「潰れ」が観察されないことから、分類が適当なのかどうか、不明ではある。

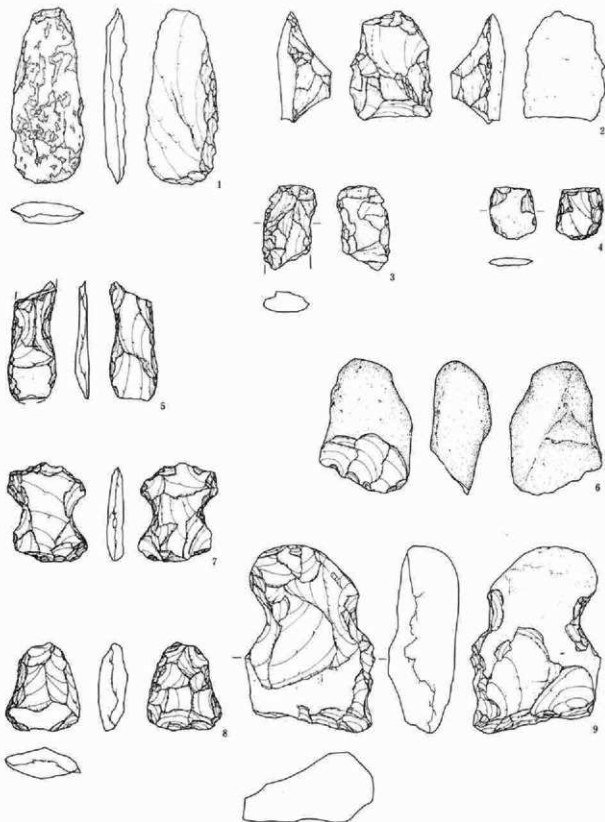
片刃石器 (第125図6)

1点がC区から出土している。掌に入る程度の礫を石器の素材に用い、小口部分を裏面から数度剥離して刃部を粗く作出している。それ以外には、刃部を整形する加工は施されない。刃部には、部分的に使用痕が存在する。

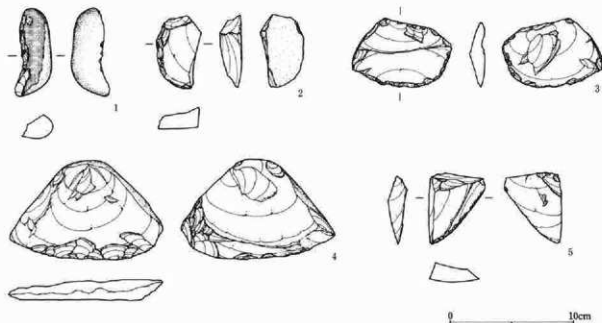
削器 (第126図1～5)

11点が出土している。縦長剥片を素材に使用する場合には側縁に、横長の剥片を素材に使用する場合には剥片端部に石器刃部を作出するケースが多い。全般に、横長の剥片を使用するケースの方が多い。剥片形状と刃部の位置は明確な相関関係が指摘され、剥片の作出は明確に剥片形状を意図して剥離している可能性があり、同様な状態は加工痕・使用痕のある剥片には存在する。1は側縁に刃部を持つ削器で、節理に沿って破損した礫片を石器素材に使用している。鋸歯状を呈す刃部形態を採る。2は側縁に刃部を持つ削器で、剥離の段階で縦面に破損した幅広い剥片を素材に使用している。3は剥片端部に刃部を持つ削器で、横長・長方形の剥片を素材に使用している。加工は左右の側縁まで及んでいる。4は剥片端部に刃部を持つ削器で、扇状を呈す横長の剥片を石器素材に使用している。5は剥離段階で二分した一方の剥片を素材に、剥片の側縁に微細な加工を連続して施し、刃部を作出している。

III 縄文時代の遺構と遺物



第125図 包含層出土の石器(2)



第126図 包含層出土の石器(3)

加工痕ある剥片(第127図1~5)

A区に9点・B区に3点・C区に1点と、13点が出土している。石器の素材に使用する剥片の形態は横長剥片が多く、削器と同様な傾向を示す。また、刃部も削器の場合と同様に、縦長剥片の場合には左右の側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に刃部を作出することが圧倒的に多い。石器石材は黒色頁岩を使用するが多い。1は小形剥片の側縁を微細に加工している。石器が小形で、その形状から作出器種は想定できない。2は縦長剥片を素材に用い、打面側の両側縁を微細に加工した石器で、その加工状態はナイフに施す加工に類似している。黒曜石を素材に使用しており、また、端正な剥片形状から判断して、縄文時代の石器ではない可能性もある。3は裏面に礫面を残す厚手の剥片を素材に使用して、周辺を粗く加工した石器で、弧状の石器形態を呈す。厚いノッチ状の刃部を作出している。4・5は剥片の側縁を粗く加工して、刃部を作出している。4は器体の上半を、5は器体の下半を欠損している。

使用痕ある剥片(第127図6~12)

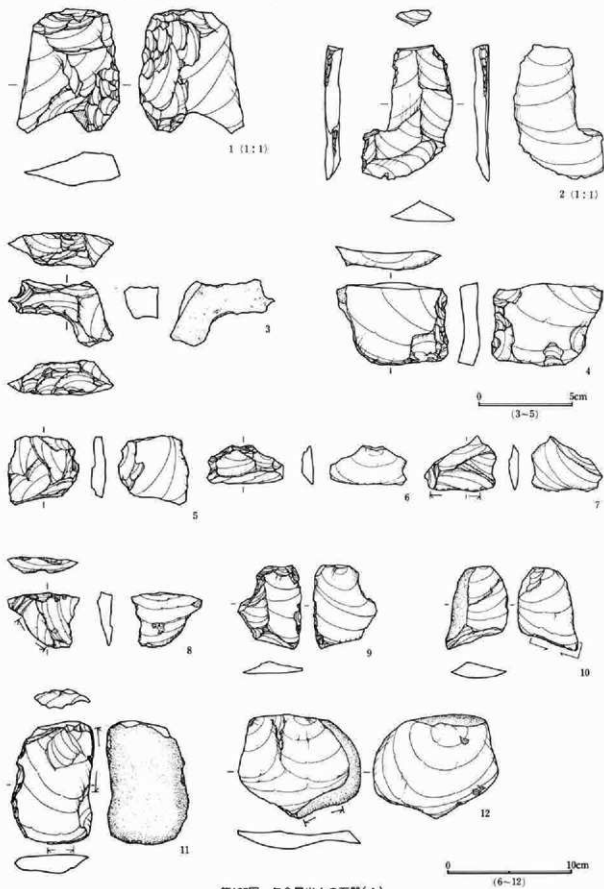
A区から15点・B区から1点・C区から3点と、

合計19点が出土している。石器素材には縦長剥片と横長剥片の両者を使用している。刃部は、縦長剥片の場合には左右の側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に設定するが多い。石器石材は黒色頁岩を使用する資料が多く、削器の場合と同様な傾向を示している。6・7は横長剥片の剥片端部を、8・9は縦長剥片の側縁を、10・11の2点は剥片の側縁と剥片端部の両方を、それぞれ刃部に使用している。

石核(第128図1~6)

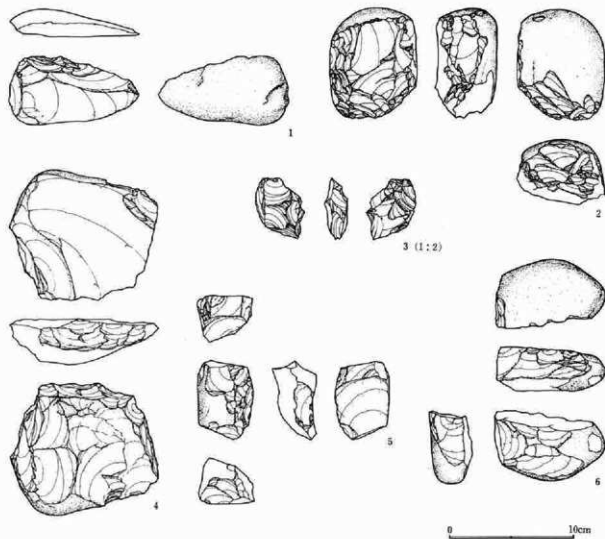
24点が出土している。全体の70%以上(17点)がA区から出土しており、特に、PラインからWラインに多い。石核素材には大形剥片が使用され、複数の作業面を持つ石核は概して少ない。石器石材は黒色頁岩が圧倒的に多い。1・4は大形の剥片を素材に使用した石核で、剥片の側縁で小形の横長剥片を剥離している。2・6は複数の作業面を持つ多面体の石核で、小形石器の製作を目的に剥片を連続して、剥離している。作業面が広い場合には横長剥片が、狭い場合には縦長剥片が剥離されているようである。3は表裏両面と側縁に作業面を持つ多面体の石核で、小形の剥片を剥離している。

III 縄文時代の遺構と遺物



第127図 包含層出土の石器(4)

3. 包含層出土の遺物



第128図 包含層出土の石器(5)

(1-2-4-6)

三角錐形石器(第129図1~4)

9点がA区から出土している。1点(第129図4)を除き、総て黒色頁岩を使用している。器体の上半を欠損する資料が3点、頭部破片1点が出土している。こうした欠損状態は、他の遺跡から出土するこの石器の欠損状態とも一致している。5号土坑から出土した石器(第111図2)がこの石器の典型的な資料だが、出土石器には広く平坦な剝離面が裏面を覆う事例の他に、側縁にも礫面を残す事例や体部全体が礫面を覆う事例が存在するなど、出土石器は多様性がある。資料点数が限定され、不確定な要素も多く不明だが、群馬県内の燃糸文土器群を出土する遺跡では、この石器は良く伴出しており、上述した石

器の多様性も既に確認している。1は平坦な剝離面が裏面を覆う資料で、頭部を欠損している。裏面から同一方向の剝離を施し、底面を作出している。明確な使用痕は観察されない。2は裏面・側面に礫面を残す資料で、原石の形状を上手に利用している。掌に入る程度の礫を使用している。裏面から同一方向の剝離で底面を作出している。明確な使用痕は観察されない。3は裏面に礫面を残す。側面や底面を大割してから、同一方向からやや丁寧な加工で器体の形状を整え、石器を作出している。器体の上半を欠損する。明確な使用痕は観察されない。4は棒状の礫を素材に用いている。左右の側面を加工することなく、底面に加工を限定して作出した資料で、1

III 縄文時代の遺構と遺物

～3の石器に良く伴出する。器体の表裏両面から剝離して底面を作出している。器体の上半を欠損する。明確な使用痕は観察されない。

スタンプ形石器(第129図5～7)

A区から2点・C区から1点と、総計3点が出土している。使用した結果、底面の周辺に微細な剝離が生じた資料(5)や摩耗が顕著な資料(6・7)など、典型的特徴を持つ石器が出土している。この石器は上述した三角錐形石器に良く伴出する。石器石材は粗粒安山岩(6)や変質安山岩(7)など、周辺の地域で容易に採集可能な石材を使用している。こうした傾向も他の遺跡から出土するスタンプ形石器の石材使用の在り方と良く一致する。なお、第129図5は、上述の傾向に反し、黒色頁岩を使用している。類例は極めて少ない。

磨石(第130図1～6)

13点が出土している。全体の6割に相当する8点がA区から出土している。偏平な円礫や棒状の礫が多い。表裏両面が摩耗している場合が多く、また、棒状の礫を使用している資料(3～6)には表裏両面の摩耗だけではなく、小口部分に打痕を持つ場合が多い。石器の形状と使用目的は密接に関連している。5・6の2点は器体の下半を欠損している。

特殊磨石(第131図1・2)

2点が出土している。断面三角形を呈す棒状の礫を素材に用い、側面に顕著な摩耗痕を持つ。小口部分には打痕も顕著で、複数の用途に使用している。押型土器群に良く伴出し、この遺跡でも両者の分布は一致している。1は器体の下半を欠損している。2点ともA区から出土している。

凹石(第131図3～6、第132図1・2)

11点が出土している。他の石器の大半がA区から出土しているのに対して、凹石はB区から多出る傾向を示す。この地点には中期・後期の土器が分布

しており、この土器に伴出する石器である可能性が高い。表裏両面の中央付近に凹部が存在し、明確なV字状の凹部を形成するもの(第131図4・5、第132図2)と、アバタ状の打痕を形成するもの(第131図3・6、第132図1)の両者が存在する。出土石器の場合、前者の凹石より後者の凹石の方が多い。

多孔石(第132図3・4)

2点が出土している。4は大形の礫を用い、多数の孔を持つ典型的な多孔石である。大部分の孔が石器の表面に存在しており、裏面や側面の孔は極めて少ない。なお、礫は器体の中央で破損した可能性が強く、そこには全く孔が見られない。3はV字状の明確な凹部が存在することから判断して分類した。だが、孔の数も3カ所づつで、また、石器形状も凹石と比べ大差なく、不明瞭である。

敲石(第132図5・6)

B区から3点・C区から1点と、総計4点が出土している。4例中2点は完形で、2点は欠損する。5は棒状の礫を用い、側面と小口部分に打痕を有す。器体の下半を欠損する。6は完形の敲石で、器体の下端に打痕を有す。1点を除き、総て粗粒安山岩を使用している。

3. 包含層出土の遺物

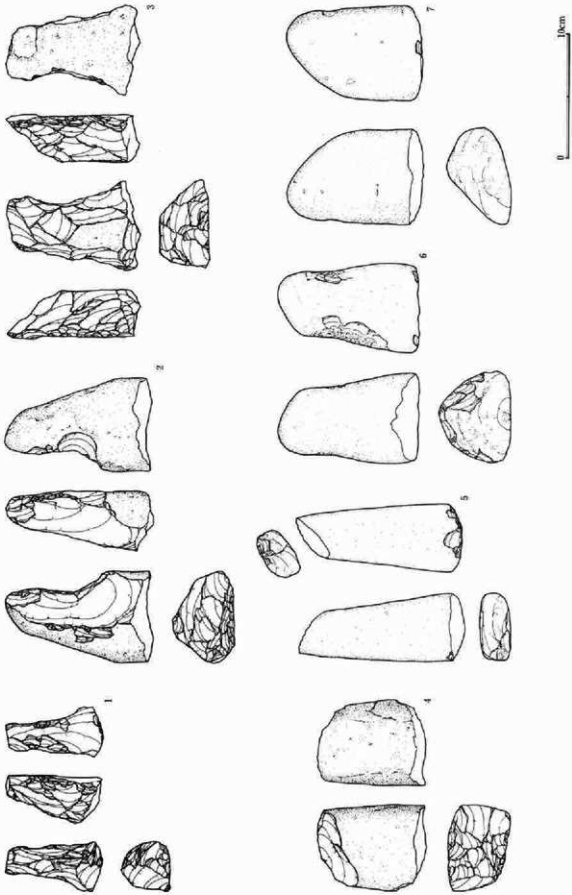
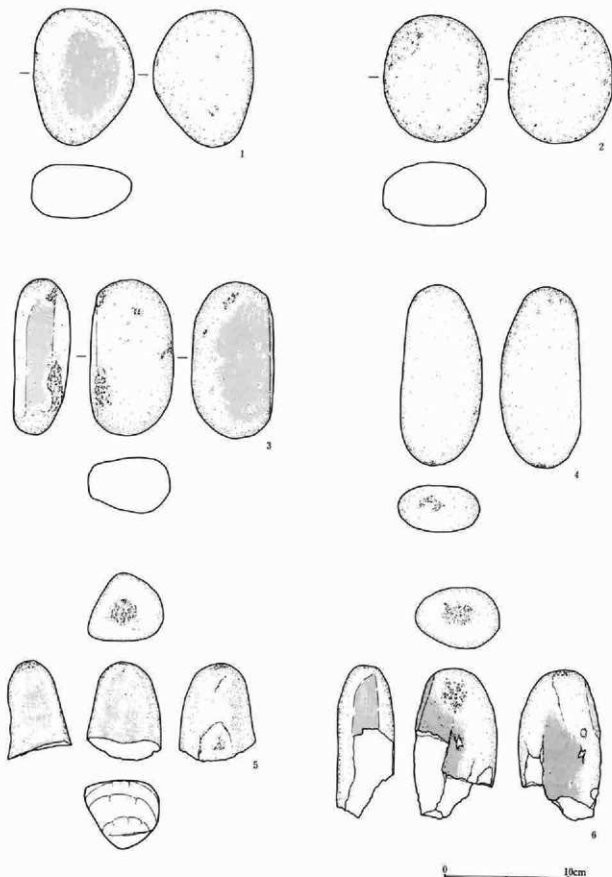


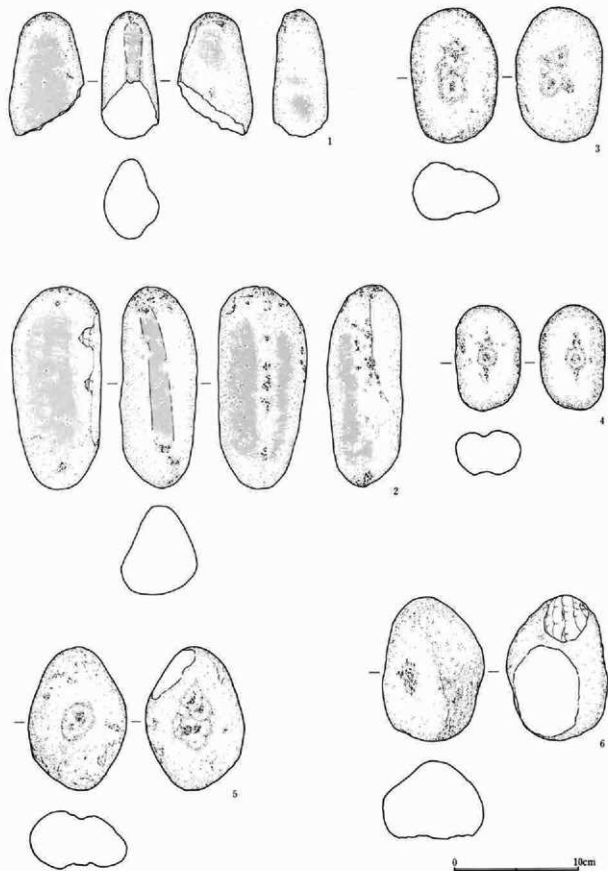
圖124 包含層出土の遺物(6)

III 縄文時代の遺構と遺物



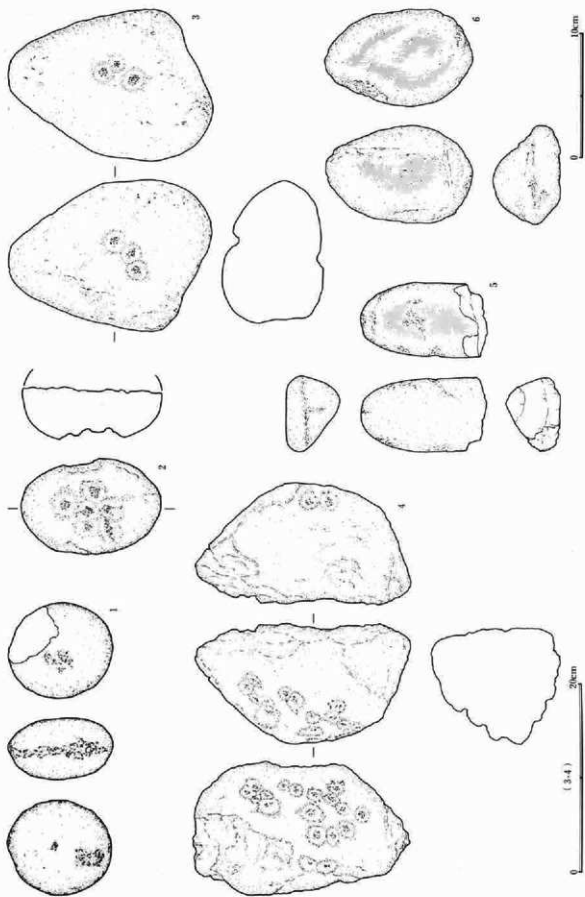
第130回 包含層出土の石器(7)

3. 包含層出土の遺物



第131図 包含層出土の石器(8)

III 縄文時代の遺構と遺物



第132図 包倉遺址出土の石器(9)

IV 平安時代の遺構と遺物

掘下八帯遺跡の調査範囲は東西に長く、この中で竈を伴う住居跡は東側のC区に集中している。さらに北南方向に住居跡が有るものとも理解される。

住居跡は縄文時代の住居跡を除くと平安時代に編入される時期が想定される。平安時代の住居跡は全部で9軒が確認された。住居跡以外では掘立柱建物跡が1棟確認されているが出土遺物が確認されず明確な時期は不明であるが遺跡内の配置の関係から住居跡群に伴うものと考えられる。住居跡はすべて竈を東壁に付設しており、住居跡の主軸方位は $N-90^{\circ}$ ～ $114^{\circ}-E$ の幅におさまるものである。^(註)

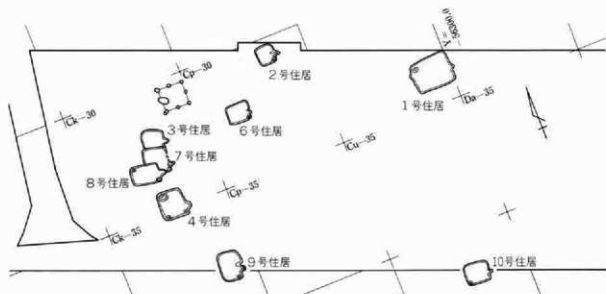
住居跡の配置はC区中央部に空白部を持ち取り囲

むように配置される様相が見られる。

各住居跡からの出土遺物の中には墨書土器の割合が高くみられる。この中で判読が可能なのは7号住居跡出土土坏の「南」、同7号住居跡出土土坏「井」等の他に1・9号住居跡から墨書土器が出土している。

住居跡出土の遺物の時期はほぼ短い時間幅に取まることが想定され、土師器の壺は口縁部が「コ」の字を呈する段階に集中しており、羽釜の出土はない。

(註) 住居跡の主軸方位の算定の方法は竈が付設される壁(本遺跡では東壁)の竈を挟み壁の上端の一番外側に張り出している部分同士を直線で線を引き、さらにこの線から直角に竈の中心部を通る線をその住居跡の主軸方位とした。



第133団 平安時代の遺構 1:600

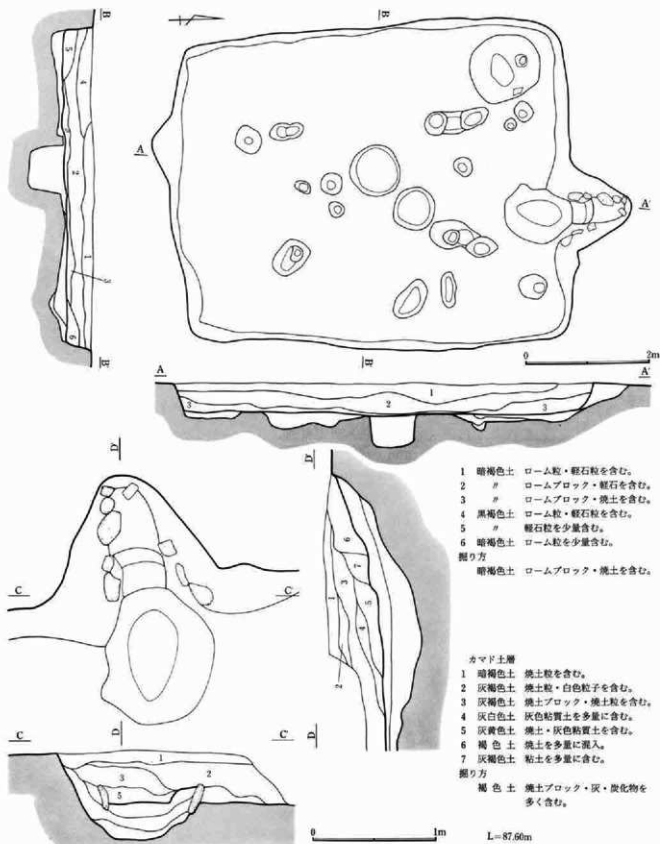
1. 住 居

1号住居跡

C区北東部に位置し $x \cdot y-33 \cdot 34$ の範囲にある。遺跡内では東端にある。他の遺構との重複はない。西壁やや北よりに幅80cm、長さ50cmの張り出しがある。規模は長辺6.7m、短辺5.1mであり平面形態は隅丸方形を呈する。壁高は約40cm～50cmを測り、主軸方位は $N-92^{\circ}-E$ である。床面はほぼ平坦をな

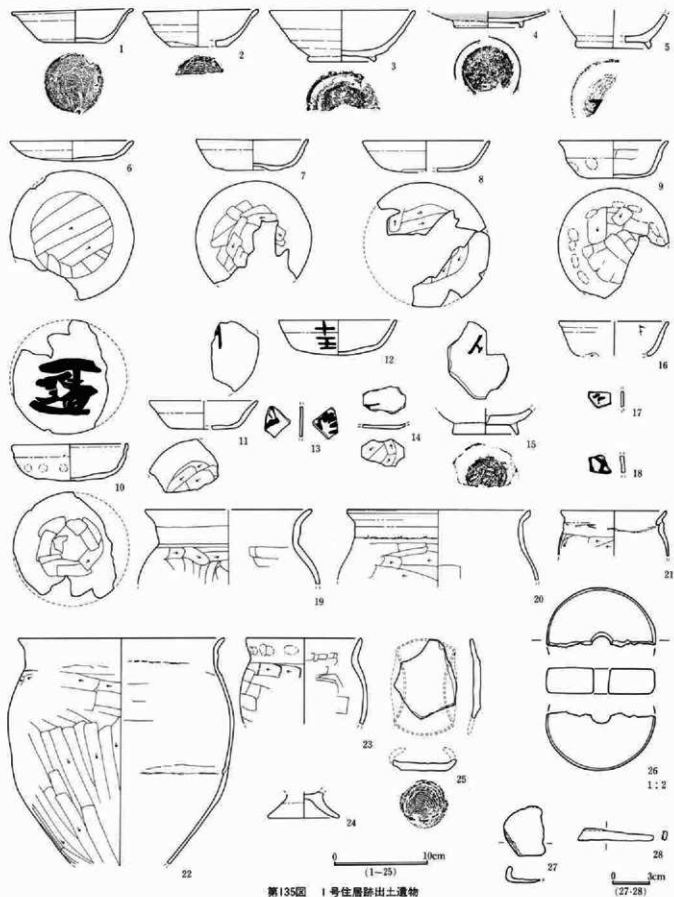
し、貯蔵穴・壁周溝等の諸施設は確認されなかったが北西部に小穴が確認されている。規模は径約90cmを測る。床掘り方面から柱穴跡と思われる小穴が確認された。柱穴と思われる小穴は各々P1～4とし、規模は径約30cm～60cmを測る、また個々の深さも40cm～50cmと平均している。竈は東壁やや南寄りに検出された。竈全面に灰層が広がり規模は幅約2.5m、長さ約2.2mを測る。袖は確認できず、燃焼部幅約55cm、同長約50cmを測る。

IV 平安時代の遺構と遺物



第134図 I号住居跡

1. 住居



第135图 1号住居跡出土遺物

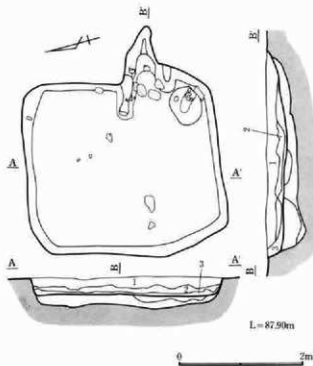
IV 平安時代の遺構と遺物

2号住居跡

C区東部に位置しs-30の範囲にあり、6号住居跡の北東にある。他の遺構との重複はない。規模は長辺3.2m、短辺2.7mを測る。平面形態は正方形に近い隅丸方形を呈する。主軸方位はN-105°-Eである。壁高は約30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、壁周溝・柱穴等の諸施設は確認されていない。竈の

東コーナーに貯蔵穴と思われる小穴が検出された。規模は径約60cm、深さ25cmを測る。

竈は東壁やや南寄りに検出され、左側には床面に壁から約50cm、幅約30cmを測り張り出している。規模は袖幅約70cm、燃焼部長約70cm、煙道部約30cmを測る。また電燃焼部内からは石が検出され竈の構築材の可能性が考えられる。



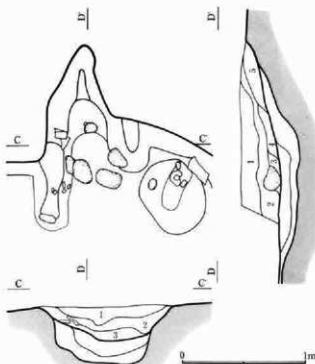
1 黒褐色土 軽石粒を多量に含む。

2 暗褐色土 軽石粒を少量含む。

3 黄褐色土 軽石粒を少量含む。

掘り方

黒褐色土 ロームブロックを含む。



カマド土層

1 暗褐色土 軽石粒を含む。

2 # 1よりやや明るい。軽石粒含む。

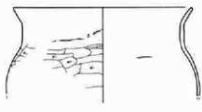
3 褐色土 軽石粒・焼土・炭化物含む。

4 茶褐色土 軽石粒を少量含む。

5 # 軽石粒を含み、やや軟弱。

掘り方

暗褐色土 暗褐色土・焼土・炭化物・ロームを含む。



0 10cm

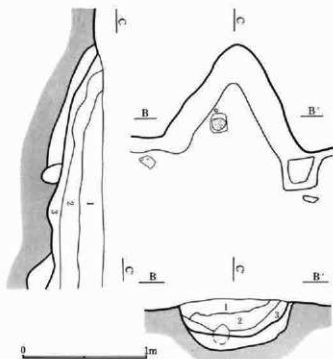
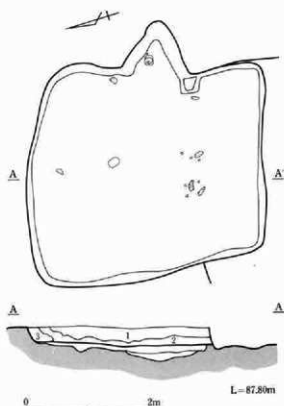
第136図 2号住居跡・出土遺物

3号住居跡

C区ほぼ中央に位置しm・n-31・32の範囲にある。6号住居跡の西にあり、7号住居跡と重複している。新旧関係は7号住居跡より旧く南側の壁で7号住居跡により南壁を壊されている。規模は長辺3.9m、短辺3.4mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。

主軸方位はN-106°-Eである。壁高は北壁で約25cm~30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし壁周溝・柱穴・貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。

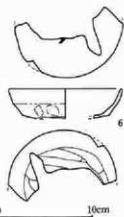
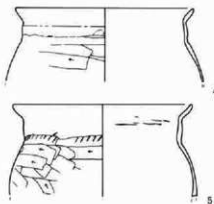
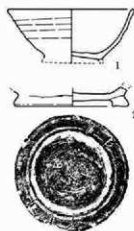
竈は東壁ほぼ中央に検出され、右側の袖が幅約20cmで床面に20cm張り出して検出された。燃焼部幅は約70cm、同長約110cmを測る。



1 黒色土 軽石粒を含む。
2 暗褐色土 ローム粒を含む。
3 褐色土 ロームブロックを含む。
掘り方
黒褐色土 灰・ロームブロックを含む。

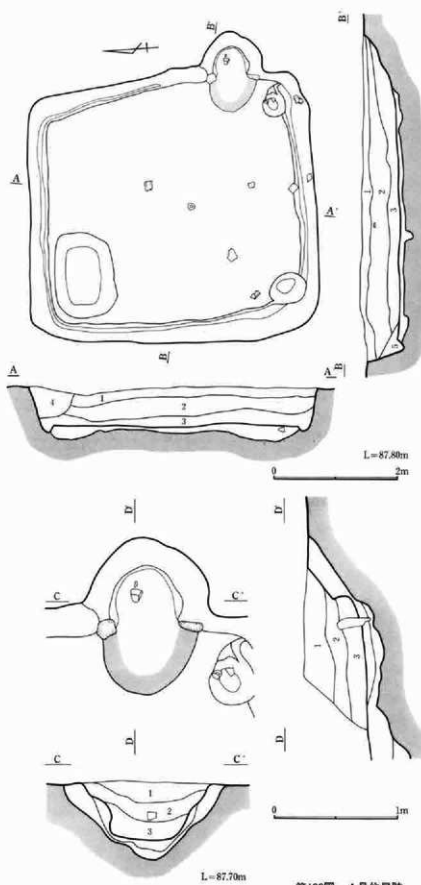
カマド土層

1 黒褐色土 軽石粒を含む。
2 暗褐色土 灰・焼土を含む。
3 # 焼土・ローム粒を含む。
掘り方
暗褐色土 ローム粒を含む。



第137図 3号住居跡・出土遺物

IV 平安時代の遺構と遺物



4号住居跡

C区ほぼ中央に位置しm・n-34・35の範囲にあり、8号住居跡の南にある。他の遺構との重複はない。規模は長辺4.7m、短辺4.2mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。主軸方位はN-95°-Eである。壁高は約60cm~70cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、柱穴・貯蔵穴は検出されていない。壁周溝が四周に検出された。規模は幅約5cm~15cmを測る。住居跡北西部1、南東部2、南西部3の小穴が検出された。規模は1、125cm×95cm、深さ約70cm、2、径約50cm、深さ約25cm、3、径約50cmを測る。

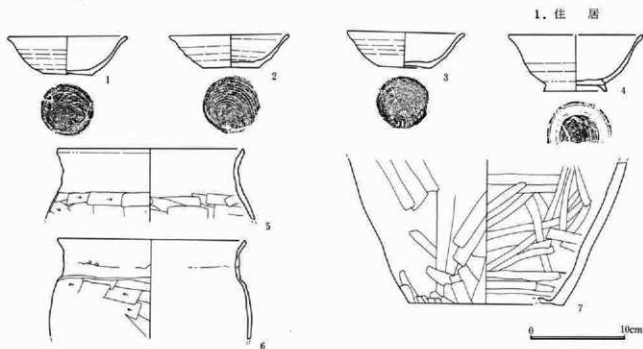
竈は東壁南寄りに検出された。規模は燃焼部幅約70cm、同長約70cmを測る。

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む。
 - 2 黒褐色土 軽石粒を含む。
 - 3 褐色土 軽石粒・炭化物を含む。
 - 4 茶褐色土 ロームブロックを含む。
 - 5 黒褐色土 土粒細かくしまりあり。
- 掘り方
ロームブロック・粘土粒を含む。

カマド土層

- 1 黒褐色土 軽石粒・軽石を含む。
 - 2 暗褐色土 焼土・炭化物・粘土を含む。
 - 3 # 焼土・炭化物を多く含む。
- 掘り方
黄褐色土 炭化物・焼土・ローム粒を含む。

第138図 4号住居跡



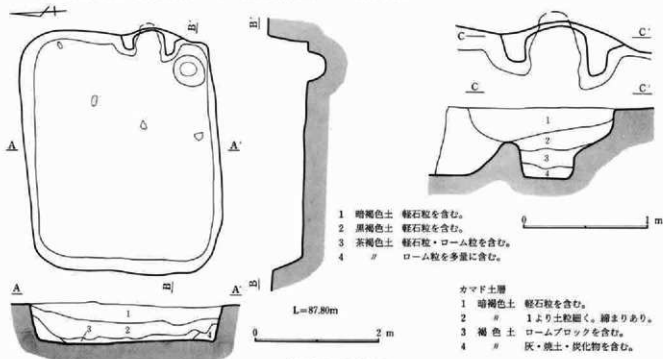
第139図 4号住居跡出土遺物

6号住居跡

C区中央やや北部に位置し $Q \cdot r-31 \cdot 32$ の範囲にある。3号住居跡の東にあり、他の遺構との重複はない。規模は長辺3.7m、短辺3.4mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。主軸方位は $N-98^{\circ}-E$ である。壁高は約50cmを測る。壁周溝・柱穴等の諸施設は検出されていない。南東コーナー西壁貯蔵穴と

思われる小穴が検出された。規模は径約50cm、深さ約30cmを測る。

竈は東壁南寄りに検出された。規模は袖幅60cm、燃焼部長50cmを測る。袖部は両袖部とも約20cm床面に張り出している。また袖部の遺存も良く左袖は下幅40cm、高さ35cmを測り、右袖は下幅35cm、高さ25cmを測る。



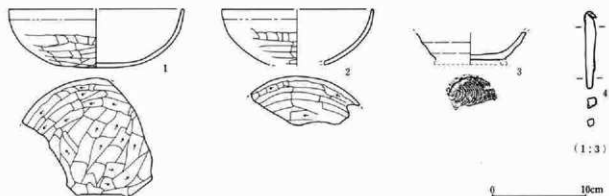
第140図 6号住居跡

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む。
- 2 黒褐色土 軽石粒を含む。
- 3 茶褐色土 軽石粒・ローム粒を含む。
- 4 # ローム粒を多量に含む。

カマド土層

- 1 暗褐色土 軽石粒を含む。
- 2 # 1より土粒細く。綿まりあり。
- 3 褐色土 ロームブロックを含む。
- 4 # 灰・焼土・炭化物を含む。

IV 平安時代の遺構と遺物



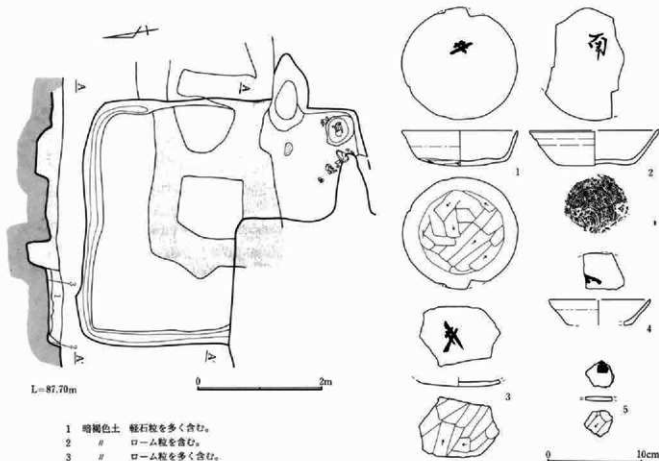
第141図 6号住居跡出土遺物

7号住居跡

C区は中央に位置しm・n-32・33の範囲にある。4号住居跡の北にあり、北側で3号住居跡、南側で8号住居跡と重複している。新旧関係は3号住居跡より新しく、8号住居跡より古い。このため8号住居跡により、南側を切り崩されている。規模は一辺約4.7mであると思われる。主軸方位はN-114°

-Eである。壁高は約70cmである。床面はほぼ平坦をなし、柱穴は検出されていない。東・北・西壁に周溝が検出された。規模は幅約15cm~30cmを測る。南東コーナーに貯蔵穴と思われる小穴が検出された。規模は径約45cm、深さ約30cmを測る。

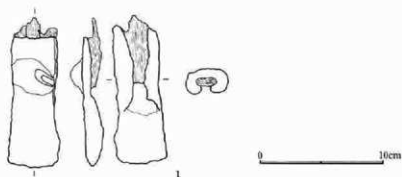
竈は東壁南寄りに検出された。規模は燃焼部幅約70cm、同長約1mを測る。



L=87.70m

- 1 暗褐色土 軽石粒を多く含む。
- 2 # # ローム粒を含む。
- 3 # # ローム粒を多く含む。

第142図 7号住居跡・出土遺物



第143図 7号住居跡出土遺物

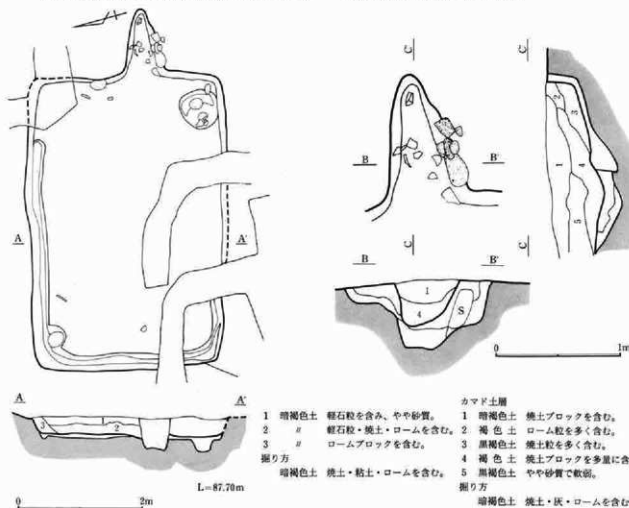
8号住居跡

C区ほぼ中央部に位置し1・m-32・33にあり、北側で7号住居跡と重複している。新旧関係は7号住居跡より新しい。規模は4.6m、短辺3.3mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。主軸方位はN-101°-Eである。壁高は50cm~60cmを測る。

床面はほぼ平坦をなし、柱穴は検出されていない。

東南コーナーに貯蔵穴と思われる小穴が検出された。規模は径約60cm、深さ約30cmを測る。北壁の西側2/3の部分、西壁、南壁の西側の一部分に周溝が検出された。規模は幅約10cm~20cmを測る。

竈は東壁やや南寄りに検出された。規模は燃烧部幅約1.2m、同長約1.2mを測る。



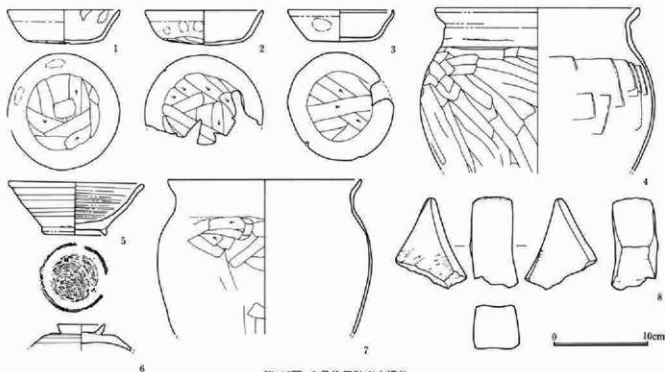
- 1 暗褐色土 軽石粒を含み、やや砂質。
2 // 軽石粒・焼土・ロームを含む。
3 // ロームブロックを含む。
掘り方
暗褐色土 焼土・粘土・ロームを含む。

カマド土層

- 1 暗褐色土 焼土ブロックを含む。
2 褐色土 ローム粒を多く含む。
3 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
4 褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
5 黒褐色土 やや砂質で軟弱。
掘り方
暗褐色土 焼土・灰・ロームを含む。

第144図 8号住居跡

IV 平安時代の遺構と遺物



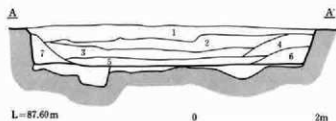
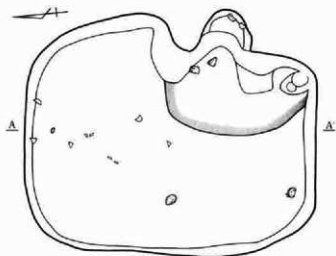
第145図 8号住居跡出土遺物

9号住居跡

C区中央南部に位置しn・o-37・38の範囲にある。4号住居跡の南にあり、他の遺構との重複はない。規模は長辺4.8m、短辺3.9mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。主軸方位はN-99°-Eである。壁高は約50cm-60cmを測る。

床面はほぼ平坦をなし、壁周溝・柱穴等の諸施設は検出されていない。南東コーナーに貯蔵穴状の落ち込みが確認された。竈全面に幅約2m×1.5mの範囲で灰層が確認されている。

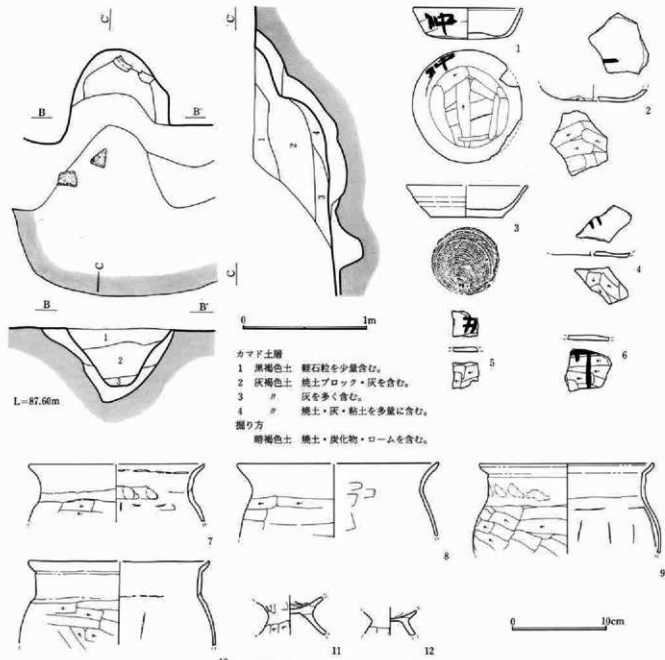
竈は東壁南寄りに検出された。規模は袖幅約1.4m、燃焼部長約1mを測る。袖は左側に約1m床面に張り出している。



- 1 暗褐色土 軽石粒・ローム粒を含む。
 - 2 # ローム粒を含む。
 - 3 黒褐色土 ローム粒を含む。
 - 4 暗褐色土 軽石粒・ロームブロックを含む。
 - 5 # ロームブロックを含む。
 - 6 暗褐色土 ローム粒を含む。
 - 7 褐色土 ロームを多く含む。
- 掘り方
暗褐色土 焼土・粘土を多量に含む。

第146図 9号住居跡

1. 住居



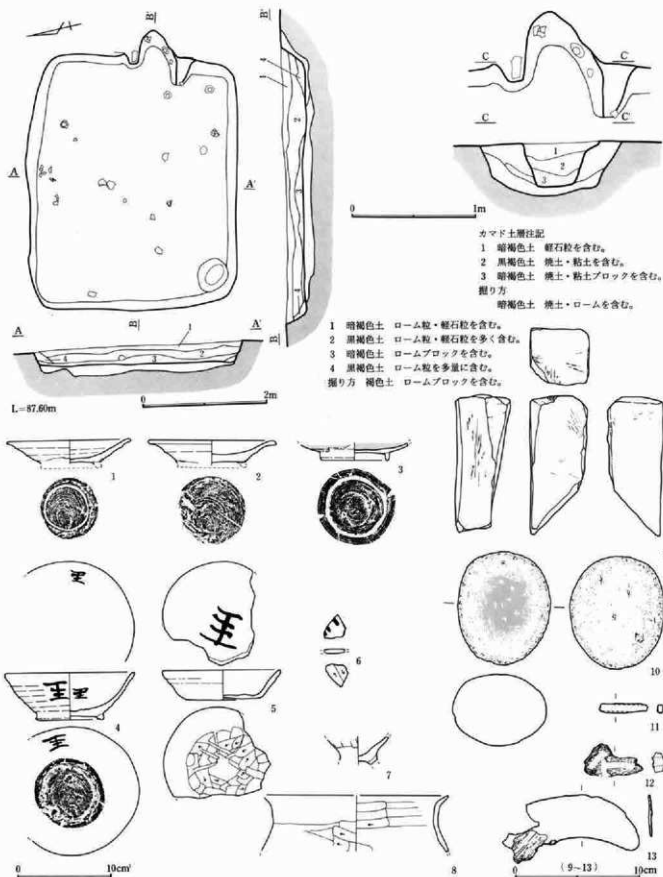
第147図 9号住居跡・出土遺物

10号住居跡

C区東南部に位置しw・x-41・42の範囲にある。9号住居跡の東にあり、他の遺構との重複はない。規模は長辺4m、短辺3.5mを測り、平面形態は隅丸の長方形を呈する。主軸方位はN-108°-Eである。壁高は約20cm~30cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、壁周溝・柱穴・貯蔵穴等の諸施設は検出されていない。南西コーナーに小穴

が検出された。規模は径約45cm、深さ約15cmである。竈は東壁やや南寄りに検出された。規模は燃燒部幅約80cm、同長約70cmを測る。右側袖部が床面に約30cm張り出して検出された。

IV 平安時代の遺構と遺物



第148図 10号住居跡・出土遺物

2. 掘立柱建物

1号掘立柱建物跡

C区北側に位置しN・O30・31の範囲にある。2間×2間の建物跡である。西側中間の小穴は当初54号土坑として処理し、ビットナンバーはふされなかったが本建物に関わるものと考えられる。

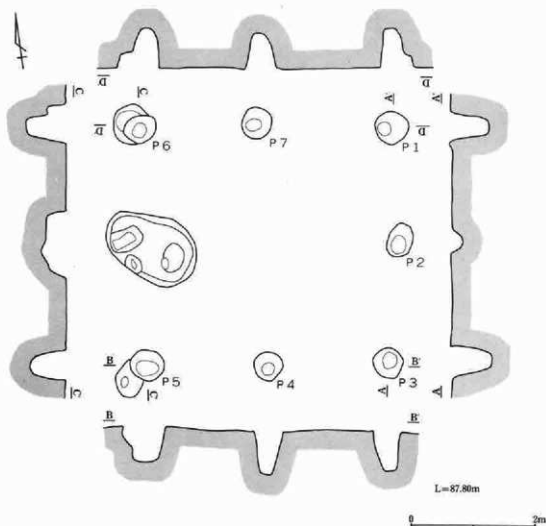
ビットは北東部から時計回りに1～7までふつた。

各々の計測値を以下に記す。

柱間はP-1・2間は約1.8m、P-2・3間は約1.8m、P-3・4間は約1.8m、P-4・5間は約1.8m、P-5・6間は3.3m、P-6・7間は1.8mを測る。

柱間は平均して約1.8mが多く1間取りの間隔は1尺を約30cmに換算すると6尺取りが見てとれる。

	上端	下端	深さ
P-1	50cm×55cm	22cm×21cm	61.5cm
P-2	56cm×40cm	40cm×24cm	18.5cm
P-3	49cm×45cm	27cm×24cm	65.0cm
P-4	45cm×47cm	19cm×21cm	71.5cm
P-5	48cm×54cm	25cm×34cm	57.0cm
P-6	46cm×50cm	24cm×24cm	64.5cm
P-7	50cm×49cm	21cm×27cm	5.9cm



第149図 1号掘立柱建物跡

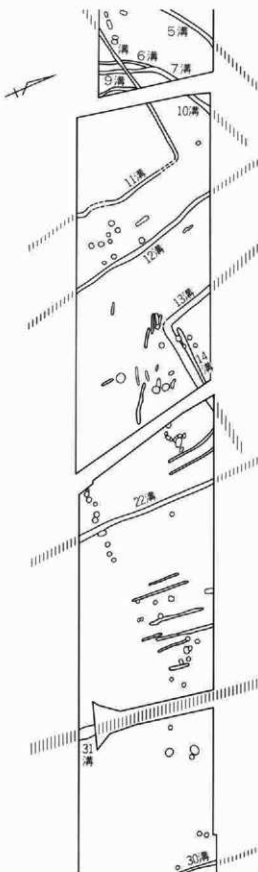
V 時期不明の遺構と遺物

調査の結果、南北に平行する数条の溝の他、井戸や土坑多数を検出した（第150図、付図3参照）。上述した遺構にはその遺構に伴う遺物は存在せず、遺構の構築年代は想定できない。ただ、地元に残る絵図や地元の伝承を総合するなら、少なくとも近世に遡る可能性が高い。

溝は約30条を検出した。A区uライン付近に3条の溝を検出した。溝は等高線に平行して構築され、その埋設土層の上位には二ツ岳火山灰（FA）が堆積していた。規模は幅1.5m～1.8m・深さ0.5m～0.8mを測り、その断面形状は逆台形状を呈していた。埋設土層には、流水していた可能性を示す砂質土は観察されない。

地形に沿う5号～7号・9号溝を除く他の溝は、ほぼ南北方向に走行する。特に、11号溝や15号溝はL字状を呈し、明確に区画を意識している。その内側には、掘立遺構や井戸など区画に伴う明確な遺構や溝の構築年代を示す遺物は未検出である。11号溝が幅1.5m前後・深さ0.4m、15号溝が2.0m・深さ0.8mを測る。11号溝・15号溝とも暗褐色土を主体に自然埋没の状態（第151図）を示しており、特に11号溝は二ツ岳火山灰（FA）を埋設土層の上位部分に堆積していた。上述した区画の間には12号溝が平行して検出され、また、22号溝（B区vライン）や31号溝（C区jライン）が南北に走行するなど全体が明確な区画を意識しているようにみえる。12号溝や22号溝が幅0.9m～1.1m・深さ0.2m～0.4mを測り、その規模が類似しているのに対し、幅2.8m～3.0m・深さ80cmを測る31号溝は、規模が大きく異なり、また、底面には凹凸が存在し、その性格は12号溝や22号溝と相違する可能性がある。23号～29号の溝も南北に走行している。

5号～7号・9号溝は等高線に平行して構築され、この溝は流水を目的に構築した可能性が最も強い。一方、他の溝は全面性に富み、ある意味では地形を



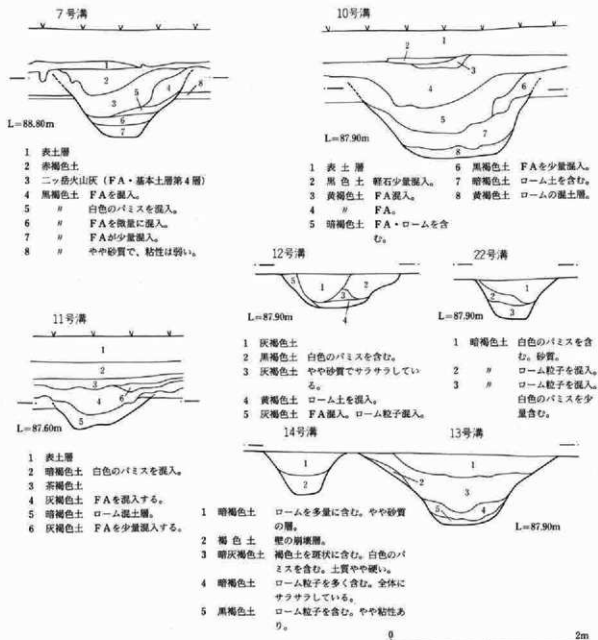
第150図 時期不明の遺構分布

無視して占地している。L字状の区画や、この区画の中間に位置する溝は、全体が有機的に結び付き、機能していた可能性が高い。5号～7号・9号溝とは、その性格や機能が相違するのではないだろうか。

土坑は約60基を検出した。長方形を呈す土坑と、円形を呈す土坑の2種が存在する。長方形を呈す土坑はA区に、円形を呈す土坑は11号溝の東側や15号溝の南側、31号溝の東西に集中して分布する傾向が指摘されよう。規模も多種多様で、その性格など

不明な点が多い。

井戸は4基を検出した。円形の平面形状を基調に、径2.2m前後・深さ3.3m～3.6mを測る大形の井戸と、径1.0m前後・深さ2.4m～3.3mを測る小形の井戸の2種が存在する。前述した方形の区画や溝との関係は不明確である。なお、1点井戸の覆土より墨書土器1点と須恵器・壺1点(第175図)が出土している。



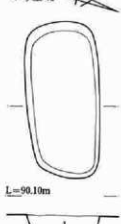
第151図 土層の堆積状態(7・10-14・22号溝)

V 時期不明の遺構と遺物

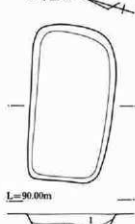
2号土坑



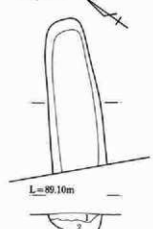
4号土坑



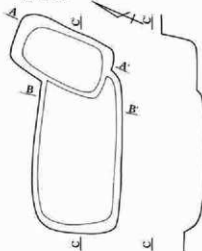
5号土坑



31号土坑



6号土坑



- 1 暗褐色土 ローム粒子混入。
2 # ローム土を多く含む。



- 1 暗褐色土 ローム粒子混入、やや砂質。
2 # ローム土を混入、やや砂質。

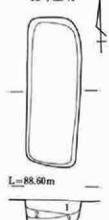


- 1 黒色土 ローム粒子・軽石混入。
2 暗褐色土 ローム土を多量に混入。

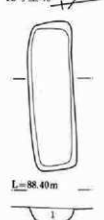
12号土坑



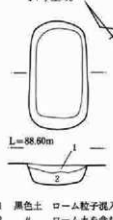
13号土坑



15号土坑



14号土坑



- 1 黒色土 ローム粒子・白色のバミスを混入。
2 # ローム粒子混入。
3 # ローム土を含む。

- 1 黒褐色土 ローム粒子を少量混入。

- 1 黒色土 ローム粒子混入。
2 # ローム土を含む。



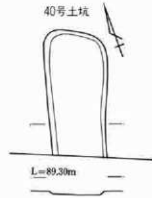
第152図 土坑(1)

V 時期不明の遺構と遺物



17号土坑

L=88.00m



40号土坑

L=89.30m

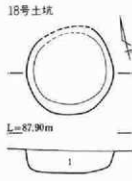


41号土坑

L=88.30m

- 1 暗褐色土 白色のバミスを混入。
- 2 # 1層より粒子細かい。

- 1 灰褐色土 ローム土及び炭化物を含む。粘性やや有る。



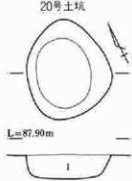
18号土坑

L=87.90m



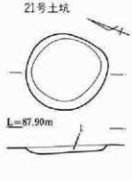
19号土坑

L=87.90m



20号土坑

L=87.90m



21号土坑

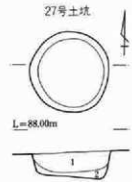
L=87.90m

- 1 暗褐色土 褐色土・黒色土・灰色土の混土層。

- 1 暗褐色土 白色のバミスを混入。
- 2 # 1層よりやや粘性に富む。白色のバミスを混入。

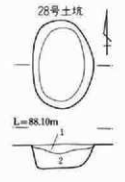
- 1 暗褐色土 褐色土・黒色土の混土層。白色のバミスを混入。

- 1 暗褐色土 褐色土・灰色土の混土層。



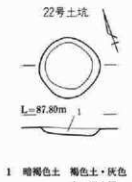
27号土坑

L=88.00m



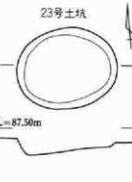
28号土坑

L=88.10m



22号土坑

L=87.80m



23号土坑

L=87.56m

- 1 黒褐色土 ローム土を混入。
- 2 黄褐色土 ローム土を混入。

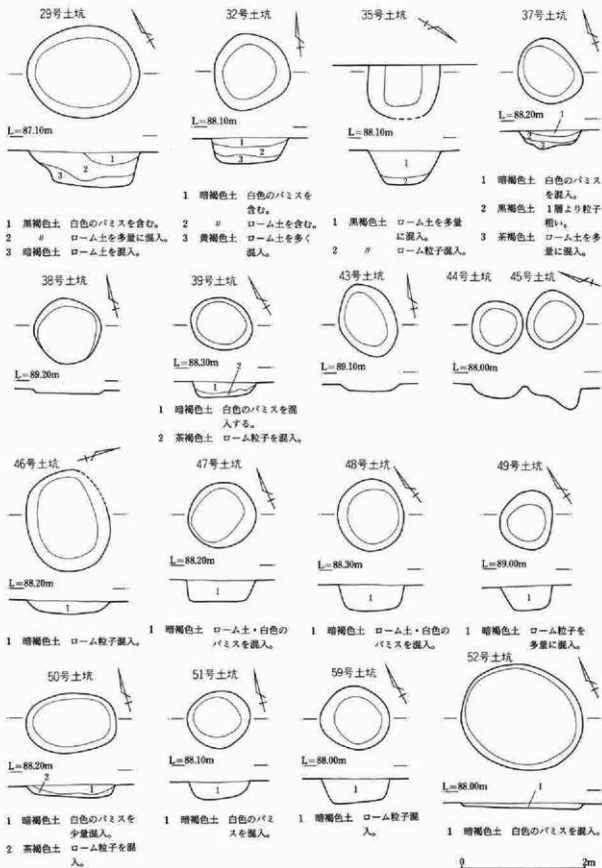
- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土 ロームの混土層。

- 1 暗褐色土 褐色土・灰色土の混土層。粘性は弱く、軟質。



第153図 土坑(2)

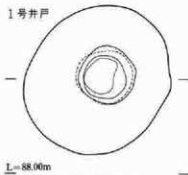
V 時期不明の遺構と遺物



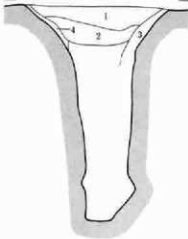
第154図 土坑(3)

V 時期不明の遺構と遺物

1号井戸



L=88.00m



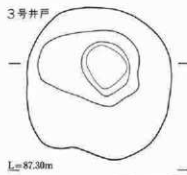
2号井戸



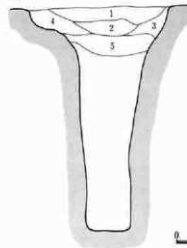
L=88.10m



3号井戸



L=87.30m



4号井戸



L=87.80m

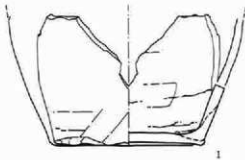


- 1 黒褐色土 白色のパミス・ローム
粒子混入。
2 暗褐色土 ローム土と
黒色の凝土層。
3 # ローム土を
多量に混入。

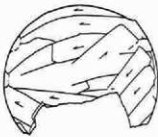
- 1 暗褐色土 ローム土を多く混入。
2 #
3 # 白色のパミスを少量混入。
4 黒褐色土 白色のパミスを少量混入。
5 # ローム土を多く含む。

0 2m

- 1 暗褐色土 粘性なし、白色のパミスを少
量混入。
2 # 粘性若干あり。白色のパミス
を含む。
3 # 粘性若干あり。白色のパミス
を少量混入。
4 黄褐色土 粘性なし。ローム土と黒色土
の凝土層。



1



2

0 10cm

第155図 1~4号井戸・出土遺物

VI ま と め

今回の発掘調査では、旧石器時代石器群を主体に、縄文時代、奈良・平安時代および中世・近世に亘る各時代の遺構・遺物を検出した。

八幡山丘陵の南側斜面から出土した旧石器時代の石器群は、上武道路関係の一連の事業の中で最大の規模を持つ。石器群は暗色帯の上位部分に出土しており、出土石器の特徴からA T降灰直前段階の所産である可能性が高い。接合資料も豊富で、そこには一定の剥離システムと、地域性の濃い剥片剥離の実態が存在しており、地域の剥片剥離を分析する上でも、有効な検討材料を提供し得た。ただ、石器が確実に分布する路線北側の地点が目の前で破壊され、悔が残る。この付近は園場整備事業関連で以前発掘しているとはいえ、その地点は全く調査対象から外れていた。10年以上も前に開発の許可が下り、行政区画の再編という特種事情を考慮してなお、遺跡の破壊は惜まれる。文化財サイドの慎重な対応が望まれよう。

縄文時代については、住居・土坑の遺構類の他、土器・石器の遺物類も多く出土した。遺構類は遺跡西側の八幡山の南斜面を主体に分布していた。竪穴住居は1軒を確認しており、出土土器から判断して諸磯B式期に位置づけられよう。住居の形態は不整円形を呈し、壁・床を検出したのにとどまり、炉・柱穴は確認してない。群馬県内でも前期住居の調査事例が増加してきている。その住居形態を概観してみても、炉・支柱構造には極めて高い規格性が看取され、以降の縄文住居定型化の確立がこの時期にあることが認められている。今回の調査事例は竪穴住居の平面形状、壁や床を確認したのみで、住居施設の必要条件である炉や柱は不明だが、遺構確認・調査経過とも関連して、住居が検出面であるローム層に類似する埋没土層に覆われ、遺構形状が極めて困難で、また、周辺のローム層が旧石器時代石器群の包含層でもあり、住居の確認・精査で一部石器が出土したこと、床面が暗色帯中に有り、柱穴の確認を難

しくしたこと、関連施設の検出を制約したのも事実である。4基の土坑も遺構確認に困難を生じる埋没状態を示していた。平面形状が円形を呈し、住居に隣接して分布する土坑も多く、居住域内に併設した貯蔵施設との想定も可能だが、確たる根拠は乏しい。

平安時代については、遺跡東側の台地縁辺に備えて住居9軒・掘立柱建物1棟からなる居住域が存在した。この時期に伴う生産域は不明だが、この東側には低地が存在しており、この集落を支えた生産域である可能性が高い。この低地部分は試掘段階で東桂川の旧流路（現在、遺跡北側約1kmの地点で中世用水遺構・女堀に流入して、粕川に合流）であることを確認した。また、部分的にAs-Bと耕作に適当な黒色土層の堆積も確認しており、埋没水田の存在した可能性があるからでもある。遺跡の周辺は古墳時代前期より展開する集落が卓越する地域だが、そうした地域でも、狭く条件の悪い低地開発を要した時代背景を、この遺跡の成立は暗示しているといえよう。

また、遺跡中央付近には溝群・土坑群・小穴群が点在していた。このなかには、方形区画の溝や建物に伴う柱穴も含まれるものと想定されたが、遺跡内では、これら遺構群の性格を捉えるまでには至らず、課題を残した。上記遺構の分析を通じ、この遺跡の中・近世の様相を多少なりとも把握する目的から、文献検索や周辺調査も実施したけれども、残念ながらここに報告するだけの十分な成果を上げられていない。

各々の時代とも、資料提示に終始した感が強く、成果を含め問題点の指摘が充分ではない。ここで得られた調査資料については、今後とも広く活用して戴くことを希望するとともに、発掘調査を行い直接担当した者としても、この遺跡の内容をより明らかにしていくため、引続き着目していきたいと思う。以上、簡単ではあるが調査のまとめとしたい。

遺物観察一覧表

計測値一覧表

凡 例

1. 本報告書の観察表・一覧表は、図示した遺物に限定して掲載した。
2. 遺物観察表中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修「標準土色帖」を使用した。
3. 長さ・幅は、小数点第2位を四捨五入し、cm単位で表示した。
4. 遺物重量の計測には電磁式はかり(EY-2200A)を使用し、小数点第3位を四捨五入しg単位で表示した。
5. 「器種」の欄の略号は次の事を示す。

ナイフ：ナイフ形石器	槌：槌形石器
加刺：加工痕のある剝片	磨斧：磨製石斧
使刺：使用痕のある剝片	打斧：打製石斧
三角錐：三角錐形石器	片刃：片刃石器
スタンプ：スタンプ形石器	特磨：特殊磨石
6. 「石材」の欄の略号は次の事を示す。

黒安：黒色安山岩	黒頁：黒色頁岩
粗安：粗粒安山岩	珪頁：珪質頁岩
石閃：石英閃緑岩	チ：チャート
灰安：灰色安山岩	点頁：点紋頁岩
変安：変質安山岩	変玄：変玄武岩
赤珪：赤色珪質岩	溶凝：溶結凝灰岩
7. 接合資料の剝離順序の項では、○印は剝離の想定可能な剝片を、→印は同一打面から連続して剝離していること、→印は90°打面転移して剝片剝離していること、→印は180°打面転移して剝片剝離していることをそれぞれ示している。

出土遺物観察表

1号住居跡(第135図 P.L44)

No・種様	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第135図1 須恵杯	口径(13.2) 高さ 3.4 底径(6.6)	カマド 掘り方 埋土 1/3	右回転クローロー回糸→無調整。クローロ間隔幅広く、内面平滑。底部は僅かに凹みあり。平面形は楕円形に近む。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③灰色。
第135図2 須恵杯	口径(12.3) 高さ 3.8 底径(6.2)	No27 1/3	右回転クローロー回糸無調整。クローロ狭やや弱い。内面はクローロ残さず平滑に仕上げている。外面に接合痕残す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。
第135図3 須恵 高台付椀	口径(15.6) 高さ[5.4] 底径(7.0)	No16 貯蔵穴 1/2割	右回転クローロー回糸→クローロ使用高台取付け。外面クローロ痕全体に強い。内面は平滑に仕上げている。高台部厚減。	①砂粒少し含む。 ②還元。 ③灰白色。
第135図4 灰輪土器	高さ[2.0] 底径 6.8	No15 カマド 割→底部	右回転クローロー回糸へ切→クローロ使用高台取付け。輪は潰跡けか内面厚く磨輪されている。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。 ④内面底部重ね焼き痕残る。
第135図5 須恵 高台付椀	高さ[4.0] 底径(8.2)	埋土 割→底部1/3	右回転クローロー回糸→クローロ使用高台取付け。外面のクローロ痕弱い。内面平滑に仕上げている。	①砂粒含む。 ②還元。 ③によい褐色。 ④底部外面墨書有り。
第135図6 土師杯	口径 13.4 高さ 2.2	No25 貯蔵穴 埋土 口縁部少し欠損	外底の削りは乾燥の進んだ状態で鋭く施す。口縁のナゲは強く工具の擦痕残す。内面のナゲ難で平滑さ欠く。	①黄砂、砂礫、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③灰色。
第135図7 土師杯	口径 12.3 高さ 3.2	No10 貯蔵穴 埋土 1/2	外底の削りは鋭く、砂粒の混れ残る。外底中心部無調整部分有。口縁下半無調整。内面同心円状・底部平滑さ欠く。	①石英粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第135図8 土師杯	口径 13.5 高さ 3.4	貯蔵穴 1/2	外底の削りやや乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半無調整。内底のナゲ凹凸し平滑さ欠く。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③赤褐色。 ④外面底部スス付着。
第135図9 土師杯	口径 12.0 高さ 3.9 底径 8.0	No28 1/2強	外底の削りは乾燥の進んだ状態で不規則に施す。口縁下半は無調整で指頭痕強く出る。内面のナゲ平滑さ欠く。	①砂礫、雲母、石英含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第135図10 土師杯	口径 12.4 高さ 3.8	埋土 口縁部3/4欠損	外面の削りは乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半は不明確な調整で指頭痕が出る。外底の中心部未調整部分有り。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③内一褐色、外一明赤褐色。 ④内面に不明確な墨書有り。
第135図11 土師杯	口径(11.9) 高さ 3.0 底径(7.2)	No7 少片	外底の削りは乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半無調整。口縁部内外面共にナゲ強い。内底丁寧なナゲで平滑である。	①石英、砂礫、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第135図12 土師杯	口径 12.7 高さ 3.6	掘り方 貯蔵穴 埋土 底部少し欠損	外底の削りは乾燥の進んだ状態で鋭く削りの単位は不規則で測れない。内面は廣ろしてナゲ強い者目状の擦痕残す。	①砂礫、赤色粘土粒、石英含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④側面に墨書。(十五)
第135図13 土師杯		埋土 破片	第135図14と同巧。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③によい褐色。内外面に墨書あるが不鮮明。

1号住居跡 (第135図 P.L.4)

No.・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第135図14 土師杯		埋土 底部少片	外底の削りはやや強い。器面は凹凸し平滑さ欠く。内面のナゲ丁寧。	①白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。 ④内面に墨書があるが小破片のため不鮮明。
第135図15 須恵 高台付壺	高さ〔 2.7〕 底径〔 7.0〕	埋土 底部1/2	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。内底僅かに凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰白色。 ④底部内面墨書有り。
第135図16 土師杯	口径〔 6.0〕 高さ〔 3.7〕	貯蔵穴 少片	外底削りは不鮮明で、口縁部工具状でナゲ。内面は布状の拭うような擦痕が残るが平滑に仕上がっている。	①白色、褐色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③褐色。 ④内面に墨書。少片のため不鮮明。
第135図17 土師杯		埋土 底部少片	第135図13・18と同巧。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④少片である。墨書？不鮮明。
第135図18 土師杯		埋土 底部少片	第135図13と同巧。	①白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。 ④少片。墨書？不鮮明。
第135図19 土師壺	口径〔18.2〕 頸部〔15.9〕 高さ〔 7.9〕	埋土 口縁部少片	外面の削りは鋭く、砂粒の移動残る。口縁部強いナゲ調整。内面ナゲ丁寧である。	②酸化。 ③褐色。
第135図20 土師壺	口径〔20.0〕 高さ〔 8.0〕	埋土 口縁部少片	輪横みか。外面の削りは鋭く、頸部辺で無調整部分残る。肩部で粘土を削り落としている。内面のナゲ丁寧である。	①砂粒含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
第135図21 土師 小型壺	口径〔11.5〕 頸部〔10.6〕 高さ〔 4.8〕	貯蔵穴 埋土 口縁部少片	輪横みか。外面の削りは強く、頸部のナゲは推で削り時の工具痕残す。内面頸部に明瞭な接合痕有り。	①雲母、砂粒含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第135図22 土師壺	口径〔22.0〕 頸部〔20.4〕 胴部〔24.0〕 高さ〔24.6〕	No1 No29コマ ド カマド 削り方 口縁～胴部1/4	輪横みか、外面削り丁寧で長い。砂粒の移動少ない。内面のナゲ丁寧で平滑に仕上がっている。	①黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④二次加熱受ける。
第135図23 土師 小型壺	口径〔12.5〕 頸部〔11.7〕 胴部〔13.9〕 高さ〔 9.1〕	埋土 口縁～胴部少片	外面の削りは鋭く、砂粒の移動残す。口縁部指痕残す。内面は細かい板状工具でナゲ擦痕残す。	①砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
第135図24 土師 台付壺	高さ〔 2.8〕 脚部 7.6	No40 脚部のみ	内外面共に布状工具でナゲ、器面が凹凸して平滑さ欠く。	①砂粒、石英、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③暗褐色。
第135図25 須恵耳皿	口径縦〔10.2〕 横〔 7.1〕 高さ〔 1.3〕 底径 5.0	埋土 口縁～底部2/3	右回転ロクロ→回糸。やや粗雑な糸切のため外底に粘土バリ付着。内面擦状工具による回転ナゲ痕残す。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③洗黄～にぶい褐色。
第135図26 紡織車	縦〔 5.7〕 横〔 6.0〕 厚み 1.4 重量 32.9g		埋土 1/2	①粗粒安山岩

遺物観察一覧表 計測値一覧表

No・器種	計測値 (cm)		成・整形技法と器形の特徴
第135図27 鉄カマ	長さ 2.8 厚み 0.3	重量 9.3g	先端部～鋒部を欠き、基礎部は折り返される。
第135図28 鉄刀子	長さ 6.0 厚み 0.4	重量 3.7g	刀子基部部分鈍角をなす。

2号住居跡 (第136図 P L44)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第136図1 灰輪土器	口径(8.0) 高さ[4.4]	埋土 口径部1/4	ロクロ使用の成形。外面はロクロ痕残り、内面はナゲ丁家で平滑である。輪は潰け掛り、内面は厚く施釉。	①砂粒、砂粒含む。 ②還元。 ③浅黄色。釉は緑色。
第136図2 須恵 高台付碗	口径 13.6 高さ[5.1] 底径 6.6	No2 口径部少し欠損	右回転ロクロ一回糸→ロクロ使用高台取付け。内外面ロクロ痕強い。内底凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒含む。 ②還元。 ③黄灰色。
第136図3 土師壺	口径 19.5 頸部 17.6 高さ[9.3]	No3 No5 埋土 口径部1/2	外面の削りはやや強く、砂粒の流れ残る。内面ナゲ丁家で平滑に仕上げている。	①膏母、石英、砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。

3号住居跡 (第137図 P L45)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第137図1 須恵 高台付碗	口径 13.7 高さ[5.4] 底径(6.6)	No2.4 カマド 埋土 1/3 高台欠損	右回転ロクロ一回糸→ロクロ使用高台取付け(高台部剥落)。外面ロクロ痕残り。内底平滑欠く。平面槽内に歪む。	①砂粒含む。 ②還元。 ③灰黄色。
第137図2 須恵鉢?	高さ[2.0] 底径 12.5	埋土 底部のみ	ロクロ使用高台取付け。外底丁寧にナゲ丁家で平滑に仕上げる。灰輪土器の可能性あり。	①砂粒含む。 ②還元。 ③灰白色。 ④内面自然釉付着。
第137図3 須恵 高台付碗	高さ[1.4] 底径 7.0	埋土 底部のみ	右回転ロクロ一回糸→ロクロ使用高台取付け。内面全体に研磨。内底凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒含む。 ②中性焰。 ③橙色。 ④内黒。
第137図4 土師壺	口径 19.4 高さ 7.8	No4, 5, 6 口径部	輪積みか。外面の削りやや強い。頸部上半と下半のナゲ強い。内面のナゲ丁家で平滑に仕上げる。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第137図5 土師壺	口径(10.0) 頸部(17.2) 高さ[9.7]	No5 埋土 口径部	外底の削り強く、頸部に削り時の鋭い擦痕残り。内面ナゲ丁家で平滑に仕上げる。	①褐色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第137図6 土師杯	口径(11.8) 高さ[3.2]	埋土 1/3	外底の削り強く、口径下半無調整で僅かに指痕残り。内面のナゲ凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい橙色。
第137図7 鉄釘	長さ 1.8 厚み 0.3	重量 0.6g	先端部分欠損。頭部は平坦で鈎状に曲がる。	

4号住居跡 (第139回 P.L45)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第139回1 須恵杯	口径(12.8) 高さ 4.0 底径 5.5	埋土 1/2強	右回転ロクロ→回糸無調整。外面ロクロ痕弱いが幅広く渦巻き状を呈す。内面は平滑。平面形は楕円形に歪む。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。
第139回2 須恵杯	口径 13.0~14.0 高さ 3.5 底径 6.2	No11 口縁部1/4欠損	右回転ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕は全体で強く渦巻き状を呈す。平面形は楕円形に歪む。	①黄母、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰黄色。内外面スス付着?黒斑?
第139回3 須恵杯	口径(12.6) 高さ 3.6 底径 5.6	埋土 1/2	右回転ロクロ→回糸無調整。ロクロ痕上半部分に残る。内面は凹凸し平滑さ欠く。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③暗灰色。 ④内外面いよぶ状。
第139回4 須恵 高台付椀	口径(14.6) 高さ 6.0 底径 6.8	No.2.3 カマド 1/3	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。ロクロ痕僅かに残す。内面ロクロ痕残さず内底は凹凸し平滑さ欠く。	①8mm大の砂礫、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。断面セピア色。
第139回5 土師壺	口径(20.3) 頸部 19.4 高さ[7.5]	No.9 埋土 口縁部少片	外面の削りは乾燥の進んだ状態で施す砂粒の移動残る。内面のナゲは丁寧であるが肩部辺にハケ目状工具痕残す。	①黄母、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
第139回6 土師壺	口径 20.6 高さ[10.3]	埋土 口縁部少片	輪模みか。外面の削りは鋭い。口縁→肩部ナゲ強い。内面のナゲ平滑に仕上げている。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第139回7 須恵壺	高さ[16.2] 底径(16.9)	No10,12 8住埋土 底部少片	輪模みか。外面の削りはやや強く、砂粒の移動多い。内面のナゲ不規則で平滑さ欠く。	①白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③灰色。

6号住居跡 (第141回 P.L45)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第141回1 土師杯	口径 18.6 高さ 6.3	No1 1/3	外面の削りは丁寧に細かく施す。内面は丁寧なナゲで平滑に仕上げている。	①黄母、黒色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい赤褐色。 ④内外面スス付着。
第141回2 土師杯	口径(16.4) 高さ[4.8]	No2 1/6	外面の削りは細かく丁寧に施す。口縁部濡らしてナゲ調整。内面のナゲは丁寧に平滑である。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。
第141回3 須恵 高台付椀	高さ[3.0] 底径(8.0)	埋土 高台刺落	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け(高台刺落)。内面は僅かに回転痕残し平滑さ欠く。	①砂礫、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③黄灰色。
第141回4 鉄釘	長さ 6.0 厚み 0.6	重量 6.1g	先端部分欠損。頭部は鉤状に曲がる。	

7号住居跡 (第142・143回 P.L45・47・48)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第142回1 土師杯	口径 12.3 高さ 3.8	貯穴 埋土 略定形	外面の削りは乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半は無調整。内面ナゲ丁寧だがやや平滑さ欠く。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④内面に墨書。(并)

遺物観察一覧表 計測値一覧表

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第142図2 須恵杯	口径(14.0) 高さ 3.6 底径 7.0	埋土 1/3	右回転ロクロー回糸無調整。外面に弱いロクロ痕残す。内定部回転痕残し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③黄灰色。 ④内底部に墨書。(南)
第142図3 土師杯		No2 底部のみ	外面は削りで、砂粒の流れ少し残す。内底はやや凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、石英粒含む。 ②酸化。 ③にぶい・橙色。 ④内底に墨書。(丹)
第142図4 土師杯	口径(10.0) 高さ 2.7	No1 口縁部少片	口縁下半不明確なナデ。指頭痕僅かに残す。内面のナデは丁寧である。	①砂粒含む。 ②酸化。 ③にぶい・橙色。 ④内面に墨書有り。小破片のため不明。
第142図5 土師杯		埋土 底部少片	外底の削りはやや強い。内面ナデ丁寧だがやや平滑さ欠く。	①砂粒含む。 ②酸化。 ③橙色。 ④内面に墨書有り。(西)
第143図1 鉄片	長さ 12.0 厚み 14.0	重量 165.0g	鉄製品。著削部分欠損。	

8号住居跡 (第145図 P.L.46)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第145図1 土師杯	口径 12.4 高さ 3.5	No11 完形	外面の削りは乾燥の進んだ状態で施し外底部分に無調整部分残す。内面同心円状ナデ。内底は凹凸し平滑さ欠く。	①石英、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④内面口縁部に灯芯痕有り。
第145図2 土師杯	口径 12.6 高さ [3.2]	No11 貯穴 埋土 1/2強	外面の削りは強く、砂粒の流れ残る。口縁下半不明確なナデで指頭痕残す。内面同心円状。中央部僅かに凹凸する。	①石英、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③赤褐色。
第145図3 土師杯	口径 11.6 高さ 3.4	7住 No1 貯穴 カマド 8住 オマド 四方 略売形	外底の削りは乾燥の進んだ状態で施す。口縁下半は無調整で、指頭痕僅かに残す。器面全体に原膚状のヒビワレ有り。	①白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。 ④二次加熱受ける。
第145図4 土師甕	口径(22.0) 高さ[17.5]	8住 No1 7住No2,3,4 埋土 カマド 口縁→胴部1/3	輪積みか。外面の削りはやや強く、砂粒の動き多い。胴部上半と下半ナデは強い。内面板状工具痕残す。	①砂粒、赤色粘土粒含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。
第145図5 須恵 高台付椀	口径(14.5) 高さ [5.6] 底径 6.6	No9,10 カマド 埋土 1/4	右回転ロクロー回糸→ロクロ使用高台取付け。外面細かいロクロ痕。内面は工具による強いロクロ痕残す。	①砂粒含む。 ②還元。 ③灰白色。
第145図6 須恵甕	つまみ(5.0) 高さ [2.7]	貯穴埋土 埋土 1/3	右回転ロクローロクロ使用高台取付け。天井部に削り痕残す。内面に弱いロクロ痕残し平滑さ欠く。	①砂粒含む。 ②還元。 ③淡黄色。
第145図7 土師甕	口径(21.0) 頸部(19.2) 最大(23.3) 高さ[16.3]	No5,6 カマド 埋土 口縁→胴部	外面の削りはやや強く、砂粒の移動残る。内面のナデ丁寧で平滑に仕上げる。	①石英粒、白色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③灰色。

9号住居跡 (第147図 P.L.45・48)

No・器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①粘土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第147図1 土師杯	口径 12.0 高さ 3.2	No5 埋土 略定形	外底の削りはやや強く、砂粒の流れ残す。口縁下平は不明確なナゲを残す。内面同心円状。底部は僅かに凹凸残す。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。 ④内面の口縁部に灯芯痕有り。
第147図2 土師杯	高さ [1.4]	No12 底部のみ	外底の削りは強く、器面は凹凸し平滑さ欠く。内面同心円状ナゲ丁寧。	①砂粒、雲母含む。 ②酸化。 ③明褐色。灰褐色。 ④墨書。(少片のため書体不明)
第147図3 須恵杯	口径(13.3) 高さ 3.4 底径 8.0	埋土 口縁部3/4欠損	右回転ロクロ一回糸無調整。外面ロクロ強く、砂粒の流れ残す。内面回転痕残り平滑さ欠く。	①石灰、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③外によい黄褐色。 ④外面スス?付着。重ね焼き?
第147図4 土師杯		埋土 底部少片	外底の削り強く、砂粒の流れ残す。内底僅かに凹凸し平滑さ欠く。	①雲母、石英、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③によい赤褐色。外面スス?付着。 ④内底墨書有り。少片のため不明確。
第147図5 土師杯		埋土 底部少片	外底の削りは強く、凹凸している。内面のナゲ丁寧で平滑である。	①黒色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③によい赤褐色。外面黒。(スス?) ④内面底部に墨書有り。小破片のため不明確。
第147図6 土師杯		埋土 底部少片	外底の削りはやや強い。内底のナゲ丁寧だが凹凸し平滑さ欠く。	①雲母、白色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。 ④外面墨書有り。
第147図7 土師壺	口径(19.2) 高さ [6.1]	No9,12 埋土 口縁部少片	外面の削りは鋭く、頸部に削り時の工具痕残す。内面指頭によるナゲ痕残り平滑さ欠く。	①白色鉱物粒子少し含む。 ②酸化。 ③によい黄褐色。
第147図8 土師甕	口径(21.9) 高さ [8.0]	埋土 口縁部少片	外面の削りはやや乾燥の進んだ状態で施す。砂粒の移動残す。内面濡らしてナゲ頸部にヘラ状の工具痕残す。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。
第147図9 土師壺	口径(18.9) 高さ [10.4]	No1カマド 埋土 口縁部少片	輪積みか。砂粒の移動残す。頸部のナゲ弱く指頭痕残す。口縁部内外面に共に強いナゲ。内面のナゲ丁寧である。	①砂粒、赤色粘土粒含む。 ②酸化。 ③灰褐色。
第147図10 土師壺	口径(20.5) 頸部(18.8) 高さ [8.9]	カマド 埋土 口縁部少片	外面の削りは鋭く、砂粒の移動多い。口縁～頸部のナゲ強く、工具痕を明確に残す。	①雲母、砂粒、白色、黒色、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐灰色。全体にセピア色を呈する。
第147図11 土師 台付甕	高さ [3.9] 台付径 5.1	カマド 脚部1/2	胴部と脚部取り付け時に工具で強くナゲ付けた感あり。胴内面強い布目状の痕痕残る。	①黒色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色～明赤褐色。 ④内外面スス付着。
第147図12 土師 台付甕	高さ [2.6] 台付径 4.0	埋土 脚部1/3	胴部内底に板状工具痕残す。脚部内面は布状工具で丁寧にナゲ平滑に仕上げている。	①雲母、褐色、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③橙色。

遺物観察一覧表 計測値一覧表

10号住居跡 (第148図 P.L.46)

No. 器種	計測値 (cm)	出土・復元状況	成・整形技法と器形の特徴	備考 ①胎土・材質 ②焼成 ③色調 ④その他
第148図1 須恵杯? 皿?	口径 13.5 高さ[3.4] 底部 6.3	No5 略完形	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け(高台剥落)。外外面共にロクロ痕残す。内面凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②中性培。 ③明赤褐色。 ④スズ?タール分?付着。
第148図2 須恵皿	口径 14.0 高さ[2.4]	No1 略完形	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け(高台剥落)。外廻ロクロ痕強い。内面のナデは丁寧で平滑である。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②中性培。 ③にぶい黄褐色。 ④にぶい黄褐色。
第148図3 灰輪杓	高さ[4.9] 底径 7.2	No24 底部のみ	右回転ロクロ→回転へら切→ロクロ使用高台取付け。輪は薄掛けか。内底凹凸し平滑さ欠く。	①砂粒、砂粒含む。 ②還元。 ③灰白色。
第148図4 須恵 高台付椀	口径 13.8 高さ 5.3 底径 7.2	No6 口縁部1/3欠損	右回転ロクロ→回糸→ロクロ使用高台取付け。外面強く細かいロクロ痕残す。内底部回転痕明瞭に残す。	①砂粒、黒色鉱物粒子含む。 ②還元。 ③にぶい黄褐色。灰黄褐色。 ④内外面墨書有り。
第148図5 土師杯	口径 12.3 底径 3.2	No7 埋土 1/2	外面の削りは乾燥の進んだ状態で施す。外底部に加調整部分残す。口縁部濡らして強いナデ。内面凹凸し平滑さ欠く。	①膏母、石英、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③明赤褐色。 ④内面底部墨書有り。
第148図6 土師杯		埋土 底部少片	外面の削りはやや乾燥の進んだ状態で施す。内面ナデ丁寧。	①膏母、褐色、黒色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③褐色。 ④内面墨書有り。小破片のため不明瞭。
第148図7 土師 台付椀	高さ[2.8]	埋土 胴一脚部	胴部と脚部濡らしてナデ付ける。脚部内面布状工具の擦痕残る。	①膏母、砂粒、褐色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③にぶい褐色。
第148図8 土師椀	口径(20.2) 高さ[5.9]	埋土 口縁部少片	輪積みか。外面の削りは鋭く、砂粒の移動残る。胴部辺のナデ弱い。内面のナデ不規則でやや平滑さ欠く。	①砂粒、白色鉱物粒子含む。 ②酸化。 ③内一明赤褐色。外一にぶい褐色。
第148図11 鉄	長さ 3.9 厚み 0.4 重量 2.7g		棒状鉄製品。断面は鈍角をなす。	
第148図12 鉄刀子	長さ 4.6 厚み 0.9 重量 9.6g	埋土	刀子縁部分か。廻りに木製品付着。	
第148図13 鎌	長さ 11.0 厚み 0.2 重量 19.3g	No12	鎌部湾曲し、基部部に木管部(着柄)が残る。	

旧石器時代の石器一覧表

採回番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	採回番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材		
第24区-1	5	ナイフ	3.4	1.5	1.92	黄紋岩	第36区-1	2	石核	4.4	4.0	27.83	黒安		
	2	外(Ai-10)	ナイフ	3.5	1.6	2.88		黒頁	4	2	石核	1.9	1.9	3.56	黒曜石
	3	11	ナイフ	4.8	1.4	3.98		黒安	20	剥片	4.5	3.0	15.15	珪頁	
	4	7	ナイフ	2.7	2.2	6.14		黒頁	13	剥片	6.3	3.5	24.38	黒安	
	5	2	ナイフ	3.4	2.5	7.17		黒安	14	剥片	3.4	3.2	12.78	黒安	
第25区-1	6	20	ナイフ	4.9	3.0	10.08	珪頁	4	17	剥片	5.0	4.1	29.98	黒安	
	17	削器	5.5	7.0	74.99	黒頁	5	5	剥片	5.6	3.0	11.69	黒頁		
第26区-1	2	15	楔	3.5	3.1	15.12	黒安	6	13	剥片	5.3	4.6	20.91	黒頁	
	5	加割	1.1	2.1	1.67	黒曜石	13	剥片	3.2	3.6	8.43	黒安			
	2	2	加割	1.7	1.3	0.75	テ	2	2	剥片	4.4	3.2	19.42	黒安	
	3	7	加割	1.6	1.3	0.84	黒安	3	外(Ae-10)	剥片	4.4	3.8	11.78	黒安	
	4	7	加割	7.2	4.2	53.49	黒頁	4	20	剥片	4.9	3.7	17.66	黒安	
	5	18	加割	3.0	2.2	3.92	黒安	5	4	剥片	6.0	4.1	37.85	黒安	
	6	7	加割	3.0	3.4	13.50	黒頁	6	2	剥片	7.1	3.5	32.66	黒安	
第27区-1	7	8	加割	4.1	6.0	25.88	黒安	第37区-1	13	剥片	3.2	3.6	8.43	黒安	
	11	加割	4.1	5.0	24.75	黒安	2	2	剥片	4.4	3.2	19.42	黒安		
	15	加割	3.5	3.6	12.13	黒頁	3	外(Ae-10)	剥片	4.4	3.8	11.78	黒安		
	12	加割	3.9	2.5	7.55	珪頁	4	20	剥片	4.9	3.7	17.66	黒安		
	7	加割	4.9	2.2	9.35	黒安	5	4	剥片	6.0	4.1	37.85	黒安		
第28区-1	11	加割	4.7	6.7	43.73	黒頁	6	2	剥片	7.1	3.5	32.66	黒安		
	15	加割	3.9	6.0	26.36	黒安	第38区-1	外(Ai-7)	剥片	3.0	3.2	8.80	黒安		
	6	加割	3.9	6.0	26.36	黒安	2	19	剥片	3.9	3.9	13.15	黒安		
	4	使割	4.9	5.3	35.72	黒安	3	1	剥片	4.6	3.0	12.12	黒頁		
	2	2	使割	4.0	3.5	9.95	黒頁	4	1	剥片	(5.1)	4.2	21.75	黒安	
	3	20	使割	5.3	4.3	20.84	黒頁	5	外(Am-16)	剥片	5.9	4.7	36.37	黒安	
第29区-1	4	4	使割	5.8	3.6	13.69	黒頁	6	2	剥片	5.1	3.8	18.70	黒安	
	5	13	使割	5.6	3.1	22.00	黒安	第39区-1	14	剥片	5.7	4.8	32.18	黒安	
	7	使割	3.3	3.5	10.00	黒安	2	15	剥片	5.9	2.9	15.08	黒安		
	13	使割	4.9	3.0	19.76	黒頁	3	2	剥片	10.4	4.0	101.32	黒頁		
	7	使割	4.7	4.9	17.45	黒頁	第40区-1	19	剥片	6.6	4.3	25.47	黒安		
	3	1号礫群	使割	4.3	3.0	16.40	珪瑛	2	7	剥片	5.6	2.8	26.37	黒安	
	4	3	使割	6.6	3.9	47.91	黒頁	3	6	剥片	4.8	2.0	5.12	黒頁	
第30区-1	5	外(Ao-14)	使割	4.9	3.2	11.55	黒頁	4	16	剥片	5.3	2.5	12.78	黒安	
	6	1	使割	4.5	5.8	29.93	黒頁	5	17	剥片	5.8	5.8	63.45	黒安	
	7	使割	4.4	7.3	29.22	黒頁	第41区-1	17	剥片	8.4	4.0	45.21	黒安		
	2	外(As-10)	使割	2.2	2.0	2.86	テ	2	11	剥片	7.3	3.3	54.07	黒安	
	11	使割	5.4	5.7	87.71	黒安	3	17	剥片	4.5	2.3	7.83	黒頁		
	4	蔵石	6.5	4.3	137.97	黒頁	4	12	剥片	5.4	2.2	14.53	黒頁		
第31区-1	2	外(Ag-11)	蔵石	7.7	3.8	89.93	黒頁	5	16	剥片	6.3	5.0	87.23	黒安	
	3	16	蔵石	13.1	5.6	489.65	粗安	6	17	剥片	3.6	5.0	47.95	黒安	
	4	16	蔵石	10.1	7.4	557.00	粗安	第42区-1	4	剥片	4.6	4.9	30.03	黒頁	
	1	1号礫群	蔵石	10.1	6.6	525.80	粗安	2	6	剥片	5.7	5.5	49.29	黒頁	
第32区-1	2	1号礫群	蔵石	11.8	6.0	583.60	粗安	3	18	剥片	5.3	7.3	48.94	黒頁	
	3	1号礫群	蔵石	16.3	11.1	1629.00	溶凝	第43区-1	2	剥片	6.1	8.1	68.31	黒安	
	1	1号礫群	礫	20.7	13.1	1886.90	粗安	2	13	剥片	6.1	7.4	62.85	黒安	
第33区-1	2	1号礫群	礫	5.5	6.8	51.78	粗安	3	10	剥片	5.6	7.2	54.86	黒安	
	11	石核	5.6	6.8	256.30	黒安	第44区-1	6	剥片	6.2	6.2	60.71	黒頁		
第34区-1	6	石核	6.3	6.3	144.73	黒安	2	外(Ad-6)	剥片	3.3	5.8	18.69	黒安		
	1	石核	4.5	4.2	33.30	黒安	3	5	剥片	6.2	7.9	111.12	黒頁		
第35区-1	7	石核	2.5	5.0	37.67	黒頁	第45区-1	外(Ai-10)	剥片	4.6	3.2	19.03	黒安		
	2	石核	2.5	5.0	37.67	黒頁	2	18	剥片	4.8	3.4	16.87	黒安		
							3	6	剥片	5.4	5.2	16.05	黒安		
							4	5	剥片	3.9	2.3	7.10	黒安		
							5	5	剥片	3.1	5.3	20.22	黒安		

接合資料の制離順序・計測値一覧表

接合資料-3	1 → 2 → ○ → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → ○ → 8
接合資料-91	○ → 1 ○ → 2 → 3 → ○ → 4
接合資料-13	1 → 2 → 3 → 4 → ○ → 5
接合資料-16	1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7
接合資料-23	1 → ○ → 2+6 (?) → (4 → 5 → 3) → ○ → 7 → 8
接合資料-80	1 → 2 → 3 → 4 → 5 → ○ → 6 → 7
接合資料-26	1+2 → ○ → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → ○ → 11 → 12 → 13 → ○ → 14
接合資料-79	1 → ○ → 2 → ○ → 3
接合資料-27	1 → 2 → 3 → 4 → ○ → 5 → ○ → 6 → 7 → 8
接合資料-32	1 → 2 → 3 → 4 → 5 → ○ → 6 → 7 → 10 → (11+12) → 13 → 14 → 15 → 16 8 → 9
接合資料-42	1 → 2 → 3 → (5 → ○ → 4) → 6 → 7 → ○ → 8 → 9
接合資料-63	1 → 2 → ○ → 3 → 4 → 5 → 6 → ○ → 7
接合資料-44	1 → ○ → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11 → 12 → 13 → 14 → 15 → 16 → 17
接合資料-69	1 → ○ → 2 → 3 → 4 → ○ → 5
接合資料-72	1 → ○ → 2 → 3 → ○ → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11 → 12
接合資料-45	1 → 2 → ○ → ○ → ○ → 3 → 4
接合資料-75	1 → ○ → 2 → 3 → 4 → 5 → ○ → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11 → ○ → 12 → 13 → 14 → 15 → 16 → ○ → 17 → 18 → 19 → 20
接合資料-18	1 → ○ → 2 → 3
接合資料-78	1 → 2 → ○ → 3 → ○ → 4 → 5
接合資料-88	1 → (○ → 2 → ○ → 3) → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11
接合資料-51	1 → 2 → 3 → ○ → 4
接合資料-89	1 → 2 → 3 → 4 → ○ → (5 → 6 → 7 → 8) → 9 → 10 → 11
接合資料-90	1 → ○ → ○ → 2 → 3 → ○ → 4
接合資料-92	1 → 2 → ○ → 3 → (4 + 5) → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → ○ → 11 → ○ → 12 → ○ → 13 → 14 → ○ → 15
接合資料-93	1 → 2 → (3 + 4) → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11 → 12 → 13 → 14 → 15 → 16 → 17 → 18

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-3 (第46・47図)							8	7	砕片	1.3	1.7	0.70	黒安
1	2	割片	5.1	2.9	14.11	黒安	9	7	砕片	1.9	1.7	1.26	黒安
2	1	使割	5.5	6.8	45.06	黒安	10	6	砕片	1.5	1.8	1.51	黒安
3	1	割片	4.3	2.5	7.41	黒安	11	7	砕片	3.5	1.9	2.50	黒安
4	1	割片	5.3	4.1	21.76	黒安	12	7	割片	2.8	1.9	2.70	黒安
	1	砕片	3.2	1.1	3.19	黒安		7	砕片	1.0	1.5	0.30	黒安
5	1	砕片	1.3	2.2	0.77	黒安	13	7	割片	1.4	2.6	2.25	黒安
6	1	割片	1.6	3.2	4.88	黒安	14	7	石核	5.3	5.2	118.28	黒安
7	1	割片	3.6	3.9	18.64	黒安	接合資料-79 (第53図)						
8	1	石核	5.0	5.5	75.81	黒安	1	13	割片	2.5	2.2	0.58	黒安
接合資料-91 (第47図)							2	18	砕片	1.0	1.5	0.46	黒安
1	13	割片	3.9	1.4	5.78	黒安	3	18	石核	6.6	6.3	97.85	黒安
2	13	砕片	1.5	2.1	1.72	黒安		19	石核	3.7	3.9	29.21	黒安
3	13	割片	4.5	1.8	6.70	黒安	接合資料-27 (第54図)						
4	11	石核	7.0	4.5	128.77	黒安	1	7	割片	1.5	3.6	4.00	黒安
接合資料-13 (第48図)							2	7	割片	3.8	3.2	15.24	黒安
1	5	割片	6.6	2.7	35.29	黒頁		7	割片	2.3	2.2	3.76	黒安
2	外(Ai-10)	割片	3.9	3.1	14.06	黒頁	3	7	加割	3.7	4.1	10.27	黒安
3	外(Ad-10)	割片	7.1	4.2	54.66	黒頁	4	外(Ad-7)	砕片	2.2	2.2	1.46	黒安
4	5	割片	3.5	2.2	1.11	黒頁	5	7	使割	8.0	5.6	82.58	黒安
5	5	石核	4.5	5.3	168.03	黒頁		7	割片	3.4	3.2	14.83	黒安
接合資料-16 (第49図)								7	割片	2.4	2.8	9.92	黒安
1	6	石核	2.7	6.4	105.13	黒安	6	7	割片	4.6	3.8	20.79	黒安
2	6	割片	3.4	3.5	13.46	黒安	7	7	割片	5.1	5.1	29.69	黒安
	6	割片	3.1	2.6	5.54	黒安	8	7	砕片	2.6	2.5	2.75	黒安
3	6	割片	6.3	3.6	41.82	黒安	接合資料-32 (第55・56図)						
4	6	砕片	2.2	1.2	1.13	黒安	1	8	割片	4.0	3.8	16.43	黒安
5	6	砕片	3.2	2.2	5.24	黒安	2	8	割片	3.6	3.0	7.15	黒安
6	6	砕片	2.7	2.0	2.82	黒安	3	8	割片	2.3	2.8	5.10	黒安
7	6	割片	6.0	5.1	45.30	黒安	4	8	割片	1.7	2.3	2.91	黒安
接合資料-23 (第50・51図)							5	8	割片	4.4	3.9	18.51	黒安
1	7	割片	1.9	2.2	2.48	黒頁	6	8	砕片	2.0	1.7	1.67	黒安
2	7	使割	4.2	5.1	33.40	黒頁	7	8	割片	3.2	5.5	66.68	黒安
3	7	石核	4.7	6.7	97.75	黒頁	8	8	割片	5.1	3.3	26.12	黒安
4	7	割片	3.9	2.2	4.95	黒頁	9	8	割片	3.7	3.2	13.56	黒安
5	7	石核	3.6	3.2	14.28	黒頁	10	8	割片	2.5	2.7	6.63	黒安
6	7	割片	5.8	6.2	43.82	黒頁	11	8	割片	3.3	3.5	10.67	黒安
7	7	割片	6.6	2.9	27.11	黒頁	12	8	砕片	2.0	0.4	0.51	黒安
8	7	割片	7.0	6.1	60.87	黒頁	13	8	割片	3.2	2.9	3.93	黒安
接合資料-80 (第51図)							14	8	割片	4.8	3.7	20.45	黒安
1	外(Ak-10)	砕片	2.5	1.9	2.57	黒安	15	8	割片	2.9	2.3	3.31	黒安
2	18	砕片	1.7	2.7	2.71	黒安	16	8	石核	6.6	7.1	134.17	黒安
3	18	砕片	3.6	2.9	7.18	黒安	接合資料-42 (第57・58図)						
4	外(Ak-10)	砕片	2.0	2.2	2.28	黒安	1	9	割片	4.8	4.8	31.59	黒頁
5	18	割片	3.7	5.4	18.15	黒安	2	10	割片	2.6	2.1	3.86	黒頁
6	18	割片	2.9	3.9	8.88	黒安	3	9	割片	4.5	3.2	24.62	黒頁
	18	割片	2.5	2.5	4.74	黒安	4	9	割片	4.7	1.8	10.86	黒頁
	18	石核	5.2	4.5	46.58	黒安	5	9	石核	4.3	2.5	43.07	黒頁
接合資料-26 (第52・53図)							6	9	割片	2.3	3.7	6.46	黒頁
1	7	割片	4.0	5.5	35.70	黒安		10	割片	1.6	3.4	3.24	黒頁
2	7	割片	5.4	4.3	29.69	黒安	7	9	割片	7.1	4.7	73.07	黒頁
3	外(Ad-6)	割片	4.0	2.6	8.15	黒安	8	9	割片	7.4	6.3	82.98	黒頁
	7	割片	3.7	2.6	6.75	黒安	9	9	割片	6.8	4.6	46.28	黒頁
4	7	割片	6.1	3.6	35.21	黒安	接合資料-63 (第58図)						
5	7	砕片	2.1	3.0	4.23	黒安	1	15	割片	3.6	1.5	3.32	黒安
6	7	砕片	3.8	4.2	18.34	黒安	2	15	砕片	2.0	2.1	2.87	黒安
	7	砕片	2.0	1.2	1.58	黒安	3	15	割片	3.8	1.9	2.59	黒安
7	7	割片	5.2	3.7	30.72	黒安	4	15	割片	3.6	2.2	7.24	黒安

遺物観察一覧表 計測値一覧表

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
	15	切片	1.5	1.5	1.30	黒安
5	15	切片	1.3	1.7	0.31	黒安
6	15	切片	1.2	1.0	0.20	黒安
7	15	石核	4.4	4.1	49.79	黒安
接合資料-44 (第59・60図)						
1	10	切片	4.5	2.7	11.89	黒頁
	10	切片	4.5	2.1	9.84	黒頁
2	11	切片	2.7	1.8	2.10	黒頁
3	10	切片	4.3	3.4	16.15	黒頁
4	10	切片	3.8	2.0	9.84	黒頁
5	10	切片	4.6	3.9	20.41	黒頁
6	10	使割	3.4	3.7	10.45	黒頁
7	10	切片	3.3	5.7	24.13	黒頁
8	10	切片	3.6	2.9	24.03	黒頁
	10	切片	1.8	1.8	1.53	黒頁
	10	切片	1.3	2.3	1.46	黒頁
9	10	切片	2.8	1.1	1.14	黒頁
10	10	切片	5.6	2.5	14.69	黒頁
11	外(Ag-5)	使割	3.0	2.4	8.19	黒頁
12	10	切片	4.7	2.5	11.15	黒頁
13	11	切片	2.2	2.8	6.97	黒頁
14	9	切片	2.9	3.9	13.75	黒頁
15	10	切片	3.8	1.6	3.36	黒頁
16	17	切片	1.3	1.9	1.18	黒頁
17	10	石核	5.0	3.2	60.74	黒頁
接合資料-69 (第61図)						
1	16	切片	7.7	3.4	33.12	黒頁
2	16	切片	3.8	2.1	7.87	黒頁
3	16	切片	4.2	4.3	32.22	黒頁
4	16	切片	4.6	5.2	35.96	黒頁
5	16	石核	3.1	5.5	96.88	黒頁
接合資料-72 (第62・63図)						
1	17	切片	3.1	6.1	28.48	黒頁
2	17	切片	6.4	3.2	17.18	黒頁
	17	切片	3.5	3.4	14.77	黒頁
3	17	切片	3.7	4.0	16.03	黒頁
4	17	加割	2.4	2.8	4.79	黒頁
5	17	切片	5.5	5.8	32.62	黒頁
6	17	切片	4.5	4.6	21.39	黒頁
7	17	切片	3.6	5.7	26.64	黒頁
	17	切片	2.0	3.1	4.82	黒頁
8	17	切片	2.5	3.9	9.82	黒頁
9	17	切片	3.7	3.9	12.62	黒頁
10	17	加割	5.7	4.5	23.76	黒頁
11	17	切片	4.5	4.4	43.97	黒頁
接合資料-45 (第63図)						
1	10	切片	4.8	4.5	26.38	黒安
	10	切片	4.7	4.5	19.25	黒安
2	10	切片	2.8	5.5	32.90	黒安
3	10	切片	1.8	3.2	2.83	黒安
4	10	石核	5.0	6.2	75.55	黒安
接合資料-75 (第64・65図)						
1	17	切片	6.0	4.5	43.91	黒安
2	6	切片	4.5	3.9	23.50	黒安
3	17	切片	4.1	3.4	17.34	黒安
	17	切片	2.3	2.5	4.74	黒安
4	17	切片	3.6	2.6	7.36	黒安
5	17	切片	6.8	2.8	20.72	黒安

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
6	17	切片	1.8	1.4	1.37	黒安
7	17	切片	1.7	2.7	1.70	黒安
8	20	切片	3.0	3.6	8.85	黒安
9	17	切片	5.8	3.7	19.10	黒安
10	17	切片	2.8	3.0	5.03	黒安
11	17	切片	3.8	3.1	6.82	黒安
12	17	切片	2.4	2.3	1.96	黒安
13	17	切片	1.7	1.7	1.71	黒安
	17	切片	2.1	1.2	1.50	黒安
14	17	切片	2.1	1.4	1.27	黒安
15	17	切片	4.6	3.6	12.68	黒安
16	17	切片	4.9	4.4	18.95	黒安
17	17	切片	4.8	3.9	16.08	黒安
	17	切片	1.1	1.3	0.45	黒安
18	17	切片	2.9	2.0	2.97	黒安
19	17	切片	3.7	4.1	17.39	黒安
20	17	石核	4.1	5.2	96.39	黒安
接合資料-18 (第65図)						
1	6	切片	3.0	2.0	6.08	黒安
	6	切片	2.7	2.7	6.08	黒安
2	外(Ae-11)	切片	2.2	3.5	4.20	黒安
3	6	石核	4.7	5.8	63.90	黒安
接合資料-78 (第66図)						
1	16	切片	5.8	3.4	21.70	黒安
2	18	切片	6.4	4.2	39.09	黒安
3	18	切片	2.6	2.5	6.72	黒安
	18	切片	3.6	2.0	5.41	黒安
4	16	切片	2.6	3.7	4.63	黒安
5	16	石核	4.7	6.5	122.54	黒安
接合資料-88 (第67・68図)						
1	18	切片	6.2	4.8	36.10	黒頁
2	18	切片	2.1	2.7	2.08	黒頁
3	18	石核	4.6	7.0	71.13	黒頁
4	18	切片	6.6	4.2	49.69	黒頁
5	18	切片	4.9	5.4	27.94	黒頁
6	18	石核	6.6	5.3	87.12	黒頁
7	18	切片	8.6	6.9	98.90	黒頁
8	16	切片	5.0	5.0	25.32	黒頁
	18	切片	5.6	3.0	21.93	黒頁
9	16	切片	2.2	3.0	3.69	黒頁
10	18	切片	7.6	7.7	165.32	黒頁
11	16	切片	8.2	6.0	188.83	黒頁
	16	石核	6.6	4.2	67.47	黒頁
	16	切片	1.7	2.9	3.45	黒頁
接合資料-51 (第68図)						
1	12	切片	2.5	2.8	5.01	黒安
2	12	切片	2.3	3.4	4.52	黒安
3	12	切片	2.0	1.4	1.51	黒安
4	12	石核	3.6	4.1	31.59	黒安
接合資料-89 (第69図)						
1	14	切片	4.8	6.1	62.92	珪頁
2	14	切片	1.6	1.7	1.25	珪頁
3	14	切片	4.6	2.8	10.85	珪頁
4	14	切片	3.7	3.7	21.73	珪頁
	14	切片	3.6	2.7	7.09	珪頁
5	14	切片	3.4	2.6	8.17	珪頁
6	14	切片	2.9	2.8	3.85	珪頁
7	14	切片	1.9	2.4	1.21	珪頁

遺物観察一覧表 計測値一覧表

資料番号	出土位置 (プロット)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (R)	石材
8	14	割片	6.9	4.8	57.50	珪頁
9	14	割片	3.4	2.3	4.98	珪頁
	14	割片	1.8	1.1	1.40	珪頁
10	14	割片	5.2	5.8	35.49	珪頁
11	外(Ag-6)	割片	4.8	6.0	44.23	珪頁
接合資料-90 (第70区)						
1	13	割片	3.3	4.5	16.21	黒安
	13	割片	3.1	4.6	15.29	黒安
	13	加割	2.5	3.0	5.01	黒安
	13	砕片	2.5	2.2	3.47	黒安
	13	砕片	2.6	3.4	3.36	黒安
2	13	割片	7.3	10.1	152.97	黒安
3	17	割片	4.1	5.4	21.14	黒安
4	13	割片	4.4	4.4	12.15	黒安
	13	割片	3.7	4.2	8.67	黒安
	13	砕片	1.1	1.0	0.33	黒安
接合資料-92 (第71・72区)						
1	外(AI-10)	割片	5.8	4.0	27.57	黒安
2	12	割片	5.0	5.0	26.13	黒安
	12	砕片	1.9	2.0	1.95	黒安
3	12	割片	6.6	4.0	42.98	黒安
4	外(AF-11)	砕片	1.2	2.6	1.54	黒安
5	12	割片	2.7	5.4	17.85	黒安
6	12	割片	4.3	5.2	14.31	黒安
7	12	割片	3.8	3.3	13.56	黒安
8	12	割片	4.1	3.1	13.32	黒安
9	12	割片	4.0	4.2	34.01	黒安
10	6	割片	4.1	5.2	20.32	黒安
	12	割片	3.4	4.4	10.86	黒安
11	12	割片	5.4	4.4	34.53	黒安
12	12	割片	3.4	3.8	17.68	黒安
13	12	割片	3.2	3.8	17.20	黒安
14	12	割片	4.9	3.8	32.00	黒安
15	12	石核	5.1	5.9	98.97	黒安
接合資料-93 (第73・74区)						
1	9	割片	3.0	1.8	5.66	黒安
	10	割片	2.5	2.1	4.86	黒安
2	10	割片	3.9	2.1	5.13	黒安
3	10	割片	5.7	4.1	37.61	黒安
	10	割片	5.5	3.7	30.81	黒安
4	10	割片	5.0	5.2	42.42	黒安
5	10	割片	4.2	6.3	61.01	黒安
6	10	割片	4.6	4.8	40.90	黒安
7	10	割片	2.7	5.7	12.85	黒安
8	10	割片	3.6	4.7	12.70	黒安
9	10	割片	6.0	6.2	40.73	黒安
	10	割片	6.9	4.4	35.15	黒安
10	10	割片	4.1	4.7	19.33	黒安
11	10	砕片	1.2	1.3	0.49	黒安
12	10	割片	2.5	4.3	23.20	黒安
13	10	割片	7.4	3.2	33.61	黒安
14	10	割片	4.9	3.5	22.88	黒安
	10	割片	3.6	2.7	11.74	黒安
15	10	割片	3.4	2.1	6.22	黒安
16	10	砕片	1.9	1.6	0.80	黒安
17	10	割片	5.2	3.9	30.69	黒安
18	10	砕片	2.8	1.5	2.22	黒安
接合資料-65 (第75区)						

資料番号	出土位置 (プロット)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (R)	石材
1	外(Ag-6)	割片	1.9	3.1	5.23	黒安
2	15	割片	4.1	1.9	8.53	黒安
3	15	楔	3.5	3.1	15.15	黒安
接合資料-87 (第75区)						
1	18	割片	5.3	8.2	48.87	黒頁
	18	砕片	1.6	2.0	2.00	黒頁
2	20	割片	3.0	3.4	10.60	黒頁
3	18	石核	9.3	13.0	586.50	黒頁
接合資料-31 (第76区)						
	8	石核	8.5	10.0	581.20	黒安
1	8	砕片	2.3	2.0	2.96	黒安
2	8	砕片	3.7	2.1	5.18	黒安
接合資料-94 (第76区)						
	16	石核	6.1	6.2	174.43	玉髓
	16	割片	3.3	3.3	25.08	玉髓
接合資料-36 (第77区)						
1	8	割片	2.5	2.1	8.82	黒安
	8	割片	2.5	2.1	5.22	黒安
2	8	砕片	2.4	1.6	1.38	黒安
3	8	割片	6.4	3.2	25.26	黒安
接合資料-52 (第77区)						
1	13	割片	5.2	2.5	13.68	黒頁
2	13	砕片	1.2	2.4	5.94	黒頁
3	13	砕片	1.9	1.2	0.84	黒頁
4	13	割片	3.5	3.2	10.81	黒頁
5	13	石核	7.5	4.8	94.91	黒頁
6	13	割片	5.9	4.3	67.06	黒頁
接合資料-53 (第78区)						
1	13	割片	6.4	2.9	21.44	黒頁
2	13	使割	6.3	3.8	30.12	黒頁
3	13	割片	3.2	2.5	10.92	黒頁
4	13	割片	4.9	4.5	20.30	黒頁
接合資料-55 (第78区)						
1	13	割片	2.3	4.4	12.13	黒頁
2	13	割片	3.6	2.0	5.20	黒頁
3	13	割片	4.3	4.4	17.51	黒頁
4	13	割片	3.8	5.4	18.69	黒頁
接合資料-59 (第79区)						
1	14	割片	4.1	3.8	20.44	黒頁
2	14	割片	5.2	5.4	40.04	黒頁
3	14	砕片	2.9	1.6	1.84	黒頁
4	14	割片	5.1	3.8	23.65	黒頁
5	14	割片	4.9	2.4	9.36	黒頁
6	14	割片	2.5	3.4	4.27	黒頁
接合資料-82 (第79区)						
1	19	割片	4.4	3.8	17.69	黒頁
2	19	割片	5.9	3.8	26.84	黒頁
接合資料-62 (第80区)						
1	15	割片	5.9	2.5	20.55	黒安
2	15	割片	3.9	2.8	9.16	黒安
3	17	割片	5.8	4.6	17.89	黒安
4	15	割片	7.5	3.1	34.35	黒安
接合資料-77 (第80区)						
1	2	砕片	1.5	1.3	0.70	黒安
2	17	砕片	2.0	1.3	1.08	黒安
3	17	割片	4.5	4.2	29.74	黒安
4	17	割片	4.5	3.9	26.13	黒安
	17	割片	2.0	3.3	10.09	黒安

遺物観察一覧表 計測値一覧表

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-74 (第81区)						
1	17	割片	2.6	3.4	4.76	黒安
2	17	割片	3.0	3.9	9.68	黒安
3	17	石核	6.5	9.3	192.28	黒安
4	17	加割	4.3	7.7	98.97	黒安
5	2	割片	5.8	5.2	39.45	黒安
6	12	割片	5.3	5.3	25.37	黒安
	12	割片	6.8	4.1	19.83	黒安
	12	割片	3.5	4.1	16.22	黒安
接合資料-10 (第82区)						
1	4	割片	3.5	4.0	27.46	黒安
	4	割片	3.1	3.6	14.43	黒安
2	4	割片	3.4	2.8	17.47	黒安
3	4	割片	4.2	5.0	28.43	黒安
接合資料-29 (第82区)						
1	7	砕片	1.7	1.5	1.60	黒安
2	8	割片	2.8	2.1	2.75	黒安
3	7	割片	6.4	6.7	63.20	黒安
接合資料-48 (第82区)						
1	10	割片	3.9	4.4	13.93	黒安
2	13	割片	5.4	3.7	12.85	黒安
	10	割片	3.5	2.3	5.01	黒安
接合資料-6 (第83区)						
1	2	割片	6.8	6.4	44.98	黒安
2	2	割片	6.3	5.8	47.86	黒安
接合資料-20 (第83区)						
	6	砕片	1.9	1.6	1.45	黒安
1	6	割片	3.6	5.4	12.08	黒安
2	6	割片	3.7	2.5	15.69	黒安
3	6	割片	2.5	4.1	5.47	黒安
	6	割片	2.2	3.0	3.54	黒安
	6	砕片	2.0	2.3	2.73	黒安
接合資料-33 (第84区)						
1	8	割片	7.3	5.2	50.71	黒安
	8	割片	4.4	2.4	9.95	黒安
2	8	割片	6.4	6.7	87.27	黒安
	8	割片	2.3	2.0	2.19	黒安
3	8	割片	7.7	6.1	108.25	黒安
4	8	割片	2.9	2.8	7.46	黒安
5	8	割片	3.8	3.5	15.80	黒安
接合資料-47 (第85区)						
1	10	割片	4.5	4.0	21.28	黒安
2	10	割片	4.9	3.9	30.66	黒安
	11	割片	2.8	3.8	8.22	黒安
	10	砕片	2.8	1.5	2.61	黒安
3	10	割片	7.3	6.2	61.77	黒安
4	10	割片	2.1	3.0	4.14	黒安
	11	砕片	1.1	2.5	1.05	黒安
5	11	割片	2.2	6.4	16.25	黒安
6	11	割片	4.0	5.2	12.81	黒安
	外(Ah-10)	砕片	1.2	1.7	0.74	黒安
接合資料-35 (第86区)						
1	外(Ad-5)	割片	2.5	3.3	9.38	黒安
2	8	割片	2.2	3.0	5.30	黒安
3	外(Ad-5)	砕片	1.7	1.8	1.85	黒安
4	8	割片	3.4	4.5	19.97	黒安
	8	割片	3.0	2.7	10.86	黒安
5	外(Ae-6)	割片	2.3	2.4	4.57	黒安

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-84 (第86区)						
1	20	割片	3.6	3.5	7.37	黒安
	20	砕片	2.0	1.4	2.37	黒安
2	20	砕片	2.8	2.0	5.48	黒安
3	20	石核	5.4	3.9	27.36	黒安
	20	割片	3.2	2.9	5.74	黒安
4	20	砕片	2.4	1.8	3.15	黒安
接合資料-86 (第87区)						
1	16	砕片	2.0	1.6	1.02	黒安
2	20	割片	4.1	4.3	17.21	黒安
接合資料-8 (第87区)						
1	2	割片	2.5	2.9	4.35	黒安
2	2	割片	3.8	3.2	8.68	黒安
接合資料-66 (第87区)						
1	15	割片	2.6	2.6	10.75	黒安
2	9	割片	3.2	1.9	6.14	黒安
接合資料-30 (第87区)						
1	8	割片	3.7	2.0	6.07	黒安
2	8	割片	2.5	2.2	6.63	黒安
3	7	割片	2.8	4.1	9.04	黒安
接合資料-11 (第87区)						
1	4	割片	4.4	3.7	16.72	黒安
	4	砕片	1.7	3.1	3.61	黒安
2	16	割片	2.8	4.2	10.42	黒安
接合資料-4 (第88区)						
1		割片	4.9	4.5	29.20	黒安
11		砕片	2.0	1.2	1.23	黒安
接合資料-40 (第88区)						
8		割片	2.5	4.1	9.06	黒安
8		割片	2.3	3.3	7.50	黒安
8		割片	1.7	4.4	6.02	黒安
8		割片	3.2	1.5	2.10	黒安
接合資料-7 (第88区)						
2		割片	7.5	8.0	96.52	黒安
2		砕片	2.9	1.4	1.35	黒安
2		砕片	1.7	1.0	0.57	黒安
接合資料-24 (第88区)						
7		割片	5.6	6.5	31.10	黒安
7		割片	4.1	3.2	5.88	黒安
接合資料-1 (第88区)						
1		割片	3.0	3.2	8.87	黒安
1		割片	3.3	2.7	6.84	黒安
接合資料-64 (第88区)						
15		割片	3.9	3.4	13.51	黒安
15		割片	4.6	3.6	11.38	黒安
15		割片	3.1	2.8	5.56	黒安
15		砕片	2.1	2.0	1.87	黒安
接合資料-58 (第88区)						
13		割片	3.5	3.3	8.95	黒安
13		割片	1.9	2.9	1.87	黒安
接合資料-21 (第89区)						
	外(Af-8)	割片	2.5	1.8	2.20	黒安
	6	砕片	2.2	2.5	1.32	黒安
接合資料-49 (第89区)						
	11	加割	2.5	2.6	4.54	黒安
	外(Af-6)	割片	2.8	2.2	3.82	黒安
接合資料-5 (第89区)						
1		割片	3.1	2.3	5.29	黒安

遺物観察一覧表 計測値一覧表

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-15 (第89区)	1	砕片	2.5	1.9	1.05	黒安
	9	剥片	3.7	2.7	11.00	黒安
	5	剥片	4.1	2.5	8.24	黒安
接合資料-17 (第89区)	6	剥片	5.8	3.0	11.87	黒安
	6	剥片	4.3	2.9	10.33	黒安
	1	砕片	2.8	3.3	4.57	頁岩
接合資料-2 (第89区)	1	砕片	2.2	2.8	4.03	頁岩

資料番号	出土位置 (ブロック)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
接合資料-9 (第89区)	3	使割	5.3	6.4	32.35	黒頁
	5	住覆土	2.6	2.0	2.50	黒頁
接合資料-19 (第89区)	6	剥片	13.3	4.2	89.29	黒安
	6	剥片	7.9	2.6	36.91	黒安
接合資料-14 (第89区)	5	剥片	9.8	4.8	93.95	黒頁
	5	剥片	4.6	2.3	10.43	黒頁

包含層 (第II層) 出土石器の一覧表

検出番号	出土位置 (Grid)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	
第124区-1	Am-8	ナイフ	(2.1)	1.1	(1.16)	チ	
	Ag-12	彫器	7.3	3.2	27.42	黒曜石	
	Ab-6	石鏃	(1.2)	1.8	(0.45)	黒曜石	
	Bk-23	石鏃	2.7	(1.8)	(1.99)	黒安	
	B区	石鏃	2.9	1.9	2.71	黒頁	
	Ca-27	石鏃	(0.8)	1.6	(0.23)	黒曜石	
	Bl-23	石鏃	1.5	1.3	0.39	チ	
	Cc-31	石鏃	3.2	1.8	2.06	チ	
第125区-1	Bj-24	磨斧	13.7	5.9	166.46	安玄	
	Ar-12	打斧	(8.5)	(6.5)	(228.60)	黒頁	
	C区	打斧	(6.7)	(4.3)	(52.52)	灰安	
	Ce-28	打斧	(4.1)	3.7	(13.78)	黒頁	
	Bf-14	打斧	(9.4)	3.8	(52.60)	黒頁	
	Cp-33	片刃	10.6	7.4	392.90	黒頁	
	Aq-13	打斧	7.8	6.1	(83.57)	黒頁	
	B区	打斧	7.0	5.9	193.76	黒頁	
	9	1住覆土	打斧	(14.8)	(10.2)	(1037.20)	砂岩
第126区-1	Ap-14	刮器	6.9	3.1	46.83	粗安	
	Ai-6	刮器	(5.7)	(3.6)	(33.88)	黒頁	
	Ba-18	刮器	5.5	8.0	52.72	黒安	
	Ag-9	刮器	7.8	12.2	155.27	黒頁	
	Ag-10	刮器	(4.5)	(5.7)	(22.53)	黒安	
第127区-1	At-12	加刺	3.3	2.8	7.69	チ	
	As-14	加刺	3.6	2.4	2.91	黒曜石	
	Aa-13	加刺	(3.4)	(5.6)	(27.69)	黒頁	
	Cc-27	加刺	(4.4)	(5.9)	(46.55)	黒頁	
	Av-14	加刺	3.6	3.8	12.18	黒頁	
	As-12	使割	3.0	6.2	14.33	黒頁	
	As-12	使割	(4.3)	(5.8)	(18.05)	黒頁	
	Ca-28	使割	(4.3)	(5.9)	(21.22)	黒曜石	
	9	Cc-27	使割	6.8	5.3	32.61	黒頁
	10	Ac-6	使割	6.5	4.9	33.80	黒頁
	11	Ac-6	使割	9.6	6.1	132.50	黒頁

検出番号	出土位置 (Grid)	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材
第128区-1	Ai-6	使割	8.1	9.9	130.99	黒頁
	As-11	石核	5.6	10.4	141.10	黒頁
	Bl-21	石核	7.1	8.7	485.60	点頁
	Ar-12	石核	3.2	2.6	8.50	黒曜石
	Ad-5	石核	10.6	11.7	532.10	黒曜石
	A区	石核	6.2	4.5	102.90	黒頁
第129区-1	Ap-13	石核	3.2	8.6	276.80	灰安
	Aj-8	三角鏃	7.7	4.0	124.10	黒頁
	Ag-6	三角鏃	11.7	7.4	406.80	黒頁
	Ag-7	三角鏃	10.6	7.2	323.20	黒頁
	As-15	三角鏃	(8.6)	(7.0)	(545.90)	輝緑岩
	Cn-34	スタンプ	(13.0)	(5.5)	(293.40)	頁岩
	A区表探	スタンプ	11.1	7.3	609.40	安玄
第130区-1	Ag-6	スタンプ	10.7	7.7	508.40	粗安
	A区表探	磨石	10.8	8.2	567.70	粗安
	Ar-13	磨石	10.0	8.6	574.00	粗安
	Ar-13	磨石	12.2	6.8	568.40	粗安
第131区-1	B区	磨石	14.2	6.6	522.50	粗安
	Ag-5	磨石	(7.7)	(6.2)	(305.90)	粗安
	Ap-13	磨石	(11.9)	(6.8)	(457.20)	珪岩
	Ar-13	特磨	(9.6)	(6.2)	(312.30)	粗安
	As-14	特磨	18.5	7.4	1024.60	珪岩
	Bl-22	凹石	10.5	7.2	375.80	粗安
第132区-1	4	凹石	8.3	5.3	168.11	粗安
	5	凹石	11.3	8.0	304.60	粗安
	6	凹石	11.8	8.0	(625.30)	粗安
	Al-8	凹石	8.3	7.8	(416.10)	花崗岩
	Bx-27	凹石	11.0	7.8	(318.70)	粗安
	Ax-18	多孔石	16.3	12.1	1676.60	粗安
	C区	多孔石	22.7	13.2	3325.00	粗安
	B区	融石	(10.1)	(6.1)	(409.70)	石閃
第132区-1	Br-23	融石	11.5	8.1	451.50	粗安

溝・土坑・井戸計測値一覧表

溝

遺構名称	検出位置 (ライン間)	走行方向	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)
1号溝	Ab~Ad	南-54°-西	4.00	0.50	0.05
2号溝	Ai~Ak	南-71°-西	6.80	0.30	0.06
3号溝	Ai~Ak	南-71°-東	(2.00)	0.40	0.09
4号溝	Ai~Al	南-71°-西	10.00	0.45	0.04
5号溝	An~Au	南-46°-西	(38.80)	1.20	0.38
6号溝	Ar~At	南-27°-西	(14.00)	0.32	0.03
7号溝	Ar~Av	南-22°-西	(20.50)	1.00	0.39
		南-58°-西			
8号溝	Ap~Au	南-78°-西	(18.40)	1.00	0.42
9号溝	At~Au	南-13°-西	(9.40)	0.50	0.24
10号溝	Av~Ay	南-58°-西	(6.40)	0.91	0.62
11号溝	Au~Bc	南-78°-西	(47.30)	1.10	0.33
		南-14°-東			
12号溝	Bc~Bg	南-15°-東	(45.20)	1.45	0.40
13号溝	Bi~Br	南-15°-東	(33.10)	1.53	0.43
		東-10°-北			
14号溝	Bk~Bp	南-87°-西	(15.80)	0.80	0.42

遺構名称	検出位置 (ライン間)	走行方向	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)
15号溝	Bj~Bi	南-70°-東	4.00	1.00	0.40
16号溝	Bj~Bi	南-59°-東	5.00	0.60	0.39
17号溝	Bj~Bi	南-58°-東	4.50	0.50	0.40
18号溝	Bn~Bq	南-63°-東	10.80	0.70	0.10
19号溝	Bm~Bn	南-8°-東	3.10	0.50	0.07
20号溝	Br~Bt	南-7°-東	(15.30)	0.40	0.10
21号溝	Bs~Bu	南-8°-東	(13.10)	0.40	0.10
22号溝	Bu~Bv	南-1°-東	(38.50)	0.75	0.46
23号溝	Ca~Cb	南-4°-西	8.20	0.40	0.04
24号溝	Cb~Cc	南-4°-西	15.50	0.50	0.06
25号溝	Cb~Cc	南-7°-西	14.50	0.80	0.25
26号溝	Cd~Ce	南-3°-西	5.10	0.50	0.08
27号溝	Ce~Cf	南-8°-西	(15.10)	0.90	0.12
28号溝	Ce~Cg	南-2°-西	7.90	0.40	0.08
29号溝	Cg~Ch	南-8°-西	5.00	0.80	0.10
30号溝	Cs~Cu	南-7°-西	(18.50)	0.60	0.25

土 坑

遺構名称	検出位置 (Grid)	長軸長 (m)	短軸長 (m)	深さ (m)	主軸方位
2号土坑	Ac-7	3.24	1.76	0.40	北-66°-東
4号土坑	Af-6	2.62	1.16	0.33	北-70°-東
5号土坑	Af-6	2.51	1.41	0.30	北-73°-東
6号土坑	Ag-8	3.47	1.50	0.37	北-62°-東
12号土坑	An-15	2.60	1.02	0.38	北-3°-西
13号土坑	Ao-15	2.42	0.86	0.39	北-6°-西
14号土坑	Ao-15	1.71	0.98	0.30	北-32°-東
15号土坑	Ap-16	2.42	0.68	0.19	北-90°-東
17号土坑	Bd-19	4.04	1.00	0.39	北-14°-西
18号土坑	Bc-21	1.58	1.22	0.35	北-44°-東
19号土坑	Bd-21	1.94	1.18	0.41	北-32°-東
20号土坑	Bd-22	1.62	1.35	0.36	北-9°-東
21号土坑	Be-21	1.26	1.23	0.11	北-45°-西
22号土坑	Be-22	0.90	0.88	0.14	北-37°-西
23号土坑	Be-19	1.60	1.26	0.14	北-80°-東
27号土坑	Bl-20	1.30	1.27	0.39	北-12°-西
28号土坑	Bn-20	1.36	1.00	0.36	北-6°-西
29号土坑	Bn-21	1.81	-	0.57	北-67°-西
31号土坑	Ad-8	(2.44)	0.88	0.35	北-44°-東

遺構名称	検出位置 (Grid)	長軸長 (m)	短軸長 (m)	深さ (m)	主軸方位
32号土坑	Bv-24	1.23	1.15	0.42	北-45°-東
35号土坑	Bq-22	(0.85)	1.14	0.56	北-77°-東
37号土坑	Ca-23	1.00	0.91	0.20	北-29°-西
38号土坑	Cb-23	1.03	1.02	0.65	北-27°-東
39号土坑	Ca-23	0.98	0.88	0.24	北-35°-西
40号土坑	Cc-24	(1.98)	1.00	0.05	北-16°-東
41号土坑	Cd-24	1.20	0.88	0.34	北-16°-東
43号土坑	Cb-27	1.20	0.81	0.12	北-31°-西
44号土坑	Ce-28	0.84	0.79	0.21	北-45°-西
45号土坑	Cc-29	0.91	0.78	0.18	北-33°-西
46号土坑	Cf-26	1.64	1.40	0.17	北-80°-西
47号土坑	Ce-26	1.10	1.02	0.37	北-52°-東
48号土坑	Cf-26	1.15	1.03	0.41	北-30°-東
49号土坑	Cg-28	0.94	0.83	0.39	北-47°-東
50号土坑	Cg-27	1.40	0.98	0.19	北-88°-東
51号土坑	Cj-29	0.89	0.97	0.29	北-53°-東
52号土坑	Cl-30	1.98	1.68	0.09	北-52°-西
59号土坑	Ch-27	1.04	0.96	0.43	北-33°-西

井 戸

遺構名称	検出位置 (Grid)	口径 (m)	底径 (m)	深さ (m)	形 状
1号井戸	Cl-28	2.40	0.45	3.37	ロート状
2号井戸	Cg-26	1.07	0.60	3.20	筒 状

遺構名称	検出位置 (Grid)	口径 (m)	底径 (m)	深さ (m)	形 状
3号井戸	Bm-23	2.30	0.70	3.50	ロート状
4号井戸	Cs-32	1.10	0.30	2.43	ロート状

写 真 图 版



遷移の遷移



1. 遺跡近景（南側から）



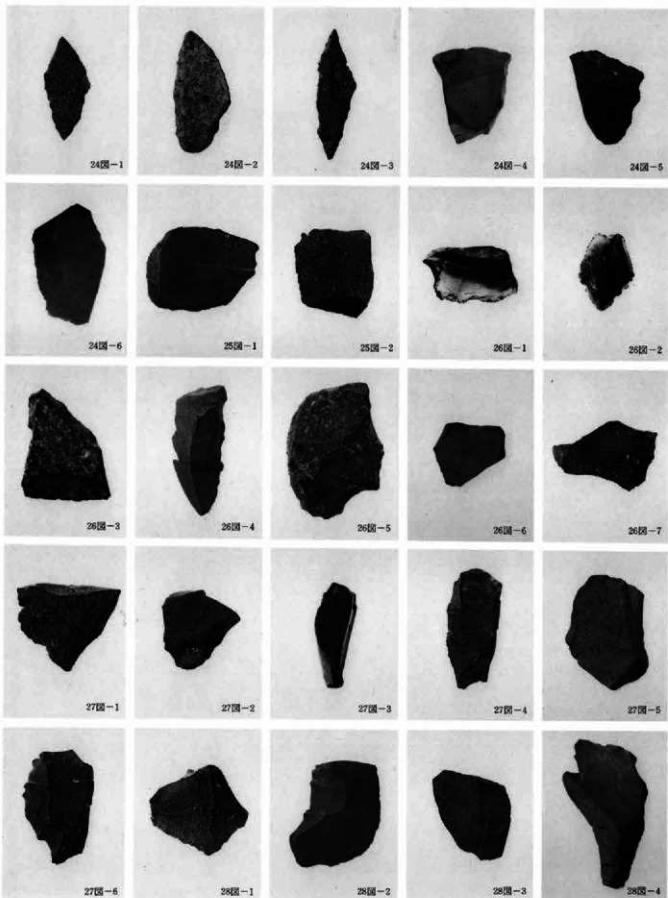
2. 遺跡全景（西側から）



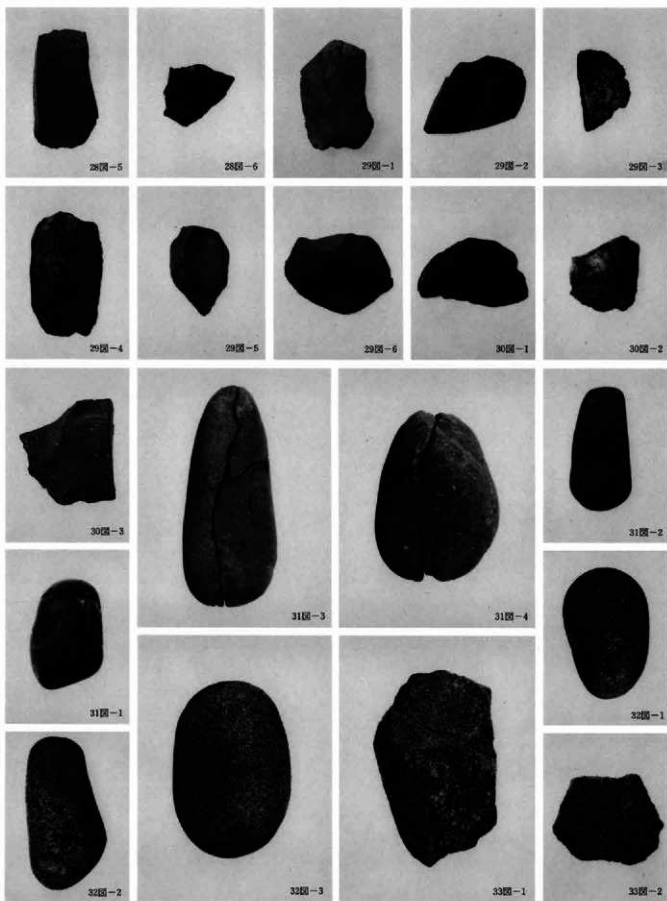
1. 遺物の出土状態



2. 遺物の出土状態 (雑群)



出土石群(1)



出土石器(2)



3408-1

3508-2



3508-4



3408-2



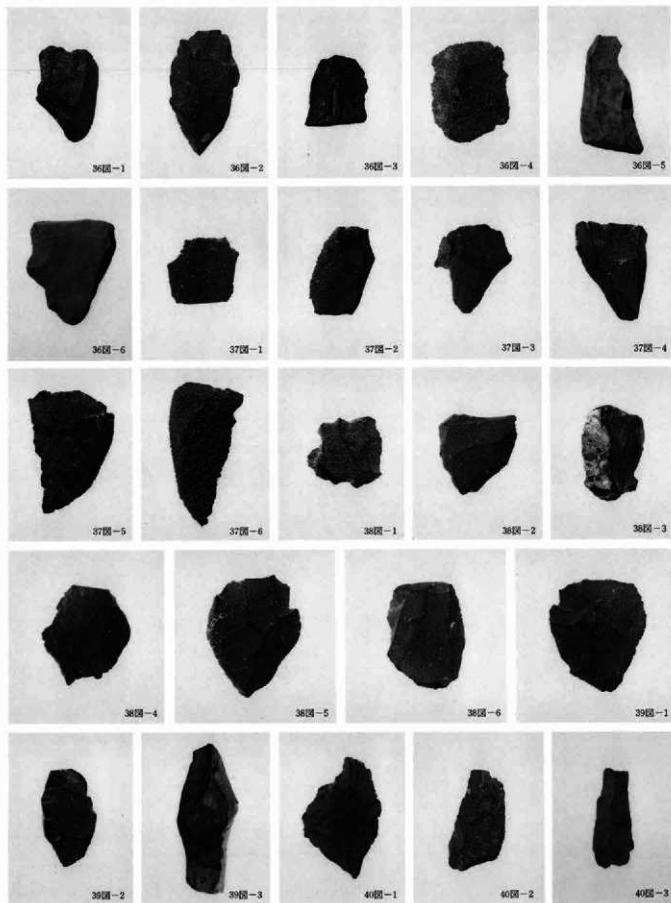
3508-1



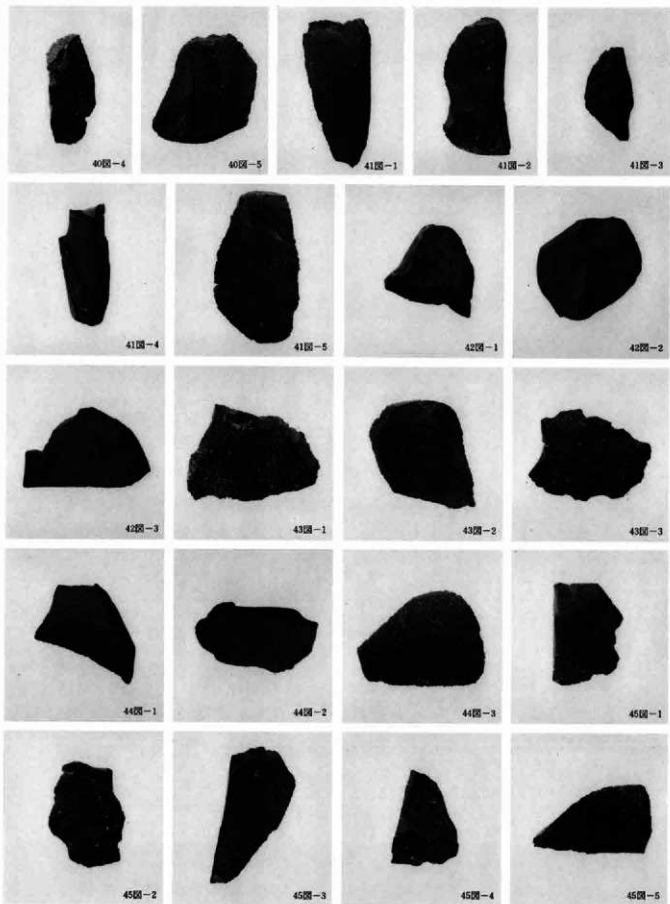
3508-3



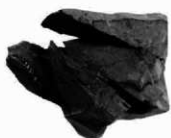
出土石器(3)



出土石器(4)



出土石器(5)



接合資料-3 (4608)



接合資料-91 (4708)



接合資料(1)



接合資料-13 (48頭)



接合資料-16 (49頭)



接合資料(2)



接合資料-23 (50図)



接合資料-80 (51図)



接合資料-26 (52図)



接合資料(3)

接合資料—27
(54圖)



接合資料—79
(53圖)



接合資料—32
(55圖)



接合資料(4)



接合資料-42
(57圖)



接合資料-63
(58圖)



接合資料(5)



接合資料—44
(5908)



接合資料—69
(6100)



接合資料(6)



接合資料-72
(6288)



接合資料-45
(6388)



接合資料(7)



接合資料—75 (6488)



接合資料—18
(6588)



接合資料(8)



接合資料—78
(66頁)



接合資料—88
(67頁)



接合資料(9)



接合資料-89
(69圖)



接合資料-51 (68圖)



接合資料-90 (70圖)



接合資料(10)



接合資料—92
(71圖)



接合資料—93
(73圖)



接合資料(11)



接合資料—31 (7600)



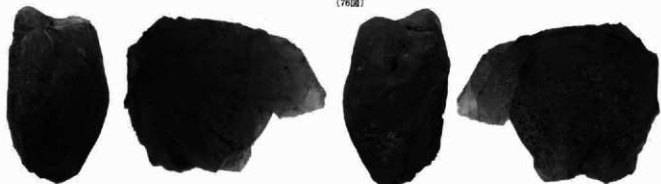
接合資料—87
(7516)



接合資料—65
(7608)



接合資料—94
(7608)



接合資料(12)



接合資料—52 (7708)



接合資料—53
(7808)



接合資料—59 (7908)



接合資料—36 (7708)



接合資料—82 (7908)



接合資料—77 (8008)



接合資料—62 (8008)



接合資料—55 (7808)



接合資料(13)



接合資料-74
(81図)



接合資料-29
(82図)



接合資料-48
(82図)

接合資料-10 (82図)

接合資料-20 (83図)



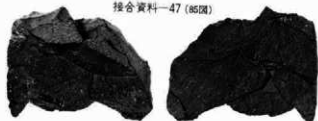
接合資料-6 (83図)

接合資料-33 (84図)



接合資料-35 (86図)

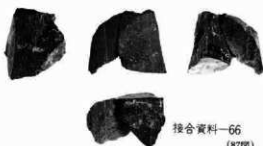
接合資料-47 (85図)



接合資料(14)



接合資料—84 (86圖)



接合資料—66
(87圖)



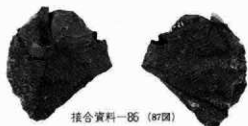
接合資料—8 (87圖)



接合資料—11 (87圖)



接合資料—4 (88圖)



接合資料—85 (87圖)



接合資料—30 (87圖)



接合資料—40
(88圖)



接合資料—1 (88圖)



接合資料—24 (88圖)



接合資料(15)

接合資料—7
(88圖)



接合資料-5
(89図)



接合資料-21
(89図)



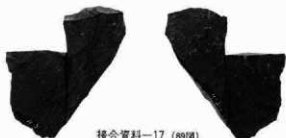
接合資料-58 (89図)



接合資料-64 (89図)



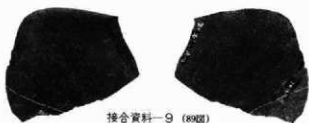
接合資料-15 (89図)



接合資料-17 (89図)



接合資料-2 (89図)



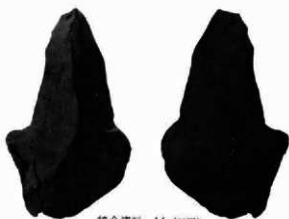
接合資料-9 (89図)



接合資料-43 (89図)



接合資料-19
(89図)

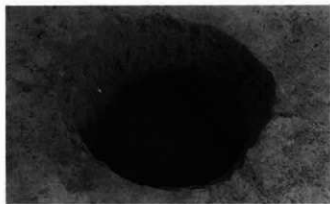


接合資料-14 (89図)

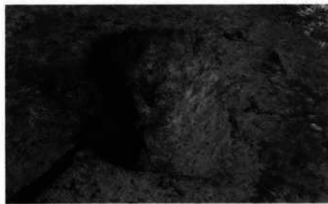
接合資料(16)



1. 5号住层跡全景



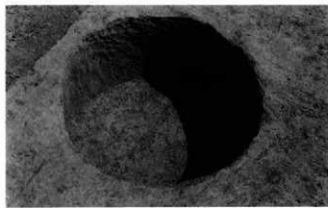
2. 2号土坑



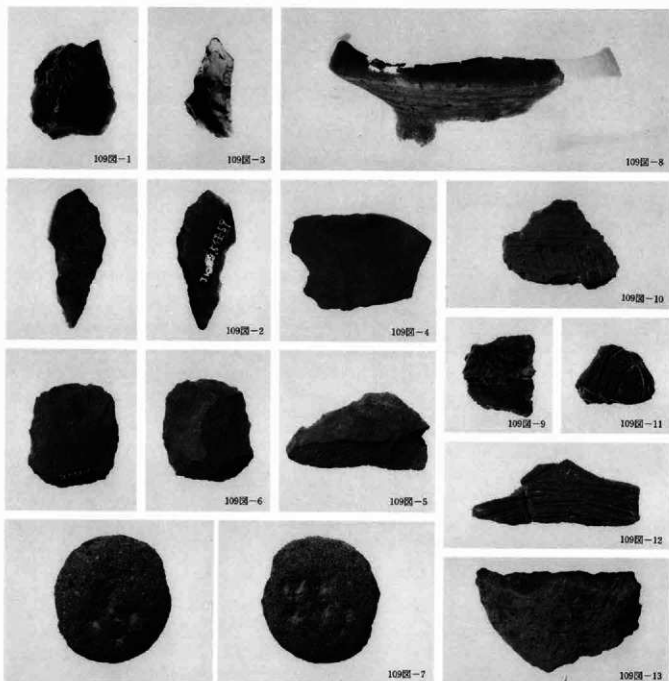
3. 3号土坑



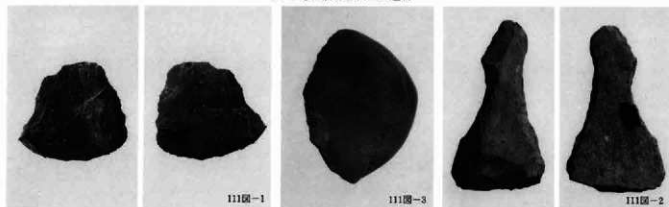
4. 4号土坑



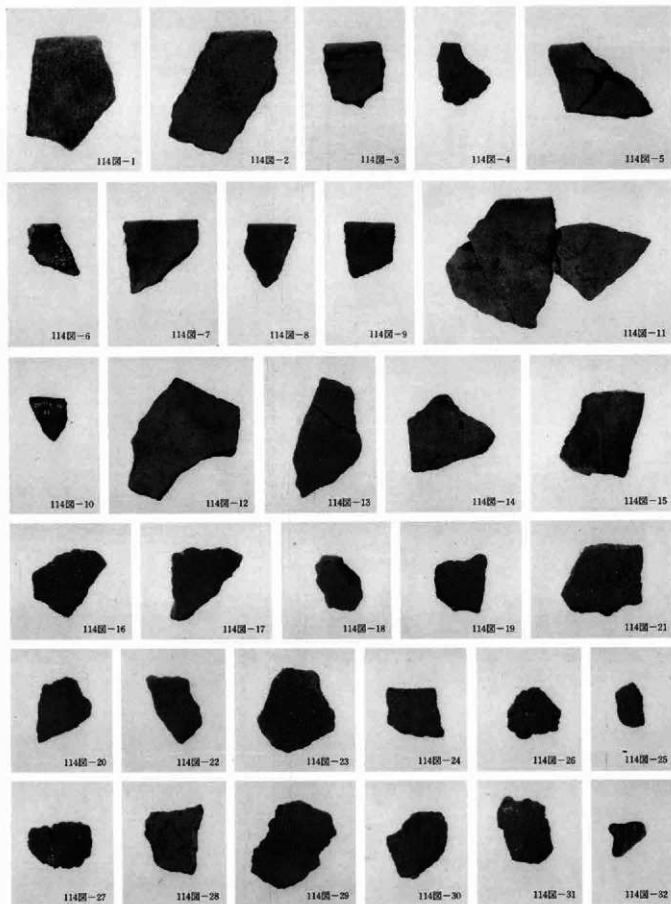
5. 5号土坑



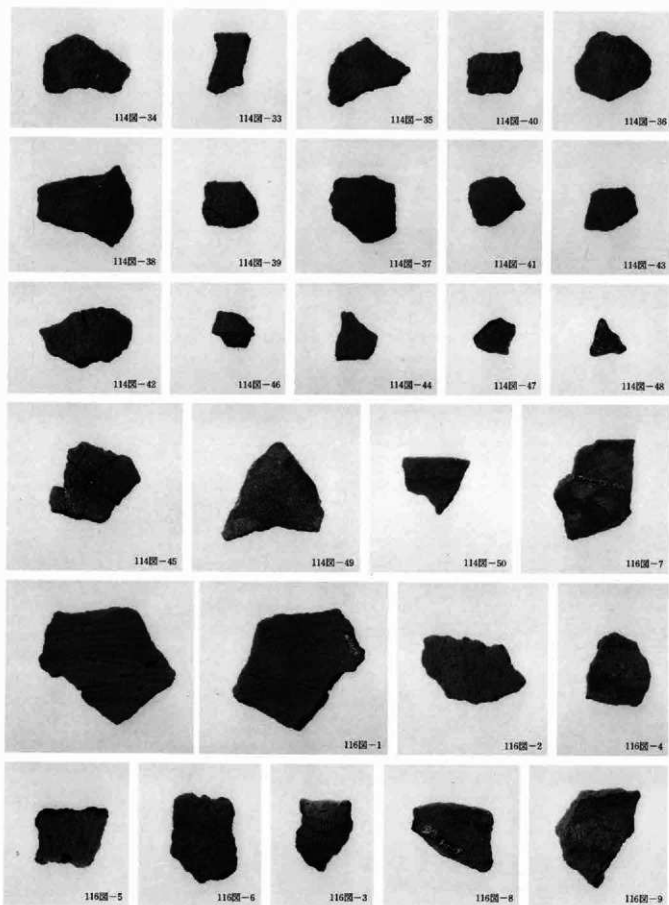
1. 5号住居跡の出土の遺物



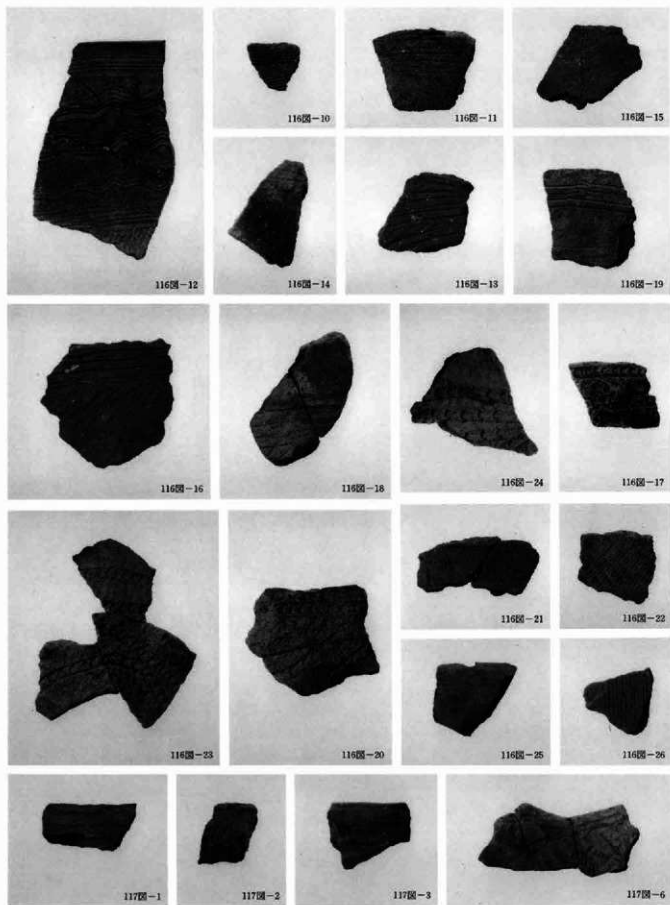
2. 土坑出土の遺物



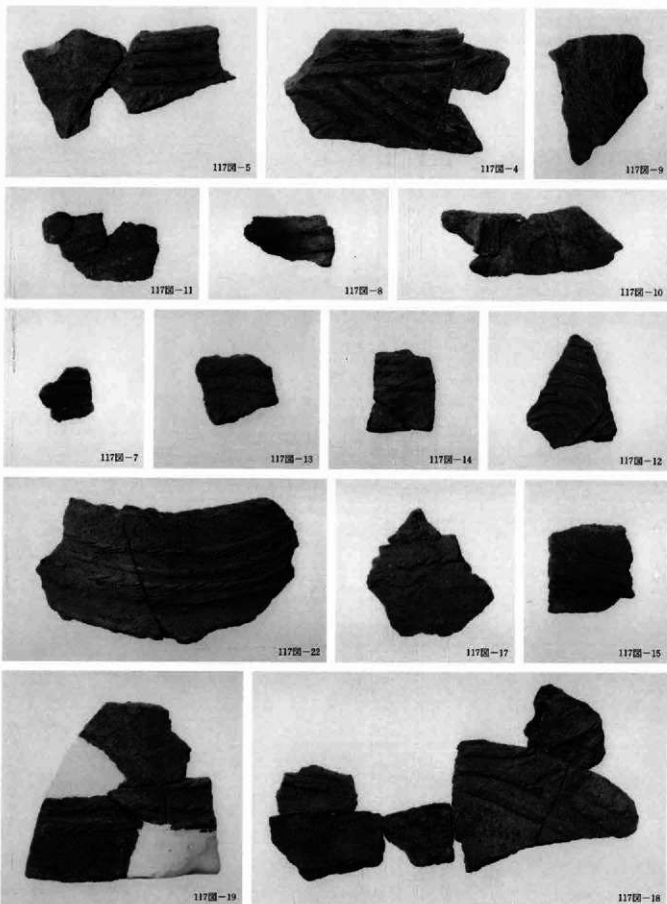
包含層出土の土器(1)



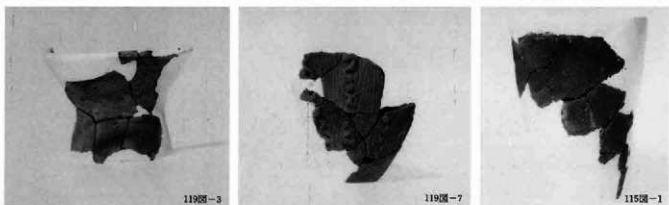
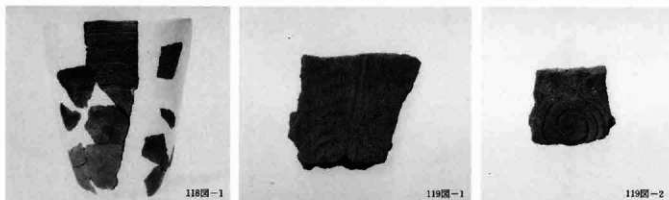
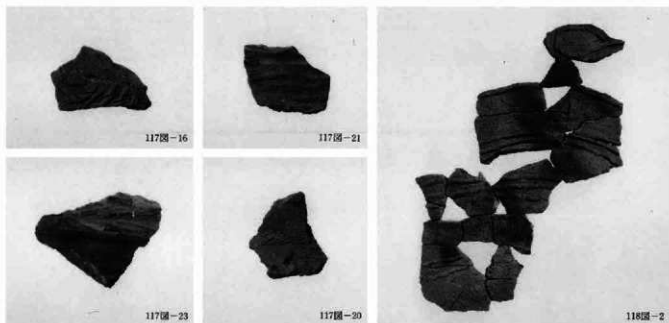
包含層出土の土器(2)



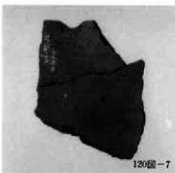
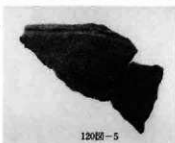
包舍層出土の土器(3)



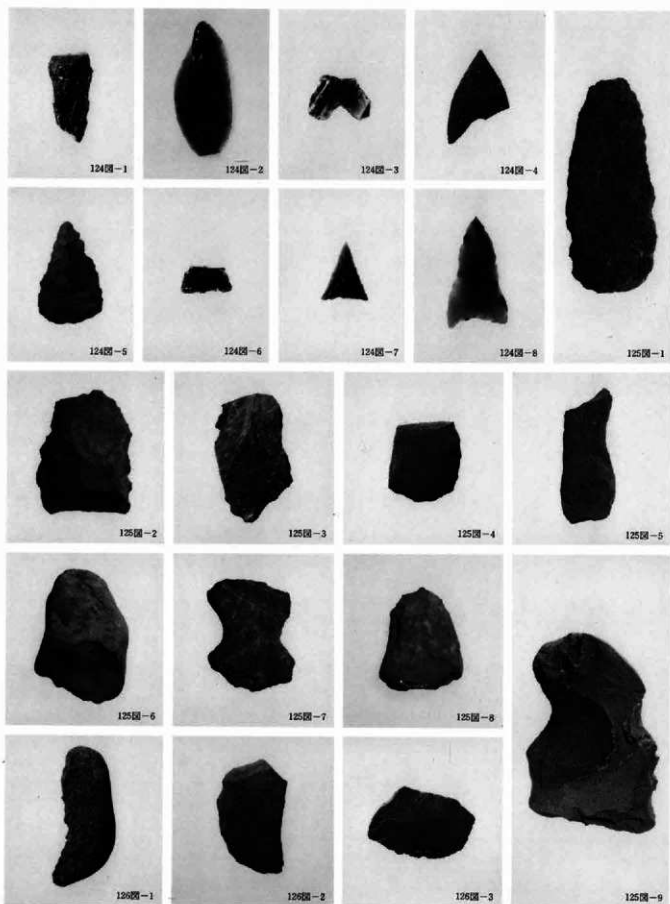
包倉層出土の土器(4)



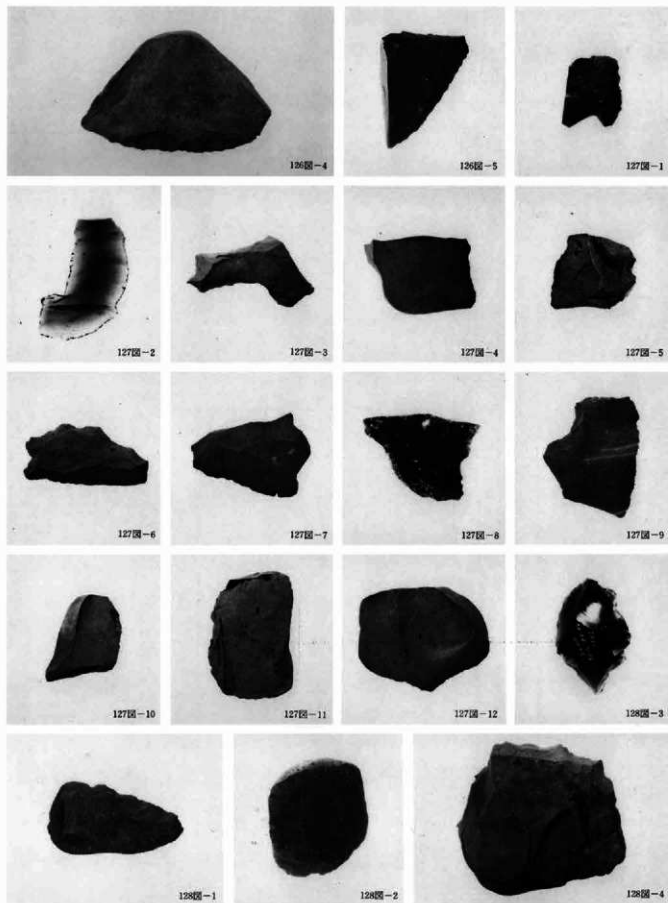
包含層出土の土器(5)



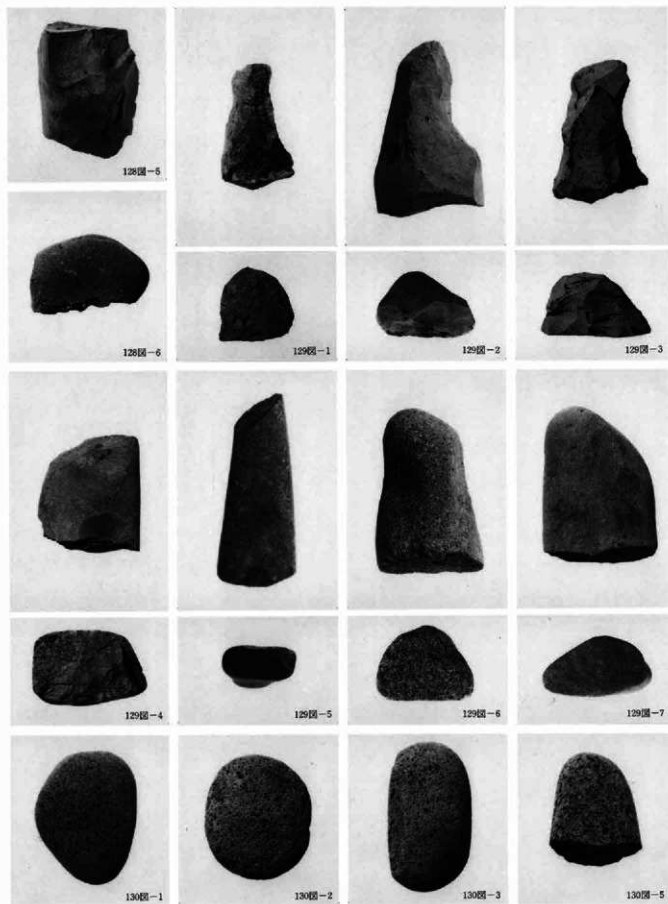
包含層出土の土器(6)



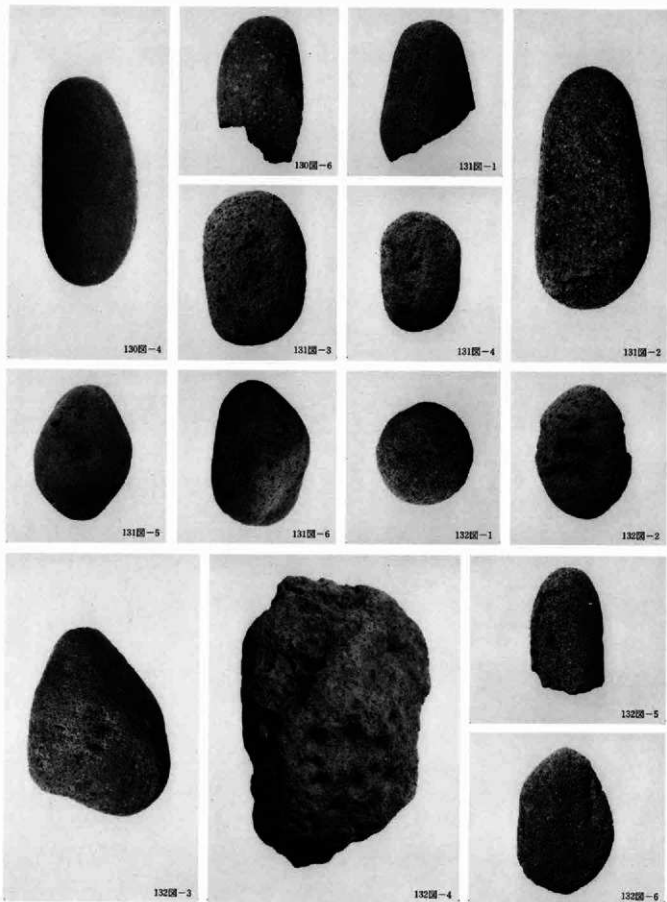
包含層出土の石器(1)



包含層出土の石片(2)



包含層出土の石鏃(3)



包含層出土の石器(4)



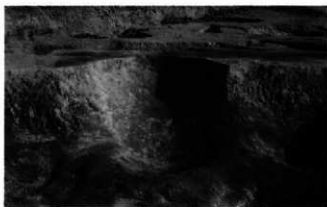
1. 1号住居跡全景



2. 1号住居跡振り方



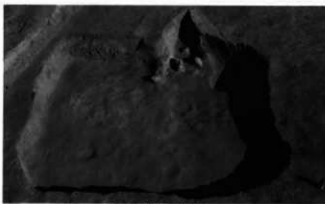
3. 1号住居跡カマド



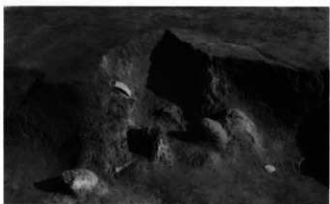
4. 1号住居跡カマド振り方



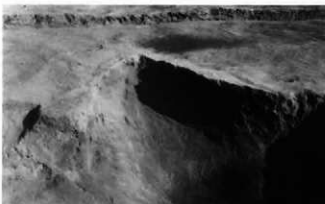
1. 2号住居跡全景



2. 2号住居跡掘り方



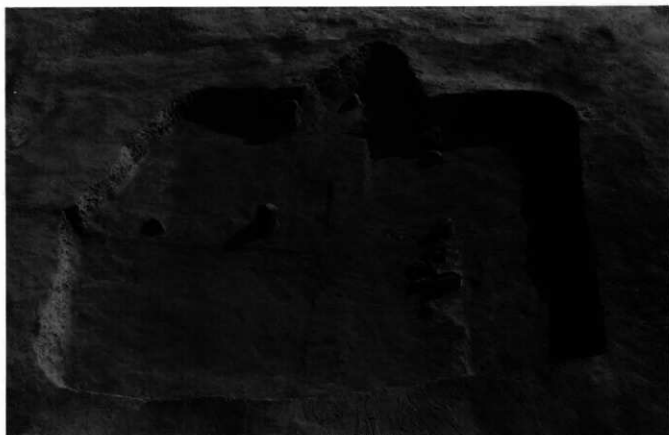
3. 2号住居跡カマド



4. 2号住居跡カマド掘り方



5. 2号住居跡遺物出土状態



1. 3号住居跡全景



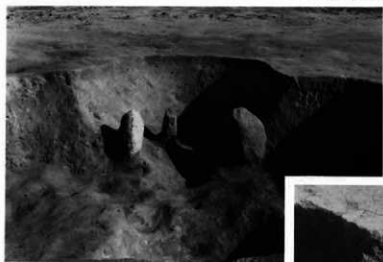
2. 3号住居跡カマド



3. 3号住居跡カマド撮り方



1. 4号住居跡全景



2. 4号住居跡カマド掘り方



3. 4号住居跡遺物出土状態



1. 6号住居跡全景



2. 7号住居跡全景



1. 8号住居跡全景



2. 9号住居跡全景



1. 10号住居跡全景



2. 8号住居跡カマド



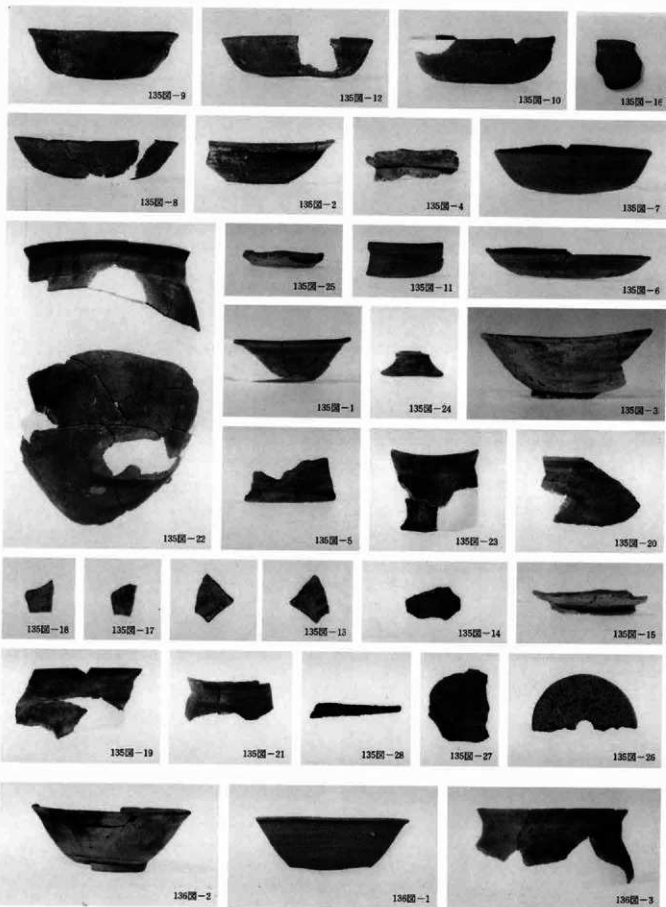
3. 8号住居跡カマド掘り方



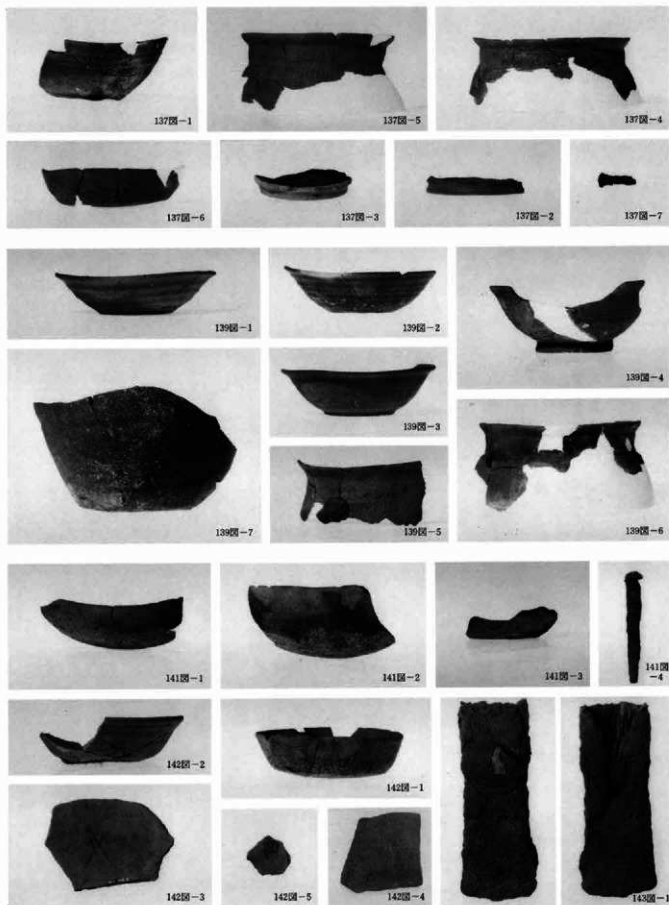
4. 9号住居跡カマド



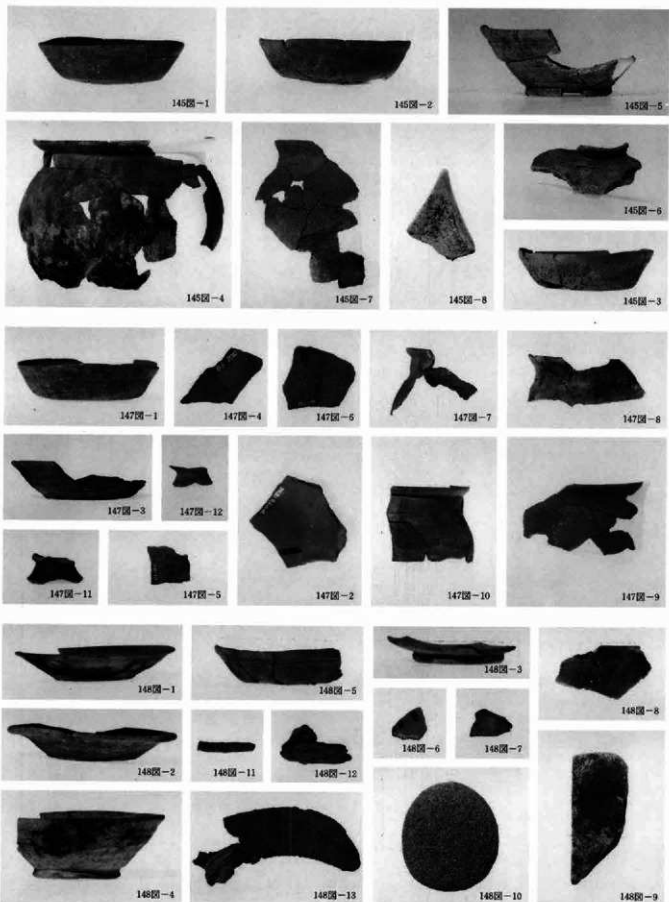
5. 10号住居跡カマド



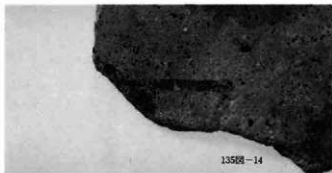
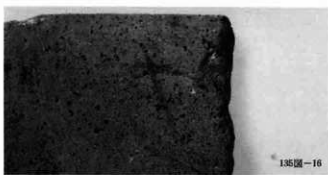
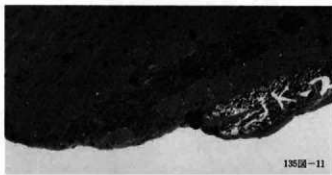
1・2号住居跡出土の遺物



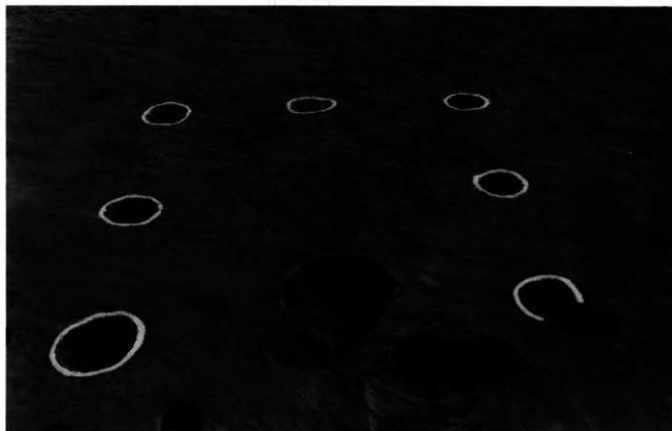
3・4・6・7号住居跡出土の遺物



8～10号住居跡出土の遺物







1. 1号掘立柱建物跡全景



2. 作業風景



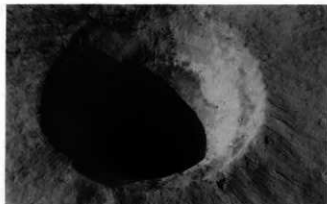
3. 作業風景



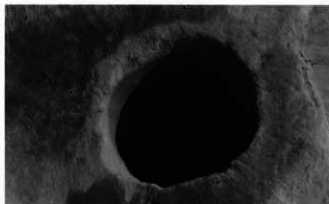
4. 現地説明会風景



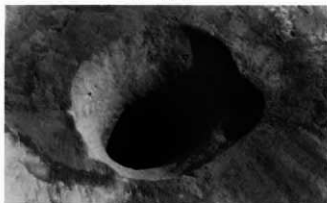
5. 復元住居



1. 1号井戸



2. 2号井戸



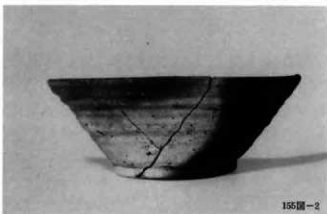
3. 3号井戸



4. 4号井戸



155図-2



5. 1号井戸出土の遺物



156図-1

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告書第111集

堀下八幡遺跡

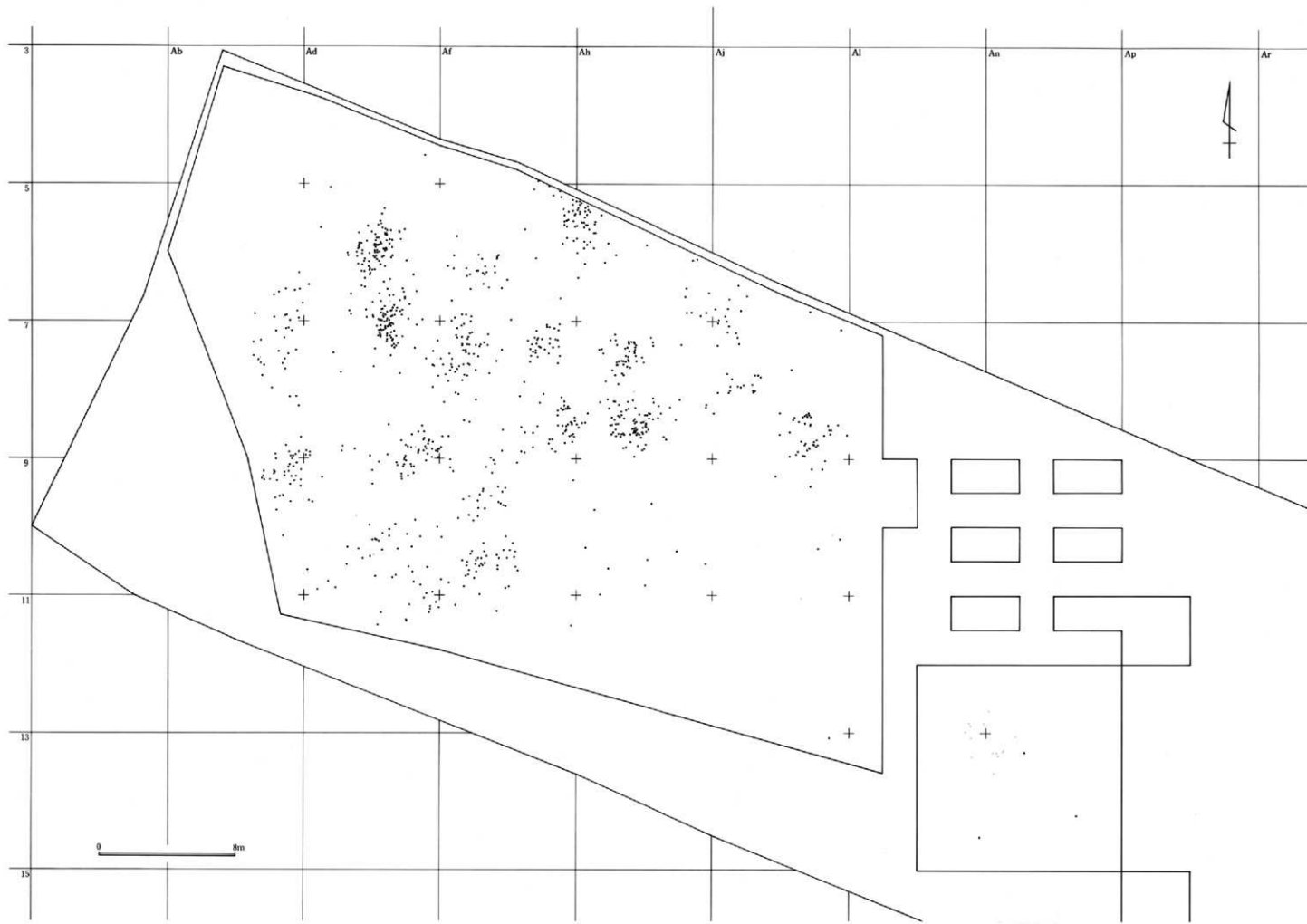
一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成2年9月27日 印刷

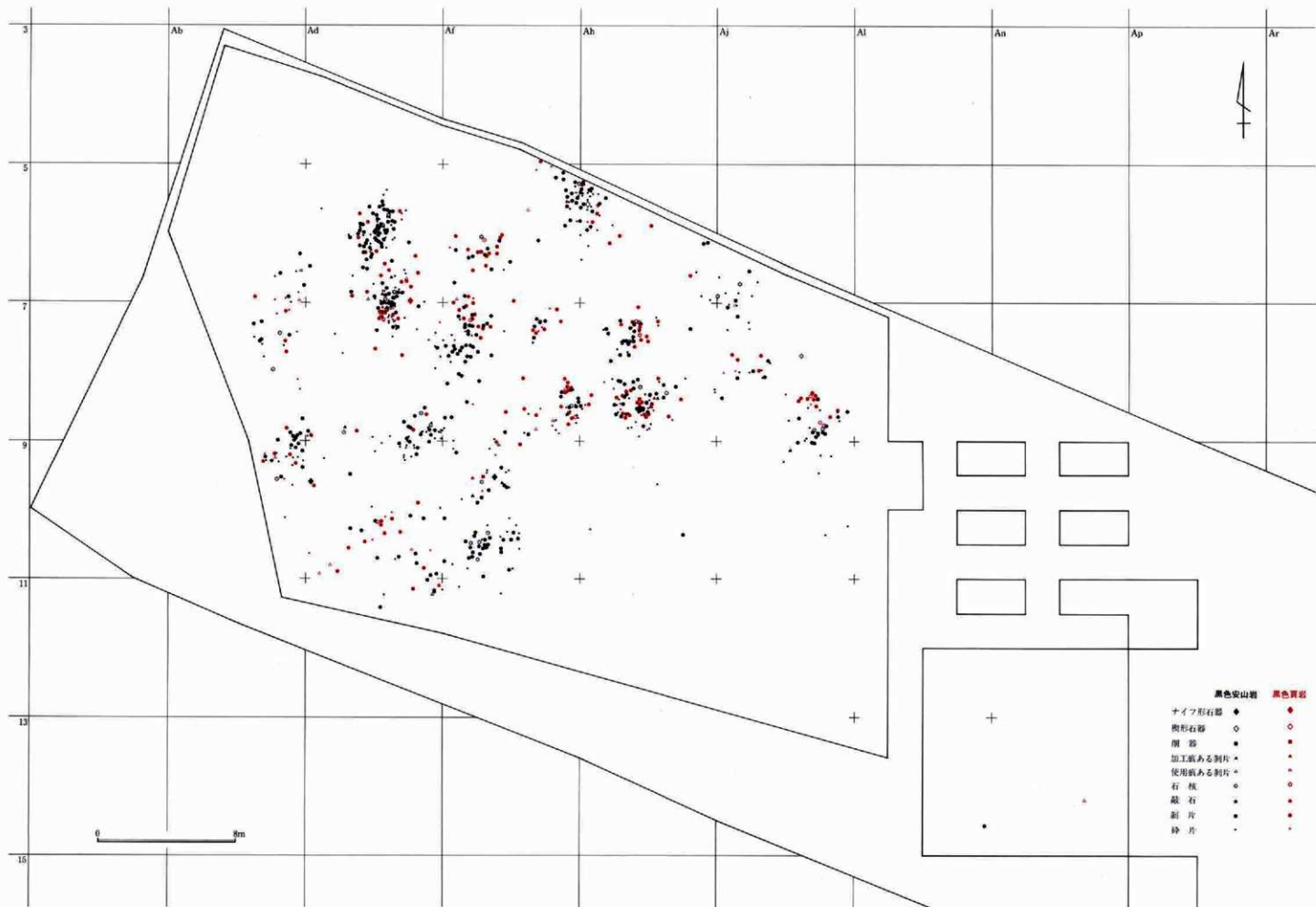
平成2年9月28日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

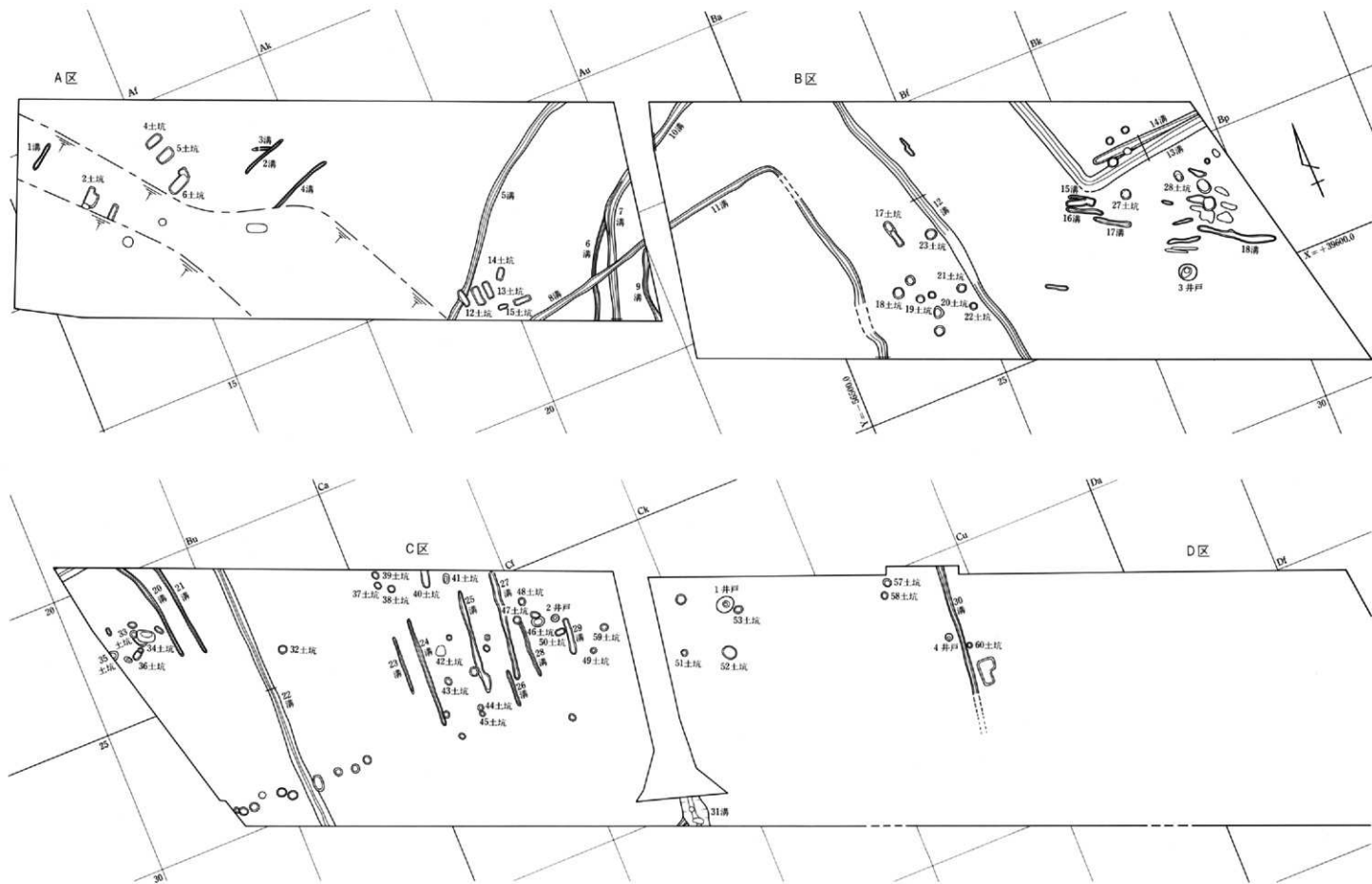
印刷／上毎印刷工業株式会社



付図1. 石器と竈(赤)の分布



付図2. 黒色安山岩と黒色頁岩の分布



付図3. 時期不明の遺構分布